文部科学省特別教育研究費採択事業
平成 20 年度～平成 23 年度

福大スタンダードによる教育の質の保証と成果の検証システムの構築

教養教育の再定義と専門基礎教育との接合

平成 24 年 3月

Fukushima University

福大スタンダードによる教育の質の保証と成果の検証システムの構築

国立大学法人
福島大学
Fukushima University

ごあいさつ

福島大学理事・教育担当副学長
中　村　民　雄

あしかけ６年にわたって検討されてきた「学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」,「教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）」,「入学者受入の方針（アドミッション・ポリシー）」は，平成２４年２月２１日の教育研究評議会において報告了承され，公表することとなりました。

この課題は，平成１８年度から「福島大学の全学生が４年間で身に付けるべき能力を策定すること」，及び「その成果を検証する全学システムを開発すること」を目指して議論を開始しました。また，平成２０年度からは，「福大スタンダードによる教育の質の保証と成果の検証システムの構築」（質の高い大学教育推進プログラムの採択事業）として引き継ぎ，さらに議論を重ねてきました。

平成２２年度には，第２期中期目標・中期計画に３つのポリシーの構築が盛り込まれました。また，学校教育法施行規則が改正され，教育情報の公表が義務化されました。そのため，大学における「教育上の目的」と「学生が修得すべき知識及び能力」（ディプロマ・ポリシー），それを保証するカリキュラム・ポリシーの公表が求められました。そうした大学をとりまく状況の変化に対応すべく，平成２３年６月には福島大学のディプロマ・ポリシーを公表し，カリキュラム・ポリシーの暫定版もあわせて公表しました。

平成２３年度は，３月１１日に発生した東日本大震災，その後に起こった東京電力福島第１原子力発電所の事故により，大学の機能が一時マヒし，しばらく議論を中座せざるを得ませんでした。しかし，この間に議論の方向性を全学一本から，各学類・現代教養コースにおけるポリシーの策定へと舵をきることとしました。それまで全学で議論されてきた「福大スタンダード（案）」は一旦棚上げし，各学類・現代教養コースごとに「学生が修得すべき知識及び能力」を分類し，概念図の作成を急ぎました。それを作成する組織も見直し，教育企画委員会にとりまとめの責任を負わせました。この教育企画委員会が窓口となったことにより，各学類教員会議と他の教務関連委員会（教務協議会,共通教育運営委員会,現代教養コース運営委員会）との意思確認が図られるようになり，カリキュラム・ポリシーの構築が順調に進むようになりました。同時に，すでに公表していたディプロマ・ポリシーやアドミッション・ポリシーも見直し，３つのポリシーの整合性をはかることができました。

また，各学類・現代教養コースの３つのポリシーができあがった頃，共通領域や自己デザイン領域で「学生が修得すべき知識及び能力」について未検討であったことに気がつきました。そこで，改めて「共通領域・自己デザイン領域において学生が修得すべき知識及び能力」を検討し，併せて大学全体の教育目的と学生が４年間で身に付けるべき知識及び能力を明確化するカリキュラム設計に入りました。こうしてできあがったのが「福島大学の教育目的」です。結果的に，この「福島大学の教育目的」は，先に暫定的に決められた「福大スタンダード（案）」とは一定の対応関係にあり,これをもって福大スタンダードに置き換えることが可能であると判断しました。したがって，今後「福大スタンダート」の名称で全学一律のポリシーを立てることはせず，議論の到達点は到達点としてできあがった「福島大学の教育目的」の見直しの際に活かしていくこととしました。

ホームページ上に公表される平成２４年度以降は,「福島大学の教育目的」ならびに各学類・現代教養コースの３つのポリシーに基づくシラバスの作成とその運用，さらには，評価・検証といった教育の質保証のＰＤＣＡサイクルを踏まえた対応が求められています。また，大学院の３つのポリシーの策定も喫緊の課題として浮かび上がってきました。いずれも，今回のポリシー作成の過程で培ったノウハウを生かして早急に策定する必要があります。

目　　次

ごあいさつ　　福島大学理事・教育担当副学長　中村　民雄

第１章　事業の概要　・・・・・・・・・・　1

第２章　福島大学の「三つのポリシー」・・・　13

第３章　福島大学の教育成果
～質問紙調査による検証～　・・・　49

第４章　学習支援システムの構築　・・・・　109

第５章　取組成果と今後の課題（おわりに）・・　181

第１章　事業の概要

１．事業計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
２．福大スタンダードを巡る議論の流れ・・・ 5
３．福大スタンダードを巡る議論の成果・・・11

１．事業計画

〈事業計画の概要〉

・全学生が４年間身に付けるべき力として「福大スタンダード」を策定する。「自学自習のスキル」と「対人関係・個性形成のコンピテンシー」と「教養コモンセンス」等を学生が自覚し、学習することを身に付けさせ、成果を検証するシステムを構築する。

・事業の実施主体：教育担当副学長・教育企画委員会、教務支援グループ（現「教務課」）

・事業の計画期間：平成２０年度～平成２３年度（４年）

Ⅰ．事業の必要性

【目的・目標】

大学教育は、学生が学習スキルや意欲の修得に無自覚では教育の効果はあがらない。学生の「教わる」という受動性を脱却し自ら学ぶ能動性を育てるべく、ユニバーサル段階の大学教育の必須の機能として、全学生を対象とした「福大スタンダード」を策定し、その成果を検証する全学システムを開発することを目的とする。スタンダード策定を進めつつ、各学類ごとの専門性の陶冶をスタンダードの上位概念として位置づけ、全学教育の充実と構造化を図る。すでに導入し機能しているＧＰＡ・Ｃａｐ制をさらに実質化するともに、スタンダード各項目を教育課程・授業内容に組み込み、卒業時にスタンダード修得状況を調査・検証することで、教育の質の保証を期す。

【必要性・緊急性】

本学は「教育重視の人材育成大学」を標榜し、平成１７年４月に３学部制から２学群４学類に教育組織を大転換した。ＧＰＡ・Ｃａｐ制を導入し、教養演習とキャリア形成論を必修化した自己デザイン領域という新たな独自のジャンルを設けて、「教えるから学ぶ」へと教育改革の実質化を進めた。今後は、大学教育の役割をより積極的に学生・教員が自覚するために、教養や専門性だけでなく、社会で必要とされる諸能力を項目化し、それを教育課程や授業内容の検証に逆照射するため「福大スタンダード」の策定が必要であり、同時にスタンダードの各項目は大学教育の成果の検証にとってもきわめて有効であるといえる。

【独創性・新規性等】

スタンダード策定自体は、本学の独創とは言えないものの、全学教育として構築する本学の試みは、先行している他大学とも、内容や役割が異なる。教育の検証システムは、本学の２０年以上に及ぶ教養教育重視の実績の蓄積が基盤にある。

福大スタンダードは、８つほどの領域を想定する。これらは、教養教育の再定義と専門基礎教育との接合（あるいは橋渡し）を可能とし、項目はすべて２１世紀に生きる市民育成にとって重要性のある学識、技能、態度を項目化し、全学生が身につけるべきスタンダードと、選択的に身につけるべきエクセレンス（仮称）の二層とする構想で検討を始めた。これらの知識、技能、態度を学生に示し、別に作成中の「学習ガイドブック」という冊子に掲載するとともに、「学習ポートフォリオ」の「目的」「検証」欄に反映させる。

さらには、卒業時に学士課程教育の各学類の専門性だけでなく、福島大学卒業者としての能力形成の検証項目として、全員対象のアンケートを実施し、点検・改善のデータを集める。

卒業時の資格要件として、対象科目範囲も含めＧＰＡのスコア利用について検討する予定である。

【中期目標及び中期計画との関連性】

中期目標「教育の質の向上」には、「社会環境の変化と多様な学習ニーズに応え、主体的な人生設計と職業選択を行うことのできる人間に育ち、社会に貢献し社会から評価される学生を育成するために、広い教養と豊かな創造力を身につけることのできる専門的教育を行う。」とし、中期計画の冒頭に「『教える』から学生の主体的な学習を支援する『学ぶ』へと転換する」を掲げた。

平成１９年１月に策定した「福島大学プラン２０１５」には、「教育の質の向上」を掲げ「教育重視の人材育成に向けた教育の質の保証として、「全学生が身につけるべき教育水準の構築」をめざし「福大スタンダード」を確立する」としている。

【経済財政改革の基本方針２００７・教育再生会議第二次報告との関連性】

教育再生会議第二次報告の「社会経済の動向を踏まえたカリキュラム改革や、学生の認知と学習スタイルの多様性に応じた教育」と、ＧＰＡ・Ｃａｐ制など「単位・進級・卒業認定厳格化」に対応する。また、「実効性ある授業評価」や「ＦＤの充実」も、当然本プロジェクトに含まれる。

Ⅱ．事業の取組内容

〔全体計画〕

すでに「福大スタンダード」は平成１８年度後半から検討を始めており、平成１９年度内には「試案」を策定して全学的な検討を推進することにしている。平成２０年度内には、試案を精査して社会的に取り組みを公表する。

学習ポートフォリオの様式も、平成１８年度から学内組織ＦＤプロジェクトで検討を始め、平成１９年度には各学類での導入を検討する段階に進む予定である。一般の教員に馴染みのないポートフォリオは、平成２０年度には、十分研修の機会を設け教養演習での利用を図るなど、可能なところから試行を行う。なお、現在の構想はペーパーベースのものだが、ＬＭＳを導入して、デジタルベースで運用することも次なる段階として考えている。

この二つはすでに並行して検討中のものだが、このプロジェクトにおいて統合を果たす。

成果の検証システムは、スタンダード策定と並行して進める。ＧＰＡの進級・卒業への活用は、すでに２学類で一部導入済みだが、全学的導入には１-２年をかけて検討する必要がある。

４カ年かけて、スタンダードの公式な策定、それを組み込む教育課程・授業改善、学習ポートフォリオの実施、検証システムの確立を進め、あわせて、本プロジェクト全体の検証を行う。

〔中期目標期間における事業展開〕

第１期目標期間である平成２０年度、平成２１年度だけでは、全体計画の完成は困難である。なぜなら、スタンダードやポートフォリオ、および検証システムは作れば完成ではなく、策定－試行－点検・修正のプロセスが必要であり、少なくともそのワンサイクルを実施するためにも、平成２３年度が不可欠となる。また、ポートフォリオの電子化を実現するには、４年目の実施・運用が必須である。

〔平成２０年度に実施する事業内容〕

「福大スタンダード」構想案を全学検討に付す。

学習ポートフォリオを含む「学習ガイドブック」の編集・印刷を平成１９年度内に終え、平成２０年度新入学生に配布する。あわせて、その活用についてＦＤを実施し、本学の制度として定着している「アドバイザー教員」に学生がガイドブック及びポートフォリオを活用する際のサポートを周知する。

教育成果の検証については、第１期中期目標・中期計画の自己評価にとって必要な検証データを　得るために、スタンダード策定とは切り離して進め、その成果を本プロジェクトで活用する。

Ⅲ．事業の実現に向けた実施体制等

【実施体制】

スタンダードは、教育研究評議会での基本方向の議論を踏まえ、教育企画委員会で検討を行う。

学習ガイドブック・学習ポートフォリオは、ＦＤプロジェクトで検討が進んでおり、平成２０年度入学生への配布を予定している。平成２１年度以降の運用と点検はこのＦＤプロジェクトが担当する。

成果の検証チームは、ルーティン化している課題に関しては既設の本学自己評価委員会が担っているが、そことは別個に組織し、本プロジェクト固有の研究課題に取り組む必要がある。自己評価委員会と連携して、スタンダードを担当する教育企画委員会が担当する予定である。

【工夫改善の状況】

本学の教育改革を推進する全学組織として「教育企画委員会」が設置されている。総合教育研究センターのＦＤ部門とキャリア開発教育研究部門からなる教育企画室を設置して、学外の改革情報を収集・研究している。また、学長提唱による「福島大学プラン２０１５」を掲げ、中期的な大学のビジョンを打ち出しており、さらにアクションプランを策定している。教育担当の副学長を置き、全学教育体制の運営と教育改革の委員会を統括し、推進責任者としている。

Ⅳ．事業達成による波及効果等（学問的効果、社会的効果、改善効果等）

本来「福大スタンダード」は、文部科学省が提唱する「人間力」、経済産業省が提唱する「社会人基礎力」、さらにはＯＥＣＤのキー・コンピテンシー、欧米では一般的なプロフェッショナル・デヴェロップメント（専門職性の開発）を参考に構想しはじめたものである。社会的ニーズを大学がどう受け止めるか、を基本課題としている。それを一大学で、全学システムとして取り組むこと自体、開発研究としての学問的な意義を持つと考える。

本学のような学生数４，０００人程度の規模では、少人数教育を標榜し、教員と学生の距離は小さく、きめ細かい支援体制が組めるので、新システム開発には適している。そうした中で開発されたシステムは、それより大きな大学にも妥当性が相当程度あると思われ、相当の効果が推定される。

ユニバーサル段階の大学の教育システムは、従来の大学の機能では果たせない新たな課題が山積している。教育の質の保証と成果の検証は、これまで卒業生の就職率とか卒業後の追跡調査など限られた指標や調査しかなかった。本プロジェクトは、そうした状況に限界を痛感していた本学での検討過程にとって大きな支えとなり、現在検討を行っている３つの計画を統合する契機となる。

２．福大スタンダードを巡る議論の流れ

※本節では教育企画委員会にて提出された資料を元に、２００６年度から２００９年度にかけてのスタンダードを巡る議論の概要をまとめていく。

◆２００６．５　教育企画委員会「今期以降の教育改革の課題メモ」

（１）競争時代の大学において「教育重視の人材育成大学」を支える教員力の充実。教育成果の質が、まともに問われる時代に、教育能力の向上をどう図るか。
（２）学生の「付加価値」という場合のカリキュラム点検。共通・専門を通して４か年学士課程として、社会の要求する力をどうつけるか。
（３）社会的なニーズにマッチする大学教育としての「付加価値」とは何か？付加価値は、即戦力、特定の職業的専門性とは考えない。学士課程が「教養教育」との言説をふまえ、汎用性の高い「コンピテンス」を付与する。
（４）プロトタイプは、人間発達文化学類の将来計画委員会で検討されている「教員スタンダード」のなかに、見ることができる。各種の「演習」や「総合科目」も、従来の授業にはない「教養とコンピテンス」を追求する「場」として、科目の設定や指導内容の質を見直すことが必要となる。

◆２００６．１０『共通教育アリーナ』「大学「教育改革」はどこに向かうか」

（１）学生が身につける「能力」、最近の言葉で言えばコンピテンスを、どう示し、教育内容にどう盛り込み、「評価」を通して定着させていくか、が否応なく問われる時代である。
（２）しかし、本学の「教育重視の人材育成大学」という標語は、漠然としている。共通教育・専門教育を通して、四年間の学士課程教育を、どういう中身として説明できるかという問題意識を共有し、その課題に応えられるような全学的な検討を進める必要がある。
（３）学長のイニシアチブで「２０１５年Ｐｌａｎ」の策定が提起された。その中に、「ＦＵ－Ｓｔａｎｄａｒｄ」という絵図案がある。まだ何も中身の議論をしているわけではないが、大学教育として、学生に身につけさせる諸力を、明示的に掲げられないものかという発想がベースになっている。

◆２００７．１ 福島大学プラン２０１５／アクションプラン

【福島大学プラン２０１５】
教育重視の人材育成に向けた教育の「質」の保証として「福大スタンダード」を確立する。このためには、主体的学習・少人数教育を系統的に組むとともに、全学生が身に付けるべき教育水準の構築や国際交流協定校との交流を促進し、加えて学内外での学生の能力を飛躍的に向上させた教育経験に学びつつ教員の授業力や教育力の向上を図る。

【アクションプラン】
「教育の成果」を、知識、態度、技能の観点から検証し、教養教育において、人格形成とともに学習意欲・学習習慣の形成を含む「学習スキル」を習得させ、「教える」から「学ぶ」への「自学自習」の能力をつける。少人数教育を持続・発展させつつ、各学類の専門性に応じたリテラシー教育、進路職種に応じた基本的な教育を重視する。全学生が身に付けるべき教育水準を、「福大スタンダード」として構築する。授業方法改善・教員の教育力の向上に向けた取り組みを強化する。

◆２００７．８　「福大スタンダード」事業計画（前節参照）の作成
「福大スタンダードによる教育の質の保証と成果の検証システムの構築」として特別教育研究経費を要求。

◆２００８．３　「福大スタンダード（仮称）」の検討状況について（２００７中間報告）

【「スタンダード」の位置づけ等】
「福大ブランド」など、必ずしも「スタンダード」という名称にはこだわらない。アクションプランの「全学生が身につけるべき」と表現について、「すべての学生」は重要であるが、あらゆる項目で「すべての学生」を対象とするかはこだわらない。

【「スタンダード」の機能】
（１）大学にとっての意味
学生を管理するのではなく、学生を自主的な主体性のある「学習者」として見なし、大学は学生が自ら育っていくための目標提示と、到達のための支援を行う。「スタンダード」が教育課程・教育活動において学生自身の身につくようにする。教育活動には、インターンシップや課外活動など、学生の主体的な活動も含まれる。新入生ガイダンス、学習ガイドブックなどの広報活動や、各種演習などでアドヴァイザーの役割を持つ教員が、「スタンダード」の意味・役割を説明する。
（２）教員にとっての意味
「スタンダード」をトップダウン的に決め、教員に対して、その趣旨に沿った授業内容･運営を強制するような他律的なことは想定していない。なぜなら、内発的でない教育内容は意味をなさないからである。現在の各授業の中に、どのような「スタンダード」が含まれるかを各自が吟味し、自発的にその項目内容を示せばよいのではないか。
（３）学生にとっての意味
授業に受け身で出るということではなく、自分なりの「学習目標」を意識化するための「指標」として活用できる。「大学では何に力を入れてきましたか？」と聞かれたときに、自信を持って答えたり、あるいは、大学での学びをのちの人生で肯定的にふり返ることができる。仕組みとして「ラーニング・ポートフォリオ」の活用を検討。ＦＤプロジェクトが作成した「学習ガイドブック」に、ポートフォリオを盛り込む。

【手続き】
（１）２００７年度は、大学教育の質の保証を学生や社会に対して説明しうるものとして、本学構成員の共通理解を深めるという過程を重視してきた。
（２）「スタンダード」の項目それ自体は、２００８年度中にその内容を固める。
（３）仮に「スタンダード」が策定され、ワンサイクル４年を視野に入れるとしても、不具合があれば適宜修正していく、という柔軟な過程を取るのが望ましい。

【中教審提唱「学士力（仮称)」との関係・・・教養教育の再構築として】

（１）中教審平成１７年１月「将来像答申」の専門を超えた共通の知識や思考法などが、教養教育の最重要課題として提起された。さらに、平成１９年９月の中教審大学分科会小委員会第６回会議でまとめられた「審議経過報告」で、「学士力（仮称)」という提案がされている。

（２）大学が単なる「学位」の授与機関ではなく、学生にどういう「付加価値」をつけて世に送り出すか、という点での社会的説明をしなければならない、ということが背景の一つになっている。

（３）中教審が正式に答申に書きこめば、これ自体は「参考指針」でしかないとは言いながら、これと同等のものを、たとえば、各大学が「どういう学生を育てたか」などを説明することが求められるのは必至であろう。

（４）答申は、年度中にまとめられる。本学の「スタンダード」構想は、いわばこれを先取りした検討例といえ、来年度概算追加要求で、「福大スタンダード」の検討プロジェクトを出して認められたのも、こうしたニーズにマッチしたものと考えられる。

◆２００８．１２　「福大スタンダード」案、たたき台

【到達点の確認】

共通のスタンダードの検討と、各学類カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーの検討を進める。中教審でアドミッションポリシー/カリキュラムポリシー/ディプロマポリシーが、成果検証とリンクして提起された。「外的動因」は受け止めざるを得ない。スタンダードのイメージは未確定だが、役員会、監査委員等からの期待は大きい。

【検討課題】

（１）中教審で学士課程教育の具体化が示されているので、本学が単純にスタンダードを掲げる、というだけでは十分でなくなった。中教審答申案をそれなりに読み込んで、全体構造をふまえて、現在の検討課題を定める必要がある。

（２）ディプロマポリシーだけでなく、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシーの重要性が喚起されるなかでは、学類単位での取り組みが不可欠。しかし、学士力が意味する共通性のあるものを掲げる意味があるとすれば、スタンダード検討を学類に委ねるのではなく、全学的検討組織を拡大強化するのが望ましいとの意見も出た。

【本委員会の課題と進め方について】

（１）専門教育としてのカリキュラムポリシー、ディプロマポリシーは各学類の守備範囲だが、分類枠組みや記述方法（～できる）は、大学として統一すべきである。

（２）シラバスへは、スタンダード対応の項目を設けることが望ましい。だが、抵抗感があれば、別の表現方法を考えればよい。なお、カリキュラムと授業の対応を書くことは、今後必須事項となると考えられる。また、シラバス等に「力」をリンクする場合、例示数が多い方が書きやすいと考える。

（３）なお、スタンダード、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーには、学生「管理」の側面もある点に留意が必要である。学生を受け身にし、主体性を育てる点でデメリットを伴うことも予想される。他大学には「管理」的方向での取組みも行われているが、模倣は避けたい。学習ポートフォリオを運用して、主体性育成する方法を、本学の特徴として打ち出してはどうかと考える。

◆２００８．３　「福大スタンダード」案、たたき台

【Ａ案】
（１）自己形成力：観察・発見／知的好奇心／ｷｬﾘｱﾃﾞｻﾞｲﾝ／自己学習（学習習慣）／倫理観・ｼﾁｽﾞﾝｼｯﾌﾟ／自信力（自己肯定感）
（２）関係形成力：ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ／集団討議・ﾃﾞｨﾍﾞｰﾄ／問題解決力（実践力）／ﾘｰﾀﾞｰｼｯﾌﾟ／ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ力
（３）学習スキル：読解力／情報ﾘﾃﾗｼｰ／ﾉｰﾄと記録／文章作成力／傾聴・質問・応答／思考法・発想法／科学的数量的思考

【Ｂ案】※Ａ案に以下の二つを追加
（１）研究力（卒業研究の段階）
（２）教養・コモンセンス（２１世紀型市民的教養）

【Ｃ案】※中教審学士力を援用したもの（対比のため）
（１）汎用的技能：ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝｽｷﾙ／数量的ｽｷﾙ／情報ﾘﾃﾗｼｰ／論理的、批判的思考力
（２）態度・志向性：問題解決力／自己形成力／ﾁｰﾑﾜｰｸ・ﾘｰﾀﾞｰｼｯﾌﾟ／倫理観、ｼﾁｽﾞﾝｼｯﾌﾟ／自己管理力
（３）知識・理解
（４）統合的な学習経験と創造性

【シラバスに反映させることの意味】
（１）他大学で進むカリキュラムマップ作成を、中教審課題への積極的対応としつつも、それが膨大な作業を伴うことなどを勘案して、以下の代替案を提示する。
①「福大スタンダード」およびそれに準ずる「学類スタンダード」を本学のカリキュラムポリシーの「基本」に置く。
②スタンダードと各授業がその授業の教育目標として掲げる内容との「つなぎ」については、シラバス上で具体化することが考えられる（が、必ずしもその手法だけに限定しない）。
③成果検証は、学生が書く「学習ポートフォリオ」と、総括的なアンケート（共通教育アンケートのイメージ）でおこなう。

◆２００９．３　教育研究評議会資料
〈「福大スタンダード試案」の提案と説明平成２１．２．２４　教育企画委員会〉

【「福大スタンダード試案」提示までの経緯】
（１）平成２０年度の教育企画委員会の検討は、主に中教審「学士力」との関連について意見交換を重ねた。
（２）「そもそもやるべきなのか」という学類教員会議で出された意見は、客観情勢のもとでは「いかにやるのか」という段階に引き上げられねばならない。しかし、実際にスタンダード項目を検討するうえでは、この「そもそも」論を丁寧に掘り起こし、その役割と活用の仕方を想定した検討が不可欠であった。
（３）そこで、今年度の検討の到達点として、スタンダード項目も「試案」とするだけでなく、項目の掲げ方とその想定される内容についても、さらに半年程度の検討を行うことを前提とした「試案」とした。
【「スタンダード試案」についての説明】
（１）今回の提案は、スタンダードそのものの形としては、「概念表」に集約される。

福大スタンダード（案）の概念表…（項目のみ抜粋）
◎自己形成力：観察・発見／知的好奇心／ｷｬﾘｱﾃﾞｻﾞｲﾝ／自己学習力（学習習慣）／倫理観（ｼﾁｽﾞﾝｼｯﾌﾟ）／自信力（自己肯定感）

◎関係形成力	：ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ力／集団行動力／問題解決力（実践力）／ﾘｰﾀﾞｰｼｯﾌﾟ／ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ／
◎学習力	：読解力／情報ﾘﾃﾗｼｰ／ﾉｰﾄと記録／文章作成力／傾聴・質問・応答／思考法・発想法／科学的数量的思考
◎専門学識	：各専門領域
◎卒業研究	：課題探究力
◎市民的教養	

（２）なお、「自己形成力」「集団形成力」「学習力」だけでは、社会的ニーズに応えた「大学教育力」の形が示されないので、これらとは少し次元を異にするが、「専門学識」「卒業研究」「市民的教養」も加えたが、本委員会ではそれらの内容に関わる、詰めた議論は出来ていない。

【さらに検討を要する点】

（１）スタンダード項目が、福島大学及び４学類の「教育目標」をふまえたものになっているのか、あるいは、本学の個性を生かしたスタンダードになっているか。

（２）ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーとの関連をいかに図るのか。

（３）成果の検証の「仕組み」を「出口管理」としてどう具体化するのか。

（４）とくに、（３）に関しては、スタンダードそのものを活用するかどうかについての選択肢もありうる（別の仕組みを作るという選択肢を指す）。

【議論の到達点】

（１）「福大スタンダード」および「学類スタンダード」（仮称）を本学のカリキュラム・ポリシーの「基本」に置く。

（２）スタンダードと各授業がその授業の教育目標として掲げる内容との連関は、シラバス上で具体的に示すことが考えられる（が、必ずしもその手法だけに限定しない）。

（３）成果検証は学生が記入する「学習ポートフォリオ」と大学が実施する総括的なアンケート（共通教育アンケートのイメージ）でおこなう。

◆２００９．１１　教育研究評議会資料

〈「福大スタンダード」をめぐって平成２１．１０．２９教育企画委員会〉

【学類等からの意見を踏まえての改めての確認】

（１）「福大スタンダード」の性格とは、その学生の専門によらず、福島大学の学生として共通に身につけるべき力量を指したものである。これが学類での専門的力量を含みこむものとか、“全学の基準を定めてそれに学類を合わせる”というものとして理解されているなら、そうではないことを改めて確認する。

（２）学生の力量形成についての学類での検討をないがしろにしたり、抑えつけたりするものではない。各学類での検討とあいまって、大学としての育てたい学生像が提示できる。人間発達文化学類では先行して「学類スタンダード」の検討を行ってきているし、他学類でも育てるべき学生像についての検討を始めている。

（３）“スタンダード”というと、標準化させる（それに沿わせる）、鋳型にはめ込むことになるのではという意見は繰り返しだされているが、もし「スタンダード」という名称がこのようなことを想起させ、使用することに抵抗があるのであれば、それにこだわる必要はなく、よりふさわしいものとすれば良いと考える。

（４）改めてスタンダード策定の意義を確認しておきたいが、今や大学がその大学の考える理念、教育目標に基づき、学生にどのような力を授けて送り出したいかを明示的に示すことが強く求められている。それに関わって、「教育の質の保証」についての「仕組み」をつくり、実施し、検証するシステムの構築が必要となっている。まずは福島大学スタンダードの策定をもとにして、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーの検討へと進む必要がある。

【先の提案文書（平成２１年３月 第１０６回評議会）を踏まえて】

・共通理解による確定と社会的な公表に踏み切る段階へと進みたい。
・〈さらに検討を要する点〉の取組へと歩を進めていく必要がある。

【今回の提案】

（１）他の名称の検討
福大共通スタンダード、福大コア・コンピテンシー、福大キー・コンピテンシー、福大ジェネリック・スキル等について検討したが、どれもより適切とは考えられない。現段階では「福大スタンダード」とする。

（２）個別項目の修正等
今回は意見を踏まえて若干の改訂をした上で、別紙の通り提案する。

別紙　福大スタンダード（案）の概念表
※上述の概念表から「自信力」「ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ」削除。また、三つの「力」とその他を分離して記述。

（３）内容的に不変のものではなく、今後の検討により、必要な部分的修正も行う。とくに、各学類で学類スタンダードないしはそれに該当するものが確定した段階で改めて再検討し、今回のものを全学的に共通するスタンダードとして、合わせて「福大スタンダード」と整理し直すことを視野に置く。

◆２０１０．３　教育企画委員会平成２１年度の総括と今後の課題

今年度は第４０回～第４８回の９回の委員会と３回のＷＧを開催した。中心的な検討点は、福大スタンダードとアンケート調査であった。

【全体的な活動報告】

（１）スタンダードについて、「試案」と３つの到達点を確認した上で、秋までに対応方針を検討し、試案から、暫定的ではあれ内容項目の確定を教育研究評議会で行った。

（２）しかし、この段階で内容項目について意見が出だした。かつ、確定段階についての異論も出てきた。そこで、それらの反応を考慮した対応を行うこととした。たとえば、第二期の中期目標・計画における年度計画（初年度）について、当初は「『福大スタンダード』の活用策を検討するとともに、厳格な学位授与に向けての方針検討を行う」としていたものを「『福大スタンダード』をさらに検討、改善するとともに、厳格な学位授与に向けての方針確認を行う」などと変更した

【今後の課題】

福大スタンダードに関しては、その本格運用の開始を当初は平成２２年度と想定したが、上記の対応を受け、より慎重な検討を行い、「福大スタンダード」項目については暫定確定と位置づけ、内容的にはさらにブラッシュアップを図り、学類スタンダード検討が進んでいるところとは一定の整合を取るようにし、来年度内にはより明確な形で確定する必要がある。今後は、学士課程教育の目標などの検討を進め、スタンダード内容の改善とともに、スタンダード提示について作業を進める必要がある。

３．福大スタンダードを巡る議論の成果

Ⅰ．平成２２年度～平成２３年度における「福大スタンダード」を巡る議論の成果

（１）平成２２年度には、第２期中期計画（２０１０-２０１５）に各種ポリシーの構築が盛り込まれた。また学校教育法施行規則改正（教育情報公表義務化）への対応として、大学における「教育上の目的」と、それに関連した「学生が修得すべき知識及び能力」（ＤＰ）、さらには知識・能力の修得を保証するカリキュラム（ＣＰ）の公表が求められることになった。

（２）以上の課題設定を踏まえ、平成２２年度以降の教育企画委員会では、各学類及び現代教養コースにおける３つのポリシーの構築を優先させる方針の下、「福大スタンダード（案）」を各学類における「学生が修得すべき知識及び能力」の分類基準とする方針を示した上で、教務関係各委員会や学類教員会議との調整を進めてきた。

（３）その成果として、学類・現代教養コースのＤＰがまとめられ、平成２３年６月に公開された。また平成２３年度には、ＤＰに対応したＣＰ・ＡＰの構築に向けた議論を、教務関係各委員会や学類教員会議との調整の下に進めた。その成果は、学類・現代教養コースのＣＰ、ＡＰの改定案にまとめられ、平成２３年１２月２１日の教育企画委員会において承認れた。

Ⅱ．「福島大学の教育目的」提案の経緯

（１）しかし、平成２２年度に策定されたＤＰは、各学類・専攻の専門教育を中心とするため、共通教育において「学生が修得すべき知識及び能力」を十分に反映していなかった。また他大学における教育情報公表の義務化への対応では、共通教育を含んだ大学全体の教育目的を提示した上で、学生が４年間で身に付けるべき知識・能力の明確化と、そのためのカリキュラム設計が進められていた。

（２）そのため平成２３年度には、各学類のポリシー構築を踏まえて、改めて全学的な「教育目的」に応じた「学生が修得すべき知識及び能力」の策定が必要となった。このような課題設定の下、「福島大学の教育目的」の叩き台を作成し、教育企画委員会及び共通教育委員会を中心に議論を進めてきた。

（３）なお「福島大学の教育目標」ではなく「福島大学の教育目的」の名称としたのは、学校教育法施行規則において「教育上の目的」の語が使用されていることに基づく。

Ⅲ.「福大スタンダード（案）」と「福島大学の教育目的」の関係

（１）以上の「福島大学の教育目的」策定の過程では、他大学の事例や福島大学の大学案内、「共通教育アンケート」に示される各科目のねらい、各学類のＤＰの他、福島大学全体における「学生が修得すべき知識及び能力」策定の到達点として「福大スタンダード（案）」を参考にしている。そのため「福大スタンダード（案）」と「福島大学の教育目的」は緩やかな対応関係にある。

（２）一方、平成２２年度以降、教育企画委員会では「福大スタンダード（案）」の検討課題自体について十分な議論をすることはできなかった。だが「福大スタンダード（案）」の到達点は、前述のように「福島大学の教育目的」策定の過程で、「学生が修得すべき知識及び能力」策定の到達点として反映させ、「福島大学の教育目的」と「福大スタンダード（案）」は一定の対応関係をもつものとなっている。

（３）これまでの「福大スタンダード」を巡る議論の中で提起された課題は、今回の「福島大学の教育目的」及び各種ポリシー策定によって完成するわけではない。しかし今回「福島大学の教育目的」が全学的議論をへて教育企画委員会で承認されるにいたった現段階をふまえれば、「福大スタンダード」自体についての議論を今後も継続することは適切ではないであろう。今後は「福大スタンダード」の議論の到達点を参考にしながら、「福島大学の教育目的」及び各種ポリシーの運用と検証・改善のサイクルの中で、「学生が修得すべき知識及び能力」の全学的な成果検証・質保証システムを構築する議論を継続していく必要がある。

⇒以下、本事業の成果の詳細については、次の各章に記載する。

・第２章　福島大学の「三つのポリシー」
・・・福島大学の教育目的／三つのポリシー／シラバス反映

・第３章　福島大学の教育成果～質問紙調査による検証～
・・・在学生アンケート／卒業生アンケート／就職先企業アンケート

・第４章　学習支援システムの構築
・・・ＬＭＳの活用報告／学習ガイドブック／学習ポートフォリオ

第２章
福島大学の「三つのポリシー」

１．「福島大学の教育目的」・・・・・・・・・・・・ 13
２．人間発達文化学類の三つのポリシー・・・・ 16
３．行政政策学類の三つのポリシー・・・・・・・ 21
４．経済経営学類の三つのポリシー・・・・・・・ 27
５．共生システム理工学類の三つのポリシー・・ 33
６．夜間主（現代教養ｺｰｽ）の三つのポリシー・・39
７．シラバス改訂―授業との連関に向けて・・・ 43

1．「福島大学の教育目的」

教育目的：広い視野と豊かな創造力を有する専門的職業人を育成する。	
人間発達文化学類	：人間の発達と文化の探求・創造に関する専門的知識と技能の獲得を通じて、学校をはじめとして現代社会が直面する人間の発達支援に関わる諸課題に積極的に取り組む人材を養成する。
行政政策学類	：21世紀の地域社会が直面している諸問題を、広く学際的な観点から学び、より暮らしやすい健康で文化的な地域社会を創り出すために必要な知識と能力をもった人材を養成する。
経済経営学類	：広い視野に立って学識を授け、現代の経済社会を理解し、経済と経営に関わる基礎的・専門的な知識及び能力を身に付けた人材を養成する。
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	：人―産業―環境に関わる課題を共生のシステム科学の視点で学び、自ら課題を発見し解決できる能力と文理融合型の思考力を有し、個性に応じた実践型キャリアを身に付けた人材を養成する。
夜間主（現代教養）コース	：現代社会を理解し、生活課題・地域社会が直面する問題を解決できる現代的教養を身に付けた人材を養成する。

主に共通領域・自己デザイン領域において修得すべき知識及び能力		主な対応領域
幅広い教養	多角的・総合的思考	共通領域 ・総合科目 ・広域選択科目 ・外国語科目 ・情報教育科目 ・健康・運動科目
	学問的思考の基礎	
	外国語リテラシー	
	情報リテラシー	
	身体リテラシー	
自己形成力	自己学習力	自己デザイン領域 ・教養演習 ・自己学習プログラム ・キャリア創造科目
	コミュニケーション力	
	キャリアデザイン力	
	関係形成力	
所属する学類・コースごとに修得すべき知識及び能力（専門的創造力）		**主な対応領域**
人間発達文化学類のディプロマポリシー	教え育む力	人間発達文化学類の専門領域
	理解し探究する力	
	人や文化と関わる力	
	解決し創造する力	
行政政策学類のディプロマポリシー	研究分野の知識	行政政策学類の専門領域
	問題発見・調査・解読能力	
	解決能力・応用能力	
	表現力・コミュニケーション能力	
経済経営学類のディプロマポリシー	自立する力	経済経営学類の専門領域
	客観的に観察・分析し、論理的に思考する力	
	経済社会で実践し解決する力	
共生ｼｽﾃﾑ理工学類のディプロマポリシー	21世紀の諸問題に挑戦し、解決する力	共生ｼｽﾃﾑ理工学類の専門領域
	グローバルな視点から、物事を探求する力	
	問題解決のための実践力	
	ｼｽﾃﾑｻｲｴﾝｽに関する幅広い専門知識と実践能力	
夜間主（現代教養）コースのディプロマポリシー	職業知識・技能	夜間主（現代教養）コースの専門領域
	社会人としての教養	
	生きがいとしての教養	
	働きながら学ぶ力	

※上記の表に示した知識及び能力の詳細な内容は、次項の「学生が修得すべき知識及び能力／各学類・コースのディプロマポリシー」及び「教育課程編成の方針／各学類・コースのカリキュラムポリシー」に示す。

【学生が修得すべき知識及び能力／各学類・コースのディプロマポリシー】

・福島大学では、広い視野と豊かな創造力を有する専門的職業人の育成を目的として、以下に示す「幅広い教養」「自己形成力」「専門的創造力」の修得を柱とした教育を行っています。

Ⅰ．今日の社会の現象や諸問題に専門的な力量を結びつけて理解し、活用する力（幅広い教養）

Ⅰ-1 多角的・総合的思考

：社会現象や諸問題に対し、文理の枠組を超えて、多角的・総合的に考える能力

Ⅰ-２学問的思考の基礎

：人間・文化・社会・歴史・自然・技術に対する専門を超えた理解と関心と、学問的な思考の基礎

Ⅰ-３外国語・情報・身体リテラシー

Ⅰ-3-①：外国語の基礎的なｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ能力と言語文化に対する豊かな世界観、思考力、表現力（**外国語ﾘﾃﾗｼｰ**）

Ⅰ-3-②：コンピュータを用いた情報収集・分析の基礎（**情報リテラシー**）

Ⅰ-3-③：健康や運動についての科学的認識（**身体リテラシー**）

Ⅱ．自ら学びをデザインする主体性（自己形成力）

Ⅱ-１自己学習力

：自ら問題を発見し、思考し、知識を追求する姿勢

Ⅱ-２コミュニケーション力

：文章や発話の意図を十分に理解した上で、自らの意見を効果的に表現・伝達する能力

Ⅱ-３キャリアデザイン力

：自らの進路選択と、基本的な職業観とモラルに基づいて、主体的に学習を計画する力

Ⅱ-４関係形成力

：課題達成のため、自ら人間関係を構築し、社会集団の中で物事に取り組む能力

Ⅲ．専門知識・技能・態度に基づいた創造的思考力（専門的創造力）

：所属する学類・専攻・コースの専門的な知識・技能・態度に基づいて課題を解決する力

⇒福島大学において学士の学位を取得するために、学生は所属する学類・コースごとに以下の**ディプロマポリシーに示す能力**を修得する必要があります。
なお、知識・能力の詳細な内容については、各学類・コースの頁をご参照ください。

・人間発達文化学類
：「教え育む力」「理解し探究する力」「人や文化と関わる力」「解決し創造する力」

・行政政策学類
：「研究分野の知識」「問題発見・調査・解読能力」「解決能力・応用能力」「表現力・ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ能力」

・経済経営学類
：「自立する力」「客観的に観察・分析し、論理的に思考する力」「経済社会で実践し解決する力」

・共生システム理工学類
：「21 世紀の諸問題に挑戦し、解決する力」「グローバルな視点から、物事を探求する力」「問題解決のための実践力」「システムサイエンスに関する幅広い専門知識と実践能力」

・夜間主（現代教養）コース
：「職業知識・技能」「社会人としての教養」「生きがいとしての教養」「働きながら学ぶ力」

【教育課程編成の方針／各学類・コースのカリキュラムポリシー】

・福島大学では、次のようなカリキュラムに基づいて、幅広い教養・自己形成力・専門的創造力を涵養します。
・学士課程のカリキュラムを「共通領域」「自己デザイン領域」「専門領域」「自由選択領域」の４領域に区分します。
・「共通領域」では、社会現象や諸問題に専門的な力量を結びつけて理解し活用する幅広い教養の基礎を育むために、すべての学類に共通するカリキュラムとして、総合科目、広域選択科目、外国語科目、情報教育科目、健康・運動科目を開講します。

－総合科目では、文系理系の枠組を超えた学習を通じて、多角的・総合的な思考を育てます。
－広域選択科目では、“人間と文化”“社会と歴史”“自然と技術”の３分野の学習を通じて、学問的な思考の基礎とともに、専門を超えた関心と理解を育みます。
－外国語科目では、英語及びその他の外国語の学習を通じて、外国語コミュニケーション能力と豊かな世界観・思考力・表現力を育みます。
－情報教育科目では、情報処理に関する基礎的な知識・スキルの学習を通じて情報リテラシーを涵養します。
－健康・運動科目では、各種目のスポーツ実践を通じて、健康や運動についての科学的認識を促すことで、身体リテラシーを育みます。

・「自己デザイン領域」では、自ら主体的に学びをデザインする自己形成力の基礎を育むために、主に１・２年次の学生を対象としたカリキュラムとして、教養演習、キャリア創造科目、自己学習プログラムを開講します。

－教養演習では、20 人規模のセミナー形式の授業を通じて、自ら問題を発見し、思考し、知識を追求する自己学習力を育みます。また社会に通用するアクティブな知識を、仲間とともに修得する過程を通じて、コミュニケーション力・関係形成力を涵養します。
－キャリア創造科目では、全学 1 年次必修科目であるキャリア形成論と、選択科目であるキャリアモデル学習・インターンシップを通じて、現代社会にふさわしい基本的な職業観とモラル、及び自らの進路選択と大学での学びを関連付けて主体的に学ぶキャリアデザイン力を涵養します。
－自己学習プログラムでは、学生による自主的な学習課題の設定と、その課題達成のために組織された学習集団による学習活動を単位として認めることで、自主性・主体性に基づく自己学習力と、社会集団のなかで物事に取り組む関係形成力を養います。

・「専門領域」では、所属する学類・専攻・コースのカリキュラムポリシーに従って、「幅広い教養」、「自己形成力」を発展させるとともに、専門知識・技能・態度に基づいた「専門的創造力」を身に付けます。

－カリキュラムポリシーは、各学類・専攻・コースが示すディプロマポリシーを修得するための専門科目の体系です。カリキュラムポリシーの詳細な内容については、各学類・コースの頁をご参照ください。

・人間発達文化学類／行政政策学類／経済経営学類／共生システム理工学類／夜間主（現代教養）コース

・「自由選択領域」では、「共通領域」「自己デザイン領域」「専門領域」の卒業に必要な単位数を満たした上で、各領域の開設科目の中から、学生の関心に基づきさらに積み重ねたいと思う領域の学習を自ら選択して進めることができます。

・上記の4領域に加え、更に自分の能力を伸ばそうとする意欲のある学生のために、コンピュータを用いた情報収集・分析面での実践的なスキルアップを図る「情報グレードアップ特修プログラム」と、専門分野の研究や就職・留学に向けた英語技能向上のための「英語グレードアップ特修プログラム」を用意しています。また、オーストラリア、中国、ベトナム、韓国、ドイツ、イギリスの６カ国１０大学との学生交流協定の下、交換留学制度を整備することで、国際的な活躍を望む学生の意欲に応えます。

２．人間発達文化学類の三つのポリシー

人間発達文化学類のディプロマポリシー

【人間発達文化学類の教育目標】
本学類は、人間の発達と文化の研究・創造に関する専門知識と技能の獲得を通じて、学校をはじめとして現代社会が直面する人間の成長支援に関わる諸課題に積極的に取り組む人材を養成する。

【学類ディプロマポリシー（簡易版「学修指標」）】
※本学類は、現代社会に必要とされるエデュケーターを育成するために、「教え育む力」を中心に、「理解し探究する力」「人や文化と関わる力」「解決し創造する力」の４つの能力を人間の発達と文化の両面から定義づけており、「学修指標」に明記している。以下に示すディプロマポリシーは「学修指標」の簡易版である。

Ⅰ　教え育む力
Ⅰ-1　成長を支援する力：エデュケーターとしての自覚／問題解決への支援／セルフ・エデュケーション
Ⅰ-2　文化を育む力：文化の伝達／文化の創造／未来志向

Ⅱ　理解し探究する力
Ⅱ-1　人間に対する深い理解：発達の筋道の理解／人格・個性の尊重／社会背景の認識
Ⅱ-2　文化の探究：専門的知識と技能の獲得／学問的思考／多様な視点からの問題把握

Ⅲ　人や文化と関わる力
Ⅲ-1　コミュニケーション実践：多様なコミュニケーション／共感的態度／関係形成への努力
Ⅲ-2　文化的実践：学問・文化の実社会での活用／文化の多様性の尊重／効果的な伝達方法

Ⅳ　解決し創造する力
Ⅳ-1　共同性の創造と深化：共同性の創造／成長への方略／自治と自立
Ⅳ-2　課題発見・解決能力：創造的発想／論理的・批判的問題解決／実践の省察

【専攻ごとのディプロマポリシー】

［人間発達専攻］
Ⅰ　現在の社会状況と人間発達の課題を関連づけ、エデュケーターとしての自覚と実践的能力を持つ。（現代社会における教育の意義）
Ⅱ　深い人間理解と愛情に根ざし、人間発達に関する専門的学識を身につけ発達の支援を行おうとする。（深い人間理解に根ざした発達支援）
Ⅲ　多様なコミュニケーションスキルに根ざし、人間関係を形成することができる。（コミュニケーションと人間関係）
Ⅳ　集団的英知にもとづいて、自らの実践を深く省察し実践を改善することができる。（省察的実践）

［文化探究専攻］
Ⅰ　学問や文化と現実社会との関係を把握し、その知識や技術を伝達することができる。（学問・文化の伝達）
Ⅱ　各文化・学問の専門知識と、学問固有の思考法を身につけている。（専門的能力）
Ⅲ　文化と人間発達の関係を捉え、多様な方法で人間に働きかけることができる。（人間発達と文化実践）
Ⅳ　物事を論理的・批判的に捉えるとともに、創造的に問題解決にあたろうとする。（論理的・批判的・創造的態度）

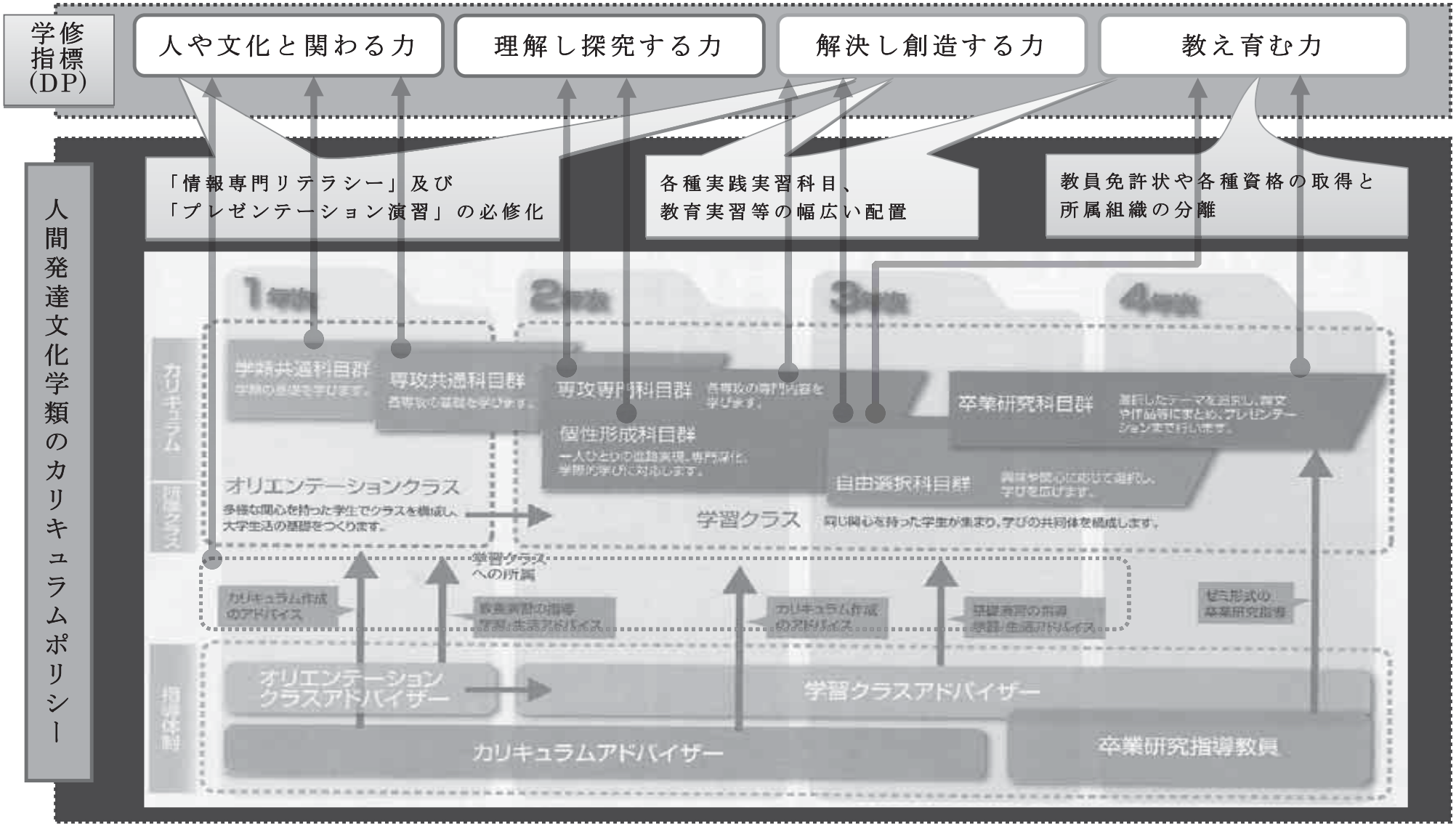
［スポーツ・芸術創造専攻］
Ⅰ　スポーツや芸術の担い手として自覚し、人間の成長・発達と諸技術をつなぎ合わせることができる。（文化の担い手としての成長）
Ⅱ　スポーツや芸術に関する専門的な知識・技術を体得し、その意義を深く理解している。（諸技術の意義）
Ⅲ　スポーツや芸術の意義にもとづいて、集団や地域社会のなかで専門技術を活用することができる。（諸技術の活用）
Ⅳ　他領域との協力関係を重視しながら、実践することができる。（協力関係の重視）

人間発達文化学類のカリキュラムポリシー

本学類は、現代社会に必要とされるエデュケーターを育成するために、〈教え育む力〉を中心に、〈理解し探究する力〉〈人や文化と関わる力〉〈解決し創造する力〉の４つの能力を人間の発達と文化の両面から定義づけており、「学修指標」に明記している。本学類のカリキュラムは、学修指標に示す４つの能力を育むために以下のように構成されている。

1．本学類の教育目標を、人間の成長に携わる専門家（エデュケーター）の育成に置いている。カリキュラム全体で、広義の〈教え育む力〉を形成させるために、〈理解し探究する力〉〈人や文化と関わる力〉〈解決し創造する力〉を有機的に構成し、かつ専門的な〈教え育む力〉の形成をめざしている。
2．オリエンテーションクラス、学習クラスにおいて〈人や文化と関わる力〉の基礎を育むために、「教養演習」「基礎演習」を必修科目として配置している。
3．３専攻の学問領域間の連携を密にし〈人や文化と関わる力〉の基礎を身につけさせるために「学類共通科目」「専攻共通科目」を配置し幅広く学ばせている。
4．各専攻の専門的な内容を深化させ〈理解し探究する力〉〈解決し創造する力〉を身につけさせるために、「専攻専門科目」を配置している。
5．個々の興味関心や進路に応じて履修する「個性形成科目」を配置し、〈教え育む力〉〈理解し探究する力〉〈解決し創造する力〉を伸長する。
6．教員免許状や各種資格の取得と所属組織を分離することにより、学生の意志による資格取得を重視し〈教え育む力〉の総合的な強化を図っている。
7．各種実践実習科目、教育実習等を幅広く配置し、〈解決し創造する力〉〈教え育む力〉を育み、より実践力のある職業人を養成するよう努めている。
8．現代の職業人に必須の能力を身につけさせる「情報専門リテラシー」「プレゼンテーション演習」を必修化し、〈解決し創造する力〉〈人や文化と関わる力〉の伸長をめざしている。
9．「卒業研究基礎演習」「卒業研究」などの科目を配置し、〈解決し創造する力〉ならびに〈教え育む力〉の定着を期している。

【人間発達文化学類のカリキュラムポリシー（概念図）】



【人間発達文化学類３専攻のカリキュラムポリシー（概念図）】

各専攻のカリキュラムポリシー

人間発達専攻

専攻ＤＰの達成に向けて、教育学、心理学、授業づくり、子育て支援、特別ニーズ等の観点から、科学に基づく人間理解と、発達支援の専門的技量を身につける。

文化探究専攻

専攻ＤＰの達成に向けて、言語文化、地域文化、生活科学、数理科学の学問的深化と、領域相互の関連性・応用可能性を追求する。

スポーツ・芸術創造専攻

専攻ＤＰの達成に向けて、スポーツ・健康科学領域と、音楽・美術の芸術領域について、それぞれの基礎科学、確かな技術、技術応用の方法論を習得する。

専攻ＤＰ

人間発達専攻	文化探究専攻	スポーツ・芸術創造専攻
現代社会における教育の意義	学問・文化の伝達	文化の担い手としての成長
深い人間理解に根ざした発達支援	専門的力量	諸技術の意義
コミュニケーションと人間関係	人間発達と文化実践	諸技術の活用
省察的実践	論理的・批判的・創造的態度	協力関係の重視

人間発達文化学類のアドミッションポリシー

１．人間発達文化学類の教育目標と求める学生像

：人間発達文化学類では，教員をはじめ地域や企業などで活躍できる広義の教育者（人間発達支援者）を目指す意欲を持ち、卒業までに次の４つの力を身に付けたいと考える学生を受け入れます。

・人間および文化に対し、それらの仕組みや相互関係について「理解し探究する力」
・主体的に現実にふれ、働きかける「人や文化と関わる力」
・課題を発見し知識や技術を通して「解決し創造する力」
・上記３つを基礎として、全体として人間の発達を支援し文化を育んでいく「教え育む力」

：人間発達文化学類には、人間発達専攻、文化探究専攻、スポーツ・芸術創造専攻の三つの専攻があります。各専攻が求める学生像は次の通りです。

・人間発達専攻では，教育の現実や歴史に対する知見や，確かな心理学的知見，乳幼児期から生涯にわたる人間の発達，特別な教育的ニーズ等に強い関心があり，将来，関連分野で子どもたちを支援する職業等につきたいと考えている学生を求めます。
・文化探究専攻では，人間の発達にかかわる言語文化，地域文化，生活科学，数理科学について、それぞれの学問内容を深めるとともに，領域相互の関連性や応用性を追求し，その成果を教育現場や社会の中で生かしていこうとする学生を求めます。
・スポーツ・芸術創造専攻では，スポーツ・芸術分野や教育現場において広く活躍する専門家を育成することをめざして，これらの分野に強い関心をもち，高い技能と深い探求心をもつ学生を求めます。

２．入試の際に求める知識・技能・関心

：人間発達支援者には，人間に対する理解だけでなく，高校で学ぶ人文科学や社会科学，生活科学，数理科学，芸術，スポーツなどの広い知識が必要です。大学において新たな知識や技術を身につけるために、以下に挙げる知識・技能・関心を有している学生を求めます。

(1). 高校時代までの基礎的な学力・実技能力

(2). 得意分野に関する優れた理解・技能（以下のうち１つ以上）
：得意な教科や領域の意味内容をよく理解している。
：スポーツにおける優れた実績を有している。
：音楽や美術において優れた技量を有している。

(3). 教育・人間・文化・社会への問題意識、及び人間発達支援に対する強い意志

（注）入学試験ごとのアドミッション・ポリシー（入学者受入方針）は各募集要項に記載します。

３．行政政策学類の三つのポリシー

行政政策学類のディプロマポリシー

【行政政策学類の教育目標】
本学類は、２１世紀の地域社会が直面している諸問題を、広く学際的な観点から学び、より暮らしやすい健康で文化的な地域社会を作り出すために必要な知識と能力をもった人材を養成する。

【学類ディプロマポリシー】
※本学類は、地方の時代、分権の時代にふさわしい新しい地域社会づくり、および地域社会の発展に貢献する人材を養成するために、「研究分野の知識」「問題発見・調査・解読能力」「解決能力・応用能力」「表現力・コミュニケーション能力」の４つの能力を、ディプロマポリシーとして提示する。

Ⅰ　研究分野の知識
：法・地域・行政・社会・文化等の研究分野に関する基礎的かつ専門的知識を習得している。

Ⅱ　問題発見・調査・解読能力
：国・地域・社会における諸問題を自ら発見し、調査・分析する能力を習得している。

Ⅲ　解決能力・応用能力
：発見し、調査・分析した諸問題につき、解決する応用的能力を習得している。

Ⅳ　表現力・コミュニケーション能力
：習得した知識・考察した結果を発表し、議論する能力を身につけている。

【専攻ごとのディプロマポリシー】

［法学専攻］
Ⅰ　法学のみならず、政治学・行政学関連の科目や、社会学・比較文化関連の科目を学際的に履修して、視野を広げて深い洞察力を身に付けた上での政策法務的な「法的な思考」を習得している。（リーガル・マインド）
Ⅱ　市民としての政治参加、裁判員制度、企業法務、公務員としての法的実践などに適応し、国および地域の複雑かつ多様な社会現象に法的に対応することができる。（社会における応用能力）
Ⅲ　国および地域の法的問題を自ら発見し、必要な法令・判例や文献の調べ方・読み方・まとめ方・報告の仕方などの基本的技術を活用して、問題を解決することができる。（問題発見・解決能力）
Ⅳ　習得した知識の活用能力、批判的・論理的思考力、課題探求力、問題解決力、表現能力、異文化理解能力およびコミュニケーション能力などを駆使することができる。（表現力とコミュニケーション能力）

［地域と行政専攻］
Ⅰ　政治・行政・社会にかかわる研究分野の基礎的知識を習得している。（基礎的知識）
Ⅱ　地域の固有性と多様性を現地調査によって十分に把握し、様々な資料を読み解き、考える力を身につけている。（調査能力と思考力）
Ⅲ　様々な研究分野の関連性を思考しながら、地域社会の諸問題の解決に向けて、積極的に貢献するための能力を習得している。（応用能力）
Ⅳ　習得した知識や思考を適切に表現する力、他者と協力して活動できるコミュニケーション能力を習得している。（表現力とコミュニケーション能力）

［社会と文化専攻］
Ⅰ　社会学、歴史学、教育学、文化研究等のいずれかについての専門的な知識を習得し、かつ「社会と文化」の研究にかかわる学際的な基礎知識を身につけている。（社会・文化研究にかかわる学際的および専門的知識）
Ⅱ　現代社会の諸問題、地域社会の問題や、歴史理解、異文化理解、国際交流等にかかわる問題を、みずから発見し、考察し、その解明・解決の方向性を見出すことができる。（社会・文化研究への応用能力）
Ⅲ　文献や資料その他の必要な情報源を見つけ出し、それらを解読し、その成果をみずからの立てた問題に照らして、活用することができる。（調査能力と情報解読能力）
Ⅳ　みずからの考察の成果を、文章によって論理的に表現することができる。また、意見交換や討議を尊重しつつ、その成果を的確に伝達することができる。（表現力とコミュニケーション能力）

行政政策学類のカリキュラムポリシー

・行政政策学類では、地方の時代、分権の時代にふさわしい新しい地域社会づくり、および地域社会の発展に貢献する人材を養成するために、「研究分野の知識」「問題発見・調査・解読能力」「解決能力・応用能力」「表現力・コミュニケーション」の４つの能力をディプロマポリシーとして掲げています。これらの達成に向けて、学類および各専攻のカリキュラムを以下の方針で構築しています。

【各専攻に共通のカリキュラムポリシー】

：各専攻に共通の「問題発見・調査・解読能力」「解決能力・応用能力」「表現力・コミュニケーション」を育成するため、カリキュラムを以下の方針で構築する。

１．自己デザイン領域、共通領域、自由選択領域のほかに、人文社会学群共通科目・学類専門科目・専攻入門科目・演習・卒業研究からなる専門領域の科目を設置する。

２．知識の活用能力、批判的・論理的思考力、課題探求力、問題解決力、表現能力、異文化理解能力およびコミュニケーション能力など、社会生活において必須となる汎用的な能力を育成するための参加型の少人数授業を実施する。

【各専攻に固有のカリキュラムポリシー】

：各専攻の「研究分野の知識」に基づいて、専攻固有の「問題発見・調査・解読能力」「解決能力・応用能力」の修得のため、カリキュラムを以下の方針で構築する。

《法学》

：リーガルマインドに基づき、社会における応用能力／問題発見・解決能力を育成する。

１．国および地域社会における複雑かつ多様な社会現象に広く対処できる基礎的能力を育成するための法分野の科目を設置する。

２．広く現代社会の問題を把握して自己の思考の基盤を形成するための学群共通科目および学類基礎科目の上に、正義と権利と法についての基礎的および原理的知識を修得するための専門科目として、実体法に関する基礎科目、手続法に関する基礎科目および応用的科目を積み上げる。

３．法学のみならず、政治学・行政学関連の科目や、社会学・比較文化関連の科目を学際的に履修して、視野を広げて深い洞察力を身に付けた上での政策法務的な「法的な思考」を修得する。

《地域と行政》

：政治・行政・社会に関わる基礎的知識に基づき、調査能力と思考力／応用能力を育成する。

１．各地域の特性を重視した地域社会を創り出すために必要な、地域社会の諸課題を産みだす構造的・動態的基礎を学ぶ科目、地域社会の諸問題の現状把握や地域情報の解析方法の修得を目指す基礎的科目を設置する。

２．政治行政分野と地域社会計画分野の２つの学修分野を設定し、各分野では、個別課題に専門的にとりくむための多様な科目を配置している。これらの科目は講義科目及び演習科目、さらに現場体験を重視した実習科目として開講する。

３．視野を広げて深い洞察力を身に付けるために、地域と行政専攻が開講する科目のみならず、法学・社会学・比較文化関連の科目を学際的に履修できるカリキュラム構成とする。

《社会と文化》

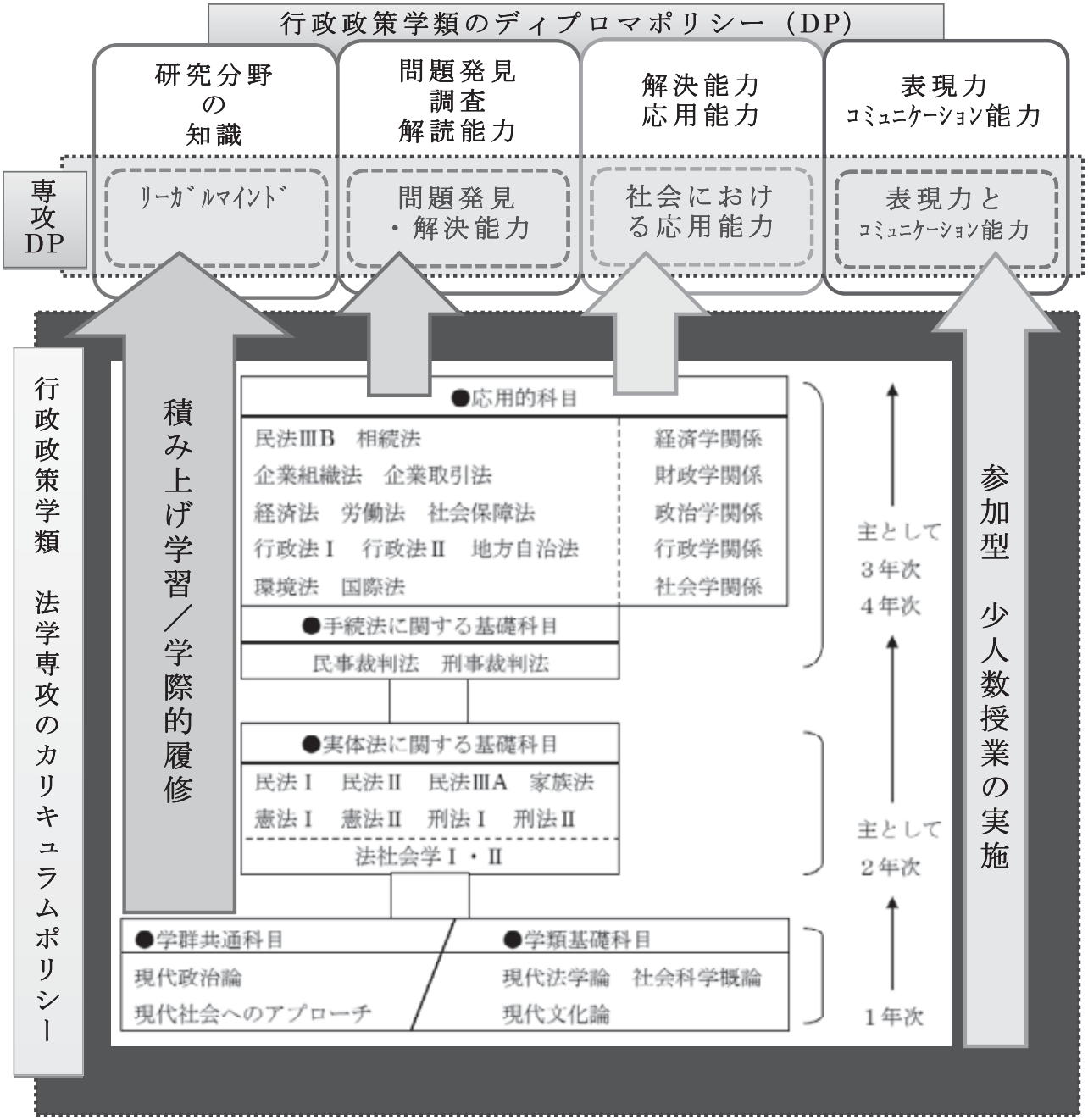
：社会・文化研究にかかわる学際的及び専門的知識に基づき、社会・文化研究への応用能力／調査能力と情報解読能力を育成する。

１．現代社会の諸問題、地域社会、歴史、異文化、国際交流にかかわる複雑かつ多様な問題について、知見を広め、考察するために必要な能力の育成をめざした、社会学・文化研究の分野の基礎科目および応用的科目を設置する。

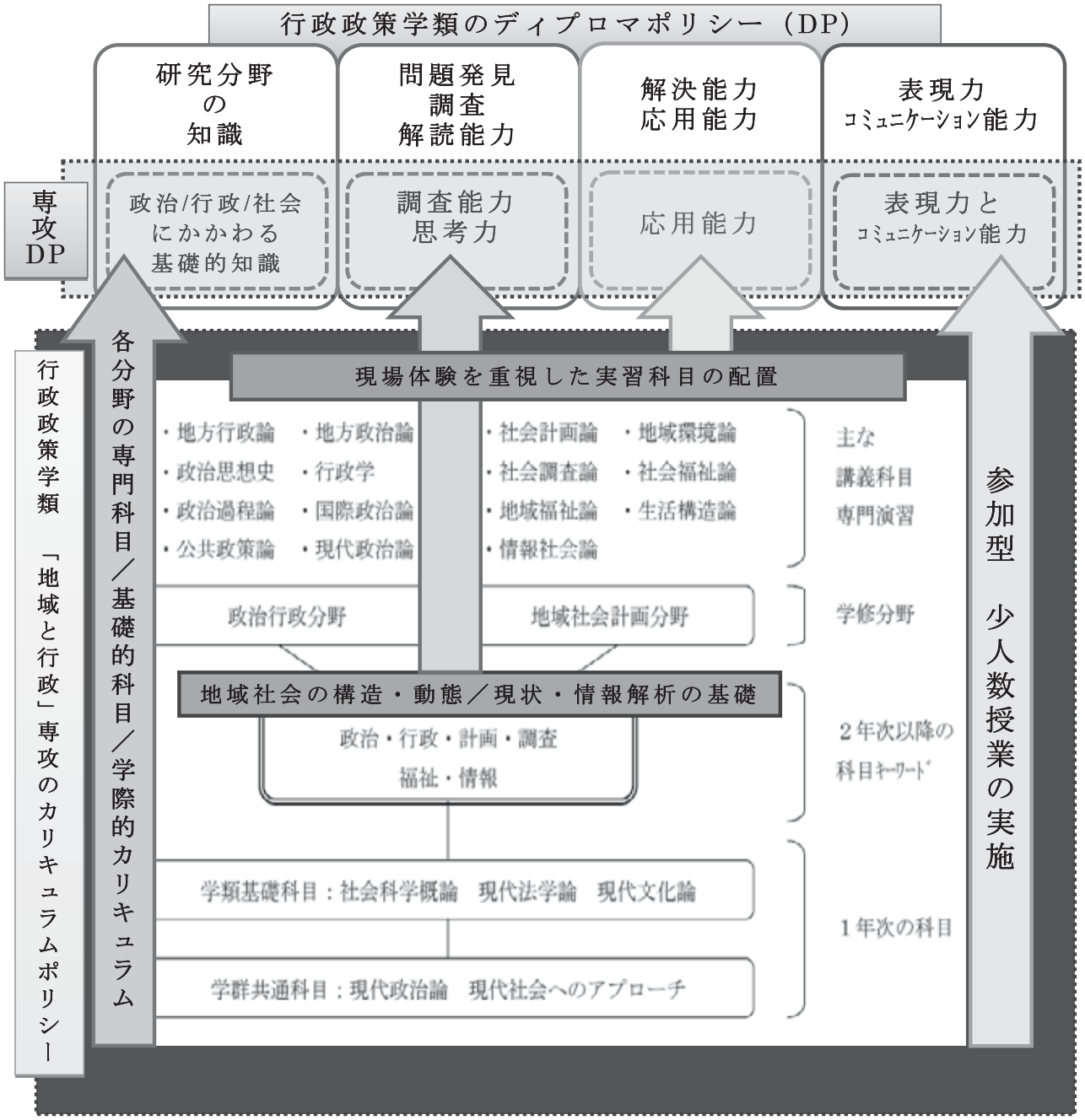
２．学際的な研究を進めていく際の核を形成するための目安として、「社会学」、「地域社会と教育･文化」、「歴史」、「比較文化」の４つの学修分野を設定し、各科目を配置する。

３．専攻に関わる科目のみならず、法学や、政治学・行政学関連の科目を履修し、視野を広げるとともに深い洞察力を身に付けた上で、従来の専門分野を超えた、あるいは学際的な問題発見・問題追及のための力を修得させる。

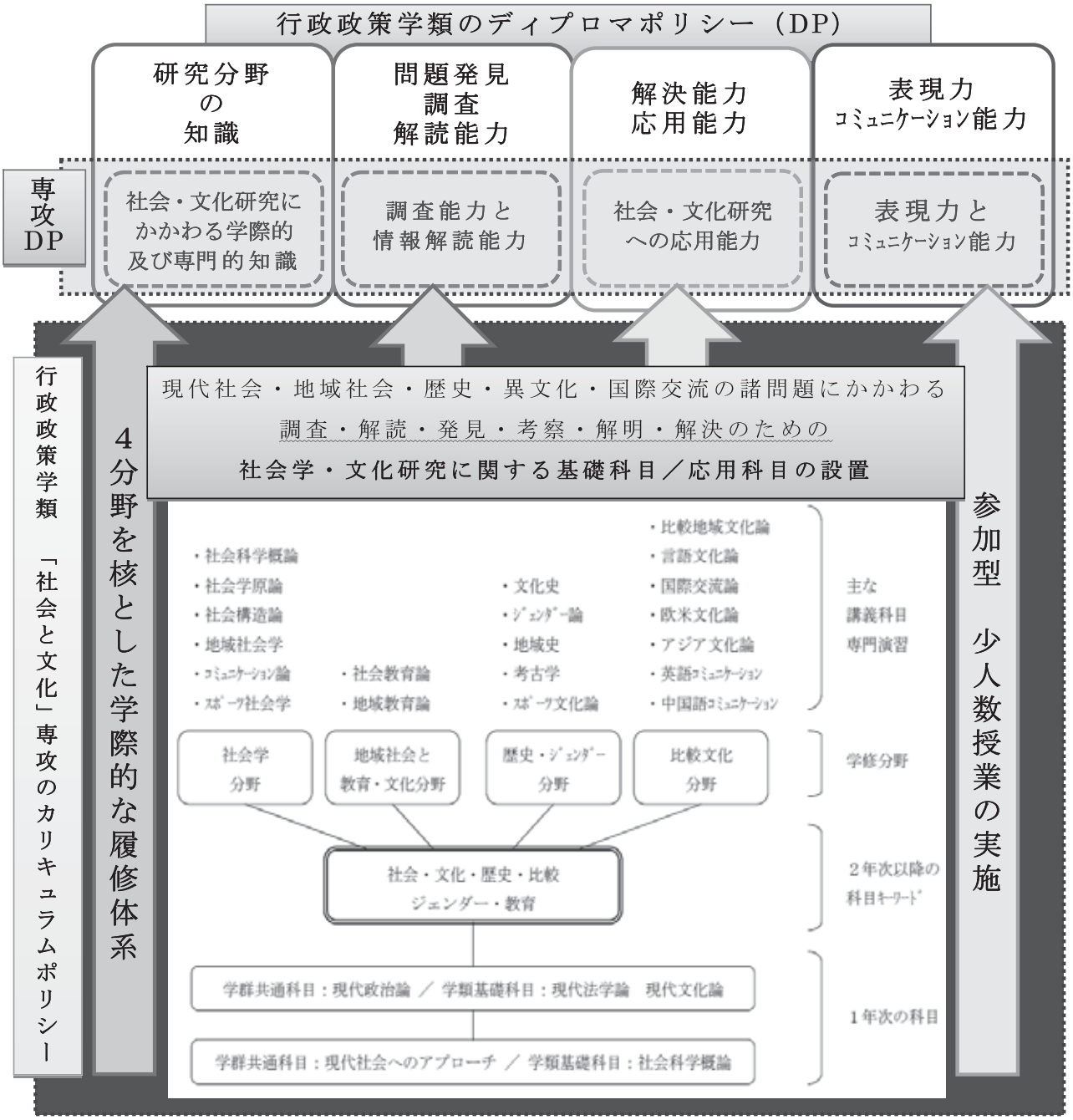
【法学専攻】


行政政策学類のディプロマポリシー（DP）
研究分野の知識
問題発見 調査 解読能力
解決能力 応用能力
表現力 コミュニケーション能力
専攻DP
リーガルマインド
問題発見・解決能力
社会における応用能力
表現力とコミュニケーション能力
行政政策学類　法学専攻のカリキュラムポリシー
積み上げ学習／学際的履修
参加型　少人数授業の実施
●応用的科目
民法ⅢB　相続法
企業組織法　企業取引法
経済法　労働法　社会保障法
行政法Ⅰ　行政法Ⅱ　地方自治法
環境法　国際法
経済学関係
財政学関係
政治学関係
行政学関係
社会学関係
●手続法に関する基礎科目
民事裁判法　刑事裁判法
●実体法に関する基礎科目
民法Ⅰ　民法Ⅱ　民法ⅢA　家族法
憲法Ⅰ　憲法Ⅱ　刑法Ⅰ　刑法Ⅱ
法社会学Ⅰ・Ⅱ
●学群共通科目
現代政治論
現代社会へのアプローチ
●学類基礎科目
現代法学論　社会科学概論
現代文化論
主として 3年次 4年次
主として 2年次
1年次

【「地域と行政」専攻】


行政政策学類のディプロマポリシー（DP）
研究分野の知識
問題発見調査解読能力
解決能力応用能力
表現力コミュニケーション能力
専攻DP
政治/行政/社会にかかわる基礎的知識
調査能力思考力
応用能力
表現力とコミュニケーション能力
行政政策学類　「地域と行政」専攻のカリキュラムポリシー
各分野の専門科目／基礎的科目／学際的カリキュラム
現場体験を重視した実習科目の配置
・地方行政論　・地方政治論
・政治思想史　・行政学
・政治過程論　・国際政治論
・公共政策論　・現代政治論
・社会計画論　・地域環境論
・社会調査論　・社会福祉論
・地域福祉論　・生活構造論
・情報社会論
主な講義科目専門演習
政治行政分野
地域社会計画分野
学修分野
地域社会の構造・動態／現状・情報解析の基礎
政治・行政・計画・調査
福祉・情報
2年次以降の科目ｷｰﾜｰﾄﾞ
学類基礎科目：社会科学概論　現代法学論　現代文化論
学群共通科目：現代政治論　現代社会へのアプローチ
1年次の科目
参加型　少人数授業の実施

【「社会と文化」専攻】


行政政策学類のディプロマポリシー（DP）
研究分野の知識
問題発見 調査 解読能力
解決能力 応用能力
表現力 コミュニケーション能力
専攻DP
社会・文化研究にかかわる学際的及び専門的知識
調査能力と情報解読能力
社会・文化研究への応用能力
表現力とコミュニケーション能力
行政政策学類 「社会と文化」専攻のカリキュラムポリシー
4分野を核とした学際的な履修体系
現代社会・地域社会・歴史・異文化・国際交流の諸問題にかかわる
調査・解読・発見・考察・解明・解決のための
社会学・文化研究に関する基礎科目／応用科目の設置
・社会科学概論
・社会学原論
・社会構造論
・地域社会学
・コミュニケーション論
・スポーツ社会学
・社会教育論
・地域教育論
・文化史
・ジェンダー論
・地域史
・考古学
・スポーツ文化論
・比較地域文化論
・言語文化論
・国際交流論
・欧米文化論
・アジア文化論
・英語コミュニケーション
・中国語コミュニケーション
主な講義科目 専門演習
社会学分野
地域社会と教育・文化分野
歴史・ジェンダー分野
比較文化分野
学修分野
社会・文化・歴史・比較 ジェンダー・教育
2年次以降の科目キーワード
学群共通科目：現代政治論 ／ 学類基礎科目：現代法学論　現代文化論
学群共通科目：現代社会へのアプローチ ／ 学類基礎科目：社会科学概論
1年次の科目
参加型 少人数授業の実施

行政政策学類のアドミッションポリシー

１．行政政策学類の教育目標と求める学生像

：行政政策学類では、21 世紀の地域社会が直面している諸課題について、広く学際的な観点から学び、より暮らしやすい健康で文化的な地域社会を作り出すために、卒業までに次の４つの力を身に付けたいと考える学生を受け入れます。

・法・地域・行政・社会・文化等の研究分野に関する基礎的かつ専門的知識
・国・地域・社会における諸問題を自ら発見し、調査・分析する能力
・発見し、調査・分析した諸問題につき、解決する応用的能力
・修得した知識・考察した結果を発表し、議論する能力

：行政政策学類では、２年生の前期（第３セメスター）から、法学専攻、地域と行政専攻、社会と文化専攻のいずれかに所属することになります。各専攻は、次のような基礎的・専門的な知識及び能力を身につけた人材の育成を目標としています。

・法学専攻：リーガルマインド（「法的な思考」）を身につけた上で、市民としての政治参加、裁判員制度、企業法務、公務員としての法的実践などに適応し、国および地域の法的問題を自ら発見・解決することができる。
・地域と行政専攻：政治・行政・社会にかかわる研究分野の基礎的知識と、地域の固有性と多様性に対する調査能力・思考力を身に付けたうえで、地域社会の諸問題の解決に向けて積極的に貢献することができる。
・社会と文化専攻：社会学、歴史学、教育学、文化研究等についての専門的知識と学際的知識、及び調査・情報解読能力を身につけた上で、現代社会、地域社会、歴史理解、異文化理解、国際交流等にかかわる問題をみずから発見・考察し、その解明・解決の方向性を見出すことができる。

２．入試の際に求める知識・技能・関心

：21 世紀の地域社会が直面している諸課題について、広く学際的な観点から学び、より暮らしやすい健康で文化的な地域社会を作り出すための能力を大学において身につけるために、以下に挙げる基礎的な知識・技能・関心を有している学生を求めます。

(1). 高校時代までの基礎的な学力（以下のうち１つ以上）
：国語、地歴公民、理科、数学、外国語について、修学に必要な知識を有している。
：上記科目のうち、いずれか３科目について、優れた知識を有している。

(2). 現代社会や地域の諸課題に関する理解力・思考力・分析統合力・表現力（以下のうち１つ以上）
：読書や論理的な文章を書く習慣に基づく長文の読解力・要約力
：政治・経済、社会的な問題などに関心を持ち、深く考察する態度
：意見交換によって解決策を考えだすための発言力或いは論点整理力

：推薦入試では、上記の１・２に加え、以下の点を評価します。

・新しい地域社会づくりに関心を持ち、地域社会の発展に貢献しようとする意欲、
及び流動的な社会の変化に対応し、過去に例のない課題に対して果敢に挑む意欲

（注）入学試験ごとのアドミッション・ポリシー（入学者受入方針）は各募集要項に記載します。

４．経済経営学類の三つのポリシー

経済経営学類のディプロマポリシー

【経済経営学類の教育目標】
本学類は、広い視野に立って学識を授け、現代の経済社会を理解し、経済と経営に関わる基礎的・専門的な知識及び能力を身に付けた人材を養成する。

【学類ディプロマポリシー】
※本学類は、現代社会で起こっている様々な問題に関心を持ち、それらを経済・経営の視点でとらえる能力をもつことによって社会での実践力を発揮できる人材を養成するために、「自立する力」「客観的に観察・分析し、論理的に思考する力」「経済社会で実践し解決する力」の３つの能力をディプロマポリシーとして提示する。

Ⅰ　自立する力
：職業人、生活者として自立し、社会的、倫理的な観点から自らを律することができる。
Ⅰ-1　幅広い教養と高い倫理性を身につけている。
Ⅰ-2　自分の意見を述べ、討論し、文章で表現できるようなコミュニケーション能力を身につけている。
Ⅰ-3　自己管理力を身につけ、自分の適性を見定めて、目標設計を主体的に行うことができる。

Ⅱ　客観的に観察・分析し、論理的に思考する力
：幅広い教養と経済学・経営学分野の基礎的・専門的知識に基づいて、現実を分析し、論理的に思考することができる。
Ⅱ-1　物事の本質をつかむ分析力と論理的思考力を身につけている。
Ⅱ-2　客観的、論理的に思考し、柔軟な考察を展開できる。

Ⅲ　経済社会で実践し解決する力
：経済学・経営学分野の基礎的・専門的知識を適切に応用することができ、経済学士としての実践力と問題解決能力を身につけている。
Ⅲ-1　経済学・経営学分野の知識と分析ツールを実践するための基礎基本を身につけている。
Ⅲ-2　各専攻が掲げる専門力量を身につけ、それを応用して、問題を発見し、分析し、解決案を創出することができる。

【専攻ごとのディプロマポリシー】

［経済分析専攻］
：ミクロ・マクロ経済学での諸議論を通して経済のしくみを体系的に理解し、得られた知識を、金融・公共経済をはじめとした経済システムの分析とそのあり方に関する実践的な考察に応用することができる。

［国際地域経済専攻］
：経済学的素養に基づく理論的、歴史的、政策的見地に加えてグローカルな知識を身に付けて今日の経済社会を理解し、国際社会と地域社会の課題に理論的実践的に取り組むことができる。

［企業経営専攻］
：企業活動に対し、外部環境を踏まえて定量的・定性的に分析するための専門的知識を有し、それを応用して企業およびその他組織における適切な意思決定ができる基礎的力量を身につけている。

経済経営学類のカリキュラムポリシー

経済経営学類では、経済と経営の基礎的・専門的な知識を身につけ、現代の経済社会を理解し、問題解決に実践的に取り組む人材を養成することを教育目標としています。これにしたがって、本学類のディプロマ・ポリシーでは、職業人・生活者として社会的、倫理的な観点から自らを律し自立することができること（「自立する力」）、経済学・経営学分野の基礎的、専門的知識と論理的思考力を身につけること（「客観的、論理的に思考する力」）、そして、それらを経済社会で応用し実践する力を獲得すること（「実践し解決する力」）、を掲げています。これらの達成に向けて、共通領域・自己デザイン領域、専門領域のカリキュラムを、以下の方針で構築しています。

１．共通領域・自己デザイン領域の履修を通して、幅広い教養と自己認識を深め、コミュニケーション能力を高めることによって、自立する力、実践力を養う。

２．経済学・経営学分野の基礎的、専門的知識と論理的思考力を身につけるため、専門教育の系統的学習システムを導入する。

2-1　前半セメスターにおいて、経済学・経営学分野の基礎基本に関する一連の科目（＝リテラシー科目群）を設定する。

2-2　後半セメスターにおいて、専攻ごとの系統的履修体系（基幹的科目と中級・応用的科目）による専門教育を展開する。

2-3 リテラシー科目群と専門科目の系統的履修体系は、各授業科目群の専門性・実践性とともに、専攻ごとのカリキュラム・マップにて表示される。

３．基礎的、専門的知識の応用力と実践力を向上させる場として、少人数教育を充実させる。

3-1　ゼミナール形式の「専門演習」、「卒業論文演習」の開講

3-2　１セメスター完結の実践的な「特別演習」の開講

3-3　学習成果の集大成としての、必修の「卒業論文」

４．応用重視の外国語教育を展開して、実践力を高める。

4-1　必修（「経済英語基礎」または「異文化コミュニケーション」）科目の設定

4-2　選択科目（「外書講読」「外国語応用コミュニケーション」「特殊講義」）での外国語教育

５．意欲を持ち力量ある学生に対し、より専門的な学習の機会を提供する。

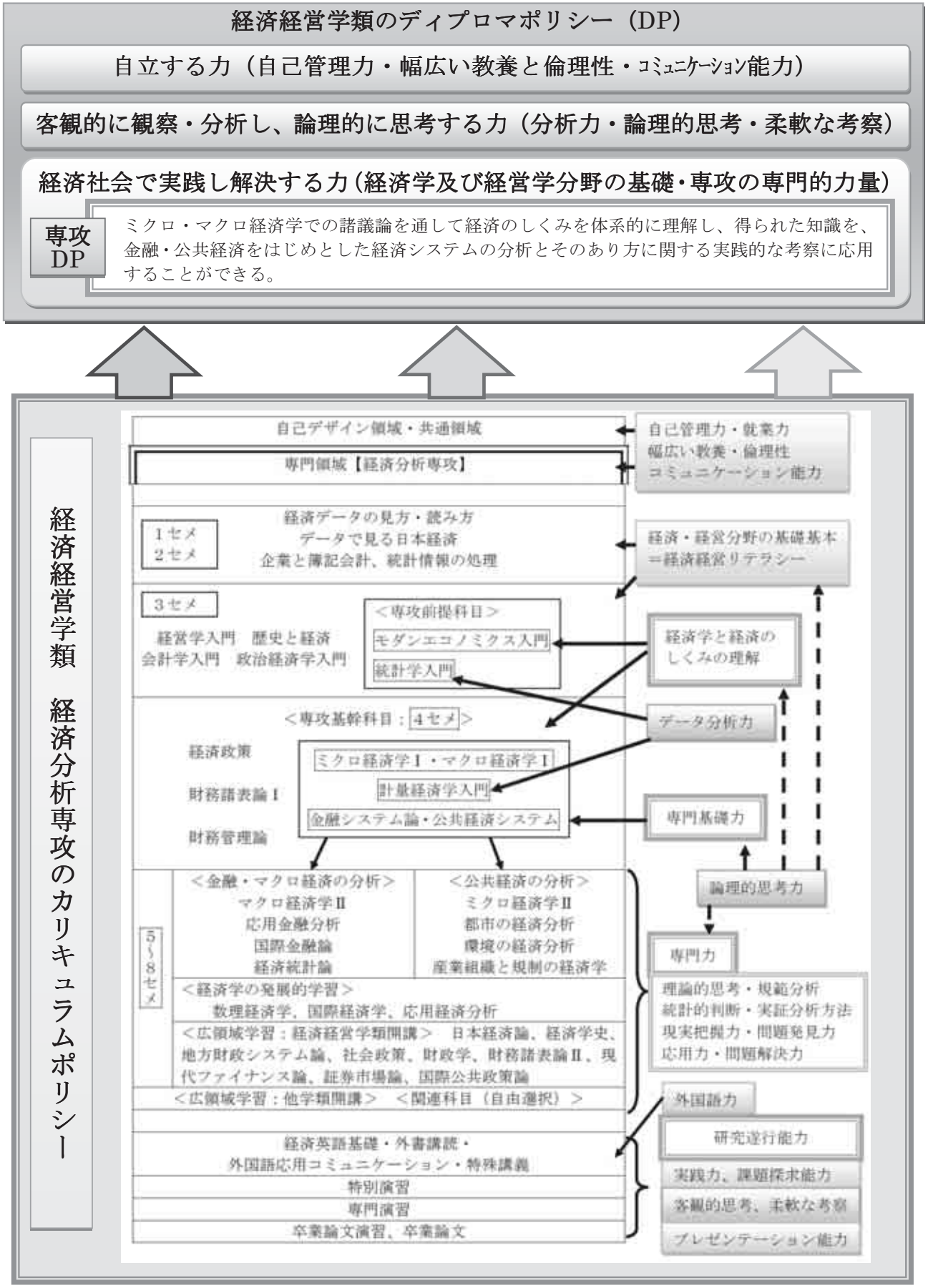
4-1　特殊講義、深化科目の開講

4-2　大学院（経済学研究科）開講科目をアドバンスト科目として履修可能に

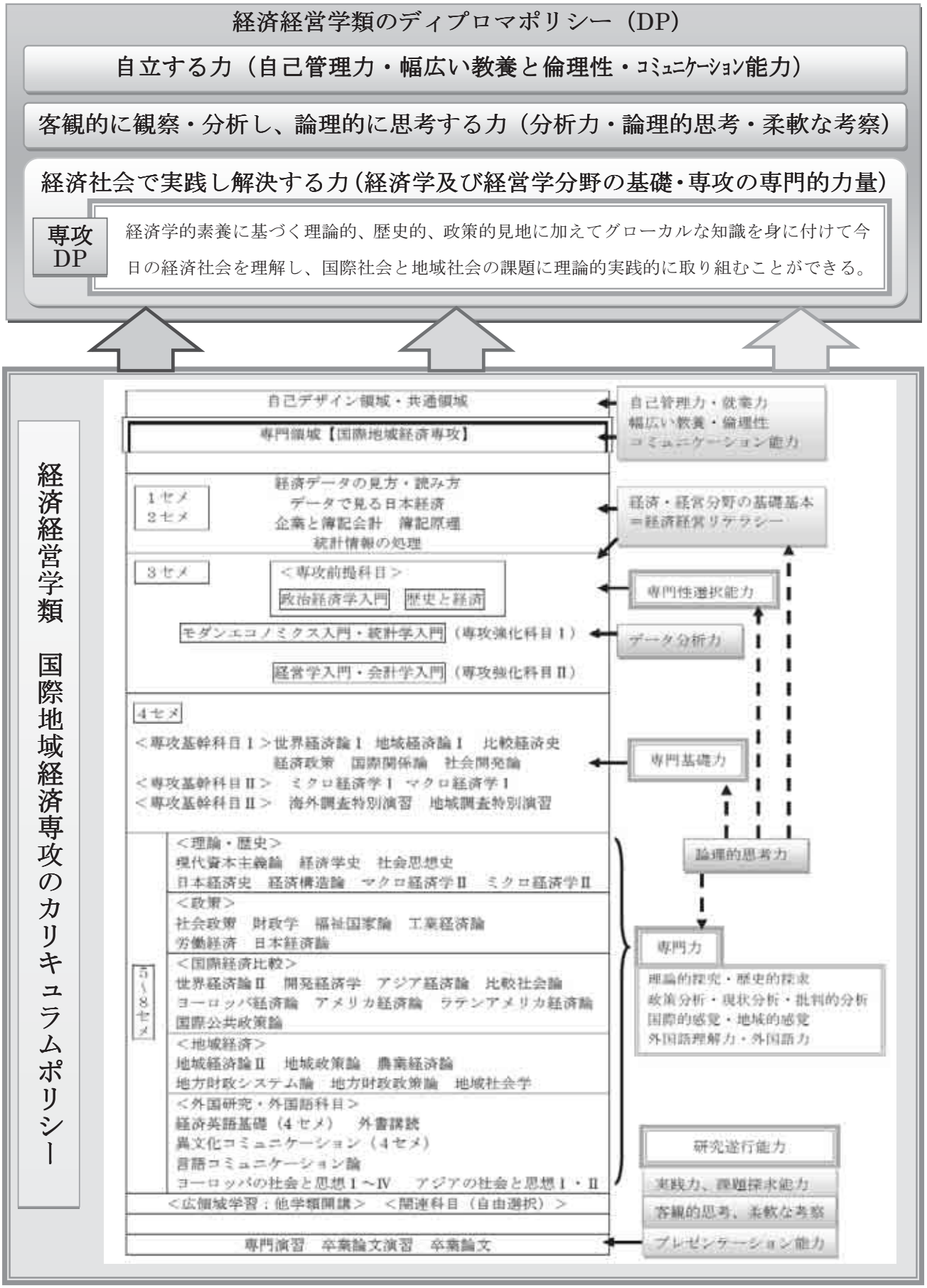
６．経済学・経営学分野の基礎的・専門的科目に対して卒業要件のＧＰＡ制度を導入し、学習の質を高める（ＧＰＡ制度：成績評価（A,B,C,D,F）を点数化し、その平均値（Grade Point Average）が一定以上であることを求めるもの）。

７．以上のカリキュラムの狙いを学生・教員の間で共有し、学生自らの目的意識の形成と選択をサポートするために、アドバイザー教員による履修指導体制を用意する。

経済経営学類.概念図案（経済分析専攻）



経済経営学類.概念図案（国際地域経済専攻）



経済経営学類.概念図案（企業経営専攻）

経済経営学類のディプロマポリシー（DP）

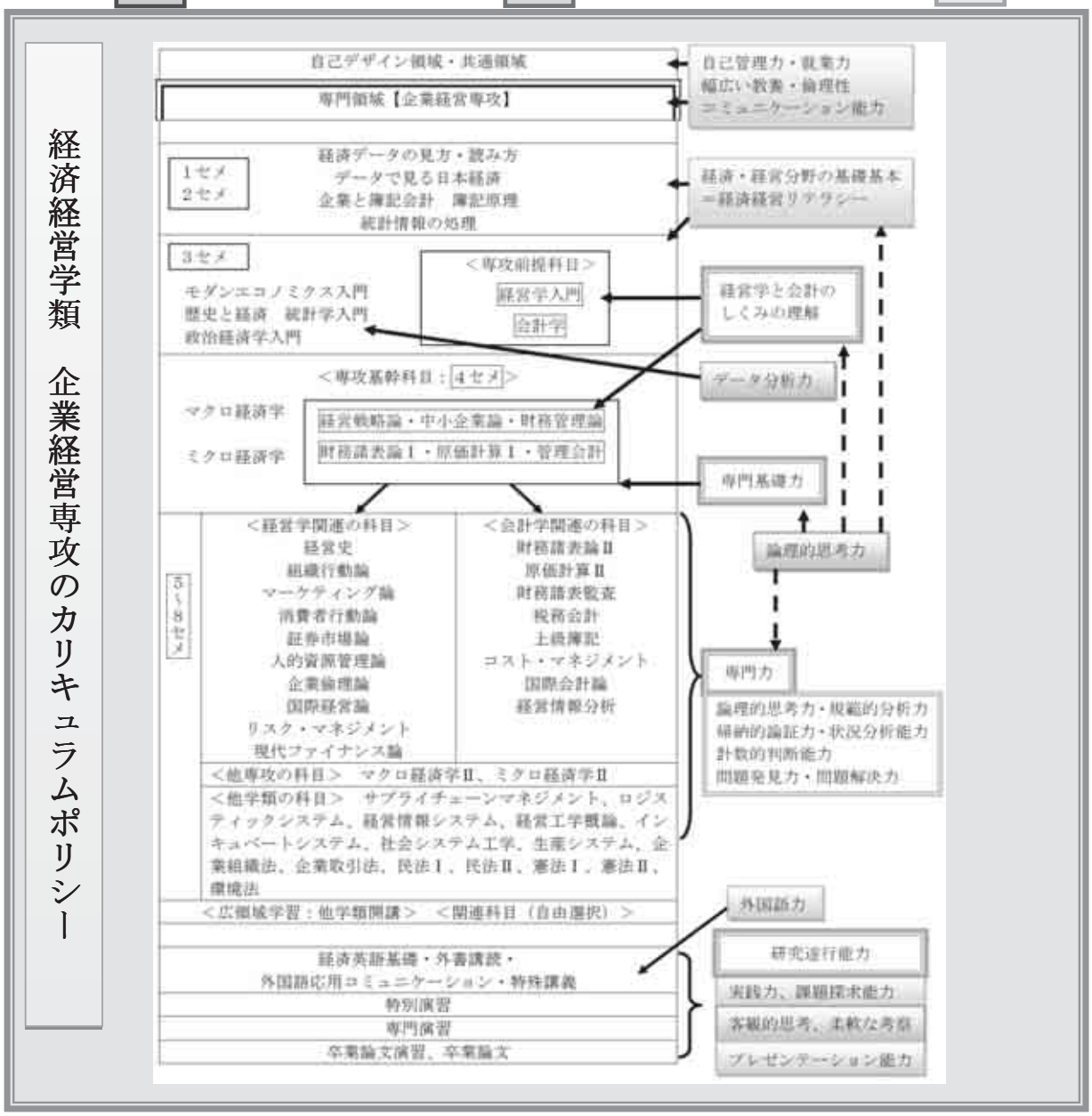
自立する力（自己管理力・幅広い教養と倫理性・ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ能力）

客観的に観察・分析し、論理的に思考する力（分析力・論理的思考・柔軟な考察）

経済社会で実践し解決する力（経済学及び経営学分野の基礎・専攻の専門的力量）

専攻DP

企業活動に対し、外部環境を踏まえて定量的・定性的に分析するための専門的知識を有し、それを応用して企業およびその他組織における適切な経営意思決定ができる基礎的力量を身につけている。



経済経営学類のアドミッションポリシー

１．経済経営学類の教育目標と求める学生像

：経済経営学類では、現代社会で起こっている様々な問題に関心を持ち、それらを経済・経営の視点でとらえる能力をもつことによって、社会での実践力を発揮するために、卒業までに次の３つの力を身に付けたいと考える学生を受け入れます。

・職業人、生活者として自立し、社会的、倫理的な観点から自らを律することができる

・幅広い教養と経済学・経営学分野の基礎的・専門的知識に基づいて、現実を分析し、論理的に思考することができる

・経済学・経営学分野の基礎的・専門的知識を適切に応用することができ、経済学士としての実践力と問題解決能力を身につけている

：経済経営学類では、２年生の後期（第４セメスター）から、経済分析専攻、国際地域経済専攻、企業経営専攻の三つの専攻のいずれかに所属することになります。各専攻は、次のような基礎的・専門的な知識及び能力を身につけた人材の育成を目標としています。

・経済分析専攻：ミクロ・マクロ経済学での諸議論を通して経済のしくみを体系的に理解し、得られた知識を金融･公共経済をはじめとした経済システムの分析とそのあり方に関する実践的な考察に応用することができる。

・国際地域経済専攻：経済学的素養に基づく理論的、歴史的、政策的見地に加えてグローカルな知識を身に付けて今日の経済社会を理解し、国際社会と地域社会の課題に理論的実践的に取り組むことができる。

・企業経営専攻：企業活動に対し、外部環境を踏まえて定量的･定性的に分析するための専門的知識を有し、それを応用して企業およびその他組織における適切な意思決定ができる基礎的力量を身につけている。

２．入試の際に求める知識・技能・関心

：現代社会で起こっている様々な問題を経済・経営の視点でとらえる能力と、社会での実践力を大学において身につけるために、以下に挙げる基礎的な知識・技能・関心を有している学生を求めます。

(1). 高校時代までの基礎的な学力

：国語、地歴公民、理科、数学、外国語について、修学に必要な知識を有している。

(2). 読解力・思考力・知識活用力・表現力

(3). 現代社会で起こっている様々な問題に対する関心・意識と勉学意欲

(4). 得意分野に関する優れた学力・実績（推薦入試及び専門高校・総合学科卒業生入試に該当）

：推薦入試及び専門高校・総合学科卒業生入試では、上記の１・２・３に加え、以下の点を評価します。

・推薦入試（以下のうち１つ以上）

：行動力や創造力に基づいた、特記すべき活動歴を有している。

：簿記・情報関連に対する優れた知識、ないし関連資格を有している。

：英語等の外国語に関する優れた知識、ないし関連資格を有している。

・専門高校・総合学科卒業生入試

：簿記、情報等の実践的科目に対する優れた知識を有している。

（注）入学試験ごとのアドミッション・ポリシー（入学者受入方針）は各募集要項に記載します。

５．共生システム理工学類の三つのポリシー

共生システム理工学類のディプロマポリシー

【共生システム理工学類の教育目標】
本学類は、人―産業―環境に関わる課題を共生のシステム科学の視点で学び、自ら課題を発見し解決できる能力と文理融合型の思考力を有し、個性に応じた実践型キャリアを身に付けた人材を養成する。

【学類ディプロマポリシー】
※本学類は、従来の理工系学問だけでは解決できない、２１世紀なってから表面化してきた新種の様々な問題を理解し、その根本的な原因を見出すとともに、このような問題の解決に積極的に挑戦し、「人–産業–環境の共生」の観点から、持続循環型（または持続可能な）社会の実現に貢献することができる幅広い専門知識と実践能力を身につけた人材を養成する。
　そのため「21世紀の諸問題に挑戦し、解決する力」「グローバルな視点から、物事を探求する力」「問題解決のための実践力」「システムサイエンスに関する幅広い専門知識と実践能力」の４つの能力を、ディプロマポリシーとして提示する。

Ⅰ　21 世紀の諸問題に挑戦し、解決する力
Ⅰ-1　少子高齢化、地球環境、エネルギー問題など 21 世紀の諸問題の中から、自ら課題を設定して、その原因を見出すことができる。
Ⅰ-2　21 世紀の諸問題の解決に向け、適切な方法を用いて、自主的、継続的に学習を進めることができる。

Ⅱ　グローバルな視点から、物事を探求する力
Ⅱ-1　地域のみならず国際感覚も身につけ、国際貢献に十分対応することができ、幅広い視野で物事を探求できる。
Ⅱ-2　日本語による論理的な記述力、口頭発表力、討議等のコミュニケーション能力。
　　および国際的に通用するコミュニケーション基礎能力を身につけている。

Ⅲ　問題解決のための実践力
Ⅲ-1　21 世紀の諸問題に対して、様々な角度から実践的な取り組みができる。
Ⅲ-2　与えられた制約の下で計画的に仕事をまとめることができる。

Ⅳ　システムサイエンスに関する幅広い専門知識と実践能力
Ⅳ-1　「人―産業―環境の共生」に関わるシステムサイエンスを理解する上で重要な、視野の広い文理融合センスを身につける。
　：科学・技術が社会や自然に及ぼす影響や効果、および科学技術者が社会に対して負っている責任を理解している。
　：数学、自然科学および情報技術に関する知識を身につけ、それらを応用できる。
　：種々の科学、技術および情報を利用して社会の要求を解決するためのデザイン能力を身につけている。
Ⅳ-2　各専攻が掲げる専門的力量を身につけ、研究・開発に応用することができる。

【各専攻が掲げる専門的力量】

［人間支援システム専攻］
：ロボティクスや福祉、医療等を含むヒト理解・人間支援又はそれらの基礎となる分野、特に、心理学や生理学などの生体システム科学、情報工学や機械・電気・電子工学などを基礎とする人間支援の技術に関して、研究・開発ができる。

［産業システム工学専攻］
：化学工学、材料工学、エネルギー開発などを基礎とする環境負荷の少ないものづくり技術や、経営工学、数理科学、産業政策、環境経済およびそれらを基礎とする省資源・循環型生産システムの構築や産業支援分野に関して、研究・開発ができる。

［環境システムマネジメント専攻］
：環境の科学や、水資源などを中心とした自然資源の確保・保全、環境分析化学、浄化工学、生態学や地域計画、流域管理計画などを基礎とする環境システムに関して、研究・開発ができる。

共生システム理工学類のカリキュラムポリシー

共生システム理工学類は，人―産業―環境に関わる課題を共生のシステム科学の視点で学び，自ら課題を発見し解決できる能力と文理融合型の思考力を有し，個性に応じた実践型キャリアを身に付けた人材を養成することを教育目標に掲げています．そのために，「Ⅰ．21 世紀の諸問題に挑戦し，解決する力」「Ⅱ．グローバルな視点から，物事を探求する力」「Ⅲ．問題解決のための実践力」「Ⅳ．システムサイエンスに関する幅広い専門知識と実践能力」の 4 つの能力をディプロマポリシー（DP）として明示しています．そこで，本学類のカリキュラムは，これら DP の各項目を育むために以下のように構成されています．

１．学類 DP 達成のため，次の 4 つを教育の柱としています．

(1) 基礎・基本を重視し，自ら問題を設定し，問題解決のできる教育を重視します．これにより，DP の「Ⅰ．21 世紀の諸問題に挑戦し，解決する力」，「Ⅳ．システムサイエンスに関する幅広い専門知識と実践能力」を養います．

(2) 視野の広い人材を育成するための文理融合型教育を重視します．これにより，DP の「Ⅳ．システムサイエンスに関する幅広い専門知識と実践能力」を養います．

(3) 国際貢献できる国際性を身につけるための教育を重視します．これにより，DP の「Ⅱ．グローバルな視点から，物事を探求する力」を養います．

(4) 実践力を身につける実践型教育を重視します．これにより，DP の「Ⅲ．問題解決のための実践力」「Ⅳ．システムサイエンスに関する幅広い専門知識と実践能力」を養います．特に，各専攻において専門性を身につける教育を含みます．これにより，DP の「Ⅳ-2．各専攻が掲げる専門的力量」を養います．

２．これらを具体化するために，「学群共通科目/学類基礎科目」，「専攻基礎科目」，「専攻実践科目」，「専攻専門科目」，「文理融合科目」，「演習・卒業研究」の 6 領域を配置します．「学群共通科目/学類基礎科目」は DP のⅠ，Ⅳが，「専攻基礎科目」は DP のⅠ，Ⅳが，「専攻実践科目」は上記 DP のⅡ，Ⅲ，Ⅳが，「専攻専門科目」は DP のⅣ-2 が，「文理融合科目」は DP のⅣが，「演習・卒業研究」は DP のⅠ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳが，主に組み込まれます．

３．これら 6 領域それぞれに基礎単位を必修化すると同時に，選択科目を可能な限り拡大し，きめ細やかな修学指導を行うことによって，学生の多様な学習ニーズに対応します．

４．共生システム理工学類を構成する 3 つの専攻は，次のような教育を特色とし，DP のⅣ-2 を養います．

「人間支援システム専攻」：人理解を基礎とする人技術の教育を主体とします．

「産業システム工学専攻」：省資源・最適生産を目的とした持続循環型産業システムの教育を主体とします．

「環境システムマネジメント専攻」：自然資源の質的・量的確保・保全を目的とし，保全・浄化・管理計画の教育を主体とします．

５．すべての専攻の「専攻基礎科目」，「専攻実践科目」，「専攻専門科目」で，理工系の基礎・基本科目と，経営マインド，環境マインドを理解する文理融合科目を設置し，視野の広い人材を育成します．その上で，理工系の専門科目を配置し，少人数によるきめ細やかな教育支援体制と GPA 等による達成度評価により，学生の基礎学力を保証します．

６．その他，本学類が開講する各授業科目に DP の各項目をバランス良く配置し，カリキュラム全体での理工学類 DP の達成を図ります．

共生システム理工学類　人間支援システム専攻

1年次 前期 1セメ	1年次 後期 2セメ	2年次 前期 3セメ	2年次 後期 4セメ	3年次 前期 5セメ	3年次 後期 6セメ	4年次 前期 7セメ	4年次 後期 8セメ
Ⅰ，Ⅳ 共生の科学	Ⅰ，Ⅳ プログラミング基礎	Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ プログラミングⅠ	Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ プログラミングⅡ				
		Ⅳ-2 計算機システム論 情報社会と情報倫理	Ⅳ-2 データベースシステム ソフトウェア設計開発論	Ⅳ-2 ネットワークシステム 言語形式とコンパイラ	Ⅳ-2 人工知能と知識処理		
		Ⅰ，Ⅳ 情報科学概論	Ⅳ-2 アルゴリズムとデータ構造 プログラミング言語論	Ⅳ-2 マルチメディアシステム論	Ⅳ-2 情報理論		
	Ⅰ，Ⅳ 人間支援システム概論	Ⅰ，Ⅳ 心理学概論	Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 生体システム実験	Ⅳ-2 サウンドスケープ			
		Ⅳ-2 脳神経科学	Ⅳ-2 システム生理学 学習心理学、認知心理学 精神生理学	Ⅳ-2 ﾋｭｰﾏﾝｲﾝﾀｰﾌｪｲｽ	Ⅳ-2 精神物理学	Ⅳ-2 生物学的心理学	
	Ⅰ，Ⅳ 産業システム概論 環境システム概論		Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 支援システム実験	Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ CAD/CAM演習			
		Ⅳ-2 デジタル信号処理 電気工学	Ⅰ，Ⅳ 人間工学	Ⅰ，Ⅳ メカトロニクス			
Ⅰ，Ⅳ 物理学Ⅰ（力学）	Ⅰ，Ⅳ 物理学Ⅱ（電磁気学）	Ⅰ，Ⅳ 物理学Ⅲ（熱力学）	Ⅳ-2 電子回路	Ⅳ-2 ﾊﾟﾜｰｴﾚｸﾄﾛﾆｸｽ			
	Ⅰ，Ⅳ 基礎実験	Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 物理学実験	Ⅳ-2 機構学	Ⅳ-2 流体力学			
		Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 化学実験	Ⅳ-2 量子力学	Ⅳ-2 統計力学			
Ⅰ，Ⅳ 化学Ⅰ（基礎化学）		Ⅰ，Ⅳ 化学Ⅱ（物理化学）					
		Ⅳ-2 材料工学概論	Ⅳ-2 材料及び固体の力学 機械材料加工学		Ⅳ-2 材料分析基礎		
Ⅰ，Ⅳ 基礎数学 幾何学基礎	Ⅰ，Ⅳ 解析学Ⅰ 線形代数学	Ⅰ，Ⅳ 解析学Ⅱ 確率統計学		Ⅳ-2 応用統計学			
Ⅰ，Ⅳ 地球科学 生物学		Ⅰ，Ⅳ 数理モデリング 離散数学	Ⅳ-2 制御工学	Ⅳ-2 応用解析学 数理計画法			
Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 教養演習Ⅰ	Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 教養演習Ⅱ	Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 海外演習	Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 創造工房ゼミ		Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 演習Ⅰ	Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 演習Ⅱ・卒業研究Ⅰ	Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 卒業研究Ⅱ
		Ⅳ 文理融合科目 （他学類等科目）	Ⅳ 文理融合科目 （他学類等科目）	Ⅳ 文理融合科目 （他学類等科目）	Ⅳ 文理融合科目 （他学類等科目）		

- 必修科目
- 選択必修科目
- 学群共通科目/学類基礎
- 専攻基礎科目
- 専攻実践科目
- 専攻専門科目
- 文理融合科目
- 演習・卒業研究

各DPと各授業科目の対応関係についてはローマ数字を参照

共生システム理工学類　産業システム工学専攻

1年次 前期 1セメ	1年次 後期 2セメ	2年次 前期 3セメ	2年次 後期 4セメ	3年次 前期 5セメ	3年次 後期 6セメ	4年次 前期 7セメ	4年次 後期 8セメ
Ⅰ，Ⅳ 共生の科学	Ⅰ，Ⅳ 産業システム概論	Ⅰ，Ⅳ 経営工学	Ⅰ，Ⅳ 製造技術概論	Ⅰ，Ⅳ ｲﾝｷｭﾍﾞｰｼｮﾝｼｽﾃﾑ			
	Ⅰ，Ⅳ 人間支援システム概論 環境システム概論	Ⅰ，Ⅳ エコロジカル経済学	Ⅰ，Ⅳ 産業構造論	Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 産業支援工学演習	Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 生産システム解析演習		
			Ⅳ-2 サプライチェーンマネジメント	Ⅳ-2 ロジスティクスシステム	Ⅳ-2 品質管理	Ⅳ-2 知的財産権論	
	Ⅰ，Ⅳ プログラミング基礎	Ⅳ-2 情報科学概論	Ⅳ-2 意思決定論 データベースシステム ソフトウェア設計開発論	Ⅳ-2 数理計画法 生産システム	Ⅳ-2 モデル構築論	Ⅳ-2 経営情報システム	
		Ⅳ-2 離散数学	Ⅳ-2 アルゴリズムとデータ構造	Ⅳ-2 応用統計学 応用解析学	Ⅳ-2 人工知能と知識処理		
Ⅰ，Ⅳ 基礎数学 幾何学基礎	Ⅰ，Ⅳ 解析学Ⅰ 線形代数学	Ⅰ，Ⅳ 解析学Ⅱ 確率統計学	Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 統計数値解析実習	Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 社会システムモデリング演習			
		Ⅰ，Ⅳ 化学Ⅱ（物理化学）	Ⅳ-2 物質変換化学	Ⅳ-2 界面物理化学			
		Ⅳ-2 分析化学概論 有機化学概論	Ⅳ-2 無機化学概論 機器分析				
			Ⅳ-2 生物化学工学	Ⅳ-2 生物資源開発			
Ⅰ，Ⅳ 化学Ⅰ（基礎化学）	Ⅰ，Ⅳ 基礎実験	Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 物理学実験 化学実験	Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 環境分析実験	Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ エコ生産システム演習			
		Ⅰ，Ⅳ 材料工学概論 衛生工学概論			Ⅳ-2 材料分析基礎		
			Ⅰ，Ⅳ 化学工学概論	Ⅳ-2 熱と物質の移動現象論	Ⅳ-2 資源循環論		
Ⅰ，Ⅳ 地球科学 生物学		Ⅳ-2 機能性材料概論		Ⅳ-2 有機・高分子材料学			
Ⅰ，Ⅳ 物理学Ⅰ（力学）	Ⅰ，Ⅳ 物理学Ⅱ（電磁気学）	Ⅰ，Ⅳ 物理学Ⅲ（熱力学）	Ⅳ-2 応用物性	Ⅳ-2 エネルギーシステム工学			
Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 教養演習Ⅰ	Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 教養演習Ⅱ	Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 海外演習	Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 産業システム工学実験		Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 演習Ⅰ	Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 演習Ⅱ・卒業研究Ⅰ	Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 卒業研究Ⅱ
		Ⅳ 文理融合科目（他学類等科目）	Ⅳ 文理融合科目（他学類等科目）	Ⅳ 文理融合科目（他学類等科目）	Ⅳ 文理融合科目（他学類等科目）		

- 必修科目
- 選択必修科目
- 学群共通科目／学類基礎科目
- 専攻基礎科目
- 専攻実践科目
- 専攻専門科目
- 文理融合科目
- 演習・卒業研究

各DPと各授業科目の対応関係についてはローマ数字を参照

共生システム理工学類　環境システムマネジメント専攻

1年次 前期 1セメ	1年次 後期 2セメ	2年次 前期 3セメ	2年次 後期 4セメ	3年次 前期 5セメ	3年次 後期 6セメ	4年次 前期 7セメ	4年次 後期 8セメ
Ⅰ，Ⅳ 共生の科学	Ⅰ，Ⅳ 基礎実験	Ⅰ，Ⅳ 解析学Ⅱ 確率統計学	【全グループ推奨科目】				
Ⅰ，Ⅳ 化学Ⅰ（基礎化学）	Ⅰ，Ⅳ 環境システム概論	Ⅰ，Ⅳ 化学Ⅱ（物理化学） 物理学（熱力学）	Ⅰ，Ⅳ 水質保全改善学概論				
Ⅰ，Ⅳ 物理学Ⅰ（力学）	Ⅰ，Ⅳ 人間支援システム概論 産業システム概論	Ⅰ，Ⅳ 環境計画論 水循環システム概論 生態学入門	Ⅰ，Ⅳ 流域管理計画概論				
Ⅰ，Ⅳ 地球科学	Ⅰ，Ⅳ プログラミング基礎		Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 環境分析実験				
Ⅰ，Ⅳ 生物学	Ⅰ，Ⅳ 解析学Ⅰ 線形代数学	Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 環境解析演習	Ⅳ－2 アルゴリズムと データ構造				
Ⅰ，Ⅳ 基礎数学 幾何学基礎	物理学Ⅱ（電磁気学）	Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 物理学実験 化学実験	【計画系推奨科目】 Ⅳ－1 環境文化論	Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 地域環境計画演習	Ⅳ－2 循環型産業論		
		Ⅳ－2 情報科学概論 離散数学	Ⅳ－2 生活環境論	Ⅳ－2 地域計画論	Ⅳ－2 資源循環論		
		Ⅳ－2 エコロジカル経済学		Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 環境モデリング演習 地球環境調査法			
				Ⅳ－2 流体力学			
		Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 流域水循環システム 調査実習	Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 衛星データ解析 地球環境科学実験	Ⅳ－2 応用統計学 応用解析学	Ⅳ－2 流域管理計画論		
		Ⅳ－2 地質学概論 大気環境科学概論		Ⅳ－2 水循環システム	【水・地球系推奨科目】		
		Ⅳ－2 環境モニタリング	Ⅳ－2 地下水盆管理学概論 環境モデリング	Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 水質保全改善学実験 地下水盆管理調査法			
		Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 森林調査法	Ⅳ－2 土壌化学概論	Ⅳ－2 森林生態学			
			Ⅳ－2 生態学概論 環境保全論	Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 土壌浄化学実験			
				Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 保全生物学実験 生物多様性保全実習			
				Ⅳ－2 生物多様性概論	【生物系推奨科目】		
		Ⅳ－2 分析化学概論 有機化学概論	Ⅳ－2 生物化学工学 化学工学概論 物質変換化学	Ⅳ－2 生物資源開発 熱と物質の移動現象論 有機・高分子材料学			
			Ⅳ－2 無機化学概論 機器分析				
		Ⅳ－2 材料工学概論 機能性材料概論	Ⅳ－2 材料及び固体の力学		Ⅳ－2 材料分析基礎		
					【化学系推奨科目】		
Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 教養演習Ⅰ	Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 教養演習Ⅱ	Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 海外演習			Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 演習Ⅰ	Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 演習Ⅱ・卒業研究Ⅰ	Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ 卒業研究Ⅱ
		Ⅳ 文理融合科目 （他学類等科目）	Ⅳ 文理融合科目 （他学類等科目）	Ⅳ 文理融合科目 （他学類等科目）	Ⅳ 文理融合科目 （他学類等科目）		

- 必修科目
- 選択必修科目
- 学群共通科目/学類基礎科目
- 専攻基礎科目
- 専攻実践科目
- 専攻専門科目
- 文理融合科目
- 演習・卒業研究

各DPと各授業科目の対応関係についてはローマ数字を参照

共生システム理工学類のアドミッションポリシー

1．共生システム理工学類の教育目標と求める学生像

: 共生システム理工学類では、学生が卒業までに、人－産業－環境が共生するためのシステム科学を学び、個性に応じた実践的研究の体験を積むことで、以下の３つの力を身に付けることを教育目標としています。

・人－産業－環境のシステム科学に関する幅広い専門知識
・広い視点から課題を発見できる文理融合型の思考力
・21 世紀の諸問題に挑戦し問題解決するための実践力

: 共生システム理工学類には、人間支援システム専攻、産業システム工学専攻、環境システムマネジメント専攻の三つの専攻があり、それぞれ以下のような特徴をもつ研究・教育を行っています。そのいずれかに興味があり、自分に適合していると考える学生を求めます。

・人間支援システム専攻では、心理学・生理学・生体工学などのヒト理解に関わる生体システム科学や、情報・機械・電気・電子工学などを基礎とする人間支援の技術開発についての研究などを通した教育、およびそれらに必要な基礎教育を行っています。これにより、卒業後、人間支援技術分野で活躍できる人を育てています。

・産業システム工学専攻では、化学工学・材料工学などを基礎とする環境負荷の少ないものづくり技術、情報工学、経営工学、さらにそれらを基礎とする省資源・循環型社会システムの構築についての研究などを通した教育、およびそれらに必要な基礎教育を行っています。これにより、ものづくりが好きで企業経営にも強い関心があり、卒業後、エンジニア・弁理士など産業支援の様々な分野で活躍できる人を育てています。

・環境システムマネジメント専攻では、環境分析化学、浄化工学、生態学や地域計画、流域管理計画などを基礎とする環境システムに関する研究などを通した教育、およびそれらに必要な基礎教育を行っています。これにより、水を中心とした環境理解と自然資源の確保・保全に強い関心があり、卒業後、環境管理者、環境計量士、公害防止者として活躍できる人を育てています。

2．入試の際に求める知識・技能・関心

: 本学類は、人間について知りたい、ものづくりや経営に興味がある、自然や環境を調べたい、の少なくともどれか一つに当てはまり、人間社会が抱える問題にも関心がある皆さんの入学を歓迎します。本学類での学習は、高校までの数学・理科を基礎に発展させますが、変化を続ける人間社会とその課題を理解する力も必要です。そのため以下に挙げる基礎的な知識・能力・意欲を有している学生を求めます。

(1). 高校時代までに学ぶ基礎的な知識
（国語、地歴公民、理科、数学、外国語についての、修学に必要な知識）
(2). 理系科目に対する柔軟な思考力、理解力、応用力、および表現力
(3). 人－産業－環境の共生システムの理解・開発・管理等に継続的に取り組む意欲

（注）入学試験ごとのアドミッション・ポリシー（入学者受入方針）は各募集要項に記載します。

６．夜間主（現代教養）コースの三つのポリシー

夜間主（現代教養）コースのディプロマポリシー

【夜間主（現代教養）コースの教育目標】
本コースは、現代社会を理解し、生活課題・地域社会が直面する問題を解決できる現代的教養を身につけた人材を養成する。

【コースディプロマポリシー】
※本コースでは、職業に関わる専門的知識・技能、および、現代社会を理解し、生活課題、地域社会が直面する課題を解決する社会人としての教養や、人間性を探求する生きがいとしての教養を、働きながら身につけることを、ディプロマポリシーとして提示する。

Ⅰ　職業知識・技能
：職業に関わる専門的知識・技能を習得する。

Ⅱ　社会人としての教養
：現代社会を理解し、生活課題、地域社会が直面する課題を解決する社会人としての教養を身につける。

Ⅲ　生きがいとしての教養
：人間性を探求する生きがいとしての教養を身につける。

Ⅳ　働きながら学ぶ力
：生活や職業という実体験をもとにして主体的に学習を深める態度を身につける。

【モデルごとのディプロマポリシー】

［文化教養モデル］
Ⅰ　自らの興味・関心にしたがって、「教育と家庭」「地域・文化・言語・国際理解・数理科学」「健康と運動」「芸術」などに関する幅広い専門的知識・技術を習得し、総合的に探究できる。（文化の体系的学習と探究）
Ⅱ　文化の多様性を尊重した上で、文化と現実社会の関係を把握し、その知識や技術を集団や地域社会のなかで伝達・活用することができる。（文化の伝達・活用）

［コミュニティ共生モデル］
Ⅰ　行政学、政治学、社会学等の知識を通じて、公共部門や地域コミュニティ活動において活躍するための基本的な学問的素養を習得している。（コミュニティ理解の学問的基礎）
Ⅱ　地域社会における複雑かつ多様な社会問題を把握し、その解決に役立つ「知識と基礎的能力」を習得している。（コミュニティ問題の把握・解決力）

［法政策モデル］
Ⅰ　「教養的法学」の知識を通じて、必要な法令・判例・文献の調べ方や報告の仕方などを身に付けるだけでなく、裁判員制度を含む司法改革や公共部門の仕事等に適応できる基本的な「法的な思考」を習得している。（法的な思考力）
Ⅱ　地域社会における複雑かつ多様な社会現象に対処するための具体的な政策を立案できるだけの法学を中心とした「知識と基礎的能力」を習得している。（地域問題の法的解決力）

［ビジネス探究モデル］
Ⅰ　幅広い教養と経済学・経営学分野の基礎的・専門的知識に基づいて現実を分析し、論理的に思考する力を身につける。（経済学・経営学分野の基礎的知識と分析ツール）
Ⅱ　経済学・経営学分野の基礎的・専門的知識を現実の経済社会に適切に応用し、問題を発見・解決する能力及び実践力を身につける。（経済社会の問題発見・解決能力）

夜間主（現代教養）コースのカリキュラムポリシー

・夜間主（現代教養）コースでは、４つのディプロマポリシー「職業知識・技能」「社会人としての教養」「生きがいとしての教養」「働きながら学ぶ力」の達成のため、次のような教育課程を編成している。

１．自己デザイン領域、共通領域、専門領域、自由選択領域の４つの領域でカリキュラムが構成されている。
－自己デザイン領域では、大学や社会での自分を見つめ直すため、教養演習、キャリア形成論を置く。
教　養　演　習：大学の学び方を身につけ、大学生としての自分を設計する。
キャリア形成論：職業に対する認識を深め、社会人としての自分をもう一度見直す。
－共通領域では、１年次の授業において、広い視野と教養を身に付ける。
－専門領域では、２年次以降に履修モデルの一つを選択して、希望する分野に関して学ぶ。
－自由選択領域では、自分が学びたいと思う科目を自由に選択する。

２．「職業知識・技能」、「社会人としての教養」、「生きがいとしての教養」について、社会人のニーズに沿ったカリキュラムを履修することができるように、文化教養モデル、コミュニティ共生モデル、法政策モデル、ビジネス探究モデルの、４つの履修モデルを用意している。
・各履修モデルでは、モデルのディプロマポリシーの達成のため、専門科目を開講する。

３．「働きながら学ぶ力」の保証のため、以下のような特徴ある履修基準・授業方法を採用している。

・働きながら学ぶ学生に対応するため、次の二つの特色を備えている。
（１）本学夜間主コースは、いわゆる二部制とは異なり、学籍上の扱いは昼間と同じである。
（２）長期履修学生制度を設ける。職業を有する社会人学生で、5 年間または 6 年間の計画的な教育課程の履修を認められた学生は、修業年限（4 年）を超えて学ぶことができる。
※授業料は、4 年分の総額を認められた年数で分割して納める。

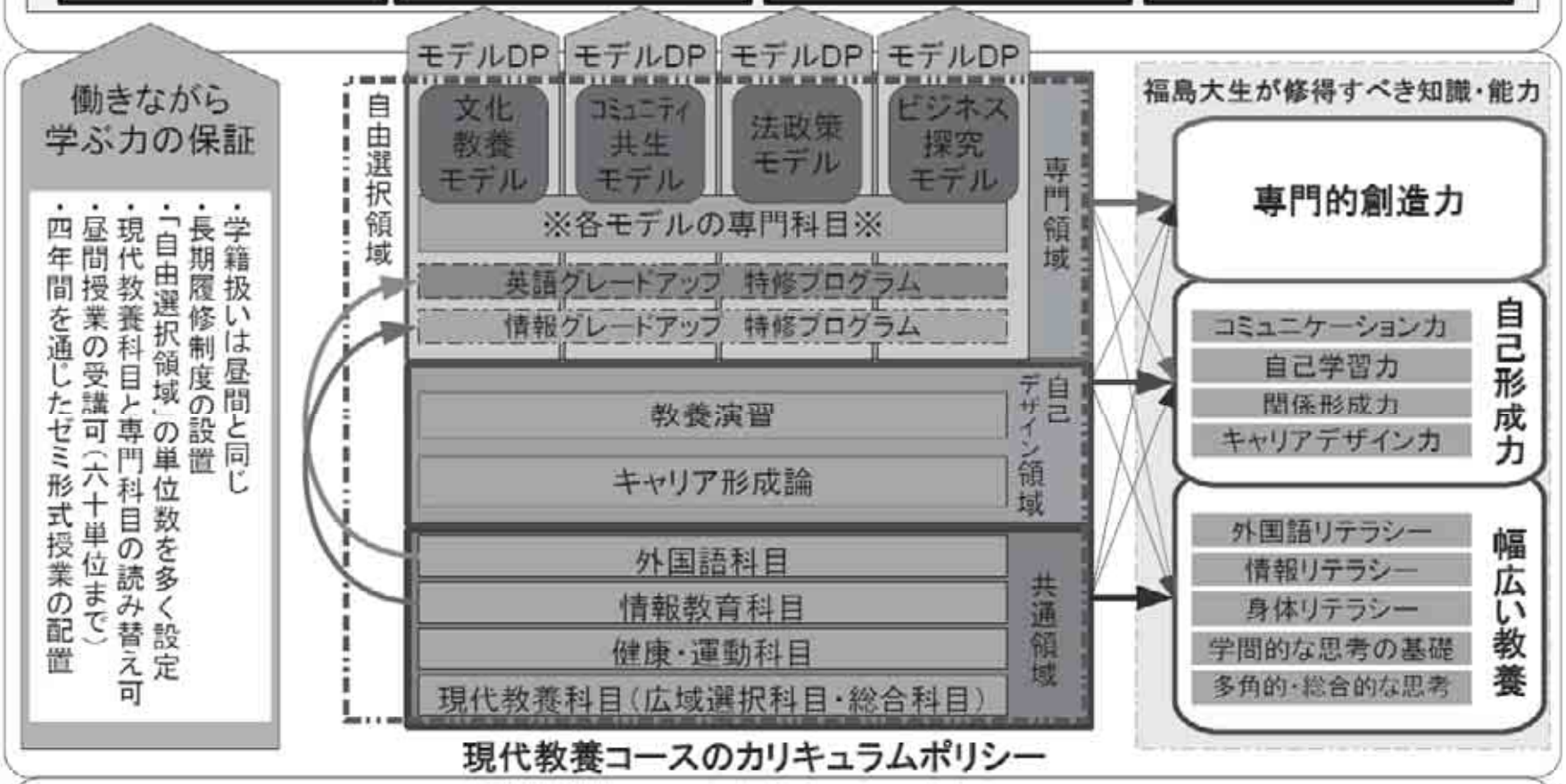
・生活や職業の実体験を通じた一人ひとりの学びへの要求を尊重するため、自分の判断で学習する内容を主体的に決めることができるように、履修基準を緩やかに設定している。
－自分が学びたい科目を自由に選択できる「自由選択領域」の単位数を多く設定している。
－現代教養科目と専門科目のいくつかについて、相互に単位の読み替えが可能である。
－夜間主コースの学生は、昼の時間帯の授業も、原則、６０単位（※）まで受講可能である。
※編入学生は除く。

・大学で過ごす時間が制約されている社会人学生が、教員と学生との密度の濃い関係を保ちながら学習できるように、４年間を通じて、教養演習・基礎演習・専門演習という、ゼミ形式の授業を配置している。

福島大学の人材育成目的：広い視野と豊かな創造力を有する専門的職業人

現代教養コースのディプロマポリシー

働きながら学ぶ力	職業知識・技能	社会人としての教養	生きがいとしての教養



現代教養コースのカリキュラムポリシー

現代教養コースのアドミッションポリシー

1. 職業に関わる専門的知識・技能の習得を望む学生
2. 現代社会を理解し、生活課題・地域社会が直面する課題を解決する社会人としての教養を求める学生
3. 人間性を探求する生きがいとしての教養を求める学生
4. 働きながら、生活や職業という実体験をもとにして、主体的に学習を深めることを望む学生

福島大学の入学者受入の方針

・市民または専門的職業人として知的・技術的貢献をしようとする意欲
・広い教養と専門的知識を生かしてリーダーシップを発揮し、地域社会に寄与する意欲

夜間主（現代教養コース）のアドミッションポリシー

１．現代教養コースの教育目標と求める学生像

：現代教養コースでは，現代社会が直面する問題を解決するための“新しい教養”を身につける意欲をもち、卒業までに次の４つの力を身に付けたいと考える社会人を学生として受け入れます。

・職業に関わる専門的知識・技能の修得を望む学生
・現代社会を理解し、生活課題・地域社会が直面する課題を解決する社会人としての教養を求める学生
・人間性を探求する生きがいとしての教養を求める学生
・働きながら、生活や職業という実体験をもとにして、主体的に学習を深めることを望む学生

：現代教養コースには、文化教養モデル、コミュニティ共生モデル、法政策モデル、ビジネス探求モデルの四つのモデルがあります。各モデルが求める学生像は次の通りです。

・文化教養モデルでは、教養を広げ、文化を体系的、探究的に学びたい学生を求めます。たとえば「子育てや家庭教育、家族の問題についてきちんと考えてみたい人」「 地域や文化、ことば、国際理解、数理科学などの問題に関心のある人」「 健康やスポーツに関心がある人」「 芸術的教養を高めてみたいと考えている人」です。

・コミュニティ共生モデルでは、地域コミュニティの抱える問題に対し、その解決に貢献するための学問的基礎知識を身に付けたい学生を求めます。たとえば「 まちづくりや福祉活動などに携わっている人、関心のある人」「将来、地域社会でボランティアや NPO 活動などへの参加を考えている人」「 地域社会のリーダーを目指している人」です。

・法政策モデルでは、複雑で多様な地域社会の現象に的確に対処できる、法的な思考・解決能力の修得を望む学生を求めます。たとえば「 公務員をはじめとした公共部門の仕事に就いている方で法律知識を身に付けたい人」「 裁判員制度や司法改革により法律が身近なものとなる中で、市民としての幅広い教養的法学を学びたいと考えている人」「将来、法律の専門職、資格取得を意識し、その基礎的法律知識を身に付けたい人」です。

・ビジネス探究モデルでは、現代社会で起こっている様々な問題に関心をもち、それらを経済・経営の視点でとらえる能力をもつことで、社会での実践力を養いたいと考える学生を求めます。たとえば「企業や役所等に勤める方で、業務のうえで経済・経営について学びたいと考えている人」「高校卒業後、働きながら経済・経営について学びたいと考えている人」「地域の問題に関心をもち、これを経済・経営の視点で捉えたいと考えている人」です。

２．入試の際に求める知識・技能・関心

：職業に関わる専門的知識・技能、および、現代社会を理解し、生活課題・地域社会が直面する課題を解決する社会人としての教養や、人間性を探求する生きがいとしての教養を、働きながら身につけるために、以下に挙げる基礎的な知識・技能・関心を有している学生を求めます。

(1). 大学での学びの基盤となる基礎的な学力
(2). 夜間主コースにて何を学ぶのかに関する鮮明な目標と課題意識
(3). 自己の目標に向かって努力する姿勢
(4). 働きながら修学を続けることに対する強い意志

（注）入学試験ごとのアドミッション・ポリシー（入学者受入方針）は各募集要項に記載します。

７．シラバス改訂―授業との連関に向けて

シラバス記載事項

【開講年度】	2012 年度	【授業コード】	※記入不要
【科目】	※記入不要		
【担当教員】	※記入不要		
【授業区分】	※記入不要	【単位数】	※記入不要
【授業概要とねらい】 《必須》 全角 300 字以内	・授業の概要（テーマ） ：授業で扱う内容を大まかに記入して下さい。 ・授業のねらい ：『授業を通じて学生が何を身につけるか』について目標を明記して下さい。 ・カリキュラム全体における当該科目の位置づけ ：「福島大学の教育目的」及びディプロマポリシー、カリキュラムポリシーに掲げる諸能力のうち、当該科目と関連の深い項目について言及して下さい。 ⇒実際の授業概要、ねらいの記載については資料２「記入例」をご参照下さい。		
【望ましい水準】 《必須》 全角 200 字以内	・「望ましい水準」（Ｃグレード）の達成に必要な具体的要件を明示して下さい。 ：修得されるべき知識、能力、技能等を箇条書きで記入して下さい。 その際、「～を学習する」「～を修得する」「～を身につける」など、学習者主体の観点から見た目標として記入して下さい。 ⇒実際の記載については資料２「記入例」をご参照下さい。 ※この「望ましい水準」が成績評価の基準となりますので、ご注意下さい。 ⇒成績評価制度については資料３「シラバス作成要領」をご参照下さい。		
【授業計画】 《必須》 ※１５回分記載すること。	・１５回分の授業方法・内容を、授業計画として記入して下さい。 ：学校教育法施行規則の改正により、年間授業計画の公開が義務化されます。 ⇒実際の授業計画の記載については、資料２「記入例」をご参照下さい。 ※正規試験は、原則、授業１５回終了後の試験・補講期間の第１週目に行います。 ※補講が必要な場合は、試験・補講期間で行うことになります。 ※授業日数については、以下の添付資料を参照のうえ、各自確認して下さい。 ⇒資料５「平成２４年度行事予定表」		
【教材・教科書】 全角 200 字以内	・テキストとその入手方法を記入して下さい。 （１）書名をあげる場合、著者・編者氏名：「 書名 」（ 出版社 ）の順で記入。 （２）市販の教材によらない場合は、「プリントを使用する」等を記入。 （３）テキストを使用しない場合は「使用しない」を記入。		
【参考図書】 全角 200 字以内	・参考書とその入手方法を記入して下さい。 注）附属図書館から依頼の「シラバス掲載参考図書指定リスト」に掲載する図書等を記入して下さい（「・・・（図書館所蔵）」と記入して下さい）。		

【参考ＵＲＬ】 半角 100 文字以内	・参考になるホームページのアドレスを記入して下さい。
【授業以外の学習】 《必須》 全角 300 字以内	・授業以外の学習について必ず明示して下さい。 ※教育の質の保証に関わって、「単位制度の実質化」が喫緊の課題です。 （大学設置基準の単位制度は、授業時間外の学習を前提としています） 【授業以外の学習の例】 ：あらかじめ読んでおく文献等の指示、準備学習 ：復習、レポート等の課題 ⇒具体的な記入については、資料２「記入例」をご参照下さい。
【成績評価の方法】 《必須》 全角 300 字以内	・正規試験、小テスト、レポート、平常試験等の配分割合を明記して下さい。 【例１】正規試験（50%）、小テスト（30%）レポート（20%） 【例２】第１回レポート（20 点）、第２回（20 点）、最終試験（60 点） ⇒具体的な記載については、資料２「記入例」をご参照下さい。
【成績評価の基準】 《必須》 全角 300 字以内	・評価（ＡＢＣＤＦ）の基準（要件）を記入して下さい。 ：学校教育法施行規則の改正により、評価基準の公開が義務化されます。 ⇒先述の「望ましい水準」の達成を基準（Ｃグレード）として、 測定可能な形で各グレードの評価基準を明示して下さい。 （具体的な記載については、資料２「記入例」をご参照下さい） ※資料３「シラバス作成要領」に評価制度の概要と留意点が記載されています。 必ずご参照の上で、記入していただきますよう、お願い申し上げます。 ※大学院生の場合、研究科・入学年度によって評価（ABCDF、優良可不可）が異なります。
【オフィスアワー】 《必須》 全角 100 字以内	・学生の授業内容等に関する質問・相談に応じる時間帯を記入して下さい。 ：具体的な時間を指定し、記入して下さい。 ⇒良い記入例「水曜日１２時～１４時」／悪い記入例「いつでも構わない」 ：可能な限り、学生の休み時間を含めた時間帯を指定して下さい。 ※授業時間帯に設定する場合、および具体的な時間を指定できない場合には、メールもしくは電話にて対応する旨、明記して下さい。
【留意点・注意事項】 全角 100 字以内	・履修にあたっての特別な留意点、注意事項等があれば、記入して下さい。
【その他】 全角 100 字以内	・各項目に該当しない場合は、この欄に記入して下さい。 ※不服申立てについては、学習案内に表記するため、記入不要です。

※ライブキャンパスによる登録ではない場合は「※記入不要欄」も記入して下さい。
なお、ＦＤ等で提出される場合は、教務関係ホームページの右側画面にある「お知らせ」から様式（Word）をダウンロードできます。http://kyoumu.adb.fukushima-u.ac.jp/

シラバス記入例

【開講年度】	2012 年度	【授業コード】	※記入不要
【科目】	※記入不要（管理会計）		
【担当教員】	※記入不要（奥山　修司）		
【授業区分】	※記入不要	【単位数】	※記入不要（２）
【授業概要とねらい】《必須》	・テーマ 「企業の経営課題は、熾烈な競争環境の中で企業価値の持続的拡大を図ることにある。その任を担う経営管理者に有用な計数データをデザインし、それを情報システムとして構築する管理会計について学習する」 ・授業のねらい 単に管理会計の知識や分析ツールを学習するだけでなく、習得した知識やツールを課題解決に活用できるようにすることを授業の目標とする。事例を用いた解説を心掛けるとともに、知識やツールが課題解決にどう活用されたかをケーススタディで紹介し、実際の課題にどう応用できているかをレポートにまとめて提出してもらう ・カリキュラム全体における当該科目の位置づけ （記入例１：「項目列挙」） ：専門的創造力（福島大学の教育目的Ⅲ）、客観的に観察・分析し、論理的に思考する力（学類ＤＰⅡ）、企業活動に対し、外部環境を踏まえて定量的・定性的に分析するための専門的知識（企業経営専攻ＤＰ） （記入例２：「文章記述」） ：本科目は、企業活動に対し、外部環境を踏まえて定量的・定性的に分析するための専門的知識の体得（企業経営専攻ＤＰ）を通じて、客観的に観察・分析し、論理的に思考する力（学類ＤＰⅡ）と専門的創造力（福島大学の教育目的Ⅲ）を涵養します。		
【望ましい水準】《必須》	本授業では、以下の三つの目標達成を「望ましい水準」とする ①管理会計に関する基礎知識の習得 ②習得した知識を基に、実際のデータを用いて分析・評価ができる ③習得した知識を基に、実践的な課題に対する解決案を提示できる		
【授業計画】《必須》	第１回　管理会計とは（オリエンテーション） 第２回　企業価値の測定方法 第３回　企業価値測定における会計の役割と限界 第４回　価値創造の経済性分析 第５回　価値創造とＲＯＥ重視の経営 第６回　ＲＯＥの構造と分解 第７回　中間まとめ 第８回　財務レバレッジと財務リスク 第９回　財務諸表分析 第 10 回　財務諸表分析の活用例 第 11 回　ＲＯＡのマネジメントと事業戦略 第 12 回　損益分岐点分析 ～ＣＶＰ（Cost-Volume-Profit）分析～ 第 13 回　営業レバレッジと営業リスク 第 14 回　価格戦略と収益（取引）デザイン 第 15 回　まとめ		
【教材・教科書】	テキストは使用しないが、適時プリントを配布する。プリントの受取りは配布当日のみとし、出席できないときはユニバーサルパスポート上のPDFファイルを各自コピーすること。		

『授業を通じて学生が何を身につけるか』についての目標を明示する。（300 字以内）

記入例に限らず、各科目に適した形式/内容にて、カリキュラム上の位置づけを自由に記述する。

※ただし、最低限の基準として
①福島大学の教育目的
②学類（現代教養コース）DP
③専攻（モデル）DP
の3区分について、それぞれ一つ以上の能力との関連を示すことが望ましい（資料 2-2 参照）

⇒なお、専攻（モデル）に属さない科目については①と②のみ、学類（コース）に属さない科目については①のみでもよい。

Ｃグレード達成に必要な知識、能力、技能を箇条書きする。（200 字以内）

15 回分の授業方法・内容を授業計画として記入する。
⇒平成２３年４月より、年間授業計画の公開が義務化。
⇒各回の授業内容について、授業で扱う内容を含めて、できるだけ詳しく記入。

著者・編者氏名：「 書名 」（ 出版社 ）の順に記入する。
⇒市販の教材によらない場合は、「プリントを使用する」等を記入する。（200 字以内）

【参考図書】	管理会計に関する参考書 ：岡本清他(2003)『管理会計』(中央経済社) 簿記会計に関する参考書 ：大塚宗春他(2007)『現代簿記会計【第６版】』(中央経済社) 企業財務に関する参考書 ：井手正介他(1997)『企業財務入門　第２版』(日本経済新聞社) 価値創造に関する参考書 ：佐藤紘光他(2002)『株主価値を高めるＥＶＡ経営』(中央経済社) いずれも図書館所蔵である
【参考ＵＲＬ】	授業で活用する財務データの入手関連先（例） ＥＤＩＮＥＴ（http://info.edinet-fsa.go.jp/）
【授業以外の学習】《必須》	本授業では、２回のレポート提出を課す。レポート課題は、授業内容に関連するテーマで出題され、復習を兼ねたレポート作成となる。
【成績評価の方法】《必須》	成績評価は、２回のレポートと平常試験の点数を基に評価する。なお、２回のレポートと平常試験の点数の内訳は以下の通りである 第１回レポート　20 点 第２回レポート　20 点 平常試験　60 点 合　計　100 点 なお、第１回レポートは 12 月 13 日の授業時間中に提出、第２回レポートは１月 24 日の授業時間中に提出となる予定である。平常試験は、計算問題（2/3）と論述問題（1/3）から成り、授業の最後に実施する予定である。
【成績評価の基準】《必須》	評価基準は、レポートと最終試験の点数を基に、以下の基準で評価する グレード A:望ましい水準の①②③すべてにおいて高い水準（100～90 点）を獲得した場合 B:望ましい水準の①②において高い水準（89～75 点）を獲得した場合 C:高い水準には達していないが①②③すべてにおいて一定の水準（74～60 点）を獲得した場合 D:いくつかの項目において未達成（59～50 点）である場合
【オフィスアワー】《必須》	オフィスアワーは、以下の時間と方法で実施する 月曜日５時限(この時間以外については、事前予約してください)
【留意点・注意事項】	※100 字以内
【その他】	※100 字以内

参考書とその入手方法を記入する。（200 字以内）
⇒附属図書館から依頼の「シラバス掲載参考図書指定リスト」に掲載する図書等を記入
※図書館所蔵の旨を明記

参考になるホームページアドレスを記入する。（半角 100 字以内）

授業以外の課題・学習について必ず明示する。
⇒教育の質の保証に関わって、「単位制度の実質化」が喫緊の課題。
（大学設置基準の定める単位制度は、授業時間外の学習を前提とする）

正規試験、小テスト、レポート、期末試験等の配分割合を明示する。
⇒出欠の条件などがあれば併せて記入
（300 字以内）

ABCDF の各基準を記入する。（300 字以内）
⇒平成２３年４月より、学修成果の評価基準の公開が義務化。
⇒「望ましい水準」の達成を基準として、測定可能な形で明記する。

学生の休み時間を含めた時間帯を、具体的に指定する（100 文字以内）
⇒授業時間帯に設定する場合メールもしくは電話にて対応する旨を明記

※【授業概要とねらい】の欄の記入に当たっては、「福島大学の教育目的」及び各科目が配置されている学類、専攻、コース、モデルのＤＰ／ＣＰを参照すること。なお「カリキュラム全体における当該科目の位置づけ」については、福島大学の教育目的や学類・専攻ポリシーとの対応を明示することを条件として、「授業のねらい」の文章内に一括して必要な文言や記号を挿入するなど、実体に即した弾力的な記入を認める。

※学生の相談の機会を確保するため、オフィスアワーの欄にも必ず記入のこと。

※最初の授業から出欠の確認を課す場合など、履修登録期間前の出欠の扱いについては、「留意点・注意事項」の欄に記入のこと。

「カリキュラム全体における当該科目の位置づけ」選択項目一覧表

※各項目の詳細とカリキュラムとの関係は、「福島大学の教育目的」及び各科目が配置されている学類/コース、専攻/モデルのDP･CPを、以下のＵＲＬよりご参照下さい。
（http://www.fukushima-u.ac.jp/new/6-syokai/naiyo/dp/index.html）

【分類／No】				【項目】
福島大学の教育目的	主に共通領域・自己デザイン領域において修得すべき知識及び能力	Ⅰ		**幅広い教養**
		Ⅰ-1		多角的・総合的思考
		Ⅰ-2		学問的思考の基礎
		Ⅰ-3-①		外国語リテラシー
		Ⅰ-3-②		情報リテラシー
		Ⅰ-3-③		身体リテラシー
		Ⅱ		**自己形成力**
		Ⅱ-1		自己学習力
		Ⅱ-2		コミュニケーション力
		Ⅱ-3		キャリアデザイン力
		Ⅱ-4		関係形成力
	Ⅲ			**所属する学類・コースごとに修得すべき知識及び能力（専門的創造力）** ※各学類/コース・専攻/モデルDPは、ここに該当する
人間発達文化学類	学類DP	Ⅰ		**教え育む力**
		Ⅰ-1		成長を支援する力
		Ⅰ-2		文化を育む力
		Ⅱ		**理解し探究する力**
		Ⅱ-1		人間に対する深い理解
		Ⅱ-2		文化の探究
		Ⅲ		**人や文化と関わる力**
		Ⅲ-1		コミュニケーション実践
		Ⅲ-2		文化的実践
		Ⅳ		**解決し創造する力**
		Ⅳ-1		共同性の創造と深化
		Ⅳ-2		課題発見・解決能力
	専攻DP	人間発達	Ⅰ	現代社会における教育の意義
			Ⅱ	深い人間理解に根ざした発達支援
			Ⅲ	コミュニケーションと人間関係
			Ⅳ	省察的実践
		文化探究	Ⅰ	学問・文化の伝達
			Ⅱ	専門的能力
			Ⅲ	人間発達と文化実践
			Ⅳ	論理的・批判的・創造的態度
		ｽﾎﾟｰﾂ・芸術創造	Ⅰ	文化の担い手としての成長
			Ⅱ	諸技術の意義
			Ⅲ	諸技術の活用
			Ⅳ	協力関係の重視
行政政策学類	学類DP	Ⅰ		**研究分野の知識**
		Ⅱ		**問題発見・調査・解読能力**
		Ⅲ		**解決能力・応用能力**
		Ⅳ		**表現力・コミュニケーション能力**
	専攻DP	法学	Ⅰ	リーガル・マインド
			Ⅱ	社会における応用能力
			Ⅲ	問題発見・解決能力
			Ⅳ	表現力とコミュニケーション能力
		地域と行政	Ⅰ	基礎的知識
			Ⅱ	調査能力と思考力
			Ⅲ	応用能力
			Ⅳ	表現力とコミュニケーション能力
		社会と文化	Ⅰ	社会・文化研究にかかわる学際的および専門的知識
			Ⅱ	社会・文化研究への応用能力
			Ⅲ	調査能力と情報解読能力
			Ⅳ	表現力とコミュニケーション能力

「カリキュラム全体における当該科目の位置づけ」選択項目一覧表

【分類／No】				【項目】
経済経営学類	学類ＤＰ	Ⅰ		**自立する力**
		Ⅰ-1		幅広い教養と高い倫理性を身につけている
		Ⅰ-2		自分の意見を述べ討論し文章で表現できるｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ能力
		Ⅰ-3		自己管理力を身につけ自分の適性を見定めて目標設計を主体的に行う
		Ⅱ		**客観的に観察・分析し、論理的に思考する力**
		Ⅱ-1		物事の本質をつかむ分析力と論理的思考力を身につけている
		Ⅱ-2		客観的、論理的に思考し、柔軟な考察を展開できる
		Ⅲ		**経済社会で実践し解決する力**
		Ⅲ-1		経済学・経営学分野の知識と分析ツールを実践するための基礎基本
		Ⅲ-2		各専攻が掲げる専門力量を応用し問題を発見/分析/解決案を創出する
	専攻ＤＰ	経済分析		ミクロ・マクロ経済学での諸議論を通して経済のしくみを体系的に理解し、得られた知識を、金融・公共経済をはじめとした経済システムの分析とそのあり方に関する実践的な考察に応用することができる。
		国際地域経済		経済学的素養に基づく理論的、歴史的、政策的見地に加えてグローカルな知識を身に付けて今日の経済社会を理解し、国際社会と地域社会の課題に理論的実践的に取り組むことができる。
		企業経営		企業活動に対し、外部環境を踏まえて定量的・定性的に分析するための専門的知識を有し、それを応用して企業およびその他組織における適切な意思決定ができる基礎的力量を身につけている。
共生システム理工学類	学類ＤＰ	Ⅰ		**21世紀の諸問題に挑戦し、解決する力**
		Ⅰ-1		21世紀の諸問題の中から、自ら課題を設定して、その原因を見出す
		Ⅰ-2		21世紀の諸問題の解決のため、適切、自主的、継続的に学習を進める
		Ⅱ		**グローバルな視点から、物事を探求する**
		Ⅱ-1		地域と国際感覚、国際貢献への対応、幅広い視野での物事の探求
		Ⅱ-2		日本語での論理的な記述力、口頭発表力、討議等コミュニケーション能力および国際的に通用するコミュニケーション基礎能力
		Ⅲ		**問題解決のための実践力**
		Ⅲ-1		21世紀の諸問題に対して、様々な角度から実践的な取り組みができる
		Ⅲ-2		与えられた制約の下で計画的に仕事をまとめることができる
		Ⅳ		**システムサイエンスに関する幅広い専門知識と実践能力**
		Ⅳ-1		共生に関わるｼｽﾃﾑｻｲｴﾝｽを理解する上で重要な視野の広い文理融合ｾﾝｽ
		Ⅳ-2		各専攻が掲げる専門的力量を身につけ、研究・開発に応用する
	専攻ＤＰ	人間支援システム		ロボティクスや福祉、医療等を含むヒト理解・人間支援又はそれらの基礎となる分野、特に、心理学や生理学などの生体システム科学、情報工学や機械・電気・電子工学などを基礎とする人間支援の技術に関して、研究・開発ができる。
		産業システム工学		化学工学、材料工学、エネルギー開発などを基礎とする環境負荷の少ないものづくり技術や、経営工学、数理科学、産業政策、環境経済およびそれらを基礎とする省資源・循環型生産システムの構築や産業支援分野に関して、研究・開発ができる。
		環境システムマネジメント		環境の科学や、水資源などを中心とした自然資源の確保・保全、環境分析化学、浄化工学、生態学や地域計画、流域管理計画などを基礎とする環境システムに関して、研究・開発ができる。
夜間主（現代教養）コース	コースＤＰ	Ⅰ		**職業知識・技能**
		Ⅱ		**社会人としての教養**
		Ⅲ		**生きがいとしての教養**
		Ⅳ		**働きながら学ぶ力**
	モデルＤＰ	文化教養	Ⅰ	文化の体系的学習と探究
			Ⅱ	文化の伝達・活用
		ｺﾐｭﾆﾃｨ共生	Ⅰ	コミュニティ理解の学問的基礎
			Ⅱ	コミュニティ問題の把握・解決力
		法政策	Ⅰ	法的な思考力
			Ⅱ	地域問題の法的解決力
		ﾋﾞｼﾞﾈｽ探求	Ⅰ	経済学・経営学分野の基礎的知識と分析ツール
			Ⅱ	経済社会の問題発見・解決能力

第３章
福島大学の教育成果
～質問紙調査による検証～

１．学類Ⅰ期生への教育成果検証アンケート・・・ 49
２．学類Ⅱ期生への教育成果検証アンケート・・・ 61
３．共通教育アンケートの経年分析・・・・・・・ 80
４．卒業生・企業への教育成果検証アンケート・・ 89

１．学類Ⅰ期生への教育成果検証アンケート

・５年前（2005）の学群、学類、学系制の導入に合わせて、それまでのカリキュラムを大幅に見直した新制度、新カリキュラムが実施され、昨春（2009.3）にその第Ⅰ期生が巣立っていきました。この第Ⅰ期生に対しては、３年修了時に大学時代に獲得してくれるであろう諸力量など（下記のⅢ）を中心とした調査を行いました。また、４年修了時に、諸力量の自己評価とともに、導入した新制度等についての評価（下記のⅠとⅡ）の調査をも併せて行いました。その結果を教育企画委員会で取りまとめましたので、全学の皆さまにお返しいたします。学類等での今後の教育改善、カリキュラム見直し等の参考にしていただければ幸いです（学類Ⅰ期生４年間経過アンケート　2009年３月実施）。

（2010.11　教育企画委員会）

Ⅰ　制度全般に対して

・新制度で加えられた新たな仕組み、及び、従来からの仕組みであるＧＰＡ制度、ＣＡＰ制度、クラス・ゼミ制度、アドバイザー制度、自己デザイン領域、特修プログラム（英語、情報）、各種演習（ゼミ）について４年間の学びにそれぞれがどう機能したと考えるかを、学生自身に４段階で評価してもらいました。

Ａ．ＧＰＡ制度

	良かった　←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
	4		3		2		1						
全　体　計	127	26.8%	201	42.5%	92	19.5%	50	10.6%	0	0.0%	3	0.6%	473
人間発達文化学類	47	32.4%	68	46.9%	23	15.9%	5	3.4%	0	0.0%	2	1.4%	145
行政政策学類	14	15.2%	38	41.3%	26	28.3%	13	14.1%	0	0.0%	1	1.1%	92
経済経営学類	23	24.7%	34	36.6%	17	18.3%	19	20.4%	0	0.0%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	17	24.3%	36	51.4%	9	12.9%	8	11.4%	0	0.0%	0	0.0%	70
現代教養コース	10	45.5%	9	40.9%	3	13.6%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	22
未　記　入	16	31.4%	16	31.4%	14	27.5%	5	9.8%	0	0.0%	0	0.0%	51

Ｂ．ＣＡＰ制度

	良かった　←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
	4		3		2		1						
全　体　計	54	11.4%	128	27.1%	157	33.2%	129	27.3%	0	0.0%	5	1.1%	473
人間発達文化学類	21	14.5%	35	24.1%	54	37.2%	34	23.4%	0	0.0%	1	0.7%	145
行政政策学類	3	3.3%	23	25.0%	34	37.0%	31	33.7%	0	0.0%	1	1.1%	92
経済経営学類	12	12.9%	18	19.4%	34	36.6%	29	31.2%	0	0.0%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	4	5.7%	30	42.9%	16	22.9%	20	28.6%	0	0.0%	0	0.0%	70
現代教養コース	6	27.3%	7	31.8%	6	27.3%	2	9.1%	0	0.0%	1	4.5%	22
未　記　入	8	15.7%	15	29.4%	13	25.5%	13	25.5%	0	0.0%	2	3.9%	51

C．クラス・ゼミ制度

	良かった ←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
	4		3		2		1						
全　体　計	232	49.0%	169	35.7%	42	8.9%	26	5.5%	1	0.2%	3	0.6%	473
人間発達文化学類	75	51.7%	51	35.2%	12	8.3%	6	4.1%	0	0.0%	1	0.7%	145
行政政策学類	55	59.8%	29	31.5%	6	6.5%	1	1.1%	1	1.1%	0	0.0%	92
経済経営学類	41	44.1%	40	43.0%	7	7.5%	5	5.4%	0	0.0%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	21	30.0%	32	45.7%	9	12.9%	8	11.4%	0	0.0%	0	0.0%	70
現代教養コース	11	50.0%	5	22.7%	4	18.2%	1	4.5%	0	0.0%	1	4.5%	22
未　記　入	29	56.9%	12	23.5%	4	7.8%	5	9.8%	0	0.0%	1	2.0%	51

D．アドバイザー制度

	良かった ←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
	4		3		2		1						
全　体　計	120	25.4%	180	38.1%	116	24.5%	48	10.1%	1	0.2%	8	1.7%	473
人間発達文化学類	52	35.9%	52	35.9%	37	25.5%	3	2.1%	0	0.0%	1	0.7%	145
行政政策学類	15	16.3%	43	46.7%	21	22.8%	11	12.0%	1	1.1%	1	1.1%	92
経済経営学類	10	10.8%	41	44.1%	25	26.9%	16	17.2%	0	0.0%	1	1.1%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	22	31.4%	24	34.3%	11	15.7%	12	17.1%	0	0.0%	1	1.4%	70
現代教養コース	2	9.1%	6	27.3%	11	50.0%	1	4.5%	0	0.0%	2	9.1%	22
未　記　入	19	37.3%	14	27.5%	11	21.6%	5	9.8%	0	0.0%	2	3.9%	51

E．自己デザイン領域

	良かった ←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
	4		3		2		1						
全　体　計	82	17.3%	222	46.9%	124	26.2%	38	8.0%	2	0.4%	5	1.1%	473
人間発達文化学類	24	16.6%	77	53.1%	37	25.5%	6	4.1%	0	0.0%	1	0.7%	145
行政政策学類	15	16.3%	47	51.1%	24	26.1%	5	5.4%	1	1.1%	0	0.0%	92
経済経営学類	12	12.9%	36	38.7%	34	36.6%	11	11.8%	0	0.0%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	14	20.0%	30	42.9%	15	21.4%	10	14.3%	0	0.0%	1	1.4%	70
現代教養コース	4	18.2%	10	45.5%	4	18.2%	1	4.5%	1	4.5%	2	9.1%	22
未　記　入	13	25.5%	22	43.1%	10	19.6%	5	9.8%	0	0.0%	1	2.0%	51

F．特修プログラム（英語・情報）

	良かった ←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
	4		3		2		1						
全　体　計	63	13.3%	153	32.3%	94	19.9%	17	3.6%	140	29.6%	6	1.3%	473
人間発達文化学類	19	13.1%	45	31.0%	31	21.4%	3	2.1%	46	31.7%	1	0.7%	145
行政政策学類	11	12.0%	37	40.2%	12	13.0%	2	2.2%	29	31.5%	1	1.1%	92
経済経営学類	13	14.0%	23	24.7%	23	24.7%	7	7.5%	26	28.0%	1	1.1%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	9	12.9%	21	30.0%	15	21.4%	1	1.4%	24	34.3%	0	0.0%	70
現代教養コース	2	9.1%	9	40.9%	5	22.7%	1	4.5%	4	18.2%	1	4.5%	22
未　記　入	9	17.6%	19	37.3%	8	15.7%	3	5.9%	11	21.6%	1	2.0%	51

G．各種演習（ゼミ）

	良かった　←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
	4		3		2		1						
全　体　計	264	55.8%	161	34.0%	29	6.1%	15	3.2%	0	0.0%	4	0.8%	473
人間発達文化学類	90	62.1%	43	29.7%	10	6.9%	1	0.7%	0	0.0%	1	0.7%	145
行政政策学類	62	67.4%	27	29.3%	2	2.2%	1	1.1%	0	0.0%	0	0.0%	92
経済経営学類	42	45.2%	40	43.0%	6	6.5%	4	4.3%	0	0.0%	1	1.1%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	29	41.4%	29	41.4%	8	11.4%	4	5.7%	0	0.0%	0	0.0%	70
現代教養コース	10	45.5%	9	40.9%	1	4.5%	1	4.5%	0	0.0%	1	4.5%	22
未　記　入	31	60.8%	13	25.5%	2	3.9%	4	7.8%	0	0.0%	1	2.0%	51

Ⅱ　個々の科目に対して

・特徴あるいくつかの個々の科目、教養演習、キャリア形成論、キャリアモデル学習、インターンシップ（単位化されるもの）、自己学習プログラム、学群共通科目、卒業研究について、同じように４段階での評価をしてもらいました。

H．教養演習

	良かった　←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
	4		3		2		1						
全　体　計	189	40.0%	171	36.2%	67	14.2%	33	7.0%	6	1.3%	7	1.5%	473
人間発達文化学類	49	33.8%	48	33.1%	31	21.4%	13	9.0%	3	2.1%	1	0.7%	145
行政政策学類	50	54.3%	32	34.8%	4	4.3%	2	2.2%	2	2.2%	2	2.2%	92
経済経営学類	33	35.5%	46	49.5%	10	10.8%	4	4.3%	0	0.0%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	21	30.0%	28	40.0%	14	20.0%	7	10.0%	0	0.0%	0	0.0%	70
現代教養コース	12	54.5%	3	13.6%	2	9.1%	1	4.5%	1	4.5%	3	13.6%	22
未　記　入	24	47.1%	14	27.5%	6	11.8%	6	11.8%	0	0.0%	1	2.0%	51

I．キャリア形成論

	良かった　←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
	4		3		2		1						
全　体　計	106	22.4%	207	43.8%	106	22.4%	40	8.5%	4	0.8%	10	2.1%	473
人間発達文化学類	27	18.6%	64	44.1%	40	27.6%	11	7.6%	1	0.7%	2	1.4%	145
行政政策学類	19	20.7%	46	50.0%	15	16.3%	8	8.7%	2	2.2%	2	2.2%	92
経済経営学類	19	20.4%	47	50.5%	19	20.4%	7	7.5%	0	0.0%	1	1.1%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	13	18.6%	31	44.3%	17	24.3%	8	11.4%	0	0.0%	1	1.4%	70
現代教養コース	10	45.5%	5	22.7%	3	13.6%	0	0.0%	1	4.5%	3	13.6%	22
未　記　入	18	35.3%	14	27.5%	12	23.5%	6	11.8%	0	0.0%	1	2.0%	51

J．キャリアモデル学習

	良かった　←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
	4		3		2		1						
全　体　計	85	18.0%	183	38.7%	97	20.5%	23	4.9%	79	16.7%	6	1.3%	473
人間発達文化学類	24	16.6%	55	37.9%	38	26.2%	5	3.4%	22	15.2%	1	0.7%	145
行政政策学類	13	14.1%	37	40.2%	16	17.4%	5	5.4%	19	20.7%	2	2.2%	92
経済経営学類	14	15.1%	45	48.4%	16	17.2%	4	4.3%	14	15.1%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	14	20.0%	30	42.9%	15	21.4%	2	2.9%	9	12.9%	0	0.0%	70
現代教養コース	6	27.3%	2	9.1%	2	9.1%	1	4.5%	10	45.5%	1	4.5%	22
未　記　入	14	27.5%	14	27.5%	10	19.6%	6	11.8%	5	9.8%	2	3.9%	51

K．インターンシップ（単位化されているもの）

	良かった ←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
	4		3		2		1						
全　体　計	10	19.6%	6	11.8%	4	7.8%	3	5.9%	26	51.0%	2	3.9%	51
人間発達文化学類	2	9.1%	4	18.2%	1	4.5%	2	9.1%	11	50.0%	2	9.1%	22
行政政策学類	11	15.7%	11	15.7%	5	7.1%	0	0.0%	43	61.4%	0	0.0%	70
経済経営学類	6	6.5%	17	18.3%	6	6.5%	5	5.4%	59	63.4%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	8	8.7%	17	18.5%	7	7.6%	1	1.1%	56	60.9%	3	3.3%	92
現代教養コース	9	6.2%	16	11.0%	5	3.4%	1	0.7%	114	78.6%	0	0.0%	145
未　記　入	46	9.7%	71	15.0%	28	5.9%	12	2.5%	309	65.3%	7	1.5%	473

L．自己学習プログラム

	良かった ←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
	4		3		2		1						
全　体　計	63	13.3%	95	20.1%	42	8.9%	17	3.6%	247	52.2%	9	1.9%	473
人間発達文化学類	24	16.6%	25	17.2%	10	6.9%	3	2.1%	82	56.6%	1	0.7%	145
行政政策学類	13	14.1%	17	18.5%	10	10.9%	2	2.2%	47	51.1%	3	3.3%	92
経済経営学類	7	7.5%	23	24.7%	10	10.8%	1	1.1%	52	55.9%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	7	10.0%	17	24.3%	6	8.6%	4	5.7%	35	50.0%	1	1.4%	70
現代教養コース	1	4.5%	6	27.3%	1	4.5%	2	9.1%	10	45.5%	2	9.1%	22
未　記　入	11	21.6%	7	13.7%	5	9.8%	5	9.8%	21	41.2%	2	3.9%	51

M．学群共通科目

	良かった ←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
	4		3		2		1						
全　体　計	111	23.5%	221	46.7%	76	16.1%	28	5.9%	33	7.0%	4	0.8%	473
人間発達文化学類	37	25.5%	63	43.4%	27	18.6%	8	5.5%	10	6.9%	0	0.0%	145
行政政策学類	22	23.9%	49	53.3%	14	15.2%	6	6.5%	1	1.1%	0	0.0%	92
経済経営学類	18	19.4%	41	44.1%	15	16.1%	7	7.5%	12	12.9%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	14	20.0%	41	58.6%	10	14.3%	2	2.9%	3	4.3%	0	0.0%	70
現代教養コース	4	18.2%	9	40.9%	2	9.1%	1	4.5%	4	18.2%	2	9.1%	22
未　記　入	16	31.4%	18	35.3%	8	15.7%	4	7.8%	3	5.9%	2	3.9%	51

N．卒業研究

	良かった ←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
	4		3		2		1						
全　体　計	239	50.5%	178	37.6%	34	7.2%	15	3.2%	2	0.4%	5	1.1%	473
人間発達文化学類	95	65.5%	44	30.3%	6	4.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	145
行政政策学類	33	35.9%	45	48.9%	9	9.8%	5	5.4%	0	0.0%	0	0.0%	92
経済経営学類	41	44.1%	41	44.1%	6	6.5%	4	4.3%	1	1.1%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	26	37.1%	34	48.6%	7	10.0%	2	2.9%	1	1.4%	0	0.0%	70
現代教養コース	10	45.5%	7	31.8%	2	9.1%	0	0.0%	0	0.0%	3	13.6%	22
未　記　入	34	66.7%	7	13.7%	4	7.8%	4	7.8%	0	0.0%	2	3.9%	51

Ⅲ　全体的なふり返り（入学時に比べ４年間で身についたと考える態度、力、知識等）

・これは３年次と４年次のほぼ修了の時期に、ほぼ同じ内容での質問を行ったものです。総じて４年修了時のものの方が自己評価が低いということが言えます。これはやや予想とは違っているようにも思えますが、社会への旅立ちを前にして、改めて自分をふり返り、よりしっかりした自己評価、認識にたったととるべきかもしれません。

１．授業の重要なところを理解しノートにとる

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全　体	H19	81	24.7%	135	41.2%	28	8.5%	8	2.4%	76	23.2%	0	0.0%	328
	H20	87	18.4%	216	45.7%	116	24.5%	23	4.9%	28	5.9%	3	0.6%	473
人間発達文化学類	H19	33	30.3%	40	36.7%	5	4.6%	3	2.8%	28	25.7%	0	0.0%	109
	H20	34	23.4%	69	47.6%	27	18.6%	7	4.8%	8	5.5%	0	0.0%	145
行政政策学類	H19	14	18.9%	35	47.3%	8	10.8%	0	0.0%	17	23.0%	0	0.0%	74
	H20	9	9.8%	42	45.7%	35	38.0%	0	0.0%	6	6.5%	0	0.0%	92
経済経営学類	H19	19	26.4%	29	40.3%	4	5.6%	3	4.2%	17	23.6%	0	0.0%	72
	H20	13	14.0%	39	41.9%	30	32.3%	4	4.3%	7	7.5%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	H19	15	20.5%	31	42.5%	11	15.1%	2	2.7%	14	19.2%	0	0.0%	73
	H20	9	12.9%	32	45.7%	17	24.3%	7	10.0%	4	5.7%	1	1.4%	70
現代教養コース	H20	7	31.8%	13	59.1%	1	4.5%	1	4.5%	0	0.0%	0	0.0%	22
未記入	H20	15	29.4%	21	41.2%	6	11.8%	4	7.8%	3	5.9%	2	3.9%	51

２．図書館等で関連の資料・文献を調べる

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全　体	H19	92	28.0%	135	41.2%	63	19.2%	15	4.6%	21	6.4%	2	0.6%	328
	H20	134	28.3%	177	37.4%	107	22.6%	35	7.4%	17	3.6%	3	0.6%	473
人間発達文化学類	H19	38	34.9%	45	41.3%	15	13.8%	3	2.8%	7	6.4%	1	0.9%	109
	H20	50	34.5%	56	38.6%	28	19.3%	5	3.4%	6	4.1%	0	0.0%	145
行政政策学類	H19	29	39.2%	30	40.5%	9	12.2%	1	1.4%	5	6.8%	0	0.0%	74
	H20	33	35.9%	36	39.1%	20	21.7%	3	3.3%	0	0.0%	0	0.0%	92
経済経営学類	H19	7	9.7%	35	48.6%	17	23.6%	8	11.1%	5	6.9%	0	0.0%	72
	H20	11	11.8%	33	35.5%	28	30.1%	15	16.1%	6	6.5%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	H19	18	24.7%	25	34.2%	22	30.1%	3	4.1%	4	5.5%	1	1.4%	73
	H20	15	21.4%	23	32.9%	23	32.9%	6	8.6%	2	2.9%	1	1.4%	70
現代教養コース	H20	9	40.9%	10	45.5%	1	4.5%	2	9.1%	0	0.0%	0	0.0%	22
未記入	H20	16	31.4%	19	37.3%	7	13.7%	4	7.8%	3	5.9%	2	3.9%	51

３．パソコン等で文書・資料を作成する

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全　体	H19	169	51.5%	95	29.0%	19	5.8%	3	0.9%	42	12.8%	0	0.0%	328
	H20	199	42.1%	184	38.9%	65	13.7%	14	3.0%	8	1.7%	3	0.6%	473
人間発達文化学類	H19	62	56.9%	30	27.5%	5	4.6%	1	0.9%	11	10.1%	0	0.0%	109
	H20	68	46.9%	60	41.4%	11	7.6%	3	2.1%	3	2.1%	0	0.0%	145
行政政策学類	H19	31	41.9%	28	37.8%	6	8.1%	1	1.4%	8	10.8%	0	0.0%	74
	H20	39	42.4%	39	42.4%	12	13.0%	2	2.2%	0	0.0%	0	0.0%	92
経済経営学類	H19	34	47.2%	21	29.2%	4	5.6%	1	1.4%	12	16.7%	0	0.0%	72
	H20	24	25.8%	42	45.2%	21	22.6%	5	5.4%	1	1.1%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	H19	42	57.5%	16	21.9%	4	5.5%	0	0.0%	11	15.1%	0	0.0%	73
	H20	32	45.7%	21	30.0%	13	18.6%	2	2.9%	1	1.4%	1	1.4%	70
現代教養コース	H20	11	50.0%	8	36.4%	3	13.6%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	22
未記入	H20	25	49.0%	14	27.5%	5	9.8%	2	3.9%	3	5.9%	2	3.9%	51

４．インターネットで情報を適切に集める

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全　体	H19	164	50.0%	91	27.7%	10	3.0%	2	0.6%	61	18.6%	0	0.0%	328
	H20	163	34.5%	205	43.3%	71	15.0%	15	3.2%	15	3.2%	4	0.8%	473
人間発達文化学類	H19	54	49.5%	34	31.2%	2	1.8%	0	0.0%	19	17.4%	0	0.0%	109
	H20	50	34.5%	66	45.5%	17	11.7%	5	3.4%	7	4.8%	0	0.0%	145
行政政策学類	H19	33	44.6%	25	33.8%	5	6.8%	1	1.4%	10	13.5%	0	0.0%	74
	H20	36	39.1%	38	41.3%	13	14.1%	2	2.2%	2	2.2%	1	1.1%	92
経済経営学類	H19	40	55.6%	15	20.8%	2	2.8%	0	0.0%	15	20.8%	0	0.0%	72
	H20	22	23.7%	46	49.5%	18	19.4%	4	4.3%	2	2.2%	1	1.1%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	H19	37	50.7%	17	23.3%	1	1.4%	1	1.4%	17	23.3%	0	0.0%	73
	H20	27	38.6%	25	35.7%	13	18.6%	2	2.9%	2	2.9%	1	1.4%	70
現代教養コース	H20	7	31.8%	10	45.5%	5	22.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	22
未記入	H20	21	41.2%	20	39.2%	5	9.8%	2	3.9%	2	3.9%	1	2.0%	51

５．定められた形式に沿ったレポートを書く

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全　体	H19	122	37.2%	149	45.4%	27	8.2%	2	0.6%	28	8.5%	0	0.0%	328
	H20	148	31.3%	209	44.2%	84	17.8%	20	4.2%	8	1.7%	4	0.8%	473
人間発達文化学類	H19	39	35.8%	53	48.6%	6	5.5%	1	0.9%	10	9.2%	0	0.0%	109
	H20	51	35.2%	68	46.9%	21	14.5%	3	2.1%	2	1.4%	0	0.0%	145
行政政策学類	H19	26	35.1%	37	50.0%	7	9.5%	0	0.0%	4	5.4%	0	0.0%	74
	H20	32	34.8%	38	41.3%	15	16.3%	5	5.4%	2	2.2%	0	0.0%	92
経済経営学類	H19	28	38.9%	30	41.7%	8	11.1%	1	1.4%	5	6.9%	0	0.0%	72
	H20	26	28.0%	43	46.2%	19	20.4%	4	4.3%	1	1.1%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	H19	29	39.7%	29	39.7%	6	8.2%	0	0.0%	9	12.3%	0	0.0%	73
	H20	17	24.3%	28	40.0%	18	25.7%	3	4.3%	2	2.9%	2	2.9%	70
現代教養コース	H20	5	22.7%	13	59.1%	2	9.1%	2	9.1%	0	0.0%	0	0.0%	22
未記入	H20	17	33.3%	19	37.3%	9	17.6%	3	5.9%	1	2.0%	2	3.9%	51

６．事実と自分の意見を区別して伝える

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　　計
全　　体	H19	84	25.6%	166	50.6%	54	16.5%	10	3.0%	14	4.3%	0	0.0%	328
	H20	109	23.0%	190	40.2%	140	29.6%	23	4.9%	7	1.5%	4	0.8%	473
人間発達文化学類	H19	24	22.0%	64	58.7%	16	14.7%	1	0.9%	4	3.7%	0	0.0%	109
	H20	38	26.2%	59	40.7%	44	30.3%	4	2.8%	0	0.0%	0	0.0%	145
行政政策学類	H19	18	24.3%	38	51.4%	12	16.2%	3	4.1%	3	4.1%	0	0.0%	74
	H20	19	20.7%	39	42.4%	26	28.3%	7	7.6%	1	1.1%	0	0.0%	92
経済経営学類	H19	26	36.1%	27	37.5%	10	13.9%	6	8.3%	3	4.2%	0	0.0%	72
	H20	14	15.1%	40	43.0%	32	34.4%	7	7.5%	0	0.0%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	H19	16	21.9%	37	50.7%	16	21.9%	0	0.0%	4	5.5%	0	0.0%	73
	H20	12	17.1%	23	32.9%	26	37.1%	4	5.7%	3	4.3%	2	2.9%	70
現代教養コース	H20	5	22.7%	13	59.1%	3	13.6%	0	0.0%	1	4.5%	0	0.0%	22
未記入	H20	21	41.2%	16	31.4%	9	17.6%	1	2.0%	2	3.9%	2	3.9%	51

７．物事の問題点を見い出すことができる

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　　計
全　　体	H19	74	22.6%	187	57.0%	51	15.5%	6	1.8%	10	3.0%	0	0.0%	328
	H20	86	18.2%	200	42.3%	157	33.2%	17	3.6%	8	1.7%	5	1.1%	473
人間発達文化学類	H19	28	25.7%	61	56.0%	18	16.5%	0	0.0%	2	1.8%	0	0.0%	109
	H20	26	17.9%	68	46.9%	46	31.7%	2	1.4%	3	2.1%	0	0.0%	145
行政政策学類	H19	17	23.0%	42	56.8%	11	14.9%	2	2.7%	2	2.7%	0	0.0%	74
	H20	20	21.7%	37	40.2%	28	30.4%	6	6.5%	1	1.1%	0	0.0%	92
経済経営学類	H19	15	20.8%	40	55.6%	10	13.9%	3	4.2%	4	5.6%	0	0.0%	72
	H20	10	10.8%	39	41.9%	38	40.9%	5	5.4%	0	0.0%	1	1.1%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	H19	14	19.2%	44	60.3%	12	16.4%	1	1.4%	2	2.7%	0	0.0%	73
	H20	8	11.4%	26	37.1%	30	42.9%	2	2.9%	2	2.9%	2	2.9%	70
現代教養コース	H20	4	18.2%	14	63.6%	3	13.6%	1	4.5%	0	0.0%	0	0.0%	22
未記入	H20	18	35.3%	16	31.4%	12	23.5%	1	2.0%	2	3.9%	2	3.9%	51

８．意見や情報をうのみにせず受け止める

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　　計
全　　体	H19	87	26.5%	157	47.9%	63	19.2%	4	1.2%	17	5.2%	0	0.0%	328
	H20	121	25.6%	171	36.2%	141	29.8%	24	5.1%	11	2.3%	5	1.1%	473
人間発達文化学類	H19	32	29.4%	50	45.9%	19	17.4%	2	1.8%	6	5.5%	0	0.0%	109
	H20	38	26.2%	57	39.3%	34	23.4%	11	7.6%	5	3.4%	0	0.0%	145
行政政策学類	H19	22	29.7%	30	40.5%	17	23.0%	1	1.4%	4	5.4%	0	0.0%	74
	H20	28	30.4%	29	31.5%	30	32.6%	4	4.3%	1	1.1%	0	0.0%	92
経済経営学類	H19	13	18.1%	45	62.5%	9	12.5%	1	1.4%	4	5.6%	0	0.0%	72
	H20	15	16.1%	36	38.7%	38	40.9%	2	2.2%	1	1.1%	1	1.1%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	H19	20	27.4%	32	43.8%	18	24.7%	0	0.0%	3	4.1%	0	0.0%	73
	H20	15	21.4%	21	30.0%	26	37.1%	5	7.1%	1	1.4%	2	2.9%	70
現代教養コース	H20	6	27.3%	12	54.5%	3	13.6%	1	4.5%	0	0.0%	0	0.0%	22
未記入	H20	19	37.3%	16	31.4%	10	19.6%	1	2.0%	3	5.9%	2	3.9%	51

９．科学的・数量的に物事を見る

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全　体	H19	64	19.5%	127	38.7%	105	32.0%	22	6.7%	10	3.0%	0	0.0%	328
	H20	58	12.3%	133	28.1%	194	41.0%	69	14.6%	15	3.2%	4	0.8%	473
人間発達文化学類	H19	16	14.7%	39	35.8%	43	39.4%	6	5.5%	5	4.6%	0	0.0%	109
	H20	17	11.7%	33	22.8%	63	43.4%	25	17.2%	7	4.8%	0	0.0%	145
行政政策学類	H19	10	13.5%	27	36.5%	31	41.9%	5	6.8%	1	1.4%	0	0.0%	74
	H20	9	9.8%	20	21.7%	46	50.0%	15	16.3%	2	2.2%	0	0.0%	92
経済経営学類	H19	10	13.9%	27	37.5%	21	29.2%	11	15.3%	3	4.2%	0	0.0%	72
	H20	9	9.7%	27	29.0%	38	40.9%	17	18.3%	2	2.2%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	H19	28	38.4%	34	46.6%	10	13.7%	0	0.0%	1	1.4%	0	0.0%	73
	H20	10	14.3%	32	45.7%	20	28.6%	5	7.1%	1	1.4%	2	2.9%	70
現代教養コース	H20	4	18.2%	10	45.5%	7	31.8%	1	4.5%	0	0.0%	0	0.0%	22
未記入	H20	9	17.6%	11	21.6%	20	39.2%	6	11.8%	3	5.9%	2	3.9%	51

１０．自分の意見を筋道立てて表現する

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全　体	H19	76	23.2%	153	46.6%	67	20.4%	16	4.9%	16	4.9%	0	0.0%	328
	H20	86	18.2%	207	43.8%	140	29.6%	26	5.5%	9	1.9%	5	1.1%	473
人間発達文化学類	H19	25	22.9%	59	54.1%	17	15.6%	2	1.8%	6	5.5%	0	0.0%	109
	H20	28	19.3%	75	51.7%	34	23.4%	6	4.1%	2	1.4%	0	0.0%	145
行政政策学類	H19	14	18.9%	37	50.0%	16	21.6%	5	6.8%	2	2.7%	0	0.0%	74
	H20	18	19.6%	36	39.1%	32	34.8%	5	5.4%	1	1.1%	0	0.0%	92
経済経営学類	H19	18	25.0%	26	36.1%	15	20.8%	7	9.7%	6	8.3%	0	0.0%	72
	H20	16	17.2%	40	43.0%	29	31.2%	6	6.5%	2	2.2%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	H19	19	26.0%	31	42.5%	19	26.0%	2	2.7%	2	2.7%	0	0.0%	73
	H20	5	7.1%	23	32.9%	32	45.7%	5	7.1%	2	2.9%	3	4.3%	70
現代教養コース	H20	3	13.6%	14	63.6%	4	18.2%	1	4.5%	0	0.0%	0	0.0%	22
未記入	H20	16	31.4%	19	37.3%	9	17.6%	3	5.9%	2	3.9%	2	3.9%	51

１１．先生や仲間にきちんと質問ができる

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全　体	H19	87	26.5%	131	39.9%	65	19.8%	15	4.6%	30	9.1%	0	0.0%	328
	H20	115	24.3%	179	37.8%	135	28.5%	30	6.3%	10	2.1%	4	0.8%	473
人間発達文化学類	H19	32	29.4%	45	41.3%	19	17.4%	2	1.8%	11	10.1%	0	0.0%	109
	H20	41	28.3%	59	40.7%	38	26.2%	4	2.8%	3	2.1%	0	0.0%	145
行政政策学類	H19	21	28.4%	27	36.5%	14	18.9%	5	6.8%	7	9.5%	0	0.0%	74
	H20	22	23.9%	31	33.7%	32	34.8%	6	6.5%	1	1.1%	0	0.0%	92
経済経営学類	H19	16	22.2%	31	43.1%	15	20.8%	4	5.6%	6	8.3%	0	0.0%	72
	H20	19	20.4%	39	41.9%	26	28.0%	9	9.7%	0	0.0%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	H19	18	24.7%	28	38.4%	17	23.3%	4	5.5%	6	8.2%	0	0.0%	73
	H20	10	14.3%	23	32.9%	23	32.9%	9	12.9%	3	4.3%	2	2.9%	70
現代教養コース	H20	6	27.3%	7	31.8%	8	36.4%	1	4.5%	0	0.0%	0	0.0%	22
未記入	H20	17	33.3%	20	39.2%	8	15.7%	1	2.0%	3	5.9%	2	3.9%	51

１２．自分の方から人間関係をつくる

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全　体	H19	78	23.8%	133	40.5%	55	16.8%	15	4.6%	46	14.0%	1	0.3%	328
	H20	134	28.3%	165	34.9%	127	26.8%	32	6.8%	12	2.5%	3	0.6%	473
人間発達文化学類	H19	23	21.1%	53	48.6%	11	10.1%	2	1.8%	19	17.4%	1	0.9%	109
	H20	46	31.7%	52	35.9%	35	24.1%	9	6.2%	3	2.1%	0	0.0%	145
行政政策学類	H19	19	25.7%	30	40.5%	11	14.9%	7	9.5%	7	9.5%	0	0.0%	74
	H20	30	32.6%	27	29.3%	27	29.3%	8	8.7%	0	0.0%	0	0.0%	92
経済経営学類	H19	18	25.0%	27	37.5%	12	16.7%	1	1.4%	14	19.4%	0	0.0%	72
	H20	19	20.4%	39	41.9%	24	25.8%	9	9.7%	2	2.2%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	H19	18	24.7%	23	31.5%	21	28.8%	5	6.8%	6	8.2%	0	0.0%	73
	H20	13	18.6%	21	30.0%	26	37.1%	4	5.7%	4	5.7%	2	2.9%	70
現代教養コース	H20	8	36.4%	7	31.8%	6	27.3%	1	4.5%	0	0.0%	0	0.0%	22
未記入	H20	18	35.3%	19	37.3%	9	17.6%	1	2.0%	3	5.9%	1	2.0%	51

１３．一般的な教養

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全　体	H19	70	21.3%	173	52.7%	55	16.8%	7	2.1%	23	7.0%	0	0.0%	328
	H20	84	17.8%	191	40.4%	153	32.3%	26	5.5%	14	3.0%	5	1.1%	473
人間発達文化学類	H19	15	13.8%	67	61.5%	16	14.7%	1	0.9%	10	9.2%	0	0.0%	109
	H20	20	13.8%	57	39.3%	57	39.3%	6	4.1%	5	3.4%	0	0.0%	145
行政政策学類	H19	15	20.3%	39	52.7%	15	20.3%	1	1.4%	4	5.4%	0	0.0%	74
	H20	22	23.9%	39	42.4%	26	28.3%	4	4.3%	1	1.1%	0	0.0%	92
経済経営学類	H19	19	26.4%	32	44.4%	11	15.3%	4	5.6%	6	8.3%	0	0.0%	72
	H20	14	15.1%	46	49.5%	25	26.9%	4	4.3%	4	4.3%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	H19	21	28.8%	35	47.9%	13	17.8%	1	1.4%	3	4.1%	0	0.0%	73
	H20	7	10.0%	23	32.9%	26	37.1%	9	12.9%	2	2.9%	3	4.3%	70
現代教養コース	H20	6	27.3%	10	45.5%	5	22.7%	1	4.5%	0	0.0%	0	0.0%	22
未記入	H20	15	29.4%	16	31.4%	14	27.5%	2	3.9%	2	3.9%	2	3.9%	51

１４．グローバルな課題への関心

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全　体	H19	74	22.6%	144	43.9%	69	21.0%	16	4.9%	25	7.6%	0	0.0%	328
	H20	83	17.5%	153	32.3%	175	37.0%	43	9.1%	14	3.0%	5	1.1%	473
人間発達文化学類	H19	21	19.3%	44	40.4%	29	26.6%	5	4.6%	10	9.2%	0	0.0%	109
	H20	17	11.7%	41	28.3%	63	43.4%	18	12.4%	5	3.4%	1	0.7%	145
行政政策学類	H19	17	23.0%	35	47.3%	14	18.9%	4	5.4%	4	5.4%	0	0.0%	74
	H20	19	20.7%	34	37.0%	31	33.7%	8	8.7%	0	0.0%	0	0.0%	92
経済経営学類	H19	19	26.4%	36	50.0%	7	9.7%	4	5.6%	6	8.3%	0	0.0%	72
	H20	15	16.1%	33	35.5%	34	36.6%	6	6.5%	5	5.4%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	H19	17	23.3%	29	39.7%	19	26.0%	3	4.1%	5	6.8%	0	0.0%	73
	H20	11	15.7%	21	30.0%	31	44.3%	5	7.1%	0	0.0%	2	2.9%	70
現代教養コース	H20	8	36.4%	10	45.5%	3	13.6%	1	4.5%	0	0.0%	0	0.0%	22
未記入	H20	13	25.5%	14	27.5%	13	25.5%	5	9.8%	4	7.8%	2	3.9%	51

１５．地域的な課題への関心

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全　体	H19	82	25.0%	149	45.4%	66	20.1%	14	4.3%	17	5.2%	0	0.0%	328
	H20	105	22.2%	155	32.8%	140	29.6%	51	10.8%	18	3.8%	4	0.8%	473
人間発達文化学類	H19	15	13.8%	54	49.5%	31	28.4%	3	2.8%	6	5.5%	0	0.0%	109
	H20	18	12.4%	43	29.7%	56	38.6%	21	14.5%	7	4.8%	0	0.0%	145
行政政策学類	H19	24	32.4%	37	50.0%	10	13.5%	1	1.4%	2	2.7%	0	0.0%	74
	H20	30	32.6%	32	34.8%	22	23.9%	6	6.5%	2	2.2%	0	0.0%	92
経済経営学類	H19	25	34.7%	30	41.7%	8	11.1%	4	5.6%	5	6.9%	0	0.0%	72
	H20	18	19.4%	38	40.9%	26	28.0%	8	8.6%	2	2.2%	1	1.1%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	H19	18	24.7%	28	38.4%	17	23.3%	6	8.2%	4	5.5%	0	0.0%	73
	H20	13	18.6%	21	30.0%	20	28.6%	12	17.1%	2	2.9%	2	2.9%	70
現代教養コース	H20	9	40.9%	9	40.9%	3	13.6%	1	4.5%	0	0.0%	0	0.0%	22
未記入	H20	17	33.3%	12	23.5%	13	25.5%	3	5.9%	5	9.8%	1	2.0%	51

１６．外国語の能力

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全　体	H19	35	10.7%	85	25.9%	129	39.3%	71	21.6%	8	2.4%	0	0.0%	328
	H20	31	6.6%	82	17.3%	184	38.9%	121	25.6%	50	10.6%	5	1.1%	473
人間発達文化学類	H19	12	11.0%	35	32.1%	43	39.4%	18	16.5%	1	0.9%	0	0.0%	109
	H20	10	6.9%	24	16.6%	59	40.7%	38	26.2%	14	9.7%	0	0.0%	145
行政政策学類	H19	5	6.8%	13	17.6%	29	39.2%	25	33.8%	2	2.7%	0	0.0%	74
	H20	4	4.3%	13	14.1%	36	39.1%	23	25.0%	15	16.3%	1	1.1%	92
経済経営学類	H19	12	16.7%	17	23.6%	26	36.1%	14	19.4%	3	4.2%	0	0.0%	72
	H20	5	5.4%	17	18.3%	42	45.2%	22	23.7%	7	7.5%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	H19	6	8.2%	20	27.4%	31	42.5%	14	19.2%	2	2.7%	0	0.0%	73
	H20	4	5.7%	7	10.0%	29	41.4%	22	31.4%	6	8.6%	2	2.9%	70
現代教養コース	H20	2	9.1%	7	31.8%	7	31.8%	2	9.1%	4	18.2%	0	0.0%	22
未記入	H20	6	11.8%	14	27.5%	11	21.6%	14	27.5%	4	7.8%	2	3.9%	51

１７．異文化の理解

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全　体	H19	64	19.5%	119	36.3%	103	31.4%	28	8.5%	14	4.3%	0	0.0%	328
	H20	68	14.4%	136	28.8%	165	34.9%	74	15.6%	25	5.3%	5	1.1%	473
人間発達文化学類	H19	22	20.2%	37	33.9%	39	35.8%	5	4.6%	6	5.5%	0	0.0%	109
	H20	23	15.9%	45	31.0%	42	29.0%	24	16.6%	10	6.9%	1	0.7%	145
行政政策学類	H19	19	25.7%	19	25.7%	25	33.8%	8	10.8%	3	4.1%	0	0.0%	74
	H20	15	16.3%	23	25.0%	33	35.9%	16	17.4%	5	5.4%	0	0.0%	92
経済経営学類	H19	8	11.1%	38	52.8%	18	25.0%	4	5.6%	4	5.6%	0	0.0%	72
	H20	5	5.4%	32	34.4%	39	41.9%	15	16.1%	2	2.2%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	H19	15	20.5%	25	34.2%	21	28.8%	11	15.1%	1	1.4%	0	0.0%	73
	H20	8	11.4%	12	17.1%	30	42.9%	15	21.4%	3	4.3%	2	2.9%	70
現代教養コース	H20	4	18.2%	12	54.5%	5	22.7%	0	0.0%	1	4.5%	0	0.0%	22
未記入	H20	13	25.5%	12	23.5%	16	31.4%	4	7.8%	4	7.8%	2	3.9%	51

１８．必要な場合のリーダーシップの発揮

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　　計
全　　体	H19	44	13.4%	112	34.1%	115	35.1%	43	13.1%	14	4.3%	0	0.0%	328
	H20	64	13.5%	149	31.5%	184	38.9%	56	11.8%	15	3.2%	5	1.1%	473
人間発達文化学類	H19	22	20.2%	38	34.9%	35	32.1%	10	9.2%	4	3.7%	0	0.0%	109
	H20	19	13.1%	57	39.3%	54	37.2%	10	6.9%	5	3.4%	0	0.0%	145
行政政策学類	H19	8	10.8%	22	29.7%	28	37.8%	14	18.9%	2	2.7%	0	0.0%	74
	H20	11	12.0%	26	28.3%	42	45.7%	10	10.9%	2	2.2%	1	1.1%	92
経済経営学類	H19	7	9.7%	28	38.9%	22	30.6%	10	13.9%	5	6.9%	0	0.0%	72
	H20	9	9.7%	24	25.8%	42	45.2%	16	17.2%	2	2.2%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	H19	7	9.6%	24	32.9%	30	41.1%	9	12.3%	3	4.1%	0	0.0%	73
	H20	6	8.6%	20	28.6%	26	37.1%	13	18.6%	3	4.3%	2	2.9%	70
現代教養コース	H20	5	22.7%	9	40.9%	6	27.3%	2	9.1%	0	0.0%	0	0.0%	22
未記入	H20	14	27.5%	13	25.5%	14	27.5%	5	9.8%	3	5.9%	2	3.9%	51

１９．プレゼンテーション力

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　　計
全　　体	H19	55	16.8%	148	45.1%	77	23.5%	40	12.2%	8	2.4%	0	0.0%	328
	H20	74	15.6%	180	38.1%	160	33.8%	43	9.1%	12	2.5%	4	0.8%	473
人間発達文化学類	H19	16	14.7%	59	54.1%	25	22.9%	9	8.3%	0	0.0%	0	0.0%	109
	H20	22	15.2%	64	44.1%	45	31.0%	11	7.6%	3	2.1%	0	0.0%	145
行政政策学類	H19	9	12.2%	30	40.5%	17	23.0%	15	20.3%	3	4.1%	0	0.0%	74
	H20	13	14.1%	28	30.4%	38	41.3%	10	10.9%	3	3.3%	0	0.0%	92
経済経営学類	H19	10	13.9%	29	40.3%	17	23.6%	12	16.7%	4	5.6%	0	0.0%	72
	H20	7	7.5%	36	38.7%	37	39.8%	12	12.9%	1	1.1%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	H19	20	27.4%	30	41.1%	18	24.7%	4	5.5%	1	1.4%	0	0.0%	73
	H20	17	24.3%	27	38.6%	17	24.3%	5	7.1%	2	2.9%	2	2.9%	70
現代教養コース	H20	4	18.2%	6	27.3%	10	45.5%	2	9.1%	0	0.0%	0	0.0%	22
未記入	H20	11	21.6%	19	37.3%	13	25.5%	3	5.9%	3	5.9%	2	3.9%	51

２０．自ら学習する習慣

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　　計
全　　体	H19	73	22.3%	139	42.4%	68	20.7%	23	7.0%	25	7.6%	0	0.0%	328
	H20	80	16.9%	140	29.6%	178	37.6%	55	11.6%	16	3.4%	4	0.8%	473
人間発達文化学類	H19	25	22.9%	46	42.2%	20	18.3%	8	7.3%	10	9.2%	0	0.0%	109
	H20	29	20.0%	43	29.7%	55	37.9%	15	10.3%	3	2.1%	0	0.0%	145
行政政策学類	H19	13	17.6%	29	39.2%	21	28.4%	4	5.4%	7	9.5%	0	0.0%	74
	H20	12	13.0%	27	29.3%	38	41.3%	9	9.8%	6	6.5%	0	0.0%	92
経済経営学類	H19	16	22.2%	35	48.6%	9	12.5%	6	8.3%	6	8.3%	0	0.0%	72
	H20	10	10.8%	30	32.3%	35	37.6%	17	18.3%	1	1.1%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	H19	19	26.0%	29	39.7%	18	24.7%	5	6.8%	2	2.7%	0	0.0%	73
	H20	11	15.7%	15	21.4%	30	42.9%	10	14.3%	2	2.9%	2	2.9%	70
現代教養コース	H20	7	31.8%	11	50.0%	4	18.2%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	22
未記入	H20	11	21.6%	14	27.5%	16	31.4%	4	7.8%	4	7.8%	2	3.9%	51

２１．社会人としてのキャリアについての関心と行動

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全　体	H19	77	23.5%	158	48.2%	66	20.1%	13	4.0%	13	4.0%	1	0.3%	328
	H20	76	16.1%	190	40.2%	156	33.0%	34	7.2%	11	2.3%	6	1.3%	473
人間発達文化学類	H19	20	18.3%	60	55.0%	22	20.2%	2	1.8%	5	4.6%	0	0.0%	109
	H20	24	16.6%	58	40.0%	54	37.2%	4	2.8%	5	3.4%	0	0.0%	145
行政政策学類	H19	15	20.3%	36	48.6%	16	21.6%	4	5.4%	3	4.1%	0	0.0%	74
	H20	15	16.3%	39	42.4%	31	33.7%	5	5.4%	2	2.2%	0	0.0%	92
経済経営学類	H19	29	40.3%	28	38.9%	7	9.7%	3	4.2%	4	5.6%	1	1.4%	72
	H20	10	10.8%	39	41.9%	32	34.4%	11	11.8%	1	1.1%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	H19	13	17.8%	34	46.6%	21	28.8%	4	5.5%	1	1.4%	0	0.0%	73
	H20	9	12.9%	25	35.7%	22	31.4%	9	12.9%	1	1.4%	4	5.7%	70
現代教養コース	H20	6	27.3%	11	50.0%	4	18.2%	1	4.5%	0	0.0%	0	0.0%	22
未記入	H20	12	23.5%	18	35.3%	13	25.5%	4	7.8%	2	3.9%	2	3.9%	51

２２．自分の専門に関する知識と理解（平成２０年度のみの質問事項）

	⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全　体	129	27.3%	204	43.1%	107	22.6%	23	4.9%	5	1.1%	5	1.1%	473
人間発達文化学類	52	35.9%	59	40.7%	31	21.4%	2	1.4%	0	0.0%	1	0.7%	145
行政政策学類	25	27.2%	41	44.6%	21	22.8%	3	3.3%	2	2.2%	0	0.0%	92
経済経営学類	19	20.4%	42	45.2%	21	22.6%	11	11.8%	0	0.0%	0	0.0%	93
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	11	15.7%	29	41.4%	24	34.3%	3	4.3%	1	1.4%	2	2.9%	70
現代教養コース	5	22.7%	13	59.1%	4	18.2%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	22
未記入	17	33.3%	20	39.2%	6	11.8%	4	7.8%	2	3.9%	2	3.9%	51

２．学類Ⅱ期生への教育成果検証アンケート

・教育企画委員会では 2010 年 1 月、学類Ⅱ期生を対象に、学類Ⅰ期生と同内容のアンケート調査を実施した。また同時に、3 年次学生・1 年次学生にも同様の調査を実施した。設問のうち「制度全般」及び「個々の科目」については 3 年次学生に、「態度、力、知識等」については 1 年次学生、3 年次学生の双方に設問を設けた。そのため、各学年段階での制度や科目に対する評価の違い、及び知識能力の獲得状況の変化を比較することが可能となっている。以下は、その結果を教育企画委員会が取りまとめたものであるが、学類Ⅰ期生対象のアンケート同様、学類等での今後の教育改善、カリキュラム見直し等の参考となれば幸いである。

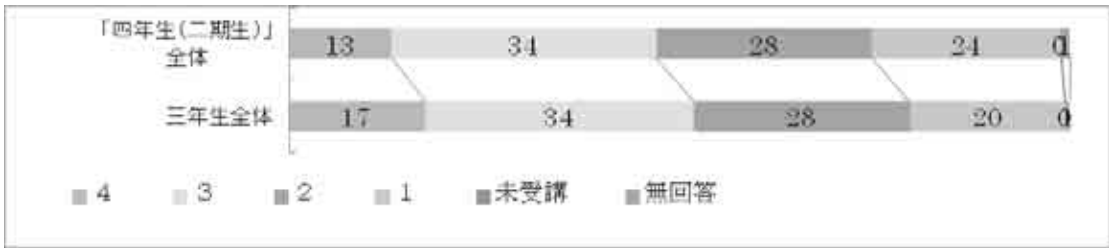
Ⅰ　制度全般に対して

Ａ　ＧＰＡ制度

		良かった　←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
		4		3		2		1						
全　体	四年生	119	23.0%	263	50.9%	85	16.4%	48	9.3%	0	0.0%	2	0.4%	517
	三年生	117	22.2%	258	48.9%	92	17.4%	56	10.6%	0	0.0%	5	0.9%	528
人間発達文化学類	四年生	33	20.2%	100	61.3%	21	12.9%	8	4.9%	0	0.0%	1	0.6%	163
	三年生	42	26.6%	83	52.5%	23	14.6%	9	5.7%	0	0.0%	1	0.6%	158
行政政策学類	四年生	25	21.0%	65	54.6%	15	12.6%	14	11.8%	0	0.0%	0	0.0%	119
	三年生	18	19.4%	45	48.4%	13	14.0%	15	16.1%	0	0.0%	2	2.2%	93
経済経営学類	四年生	24	19.7%	47	38.5%	29	23.8%	22	18.0%	0	0.0%	0	0.0%	122
	三年生	15	12.2%	51	41.5%	31	25.2%	24	19.5%	0	0.0%	2	1.6%	123
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	四年生	28	31.8%	39	44.3%	19	21.6%	2	2.3%	0	0.0%	0	0.0%	88
	三年生	37	31.1%	57	47.9%	19	16.0%	6	5.0%	0	0.0%	0	0.0%	119
現代教養コース	四年生	9	36.0%	12	48.0%	1	4.0%	2	8.0%	0	0.0%	1	4.0%	25
	三年生	5	14.3%	22	62.9%	6	17.1%	2	5.7%	0	0.0%	0	0.0%	35

B　Ｃａｐ制度

		良かった　←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
		4		3		2		1						
全　体	四年生	68	13.2%	175	33.8%	143	27.7%	125	24.2%	0	0.0%	6	1.2%	517
	三年生	92	17.4%	182	34.5%	146	27.7%	105	19.9%	0	0.0%	3	0.6%	528
人間発達文化学類	四年生	37	22.7%	60	36.8%	36	22.1%	29	17.8%	0	0.0%	1	0.6%	163
	三年生	56	35.4%	54	34.2%	35	22.2%	12	7.6%	0	0.0%	1	0.6%	158
行政政策学類	四年生	6	5.0%	32	26.9%	45	37.8%	34	28.6%	0	0.0%	2	1.7%	119
	三年生	9	9.7%	26	28.0%	26	28.0%	32	34.4%	0	0.0%	0	0.0%	93
経済経営学類	四年生	9	7.4%	38	31.1%	33	27.0%	42	34.4%	0	0.0%	0	0.0%	122
	三年生	5	4.1%	40	32.5%	40	32.5%	36	29.3%	0	0.0%	2	1.6%	123
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	四年生	12	13.6%	35	39.8%	25	28.4%	15	17.0%	0	0.0%	1	1.1%	88
	三年生	20	16.8%	43	36.1%	36	30.3%	20	16.8%	0	0.0%	0	0.0%	119
現代教養コース	四年生	4	16.0%	10	40.0%	4	16.0%	5	20.0%	0	0.0%	2	8.0%	25
	三年生	2	5.7%	19	54.3%	9	25.7%	5	14.3%	0	0.0%	0	0.0%	35

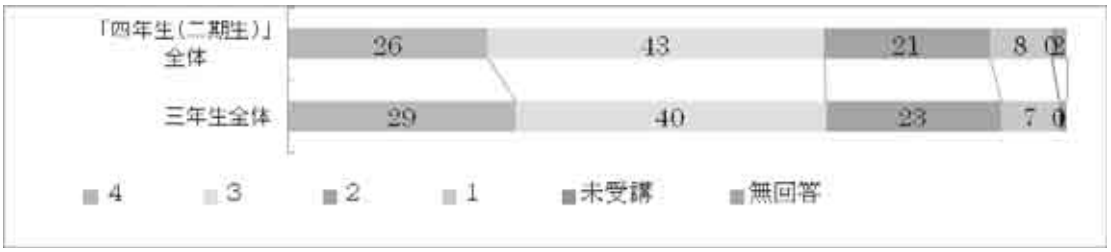


C　クラス・ゼミ制度

		良かった　←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
		4		3		2		1						
全　体	四年生	259	50.1%	219	42.4%	26	5.0%	12	2.3%	0	0.0%	1	0.2%	517
	三年生	270	51.1%	204	38.6%	43	8.1%	10	1.9%	0	0.0%	1	0.2%	528
人間発達文化学類	四年生	94	57.7%	60	36.8%	8	4.9%	1	0.6%	0	0.0%	0	0.0%	163
	三年生	97	61.4%	50	31.6%	10	6.3%	1	0.6%	0	0.0%	0	0.0%	158
行政政策学類	四年生	70	58.8%	47	39.5%	1	0.8%	1	0.8%	0	0.0%	0	0.0%	119
	三年生	47	50.5%	41	44.1%	4	4.3%	1	1.1%	0	0.0%	0	0.0%	93
経済経営学類	四年生	58	47.5%	58	47.5%	6	4.9%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	122
	三年生	61	49.6%	56	45.5%	2	1.6%	3	2.4%	0	0.0%	1	0.8%	123
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	四年生	27	30.7%	42	47.7%	10	11.4%	8	9.1%	0	0.0%	1	1.1%	88
	三年生	50	42.0%	42	35.3%	23	19.3%	4	3.4%	0	0.0%	0	0.0%	119
現代教養コース	四年生	10	40.0%	12	48.0%	1	4.0%	2	8.0%	0	0.0%	0	0.0%	25
	三年生	15	42.9%	15	42.9%	4	11.4%	1	2.9%	0	0.0%	0	0.0%	35

D　アドバイザー制度

		良かった　←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
		4		3		2		1						
全　体	四年生	133	25.7%	223	43.1%	110	21.3%	41	7.9%	0	0.0%	10	1.9%	517
	三年生	155	29.4%	210	39.8%	119	22.5%	39	7.4%	0	0.0%	5	0.9%	528
人間発達文化学類	四年生	58	35.6%	66	40.5%	35	21.5%	4	2.5%	0	0.0%	0	0.0%	163
	三年生	56	35.4%	69	43.7%	28	17.7%	5	3.2%	0	0.0%	0	0.0%	158
行政政策学類	四年生	28	23.5%	50	42.0%	24	20.2%	10	8.4%	0	0.0%	7	5.9%	119
	三年生	29	31.2%	34	36.6%	22	23.7%	5	5.4%	0	0.0%	3	3.2%	93
経済経営学類	四年生	27	22.1%	55	45.1%	29	23.8%	11	9.0%	0	0.0%	0	0.0%	122
	三年生	32	26.0%	52	42.3%	24	19.5%	13	10.6%	0	0.0%	2	1.6%	123
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	四年生	14	15.9%	44	50.0%	17	19.3%	12	13.6%	0	0.0%	1	1.1%	88
	三年生	33	27.7%	44	37.0%	31	26.1%	11	9.2%	0	0.0%	0	0.0%	119
現代教養コース	四年生	6	24.0%	8	32.0%	5	20.0%	4	16.0%	0	0.0%	2	8.0%	25
	三年生	5	14.3%	11	31.4%	14	40.0%	5	14.3%	0	0.0%	0	0.0%	35



E　自己デザイン領域

		良かった　←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
		4		3		2		1						
全　体	四年生	75	14.5%	275	53.2%	126	24.4%	32	6.2%	0	0.0%	9	1.7%	517
	三年生	90	17.0%	282	53.4%	115	21.8%	29	5.5%	4	0.8%	8	1.5%	528
人間発達文化学類	四年生	24	14.7%	90	55.2%	41	25.2%	5	3.1%	0	0.0%	3	1.8%	163
	三年生	28	17.7%	91	57.6%	32	20.3%	3	1.9%	2	1.3%	2	1.3%	158
行政政策学類	四年生	17	14.3%	54	45.4%	34	28.6%	10	8.4%	0	0.0%	4	3.4%	119
	三年生	17	18.3%	44	47.3%	19	20.4%	8	8.6%	1	1.1%	4	4.3%	93
経済経営学類	四年生	20	16.4%	73	59.8%	22	18.0%	7	5.7%	0	0.0%	0	0.0%	122
	三年生	23	18.7%	66	53.7%	26	21.1%	7	5.7%	1	0.8%	0	0.0%	123
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	四年生	8	9.1%	43	48.9%	28	31.8%	8	9.1%	0	0.0%	1	1.1%	88
	三年生	19	16.0%	61	51.3%	27	22.7%	10	8.4%	0	0.0%	2	1.7%	119
現代教養コース	四年生	6	24.0%	15	60.0%	1	4.0%	2	8.0%	0	0.0%	1	4.0%	25
	三年生	3	8.6%	20	57.1%	11	31.4%	1	2.9%	0	0.0%	0	0.0%	35

F　特修プログラム（英語・情報）

		良かった　←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
		4		3		2		1						
全　体	四年生	47	9.1%	195	37.7%	89	17.2%	11	2.1%	168	32.5%	7	1.4%	517
	三年生	63	11.9%	201	38.1%	88	16.7%	21	4.0%	154	29.2%	1	0.2%	528
人間発達文化学類	四年生	14	8.6%	55	33.7%	31	19.0%	1	0.6%	58	35.6%	4	2.5%	163
	三年生	17	10.8%	66	41.8%	34	21.5%	7	4.4%	34	21.5%	0	0.0%	158
行政政策学類	四年生	6	5.0%	50	42.0%	18	15.1%	2	1.7%	42	35.3%	1	0.8%	119
	三年生	6	6.5%	38	40.9%	16	17.2%	5	5.4%	28	30.1%	0	0.0%	93
経済経営学類	四年生	16	13.1%	53	43.4%	23	18.9%	3	2.5%	26	21.3%	1	0.8%	122
	三年生	16	13.0%	49	39.8%	18	14.6%	5	4.1%	35	28.5%	0	0.0%	123
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	四年生	7	8.0%	30	34.1%	13	14.8%	2	2.3%	36	40.9%	0	0.0%	88
	三年生	21	17.6%	34	28.6%	13	10.9%	1	0.8%	49	41.2%	1	0.8%	119
現代教養コース	四年生	4	16.0%	7	28.0%	4	16.0%	3	12.0%	6	24.0%	1	4.0%	25
	三年生	3	8.6%	14	40.0%	7	20.0%	3	8.6%	8	22.9%	0	0.0%	35

G　各種演習（ゼミ）

		良かった　←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
		4		3		2		1						
全　体	四年生	309	59.8%	187	36.2%	14	2.7%	7	1.4%	0	0.0%	0	0.0%	517
	三年生	295	55.9%	210	39.8%	17	3.2%	5	0.9%	0	0.0%	1	0.2%	528
人間発達文化学類	四年生	104	63.8%	57	35.0%	2	1.2%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	163
	三年生	104	65.8%	50	31.6%	3	1.9%	1	0.6%	0	0.0%	0	0.0%	158
行政政策学類	四年生	75	63.0%	41	34.5%	2	1.7%	1	0.8%	0	0.0%	0	0.0%	119
	三年生	50	53.8%	39	41.9%	3	3.2%	1	1.1%	0	0.0%	0	0.0%	93
経済経営学類	四年生	74	60.7%	42	34.4%	4	3.3%	2	1.6%	0	0.0%	0	0.0%	122
	三年生	70	56.9%	48	39.0%	3	2.4%	2	1.6%	0	0.0%	0	0.0%	123
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	四年生	43	48.9%	36	40.9%	5	5.7%	4	4.5%	0	0.0%	0	0.0%	88
	三年生	57	47.9%	55	46.2%	6	5.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.8%	119
現代教養コース	四年生	13	52.0%	11	44.0%	1	4.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	25
	三年生	14	40.0%	18	51.4%	2	5.7%	1	2.9%	0	0.0%	0	0.0%	35

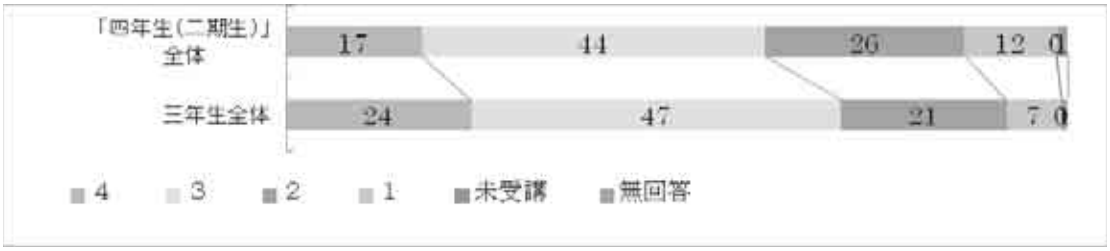
Ⅱ　個々の科目に対して

H　教養演習

		良かった　←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
		4		3		2		1						
全　　体	四年生	194	37.5%	221	42.7%	70	13.5%	27	5.2%	0	0.0%	5	1.0%	517
	三年生	206	39.0%	203	38.4%	87	16.5%	29	5.5%	0	0.0%	3	0.6%	528
人間発達文化学類	四年生	50	30.7%	71	43.6%	33	20.2%	7	4.3%	0	0.0%	2	1.2%	163
	三年生	56	35.4%	68	43.0%	26	16.5%	5	3.2%	0	0.0%	3	1.9%	158
行政政策学類	四年生	59	49.6%	51	42.9%	5	4.2%	3	2.5%	0	0.0%	1	0.8%	119
	三年生	55	59.1%	29	31.2%	8	8.6%	1	1.1%	0	0.0%	0	0.0%	93
経済経営学類	四年生	52	42.6%	53	43.4%	9	7.4%	6	4.9%	0	0.0%	2	1.6%	122
	三年生	56	45.5%	40	32.5%	21	17.1%	6	4.9%	0	0.0%	0	0.0%	123
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	四年生	20	22.7%	35	39.8%	22	25.0%	11	12.5%	0	0.0%	0	0.0%	88
	三年生	31	26.1%	45	37.8%	28	23.5%	15	12.6%	0	0.0%	0	0.0%	119
現代教養コース	四年生	13	52.0%	11	44.0%	1	4.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	25
	三年生	8	22.9%	21	60.0%	4	11.4%	2	5.7%	0	0.0%	0	0.0%	35

I　キャリア形成論

		良かった　←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
		4		3		2		1						
全　　体	四年生	90	17.4%	227	43.9%	132	25.5%	61	11.8%	0	0.0%	7	1.4%	517
	三年生	125	23.7%	250	47.3%	112	21.2%	37	7.0%	0	0.0%	4	0.8%	528
人間発達文化学類	四年生	18	11.0%	78	47.9%	47	28.8%	15	9.2%	0	0.0%	5	3.1%	163
	三年生	32	20.3%	68	43.0%	41	25.9%	14	8.9%	0	0.0%	3	1.9%	158
行政政策学類	四年生	19	16.0%	42	35.3%	33	27.7%	24	20.2%	0	0.0%	1	0.8%	119
	三年生	18	19.4%	40	43.0%	25	26.9%	9	9.7%	0	0.0%	1	1.1%	93
経済経営学類	四年生	32	26.2%	61	50.0%	20	16.4%	8	6.6%	0	0.0%	1	0.8%	122
	三年生	41	33.3%	59	48.0%	15	12.2%	8	6.5%	0	0.0%	0	0.0%	123
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	四年生	8	9.1%	37	42.0%	29	33.0%	14	15.9%	0	0.0%	0	0.0%	88
	三年生	22	18.5%	63	52.9%	29	24.4%	5	4.2%	0	0.0%	0	0.0%	119
現代教養コース	四年生	13	52.0%	9	36.0%	3	12.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	25
	三年生	12	34.3%	20	57.1%	2	5.7%	1	2.9%	0	0.0%	0	0.0%	35

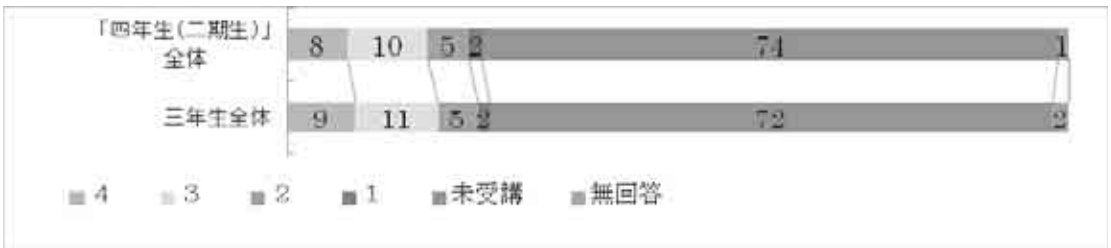


J　キャリアモデル学習

		良かった　←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
		4		3		2		1						
全　体	四年生	73	14.1%	211	40.8%	106	20.5%	44	8.5%	76	14.7%	7	1.4%	517
	三年生	110	20.8%	215	40.7%	107	20.3%	27	5.1%	67	12.7%	2	0.4%	528
人間発達文化学類	四年生	17	10.4%	73	44.8%	36	22.1%	8	4.9%	25	15.3%	4	2.5%	163
	三年生	27	17.1%	61	38.6%	40	25.3%	9	5.7%	21	13.3%	0	0.0%	158
行政政策学類	四年生	13	10.9%	44	37.0%	27	22.7%	21	17.6%	12	10.1%	2	1.7%	119
	三年生	15	16.1%	40	43.0%	22	23.7%	8	8.6%	7	7.5%	1	1.1%	93
経済経営学類	四年生	30	24.6%	59	48.4%	15	12.3%	6	4.9%	11	9.0%	1	0.8%	122
	三年生	41	33.3%	58	47.2%	14	11.4%	6	4.9%	4	3.3%	0	0.0%	123
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	四年生	7	8.0%	31	35.2%	25	28.4%	9	10.2%	16	18.2%	0	0.0%	88
	三年生	25	21.0%	46	38.7%	26	21.8%	4	3.4%	18	15.1%	0	0.0%	119
現代教養コース	四年生	6	24.0%	4	16.0%	3	12.0%	0	0.0%	12	48.0%	0	0.0%	25
	三年生	2	5.7%	10	28.6%	5	14.3%	0	0.0%	17	48.6%	1	2.9%	35

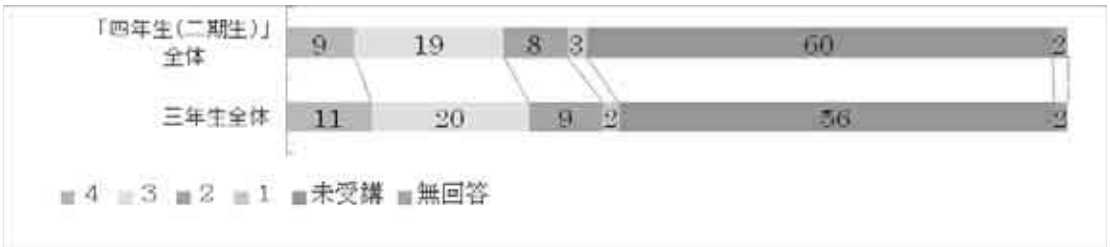
K　インターンシップ（単位化されているもの）

		良かった　←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
		4		3		2		1						
全　体	四年生	40	7.7%	53	10.3%	27	5.2%	9	1.7%	381	73.7%	7	1.4%	517
	三年生	46	8.7%	56	10.6%	27	5.1%	8	1.5%	380	72.0%	11	2.1%	528
人間発達文化学類	四年生	8	4.9%	17	10.4%	7	4.3%	3	1.8%	125	76.7%	3	1.8%	163
	三年生	7	4.4%	13	8.2%	6	3.8%	3	1.9%	127	80.4%	2	1.3%	158
行政政策学類	四年生	11	9.2%	13	10.9%	3	2.5%	3	2.5%	86	72.3%	3	2.5%	119
	三年生	16	17.2%	14	15.1%	4	4.3%	2	2.2%	56	60.2%	1	1.1%	93
経済経営学類	四年生	6	4.9%	14	11.5%	13	10.7%	2	1.6%	86	70.5%	1	0.8%	122
	三年生	10	8.1%	19	15.4%	7	5.7%	3	2.4%	79	64.2%	5	4.1%	123
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	四年生	14	15.9%	7	8.0%	3	3.4%	1	1.1%	63	71.6%	0	0.0%	88
	三年生	11	9.2%	9	7.6%	6	5.0%	0	0.0%	91	76.5%	2	1.7%	119
現代教養コース	四年生	1	4.0%	2	8.0%	1	4.0%	0	0.0%	21	84.0%	0	0.0%	25
	三年生	2	5.7%	1	2.9%	4	11.4%	0	0.0%	27	77.1%	1	2.9%	35



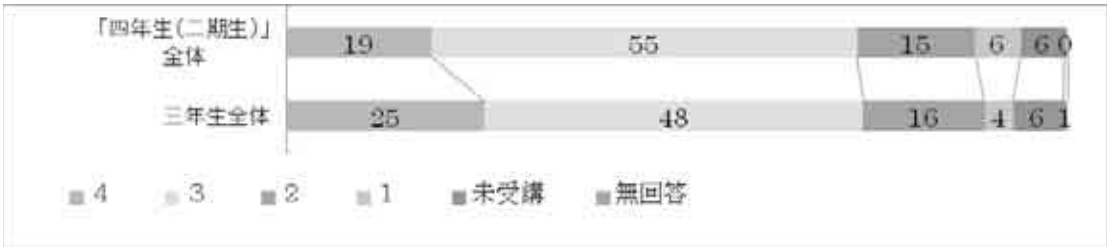
L　自己学習プログラム

		良かった　←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
		4		3		2		1						
全　体	四年生	45	8.7%	99	19.1%	42	8.1%	13	2.5%	308	59.6%	10	1.9%	517
	三年生	58	11.0%	106	20.1%	50	9.5%	11	2.1%	294	55.7%	9	1.7%	528
人間発達文化学類	四年生	14	8.6%	35	21.5%	13	8.0%	2	1.2%	95	58.3%	4	2.5%	163
	三年生	26	16.5%	28	17.7%	11	7.0%	3	1.9%	87	55.1%	3	1.9%	158
行政政策学類	四年生	12	10.1%	23	19.3%	5	4.2%	6	5.0%	69	58.0%	4	3.4%	119
	三年生	8	8.6%	20	21.5%	6	6.5%	4	4.3%	54	58.1%	1	1.1%	93
経済経営学類	四年生	10	8.2%	20	16.4%	15	12.3%	1	0.8%	76	62.3%	0	0.0%	122
	三年生	9	7.3%	33	26.8%	13	10.6%	2	1.6%	63	51.2%	3	2.4%	123
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	四年生	7	8.0%	17	19.3%	8	9.1%	4	4.5%	50	56.8%	2	2.3%	88
	三年生	13	10.9%	22	18.5%	15	12.6%	2	1.7%	66	55.5%	1	0.8%	119
現代教養コース	四年生	2	8.0%	4	16.0%	1	4.0%	0	0.0%	18	72.0%	0	0.0%	25
	三年生	2	5.7%	3	8.6%	5	14.3%	0	0.0%	24	68.6%	1	2.9%	35



M　学群共通科目

		良かった　←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
		4		3		2		1						
全　体	四年生	96	18.6%	282	54.5%	78	15.1%	30	5.8%	29	5.6%	2	0.4%	517
	三年生	134	25.4%	256	48.5%	82	15.5%	19	3.6%	34	6.4%	3	0.6%	528
人間発達文化学類	四年生	28	17.2%	92	56.4%	31	19.0%	7	4.3%	4	2.5%	1	0.6%	163
	三年生	36	22.8%	74	46.8%	34	21.5%	5	3.2%	8	5.1%	1	0.6%	158
行政政策学類	四年生	24	20.2%	71	59.7%	10	8.4%	8	6.7%	6	5.0%	0	0.0%	119
	三年生	24	25.8%	42	45.2%	17	18.3%	8	8.6%	1	1.1%	1	1.1%	93
経済経営学類	四年生	25	20.5%	66	54.1%	21	17.2%	3	2.5%	7	5.7%	0	0.0%	122
	三年生	34	27.6%	69	56.1%	10	8.1%	2	1.6%	8	6.5%	0	0.0%	123
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	四年生	15	17.0%	42	47.7%	15	17.0%	12	13.6%	3	3.4%	1	1.1%	88
	三年生	34	28.6%	58	48.7%	16	13.4%	4	3.4%	6	5.0%	1	0.8%	119
現代教養コース	四年生	4	16.0%	11	44.0%	1	4.0%	0	0.0%	9	36.0%	0	0.0%	25
	三年生	6	17.1%	13	37.1%	5	14.3%	0	0.0%	11	31.4%	0	0.0%	35



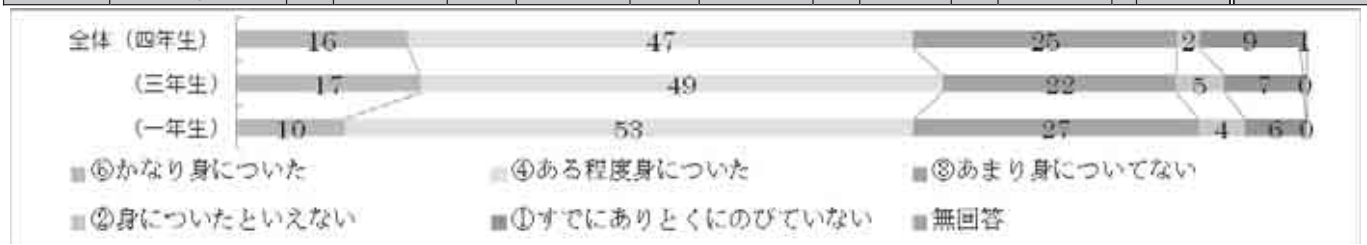
N　卒業研究

		良かった　←				→ 良くなかった				未受講		無回答		合計
		4		3		2		1						
全　　体	四年生	233	45.1%	237	45.8%	26	5.0%	18	3.5%	0	0.0%	3	0.6%	517
人間発達文化学類	四年生	92	56.4%	69	42.3%	1	0.6%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.6%	163
行政政策学類	四年生	38	31.9%	66	55.5%	9	7.6%	6	5.0%	0	0.0%	0	0.0%	119
経済経営学類	四年生	43	35.2%	66	54.1%	10	8.2%	3	2.5%	0	0.0%	0	0.0%	122
共生ｼｽﾃﾑ理工学類	四年生	48	54.5%	28	31.8%	3	3.4%	9	10.2%	0	0.0%	0	0.0%	88
現代教養コース	四年生	12	48.0%	8	32.0%	3	12.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	8.0%	25

Ⅲ　全体的なふり返り（入学時に比べ現在までに身についたと考える態度、力、知識等）

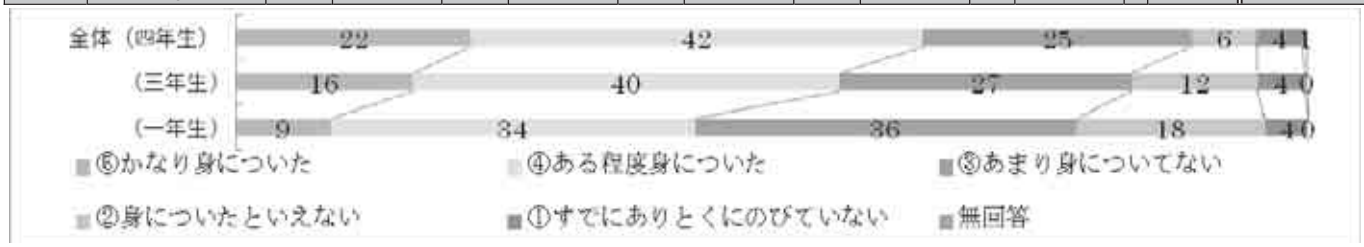
1．授業の重要なところを理解しノートにとる

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　　計
全体	四年生	83	16.1%	244	47.2%	127	24.6%	11	2.1%	48	9.3%	4	0.8%	517
	三年生	91	17.2%	257	48.7%	115	21.8%	24	4.5%	39	7.4%	2	0.4%	528
	一年生	78	10.1%	408	53.1%	205	26.7%	33	4.3%	44	5.7%	1	0.1%	769
人間発達文化	四年生	32	19.6%	86	52.8%	32	19.6%	0	0.0%	11	6.7%	2	1.2%	163
	三年生	35	22.2%	86	54.4%	21	13.3%	5	3.2%	11	7.0%	0	0.0%	158
	一年生	20	8.0%	147	58.8%	61	24.4%	5	2.0%	16	6.4%	1	0.4%	250
行政政策	四年生	13	10.9%	49	41.2%	39	32.8%	2	1.7%	16	13.4%	0	0.0%	119
	三年生	19	20.4%	33	35.5%	25	26.9%	9	9.7%	7	7.5%	0	0.0%	93
	一年生	14	11.3%	66	53.2%	32	25.8%	9	7.3%	3	2.4%	0	0.0%	124
経済経営	四年生	21	17.2%	55	45.1%	31	25.4%	6	4.9%	7	5.7%	2	1.6%	122
	三年生	15	12.2%	65	52.8%	29	23.6%	3	2.4%	10	8.1%	1	0.8%	123
	一年生	21	10.2%	99	48.3%	61	29.8%	13	6.3%	11	5.4%	0	0.0%	205
共生ｼｽﾃﾑ理工	四年生	9	10.2%	42	47.7%	21	23.9%	3	3.4%	13	14.8%	0	0.0%	88
	三年生	19	16.0%	53	44.5%	31	26.1%	6	5.0%	10	8.4%	0	0.0%	119
	一年生	22	12.5%	87	49.4%	48	27.3%	6	3.4%	13	7.4%	0	0.0%	176
現代教養	四年生	8	32.0%	12	48.0%	4	16.0%	0	0.0%	1	4.0%	0	0.0%	25
	三年生	3	8.6%	20	57.1%	9	25.7%	1	2.9%	1	2.9%	1	2.9%	35
	一年生	1	7.1%	9	64.3%	3	21.4%	0	0.0%	1	7.1%	0	0.0%	14



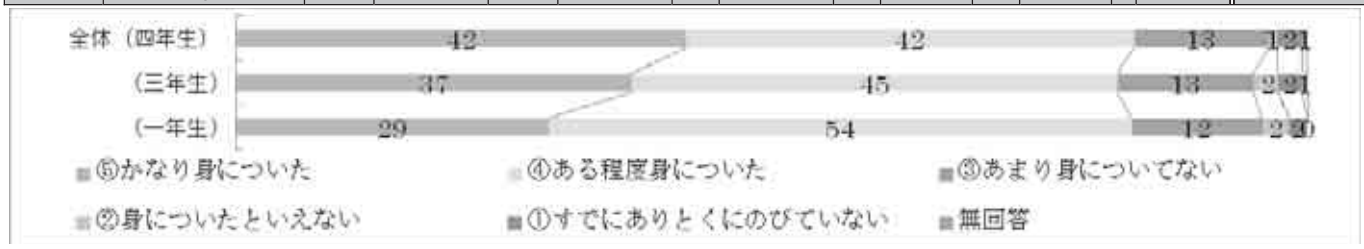
２．図書館等で関連の資料・文献を調べる

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全体	四年生	113	21.9%	218	42.2%	130	25.1%	31	6.0%	22	4.3%	3	0.6%	517
	三年生	87	16.5%	210	39.8%	144	27.3%	62	11.7%	23	4.4%	2	0.4%	528
	一年生	68	8.8%	261	33.9%	274	35.6%	135	17.6%	31	4.0%	0	0.0%	769
人間発達文化	四年生	52	31.9%	63	38.7%	32	19.6%	8	4.9%	7	4.3%	1	0.6%	163
	三年生	32	20.3%	79	50.0%	34	21.5%	10	6.3%	3	1.9%	0	0.0%	158
	一年生	13	5.2%	69	27.6%	95	38.0%	62	24.8%	11	4.4%	0	0.0%	250
行政政策	四年生	23	19.3%	66	55.5%	21	17.6%	4	3.4%	5	4.2%	0	0.0%	119
	三年生	23	24.7%	37	39.8%	24	25.8%	7	7.5%	2	2.2%	0	0.0%	93
	一年生	19	15.3%	51	41.1%	37	29.8%	13	10.5%	4	3.2%	0	0.0%	124
経済経営	四年生	18	14.8%	47	38.5%	40	32.8%	9	7.4%	6	4.9%	2	1.6%	122
	三年生	7	5.7%	45	36.6%	38	30.9%	23	18.7%	9	7.3%	1	0.8%	123
	一年生	11	5.4%	73	35.6%	77	37.6%	35	17.1%	9	4.4%	0	0.0%	205
共生ｼｽﾃﾑ理工	四年生	16	18.2%	32	36.4%	27	30.7%	9	10.2%	4	4.5%	0	0.0%	88
	三年生	21	17.6%	43	36.1%	37	31.1%	13	10.9%	5	4.2%	0	0.0%	119
	一年生	24	13.6%	62	35.2%	60	34.1%	23	13.1%	7	4.0%	0	0.0%	176
現代教養	四年生	4	16.0%	10	40.0%	10	40.0%	1	4.0%	0	0.0%	0	0.0%	25
	三年生	4	11.4%	6	17.1%	11	31.4%	9	25.7%	4	11.4%	1	2.9%	35
	一年生	1	7.1%	6	42.9%	5	35.7%	2	14.3%	0	0.0%	0	0.0%	14



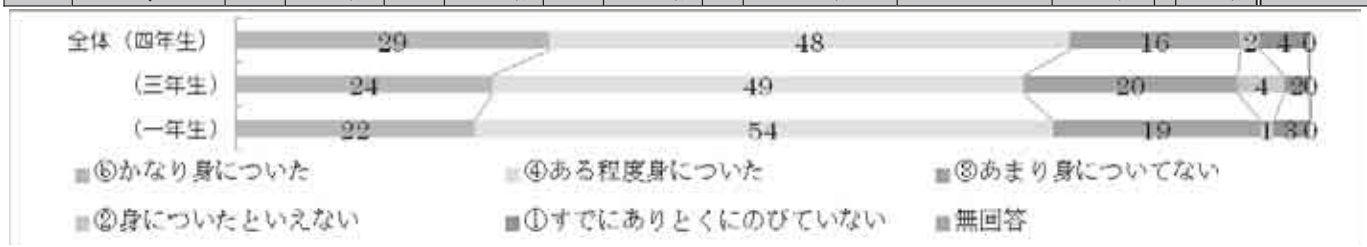
３．パソコン等で文書・資料を作成する

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全体	四年生	217	42.0%	216	41.8%	65	12.6%	4	0.8%	12	2.3%	3	0.6%	517
	三年生	195	36.9%	239	45.3%	67	12.7%	12	2.3%	12	2.3%	3	0.6%	528
	一年生	224	29.1%	418	54.4%	94	12.2%	19	2.5%	13	1.7%	1	0.1%	769
人間発達文化	四年生	72	44.2%	65	39.9%	21	12.9%	1	0.6%	3	1.8%	1	0.6%	163
	三年生	65	41.1%	72	45.6%	17	10.8%	2	1.3%	2	1.3%	0	0.0%	158
	一年生	61	24.4%	140	56.0%	36	14.4%	8	3.2%	4	1.6%	1	0.4%	250
行政政策	四年生	43	36.1%	54	45.4%	18	15.1%	0	0.0%	4	3.4%	0	0.0%	119
	三年生	28	30.1%	49	52.7%	12	12.9%	1	1.1%	3	3.2%	0	0.0%	93
	一年生	42	33.9%	66	53.2%	13	10.5%	1	0.8%	2	1.6%	0	0.0%	124
経済経営	四年生	55	45.1%	48	39.3%	12	9.8%	2	1.6%	3	2.5%	2	1.6%	122
	三年生	46	37.4%	54	43.9%	12	9.8%	5	4.1%	5	4.1%	1	0.8%	123
	一年生	65	31.7%	105	51.2%	25	12.2%	6	2.9%	4	2.0%	0	0.0%	205
共生ｼｽﾃﾑ理工	四年生	37	42.0%	40	45.5%	9	10.2%	1	1.1%	1	1.1%	0	0.0%	88
	三年生	46	38.7%	55	46.2%	14	11.8%	2	1.7%	2	1.7%	0	0.0%	119
	一年生	55	31.3%	97	55.1%	18	10.2%	4	2.3%	2	1.1%	0	0.0%	176
現代教養	四年生	10	40.0%	9	36.0%	5	20.0%	0	0.0%	1	4.0%	0	0.0%	25
	三年生	10	28.6%	9	25.7%	12	34.3%	2	5.7%	0	0.0%	2	5.7%	35
	一年生	1	7.1%	10	71.4%	2	14.3%	0	0.0%	1	7.1%	0	0.0%	14



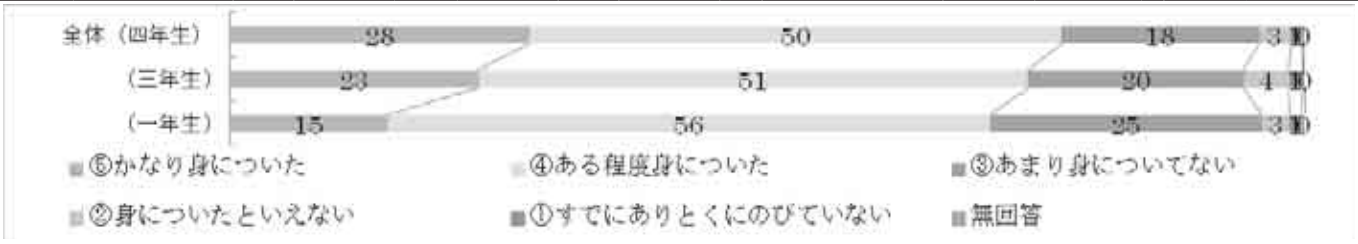
4．インターネットで情報を適切に集める

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全体	四年生	151	29.2%	250	48.4%	82	15.9%	9	1.7%	23	4.4%	2	0.4%	517
	三年生	126	23.9%	261	49.4%	105	19.9%	23	4.4%	12	2.3%	1	0.2%	528
	一年生	171	22.2%	413	53.7%	149	19.4%	9	1.2%	26	3.4%	1	0.1%	769
人間発達文化	四年生	41	25.2%	80	49.1%	32	19.6%	3	1.8%	6	3.7%	1	0.6%	163
	三年生	40	25.3%	75	47.5%	30	19.0%	8	5.1%	5	3.2%	0	0.0%	158
	一年生	50	20.0%	145	58.0%	41	16.4%	2	0.8%	12	4.8%	0	0.0%	250
行政政策	四年生	33	27.7%	61	51.3%	17	14.3%	2	1.7%	6	5.0%	0	0.0%	119
	三年生	18	19.4%	51	54.8%	20	21.5%	4	4.3%	0	0.0%	0	0.0%	93
	一年生	25	20.2%	64	51.6%	30	24.2%	1	0.8%	3	2.4%	1	0.8%	124
経済経営	四年生	42	34.4%	55	45.1%	15	12.3%	2	1.6%	7	5.7%	1	0.8%	122
	三年生	30	24.4%	65	52.8%	20	16.3%	5	4.1%	3	2.4%	0	0.0%	123
	一年生	54	26.3%	103	50.2%	40	19.5%	4	2.0%	4	2.0%	0	0.0%	205
共生ｼｽﾃﾑ理工	四年生	28	31.8%	39	44.3%	15	17.0%	2	2.3%	4	4.5%	0	0.0%	88
	三年生	32	26.9%	58	48.7%	23	19.3%	4	3.4%	2	1.7%	0	0.0%	119
	一年生	41	23.3%	95	54.0%	32	18.2%	2	1.1%	6	3.4%	0	0.0%	176
現代教養	四年生	7	28.0%	15	60.0%	3	12.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	25
	三年生	6	17.1%	12	34.3%	12	34.3%	2	5.7%	2	5.7%	1	2.9%	35
	一年生	1	7.1%	6	42.9%	6	42.9%	0	0.0%	1	7.1%	0	0.0%	14



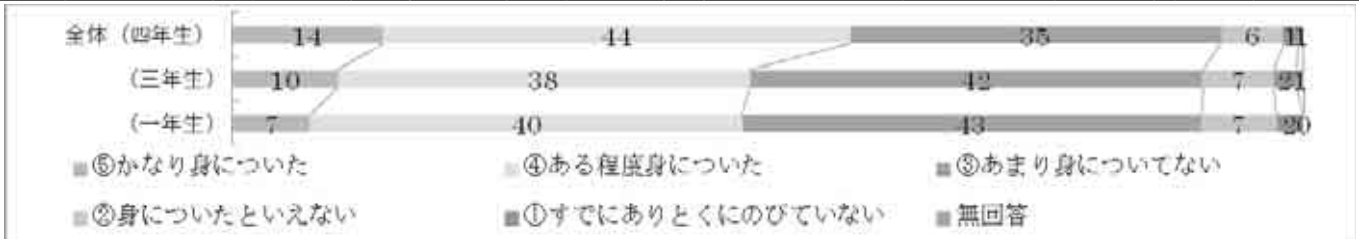
5．定められた形式に沿ったレポートを書く

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全体	四年生	144	27.9%	256	49.5%	95	18.4%	15	2.9%	5	1.0%	2	0.4%	517
	三年生	122	23.1%	270	51.1%	106	20.1%	22	4.2%	7	1.3%	1	0.2%	528
	一年生	113	14.7%	431	56.0%	194	25.2%	20	2.6%	8	1.0%	3	0.4%	769
人間発達文化	四年生	49	30.1%	80	49.1%	30	18.4%	2	1.2%	1	0.6%	1	0.6%	163
	三年生	33	20.9%	94	59.5%	25	15.8%	4	2.5%	2	1.3%	0	0.0%	158
	一年生	36	14.4%	133	53.2%	73	29.2%	4	1.6%	3	1.2%	1	0.4%	250
行政政策	四年生	30	25.2%	55	46.2%	25	21.0%	7	5.9%	2	1.7%	0	0.0%	119
	三年生	23	24.7%	39	41.9%	28	30.1%	2	2.2%	1	1.1%	0	0.0%	93
	一年生	22	17.7%	67	54.0%	32	25.8%	2	1.6%	1	0.8%	0	0.0%	124
経済経営	四年生	33	27.0%	59	48.4%	24	19.7%	3	2.5%	2	1.6%	1	0.8%	122
	三年生	31	25.2%	64	52.0%	21	17.1%	5	4.1%	2	1.6%	0	0.0%	123
	一年生	28	13.7%	119	58.0%	49	23.9%	7	3.4%	1	0.5%	1	0.5%	205
共生ｼｽﾃﾑ理工	四年生	23	26.1%	48	54.5%	14	15.9%	3	3.4%	0	0.0%	0	0.0%	88
	三年生	31	26.1%	62	52.1%	15	12.6%	9	7.6%	2	1.7%	0	0.0%	119
	一年生	27	15.3%	103	58.5%	37	21.0%	6	3.4%	2	1.1%	1	0.6%	176
現代教養	四年生	9	36.0%	14	56.0%	2	8.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	25
	三年生	4	11.4%	11	31.4%	17	48.6%	2	5.7%	0	0.0%	1	2.9%	35
	一年生	0	0.0%	9	64.3%	3	21.4%	1	7.1%	1	7.1%	0	0.0%	14



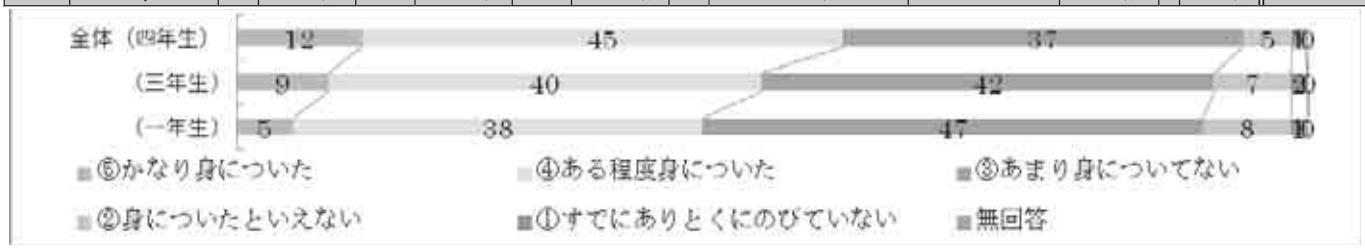
６．事実と自分の意見を区別して伝える

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全体	四年生	73	14.1%	225	43.5%	179	34.6%	30	5.8%	7	1.4%	3	0.6%	517
	三年生	52	9.8%	203	38.4%	223	42.2%	35	6.6%	11	2.1%	4	0.8%	528
	一年生	56	7.3%	310	40.3%	329	42.8%	54	7.0%	19	2.5%	1	0.1%	769
人間発達文化	四年生	23	14.1%	84	51.5%	48	29.4%	7	4.3%	0	0.0%	1	0.6%	163
	三年生	15	9.5%	64	40.5%	69	43.7%	7	4.4%	2	1.3%	1	0.6%	158
	一年生	22	8.8%	101	40.4%	104	41.6%	17	6.8%	5	2.0%	1	0.4%	250
行政政策	四年生	19	16.0%	52	43.7%	40	33.6%	7	5.9%	1	0.8%	0	0.0%	119
	三年生	10	10.8%	36	38.7%	35	37.6%	11	11.8%	0	0.0%	1	1.1%	93
	一年生	8	6.5%	48	38.7%	61	49.2%	4	3.2%	3	2.4%	0	0.0%	124
経済経営	四年生	19	15.6%	50	41.0%	43	35.2%	6	4.9%	2	1.6%	2	1.6%	122
	三年生	11	8.9%	55	44.7%	48	39.0%	6	4.9%	2	1.6%	1	0.8%	123
	一年生	16	7.8%	78	38.0%	90	43.9%	15	7.3%	6	2.9%	0	0.0%	205
共生ｼｽﾃﾑ理工	四年生	6	6.8%	29	33.0%	41	46.6%	8	9.1%	4	4.5%	0	0.0%	88
	三年生	13	10.9%	38	31.9%	55	46.2%	7	5.9%	6	5.0%	0	0.0%	119
	一年生	10	5.7%	79	44.9%	66	37.5%	17	9.7%	4	2.3%	0	0.0%	176
現代教養	四年生	6	24.0%	10	40.0%	7	28.0%	2	8.0%	0	0.0%	0	0.0%	25
	三年生	3	8.6%	10	28.6%	16	45.7%	4	11.4%	1	2.9%	1	2.9%	35
	一年生	0	0.0%	4	28.6%	8	57.1%	1	7.1%	1	7.1%	0	0.0%	14



７．物事の問題点を見い出すことができる

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全体	四年生	60	11.6%	232	44.9%	193	37.3%	24	4.6%	6	1.2%	2	0.4%	517
	三年生	45	8.5%	213	40.3%	223	42.2%	38	7.2%	8	1.5%	1	0.2%	528
	一年生	40	5.2%	294	38.2%	359	46.7%	63	8.2%	11	1.4%	2	0.3%	769
人間発達文化	四年生	16	9.8%	78	47.9%	62	38.0%	6	3.7%	0	0.0%	1	0.6%	163
	三年生	15	9.5%	64	40.5%	69	43.7%	7	4.4%	2	1.3%	1	0.6%	158
	一年生	15	6.0%	96	38.4%	111	44.4%	22	8.8%	5	2.0%	1	0.4%	250
行政政策	四年生	14	11.8%	52	43.7%	43	36.1%	7	5.9%	3	2.5%	0	0.0%	119
	三年生	10	10.8%	39	41.9%	36	38.7%	8	8.6%	0	0.0%	0	0.0%	93
	一年生	8	6.5%	41	33.1%	62	50.0%	10	8.1%	3	2.4%	0	0.0%	124
経済経営	四年生	14	11.5%	54	44.3%	47	38.5%	6	4.9%	0	0.0%	1	0.8%	122
	三年生	10	8.1%	51	41.5%	53	43.1%	7	5.7%	2	1.6%	0	0.0%	123
	一年生	10	4.9%	80	39.0%	99	48.3%	15	7.3%	1	0.5%	0	0.0%	205
共生ｼｽﾃﾑ理工	四年生	14	15.9%	30	34.1%	38	43.2%	3	3.4%	3	3.4%	0	0.0%	88
	三年生	11	9.2%	41	34.5%	56	47.1%	8	6.7%	3	2.5%	0	0.0%	119
	一年生	7	4.0%	69	39.2%	81	46.0%	16	9.1%	2	1.1%	1	0.6%	176
現代教養	四年生	2	8.0%	18	72.0%	3	12.0%	2	8.0%	0	0.0%	0	0.0%	25
	三年生	1	2.9%	10	28.6%	19	54.3%	4	11.4%	0	0.0%	1	2.9%	35
	一年生	0	0.0%	8	57.1%	6	42.9%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	14

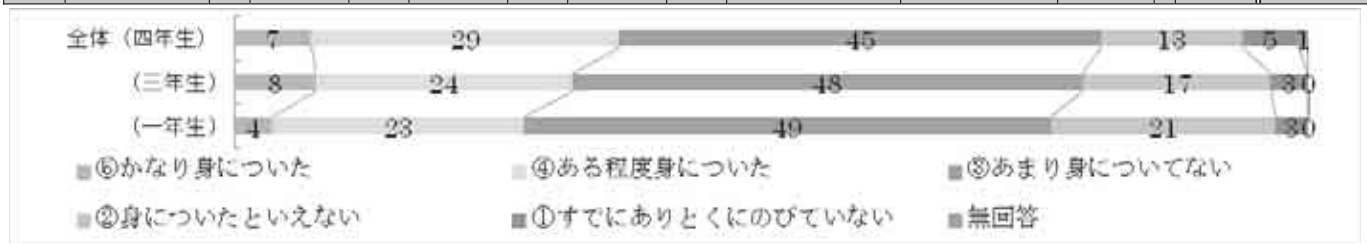


8. 意見や情報をうのみにせず受け止める

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全体	四年生	89	17.2%	218	42.2%	147	28.4%	38	7.4%	21	4.1%	4	0.8%	517
	三年生	67	12.7%	201	38.1%	205	38.8%	40	7.6%	13	2.5%	2	0.4%	528
	一年生	71	9.2%	295	38.4%	301	39.1%	74	9.6%	25	3.3%	3	0.4%	769
人間発達文化	四年生	26	16.0%	75	46.0%	51	31.3%	7	4.3%	3	1.8%	1	0.6%	163
	三年生	24	15.2%	65	41.1%	54	34.2%	12	7.6%	3	1.9%	0	0.0%	158
	一年生	18	7.2%	97	38.8%	100	40.0%	24	9.6%	10	4.0%	1	0.4%	250
行政政策	四年生	23	19.3%	48	40.3%	33	27.7%	6	5.0%	8	6.7%	1	0.8%	119
	三年生	12	12.9%	32	34.4%	36	38.7%	8	8.6%	5	5.4%	0	0.0%	93
	一年生	10	8.1%	47	37.9%	46	37.1%	16	12.9%	5	4.0%	0	0.0%	124
経済経営	四年生	20	16.4%	51	41.8%	34	27.9%	12	9.8%	3	2.5%	2	1.6%	122
	三年生	10	8.1%	49	39.8%	51	41.5%	10	8.1%	2	1.6%	1	0.8%	123
	一年生	27	13.2%	83	40.5%	76	37.1%	14	6.8%	4	2.0%	1	0.5%	205
共生ｼｽﾃﾑ理工	四年生	12	13.6%	37	42.0%	21	23.9%	11	12.5%	7	8.0%	0	0.0%	88
	三年生	17	14.3%	45	37.8%	45	37.8%	9	7.6%	3	2.5%	0	0.0%	119
	一年生	13	7.4%	64	36.4%	74	42.0%	18	10.2%	6	3.4%	1	0.6%	176
現代教養	四年生	1	4.0%	9	36.0%	11	44.0%	3	12.0%	1	4.0%	0	0.0%	25
	三年生	4	11.4%	10	28.6%	19	54.3%	1	2.9%	0	0.0%	1	2.9%	35
	一年生	3	21.4%	4	28.6%	5	35.7%	2	14.3%	0	0.0%	0	0.0%	14

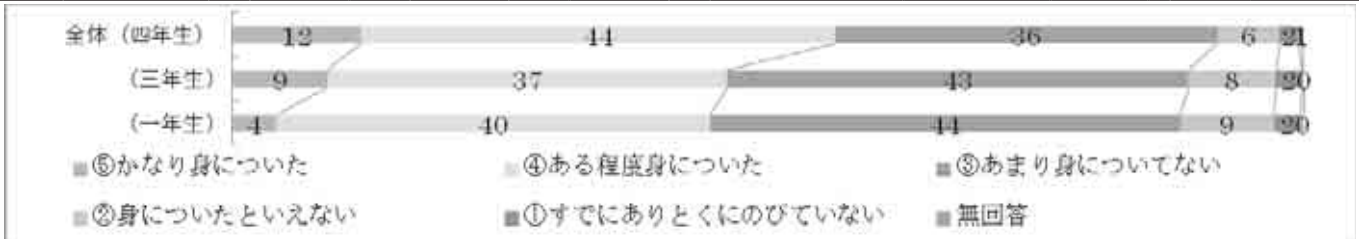
9. 科学的・数量的に物事を見る

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全体	四年生	37	7.2%	148	28.6%	232	44.9%	68	13.2%	27	5.2%	5	1.0%	517
	三年生	40	7.6%	126	23.9%	251	47.5%	92	17.4%	18	3.4%	1	0.2%	528
	一年生	27	3.5%	180	23.4%	377	49.0%	161	20.9%	23	3.0%	1	0.1%	769
人間発達文化	四年生	7	4.3%	47	28.8%	84	51.5%	18	11.0%	6	3.7%	1	0.6%	163
	三年生	9	5.7%	34	21.5%	80	50.6%	32	20.3%	3	1.9%	0	0.0%	158
	一年生	5	2.0%	48	19.2%	120	48.0%	63	25.2%	13	5.2%	1	0.4%	250
行政政策	四年生	4	3.4%	24	20.2%	62	52.1%	19	16.0%	10	8.4%	0	0.0%	119
	三年生	3	3.2%	17	18.3%	50	53.8%	19	20.4%	4	4.3%	0	0.0%	93
	一年生	4	3.2%	30	24.2%	61	49.2%	28	22.6%	1	0.8%	0	0.0%	124
経済経営	四年生	10	8.2%	35	28.7%	46	37.7%	22	18.0%	7	5.7%	2	1.6%	122
	三年生	9	7.3%	32	26.0%	56	45.5%	22	17.9%	4	3.3%	0	0.0%	123
	一年生	8	3.9%	40	19.5%	108	52.7%	43	21.0%	6	2.9%	0	0.0%	205
共生ｼｽﾃﾑ理工	四年生	15	17.0%	33	37.5%	29	33.0%	6	6.8%	3	3.4%	2	2.3%	88
	三年生	17	14.3%	35	29.4%	54	45.4%	9	7.6%	4	3.4%	0	0.0%	119
	一年生	9	5.1%	59	33.5%	80	45.5%	25	14.2%	3	1.7%	0	0.0%	176
現代教養	四年生	1	4.0%	9	36.0%	11	44.0%	3	12.0%	1	4.0%	0	0.0%	25
	三年生	2	5.7%	8	22.9%	11	31.4%	10	28.6%	3	8.6%	1	2.9%	35
	一年生	1	7.1%	3	21.4%	8	57.1%	2	14.3%	0	0.0%	0	0.0%	14



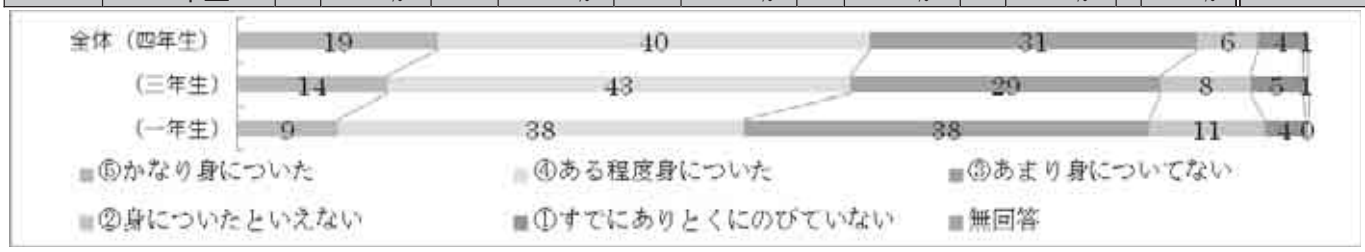
１０．自分の意見を筋道立てて表現する

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全体	四年生	62	12.0%	229	44.3%	184	35.6%	30	5.8%	9	1.7%	3	0.6%	517
	三年生	47	8.9%	197	37.3%	227	43.0%	43	8.1%	13	2.5%	1	0.2%	528
	一年生	32	4.2%	311	40.4%	337	43.8%	67	8.7%	19	2.5%	3	0.4%	769
人間発達文化	四年生	13	8.0%	79	48.5%	60	36.8%	7	4.3%	2	1.2%	2	1.2%	163
	三年生	15	9.5%	63	39.9%	65	41.1%	12	7.6%	3	1.9%	0	0.0%	158
	一年生	8	3.2%	98	39.2%	116	46.4%	20	8.0%	7	2.8%	1	0.4%	250
行政政策	四年生	15	12.6%	50	42.0%	40	33.6%	11	9.2%	3	2.5%	0	0.0%	119
	三年生	10	10.8%	25	26.9%	46	49.5%	10	10.8%	2	2.2%	0	0.0%	93
	一年生	4	3.2%	58	46.8%	50	40.3%	11	8.9%	1	0.8%	0	0.0%	124
経済経営	四年生	24	19.7%	50	41.0%	40	32.8%	4	3.3%	3	2.5%	1	0.8%	122
	三年生	7	5.7%	60	48.8%	47	38.2%	6	4.9%	3	2.4%	0	0.0%	123
	一年生	15	7.3%	84	41.0%	82	40.0%	16	7.8%	6	2.9%	2	1.0%	205
共生ｼｽﾃﾑ理工	四年生	7	8.0%	35	39.8%	38	43.2%	7	8.0%	1	1.1%	0	0.0%	88
	三年生	11	9.2%	42	35.3%	52	43.7%	9	7.6%	5	4.2%	0	0.0%	119
	一年生	5	2.8%	64	36.4%	84	47.7%	19	10.8%	4	2.3%	0	0.0%	176
現代教養	四年生	3	12.0%	15	60.0%	6	24.0%	1	4.0%	0	0.0%	0	0.0%	25
	三年生	4	11.4%	7	20.0%	17	48.6%	6	17.1%	0	0.0%	1	2.9%	35
	一年生	0	0.0%	7	50.0%	5	35.7%	1	7.1%	1	7.1%	0	0.0%	14



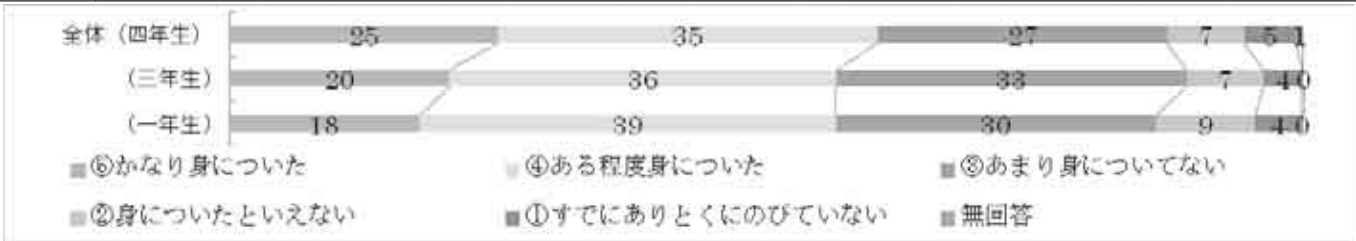
１１．先生や仲間にきちんと質問ができる

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全体	四年生	97	18.8%	208	40.2%	158	30.6%	29	5.6%	22	4.3%	3	0.6%	517
	三年生	74	14.0%	228	43.2%	153	29.0%	44	8.3%	26	4.9%	3	0.6%	528
	一年生	72	9.4%	291	37.8%	291	37.8%	83	10.8%	29	3.8%	3	0.4%	769
人間発達文化	四年生	37	22.7%	64	39.3%	53	32.5%	5	3.1%	3	1.8%	1	0.6%	163
	三年生	27	17.1%	78	49.4%	37	23.4%	11	7.0%	4	2.5%	1	0.6%	158
	一年生	29	11.6%	114	45.6%	76	30.4%	19	7.6%	11	4.4%	1	0.4%	250
行政政策	四年生	20	16.8%	46	38.7%	38	31.9%	9	7.6%	6	5.0%	0	0.0%	119
	三年生	11	11.8%	40	43.0%	25	26.9%	10	10.8%	6	6.5%	1	1.1%	93
	一年生	11	8.9%	42	33.9%	52	41.9%	15	12.1%	3	2.4%	1	0.8%	124
経済経営	四年生	23	18.9%	51	41.8%	34	27.9%	8	6.6%	4	3.3%	2	1.6%	122
	三年生	19	15.4%	54	43.9%	36	29.3%	7	5.7%	7	5.7%	0	0.0%	123
	一年生	17	8.3%	75	36.6%	83	40.5%	25	12.2%	5	2.4%	0	0.0%	205
共生ｼｽﾃﾑ理工	四年生	11	12.5%	37	42.0%	24	27.3%	7	8.0%	9	10.2%	0	0.0%	88
	三年生	15	12.6%	46	38.7%	45	37.8%	6	5.0%	7	5.9%	0	0.0%	119
	一年生	14	8.0%	53	30.1%	75	42.6%	24	13.6%	9	5.1%	1	0.6%	176
現代教養	四年生	6	24.0%	10	40.0%	9	36.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	25
	三年生	2	5.7%	10	28.6%	10	28.6%	10	28.6%	2	5.7%	1	2.9%	35
	一年生	1	7.1%	7	50.0%	5	35.7%	0	0.0%	1	7.1%	0	0.0%	14



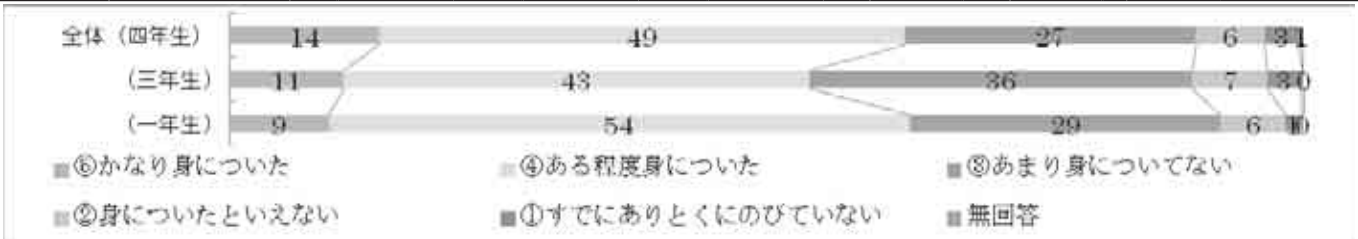
１２．自分の方から人間関係をつくる

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全体	四年生	129	25.0%	183	35.4%	139	26.9%	37	7.2%	25	4.8%	4	0.8%	517
	三年生	108	20.5%	190	36.0%	172	32.6%	38	7.2%	19	3.6%	1	0.2%	528
	一年生	136	17.7%	298	38.8%	229	29.8%	71	9.2%	33	4.3%	2	0.3%	769
人間発達文化	四年生	47	28.8%	58	35.6%	39	23.9%	11	6.7%	6	3.7%	2	1.2%	163
	三年生	34	21.5%	73	46.2%	40	25.3%	6	3.8%	5	3.2%	0	0.0%	158
	一年生	54	21.6%	107	42.8%	58	23.2%	19	7.6%	11	4.4%	1	0.4%	250
行政政策	四年生	30	25.2%	39	32.8%	37	31.1%	6	5.0%	7	5.9%	0	0.0%	119
	三年生	20	21.5%	29	31.2%	31	33.3%	10	10.8%	3	3.2%	0	0.0%	93
	一年生	18	14.5%	43	34.7%	49	39.5%	9	7.3%	5	4.0%	0	0.0%	124
経済経営	四年生	28	23.0%	47	38.5%	34	27.9%	9	7.4%	2	1.6%	2	1.6%	122
	三年生	25	20.3%	48	39.0%	38	30.9%	8	6.5%	4	3.3%	0	0.0%	123
	一年生	40	19.5%	78	38.0%	61	29.8%	17	8.3%	8	3.9%	1	0.5%	205
共生ｼｽﾃﾑ理工	四年生	16	18.2%	30	34.1%	22	25.0%	10	11.4%	10	11.4%	0	0.0%	88
	三年生	26	21.8%	30	25.2%	48	40.3%	10	8.4%	5	4.2%	0	0.0%	119
	一年生	20	11.4%	65	36.9%	58	33.0%	26	14.8%	7	4.0%	0	0.0%	176
現代教養	四年生	8	32.0%	9	36.0%	7	28.0%	1	4.0%	0	0.0%	0	0.0%	25
	三年生	3	8.6%	10	28.6%	15	42.9%	4	11.4%	2	5.7%	1	2.9%	35
	一年生	4	28.6%	5	35.7%	3	21.4%	0	0.0%	2	14.3%	0	0.0%	14



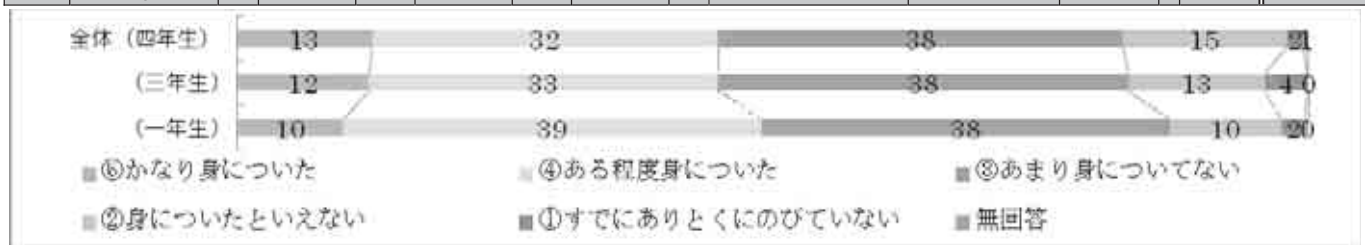
１３．一般的な教養

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全体	四年生	72	13.9%	253	48.9%	140	27.1%	33	6.4%	16	3.1%	3	0.6%	517
	三年生	56	10.6%	229	43.4%	188	35.6%	37	7.0%	17	3.2%	1	0.2%	528
	一年生	71	9.2%	416	54.1%	222	28.9%	47	6.1%	11	1.4%	2	0.3%	769
人間発達文化	四年生	21	12.9%	82	50.3%	44	27.0%	13	8.0%	2	1.2%	1	0.6%	163
	三年生	18	11.4%	63	39.9%	62	39.2%	14	8.9%	1	0.6%	0	0.0%	158
	一年生	24	9.6%	139	55.6%	70	28.0%	14	5.6%	2	0.8%	1	0.4%	250
行政政策	四年生	18	15.1%	56	47.1%	30	25.2%	9	7.6%	6	5.0%	0	0.0%	119
	三年生	16	17.2%	39	41.9%	29	31.2%	5	5.4%	4	4.3%	0	0.0%	93
	一年生	10	8.1%	69	55.6%	36	29.0%	7	5.6%	1	0.8%	1	0.8%	124
経済経営	四年生	18	14.8%	64	52.5%	31	25.4%	3	2.5%	4	3.3%	2	1.6%	122
	三年生	9	7.3%	61	49.6%	39	31.7%	9	7.3%	5	4.1%	0	0.0%	123
	一年生	22	10.7%	116	56.6%	51	24.9%	10	4.9%	6	2.9%	0	0.0%	205
共生ｼｽﾃﾑ理工	四年生	10	11.4%	38	43.2%	28	31.8%	8	9.1%	4	4.5%	0	0.0%	88
	三年生	9	7.6%	53	44.5%	44	37.0%	7	5.9%	6	5.0%	0	0.0%	119
	一年生	14	8.0%	87	49.4%	57	32.4%	16	9.1%	2	1.1%	0	0.0%	176
現代教養	四年生	5	20.0%	13	52.0%	7	28.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	25
	三年生	4	11.4%	13	37.1%	14	40.0%	2	5.7%	1	2.9%	1	2.9%	35
	一年生	1	7.1%	5	35.7%	8	57.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	14



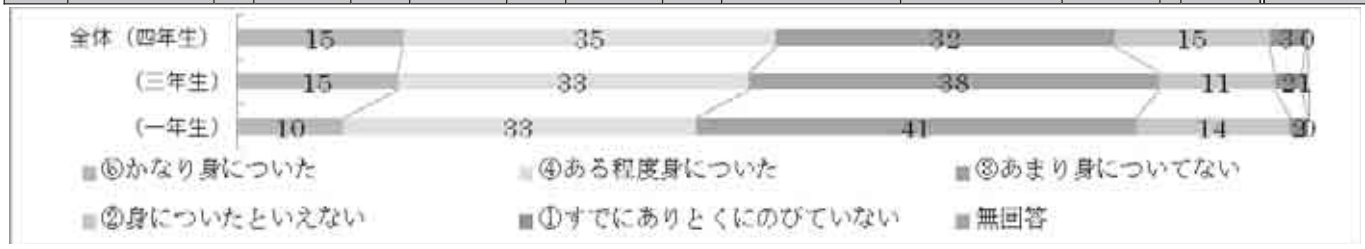
１４．グローバルな課題への関心

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全体	四年生	65	12.6%	167	32.3%	195	37.7%	79	15.3%	8	1.5%	3	0.6%	517
	三年生	65	12.3%	172	32.6%	202	38.3%	67	12.7%	21	4.0%	1	0.2%	528
	一年生	76	9.9%	300	39.0%	293	38.1%	80	10.4%	17	2.2%	3	0.4%	769
人間発達文化	四年生	11	6.7%	51	31.3%	71	43.6%	26	16.0%	3	1.8%	1	0.6%	163
	三年生	13	8.2%	43	27.2%	70	44.3%	28	17.7%	4	2.5%	0	0.0%	158
	一年生	20	8.0%	85	34.0%	105	42.0%	28	11.2%	11	4.4%	1	0.4%	250
行政政策	四年生	14	11.8%	38	31.9%	47	39.5%	19	16.0%	1	0.8%	0	0.0%	119
	三年生	16	17.2%	34	36.6%	29	31.2%	11	11.8%	3	3.2%	0	0.0%	93
	一年生	12	9.7%	57	46.0%	44	35.5%	10	8.1%	1	0.8%	0	0.0%	124
経済経営	四年生	21	17.2%	40	32.8%	42	34.4%	15	12.3%	2	1.6%	2	1.6%	122
	三年生	22	17.9%	44	35.8%	44	35.8%	7	5.7%	6	4.9%	0	0.0%	123
	一年生	23	11.2%	81	39.5%	75	36.6%	22	10.7%	2	1.0%	2	1.0%	205
共生ｼｽﾃﾑ理工	四年生	12	13.6%	28	31.8%	29	33.0%	17	19.3%	2	2.3%	0	0.0%	88
	三年生	10	8.4%	43	36.1%	44	37.0%	15	12.6%	7	5.9%	0	0.0%	119
	一年生	19	10.8%	70	39.8%	64	36.4%	20	11.4%	3	1.7%	0	0.0%	176
現代教養	四年生	7	28.0%	10	40.0%	6	24.0%	2	8.0%	0	0.0%	0	0.0%	25
	三年生	4	11.4%	8	22.9%	15	42.9%	6	17.1%	1	2.9%	1	2.9%	35
	一年生	2	14.3%	7	50.0%	5	35.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	14



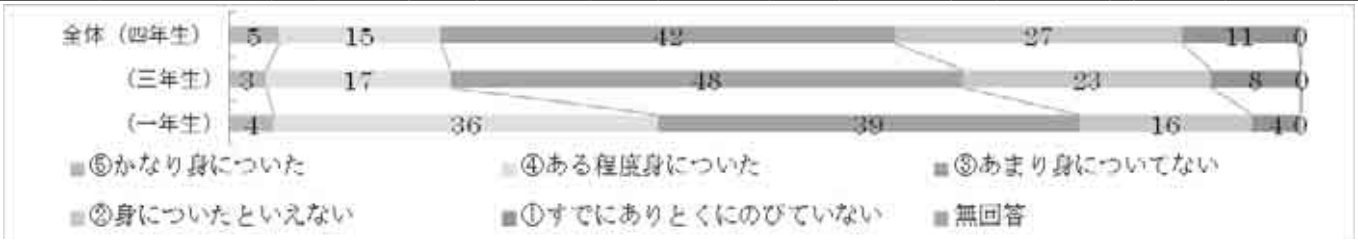
１５．地域的な課題への関心

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全体	四年生	80	15.5%	180	34.8%	163	31.5%	75	14.5%	17	3.3%	2	0.4%	517
	三年生	79	15.0%	173	32.8%	202	38.3%	57	10.8%	13	2.5%	4	0.8%	528
	一年生	76	9.9%	253	32.9%	316	41.1%	110	14.3%	13	1.7%	1	0.1%	769
人間発達文化	四年生	13	8.0%	51	31.3%	63	38.7%	30	18.4%	5	3.1%	1	0.6%	163
	三年生	16	10.1%	48	30.4%	67	42.4%	24	15.2%	3	1.9%	0	0.0%	158
	一年生	19	7.6%	72	28.8%	108	43.2%	48	19.2%	2	0.8%	1	0.4%	250
行政政策	四年生	21	17.6%	42	35.3%	29	24.4%	24	20.2%	3	2.5%	0	0.0%	119
	三年生	23	24.7%	35	37.6%	29	31.2%	4	4.3%	2	2.2%	0	0.0%	93
	一年生	18	14.5%	62	50.0%	33	26.6%	10	8.1%	1	0.8%	0	0.0%	124
経済経営	四年生	29	23.8%	41	33.6%	43	35.2%	4	3.3%	4	3.3%	1	0.8%	122
	三年生	25	20.3%	42	34.1%	43	35.0%	8	6.5%	3	2.4%	2	1.6%	123
	一年生	29	14.1%	67	32.7%	80	39.0%	28	13.7%	1	0.5%	0	0.0%	205
共生ｼｽﾃﾑ理工	四年生	14	15.9%	34	38.6%	22	25.0%	14	15.9%	4	4.5%	0	0.0%	88
	三年生	11	9.2%	38	31.9%	50	42.0%	15	12.6%	4	3.4%	1	0.8%	119
	一年生	9	5.1%	45	25.6%	90	51.1%	23	13.1%	9	5.1%	0	0.0%	176
現代教養	四年生	3	12.0%	12	48.0%	6	24.0%	3	12.0%	1	4.0%	0	0.0%	25
	三年生	4	11.4%	10	28.6%	13	37.1%	6	17.1%	1	2.9%	1	2.9%	35
	一年生	1	7.1%	7	50.0%	5	35.7%	1	7.1%	0	0.0%	0	0.0%	14



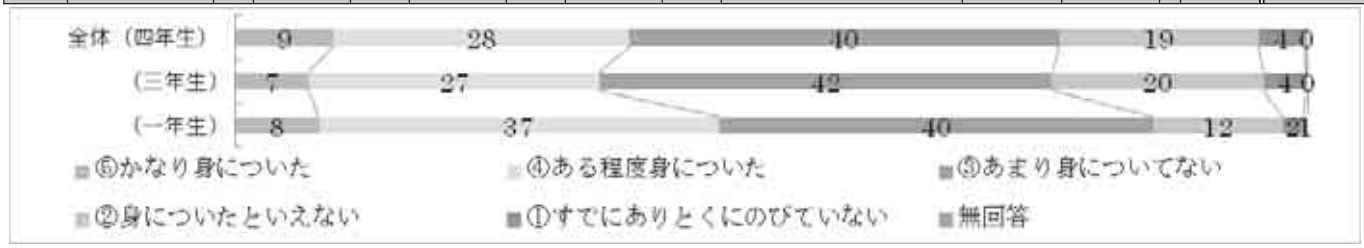
１６．外国語の能力

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全体	四年生	24	4.6%	78	15.1%	219	42.4%	138	26.7%	56	10.8%	2	0.4%	517
	三年生	18	3.4%	91	17.2%	252	47.7%	122	23.1%	44	8.3%	1	0.2%	528
	一年生	32	4.2%	275	35.8%	302	39.3%	124	16.1%	34	4.4%	2	0.3%	769
人間発達文化	四年生	8	4.9%	25	15.3%	71	43.6%	42	25.8%	16	9.8%	1	0.6%	163
	三年生	3	1.9%	30	19.0%	73	46.2%	42	26.6%	10	6.3%	0	0.0%	158
	一年生	9	3.6%	100	40.0%	91	36.4%	32	12.8%	17	6.8%	1	0.4%	250
行政政策	四年生	4	3.4%	9	7.6%	52	43.7%	36	30.3%	18	15.1%	0	0.0%	119
	三年生	5	5.4%	14	15.1%	41	44.1%	26	28.0%	7	7.5%	0	0.0%	93
	一年生	3	2.4%	42	33.9%	46	37.1%	28	22.6%	5	4.0%	0	0.0%	124
経済経営	四年生	9	7.4%	28	23.0%	40	32.8%	31	25.4%	13	10.7%	1	0.8%	122
	三年生	7	5.7%	24	19.5%	61	49.6%	23	18.7%	8	6.5%	0	0.0%	123
	一年生	14	6.8%	77	37.6%	77	37.6%	31	15.1%	6	2.9%	0	0.0%	205
共生ｼｽﾃﾑ理工	四年生	3	3.4%	11	12.5%	44	50.0%	24	27.3%	6	6.8%	0	0.0%	88
	三年生	2	1.7%	19	16.0%	65	54.6%	21	17.6%	12	10.1%	0	0.0%	119
	一年生	6	3.4%	50	28.4%	83	47.2%	30	17.0%	6	3.4%	1	0.6%	176
現代教養	四年生	0	0.0%	5	20.0%	12	48.0%	5	20.0%	3	12.0%	0	0.0%	25
	三年生	1	2.9%	4	11.4%	12	34.3%	10	28.6%	7	20.0%	1	2.9%	35
	一年生	0	0.0%	6	42.9%	5	35.7%	3	21.4%	0	0.0%	0	0.0%	14



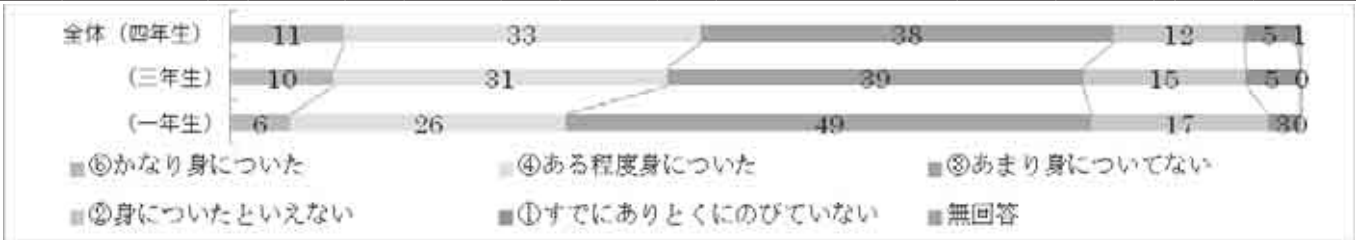
１７．異文化の理解

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全体	四年生	47	9.1%	143	27.7%	207	40.0%	96	18.6%	22	4.3%	2	0.4%	517
	三年生	36	6.8%	143	27.1%	223	42.2%	104	19.7%	21	4.0%	1	0.2%	528
	一年生	60	7.8%	287	37.3%	311	40.4%	93	12.1%	14	1.8%	4	0.5%	769
人間発達文化	四年生	13	8.0%	42	25.8%	72	44.2%	27	16.6%	8	4.9%	1	0.6%	163
	三年生	10	6.3%	38	24.1%	72	45.6%	35	22.2%	3	1.9%	0	0.0%	158
	一年生	20	8.0%	107	42.8%	98	39.2%	18	7.2%	6	2.4%	1	0.4%	250
行政政策	四年生	11	9.2%	36	30.3%	43	36.1%	23	19.3%	6	5.0%	0	0.0%	119
	三年生	10	10.8%	29	31.2%	38	40.9%	12	12.9%	4	4.3%	0	0.0%	93
	一年生	10	8.1%	42	33.9%	53	42.7%	15	12.1%	3	2.4%	1	0.8%	124
経済経営	四年生	15	12.3%	32	26.2%	45	36.9%	26	21.3%	3	2.5%	1	0.8%	122
	三年生	12	9.8%	40	32.5%	51	41.5%	17	13.8%	3	2.4%	0	0.0%	123
	一年生	19	9.3%	77	37.6%	78	38.0%	29	14.1%	2	1.0%	0	0.0%	205
共生ｼｽﾃﾑ理工	四年生	6	6.8%	24	27.3%	37	42.0%	16	18.2%	5	5.7%	0	0.0%	88
	三年生	4	3.4%	30	25.2%	45	37.8%	32	26.9%	8	6.7%	0	0.0%	119
	一年生	11	6.3%	56	31.8%	75	42.6%	29	16.5%	3	1.7%	2	1.1%	176
現代教養	四年生	2	8.0%	9	36.0%	10	40.0%	4	16.0%	0	0.0%	0	0.0%	25
	三年生	0	0.0%	6	17.1%	17	48.6%	8	22.9%	3	8.6%	1	2.9%	35
	一年生	0	0.0%	5	35.7%	7	50.0%	2	14.3%	0	0.0%	0	0.0%	14



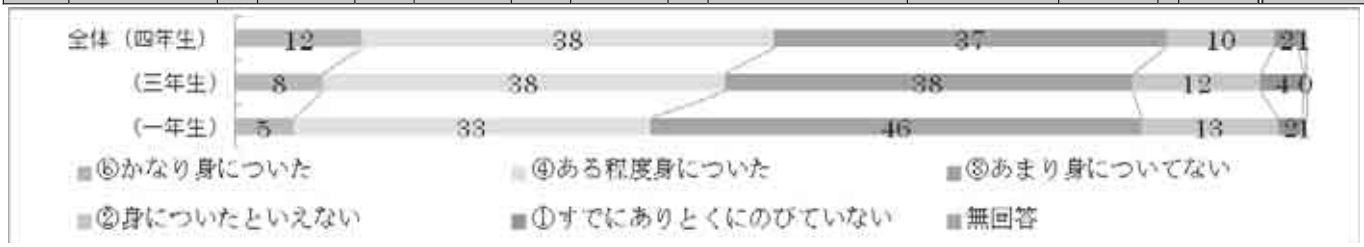
１８．必要な場合のリーダーシップの発揮

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　　計
全体	四年生	55	10.6%	172	33.3%	199	38.5%	63	12.2%	25	4.8%	3	0.6%	517
	三年生	51	9.7%	164	31.1%	205	38.8%	80	15.2%	27	5.1%	1	0.2%	528
	一年生	43	5.6%	198	25.7%	377	49.0%	127	16.5%	22	2.9%	2	0.3%	769
人間発達文化	四年生	17	10.4%	66	40.5%	63	38.7%	14	8.6%	2	1.2%	1	0.6%	163
	三年生	17	10.8%	68	43.0%	42	26.6%	23	14.6%	8	5.1%	0	0.0%	158
	一年生	21	8.4%	74	29.6%	119	47.6%	28	11.2%	7	2.8%	1	0.4%	250
行政政策	四年生	14	11.8%	23	19.3%	54	45.4%	19	16.0%	9	7.6%	0	0.0%	119
	三年生	10	10.8%	26	28.0%	33	35.5%	19	20.4%	5	5.4%	0	0.0%	93
	一年生	6	4.8%	28	22.6%	61	49.2%	25	20.2%	3	2.4%	1	0.8%	124
経済経営	四年生	12	9.8%	49	40.2%	39	32.0%	11	9.0%	9	7.4%	2	1.6%	122
	三年生	8	6.5%	39	31.7%	60	48.8%	12	9.8%	4	3.3%	0	0.0%	123
	一年生	9	4.4%	51	24.9%	106	51.7%	32	15.6%	7	3.4%	0	0.0%	205
共生ｼｽﾃﾑ理工	四年生	9	10.2%	27	30.7%	30	34.1%	17	19.3%	5	5.7%	0	0.0%	88
	三年生	15	12.6%	28	23.5%	51	42.9%	18	15.1%	7	5.9%	0	0.0%	119
	一年生	7	4.0%	40	22.7%	86	48.9%	38	21.6%	5	2.8%	0	0.0%	176
現代教養	四年生	3	12.0%	7	28.0%	13	52.0%	2	8.0%	0	0.0%	0	0.0%	25
	三年生	1	2.9%	3	8.6%	19	54.3%	8	22.9%	3	8.6%	1	2.9%	35
	一年生	0	0.0%	5	35.7%	5	35.7%	4	28.6%	0	0.0%	0	0.0%	14



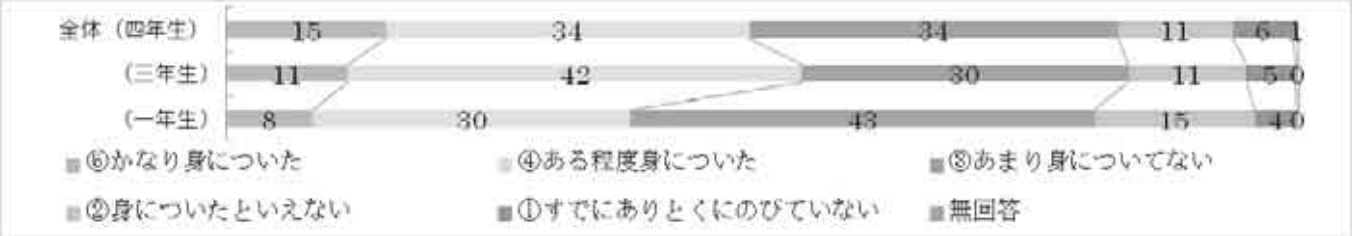
１９．プレゼンテーション力

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　　計
全体	四年生	61	11.8%	199	38.5%	189	36.6%	52	10.1%	12	2.3%	4	0.8%	517
	三年生	43	8.1%	198	37.5%	201	38.1%	63	11.9%	21	4.0%	2	0.4%	528
	一年生	42	5.5%	256	33.3%	352	45.8%	98	12.7%	17	2.2%	4	0.5%	769
人間発達文化	四年生	16	9.8%	71	43.6%	60	36.8%	14	8.6%	1	0.6%	1	0.6%	163
	三年生	12	7.6%	78	49.4%	50	31.6%	15	9.5%	3	1.9%	0	0.0%	158
	一年生	12	4.8%	79	31.6%	117	46.8%	36	14.4%	5	2.0%	1	0.4%	250
行政政策	四年生	11	9.2%	35	29.4%	55	46.2%	13	10.9%	5	4.2%	0	0.0%	119
	三年生	7	7.5%	27	29.0%	41	44.1%	15	16.1%	2	2.2%	1	1.1%	93
	一年生	4	3.2%	43	34.7%	56	45.2%	17	13.7%	3	2.4%	1	0.8%	124
経済経営	四年生	18	14.8%	49	40.2%	37	30.3%	11	9.0%	4	3.3%	3	2.5%	122
	三年生	11	8.9%	47	38.2%	44	35.8%	15	12.2%	6	4.9%	0	0.0%	123
	一年生	13	6.3%	75	36.6%	90	43.9%	19	9.3%	7	3.4%	1	0.5%	205
共生ｼｽﾃﾑ理工	四年生	11	12.5%	32	36.4%	29	33.0%	9	10.2%	7	8.0%	0	0.0%	88
	三年生	13	10.9%	42	35.3%	47	39.5%	10	8.4%	7	5.9%	0	0.0%	119
	一年生	13	7.4%	57	32.4%	80	45.5%	25	14.2%	1	0.6%	0	0.0%	176
現代教養	四年生	1	4.0%	10	40.0%	11	44.0%	3	12.0%	0	0.0%	0	0.0%	25
	三年生	0	0.0%	4	11.4%	19	54.3%	8	22.9%	3	8.6%	1	2.9%	35
	一年生	0	0.0%	2	14.3%	9	64.3%	1	7.1%	1	7.1%	1	7.1%	14



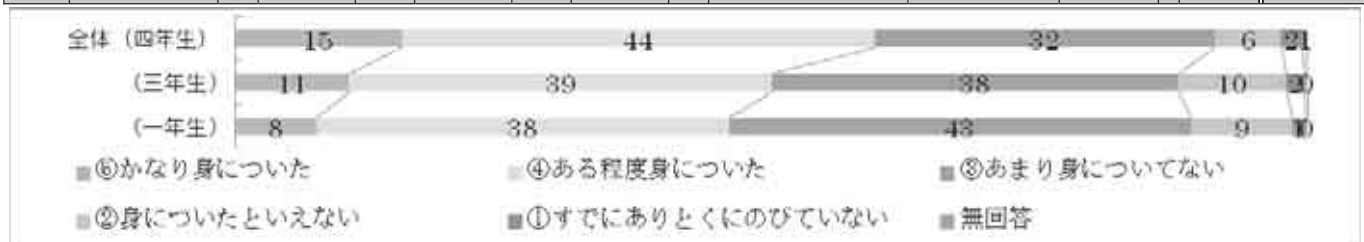
２０．自ら学習する習慣

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全体	四年生	77	14.9%	175	33.8%	178	34.4%	55	10.6%	29	5.6%	3	0.6%	517
	三年生	60	11.4%	223	42.2%	161	30.5%	58	11.0%	24	4.5%	2	0.4%	528
	一年生	62	8.1%	228	29.6%	332	43.2%	115	15.0%	30	3.9%	2	0.3%	769
人間発達文化	四年生	31	19.0%	56	34.4%	54	33.1%	15	9.2%	6	3.7%	1	0.6%	163
	三年生	20	12.7%	75	47.5%	45	28.5%	11	7.0%	7	4.4%	0	0.0%	158
	一年生	16	6.4%	84	33.6%	99	39.6%	37	14.8%	13	5.2%	1	0.4%	250
行政政策	四年生	12	10.1%	32	26.9%	52	43.7%	14	11.8%	8	6.7%	1	0.8%	119
	三年生	14	11.4%	45	36.6%	43	35.0%	16	13.0%	5	4.1%	0	0.0%	123
	一年生	5	4.0%	36	29.0%	63	50.8%	14	11.3%	5	4.0%	1	0.8%	124
経済経営	四年生	21	17.2%	43	35.2%	36	29.5%	15	12.3%	6	4.9%	1	0.8%	122
	三年生	14	11.4%	45	36.6%	43	35.0%	16	13.0%	5	4.1%	0	0.0%	123
	一年生	20	9.8%	55	26.8%	89	43.4%	36	17.6%	5	2.4%	0	0.0%	205
共生ｼｽﾃﾑ理工	四年生	11	12.5%	32	36.4%	29	33.0%	9	10.2%	7	8.0%	0	0.0%	88
	三年生	13	10.9%	51	42.9%	34	28.6%	14	11.8%	7	5.9%	0	0.0%	119
	一年生	17	9.7%	49	27.8%	77	43.8%	26	14.8%	7	4.0%	0	0.0%	176
現代教養	四年生	2	8.0%	12	48.0%	7	28.0%	2	8.0%	2	8.0%	0	0.0%	25
	三年生	3	8.6%	14	40.0%	9	25.7%	6	17.1%	2	5.7%	1	2.9%	35
	一年生	4	28.6%	4	28.6%	4	28.6%	2	14.3%	0	0.0%	0	0.0%	14



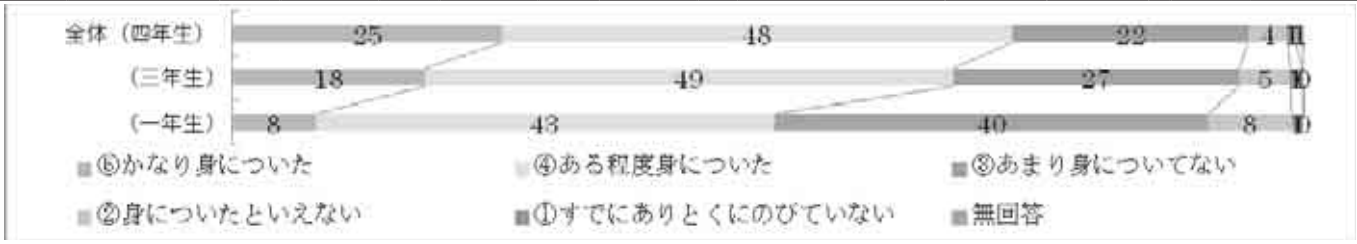
２１．社会人としてのキャリアについての関心と行動

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　計
全体	四年生	80	15.5%	228	44.1%	164	31.7%	32	6.2%	10	1.9%	3	0.6%	517
	三年生	56	10.6%	208	39.4%	200	37.9%	53	10.0%	9	1.7%	2	0.4%	528
	一年生	58	7.5%	296	38.5%	331	43.0%	73	9.5%	9	1.2%	2	0.3%	769
人間発達文化	四年生	28	17.2%	77	47.2%	48	29.4%	7	4.3%	1	0.6%	2	1.2%	163
	三年生	21	13.3%	63	39.9%	62	39.2%	10	6.3%	2	1.3%	0	0.0%	158
	一年生	22	8.8%	103	41.2%	93	37.2%	29	11.6%	2	0.8%	1	0.4%	250
行政政策	四年生	13	10.9%	46	38.7%	47	39.5%	9	7.6%	4	3.4%	0	0.0%	119
	三年生	12	12.9%	32	34.4%	36	38.7%	12	12.9%	1	1.1%	0	0.0%	93
	一年生	7	5.6%	55	44.4%	52	41.9%	8	6.5%	2	1.6%	0	0.0%	124
経済経営	四年生	22	18.0%	53	43.4%	40	32.8%	4	3.3%	2	1.6%	1	0.8%	122
	三年生	11	8.9%	54	43.9%	45	36.6%	10	8.1%	2	1.6%	1	0.8%	123
	一年生	18	8.8%	84	41.0%	82	40.0%	17	8.3%	3	1.5%	1	0.5%	205
共生ｼｽﾃﾑ理工	四年生	11	12.5%	38	43.2%	25	28.4%	11	12.5%	3	3.4%	0	0.0%	88
	三年生	11	9.2%	48	40.3%	41	34.5%	15	12.6%	4	3.4%	0	0.0%	119
	一年生	10	5.7%	48	27.3%	97	55.1%	19	10.8%	2	1.1%	0	0.0%	176
現代教養	四年生	6	24.0%	14	56.0%	4	16.0%	1	4.0%	0	0.0%	0	0.0%	25
	三年生	1	2.9%	11	31.4%	16	45.7%	6	17.1%	0	0.0%	1	2.9%	35
	一年生	1	7.1%	6	42.9%	7	50.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	14



２２．自分の専門に関する知識と理解

		⑤かなり身についた		④ある程度身についた		③あまり身についてない		②身についたといえない		①すでにありとくにのびていない		無回答		合　　計
全体	四年生	130	25.1%	246	47.6%	114	22.1%	19	3.7%	4	0.8%	4	0.8%	517
	三年生	95	18.0%	260	49.2%	141	26.7%	25	4.7%	6	1.1%	1	0.2%	528
	一年生	60	7.8%	329	42.8%	311	40.4%	60	7.8%	8	1.0%	1	0.1%	769
人間発達文化	四年生	62	38.0%	78	47.9%	20	12.3%	1	0.6%	0	0.0%	2	1.2%	163
	三年生	41	25.9%	90	57.0%	24	15.2%	3	1.9%	0	0.0%	0	0.0%	158
	一年生	31	12.4%	117	46.8%	86	34.4%	13	5.2%	2	0.8%	1	0.4%	250
行政政策	四年生	23	19.3%	51	42.9%	37	31.1%	6	5.0%	1	0.8%	1	0.8%	119
	三年生	18	19.4%	38	40.9%	29	31.2%	6	6.5%	2	2.2%	0	0.0%	93
	一年生	7	5.6%	54	43.5%	55	44.4%	6	4.8%	2	1.6%	0	0.0%	124
経済経営	四年生	22	18.0%	64	52.5%	31	25.4%	3	2.5%	1	0.8%	1	0.8%	122
	三年生	18	14.6%	64	52.0%	32	26.0%	7	5.7%	2	1.6%	0	0.0%	123
	一年生	10	4.9%	86	42.0%	87	42.4%	19	9.3%	3	1.5%	0	0.0%	205
共生ｼｽﾃﾑ理工	四年生	20	22.7%	36	40.9%	23	26.1%	8	9.1%	1	1.1%	0	0.0%	88
	三年生	17	14.3%	52	43.7%	42	35.3%	6	5.0%	2	1.7%	0	0.0%	119
	一年生	12	6.8%	67	38.1%	74	42.0%	22	12.5%	1	0.6%	0	0.0%	176
現代教養	四年生	3	12.0%	17	68.0%	3	12.0%	1	4.0%	1	4.0%	0	0.0%	25
	三年生	1	2.9%	16	45.7%	14	40.0%	3	8.6%	0	0.0%	1	2.9%	35
	一年生	0	0.0%	5	35.7%	9	64.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	14



３．共通教育アンケートの経年分析

・本報告は、平成 18 年度から平成 21 年度の「学生による共通教育アンケート」を比較し、共通教育が抱える課題を明らかにすることを目的としている。4 年間の調査の結果を比較すると、多くの質問項目において、カリキュラムの趣旨の理解や、目標とされる知識・態度・技術の修得が、次第に定着していく様子を見てとることができる（たとえば GPA 制度や、総合科目、広域選択科目、情報教育科目の内容理解）。ただし、いくつかの項目では、4 年間の間に改善が見られない、あるいは改善が行われても低い水準にとどまっているため、注意が必要である。

（2010. 12　総合教育研究センター　丸山和昭）

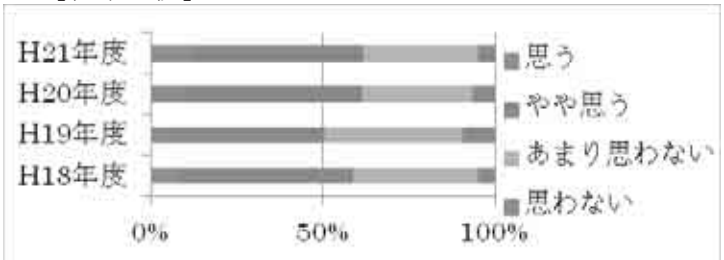
１．共通教育全体について

・シラバスは 4 年間一貫して、9 割近くの学生が役立ったと感じている。また、シラバスに示された成績基準についても、7 割が納得している。GPA 制度については、4 年間を通じて理解・納得が進んだ。平成 21 年度にはほぼ 8 割の学生が理解・納得していると答えている。

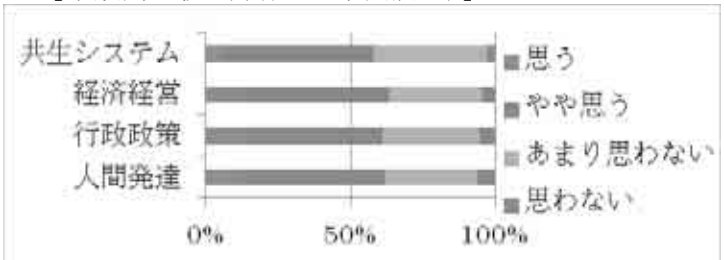
・一方、共通領域の趣旨を理解している学生は 6 割程度にとどまる。また受講調整による希望科目の受講を逃した学生の割合は 6 割近くに上る。この割合は 4 年間改善されていない。ただし、受講調整をしかたがないと考える学生も、次第に増加している。

質問：共通領域における学習案内の趣旨についてガイダンス等から理解できたか

【経年比較】

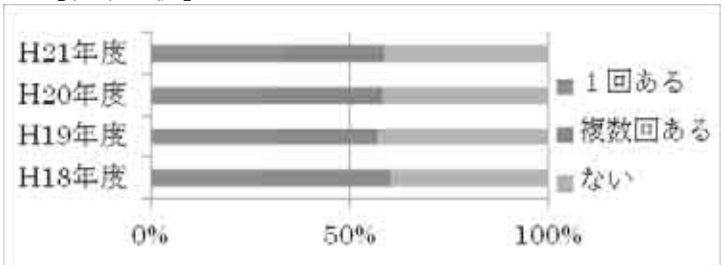


【学類間比較（平成 21 年度調査）】

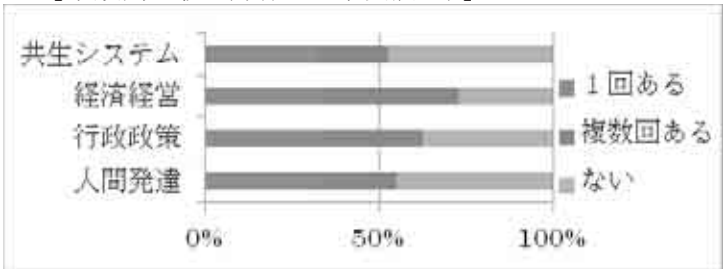


質問：受講調整の結果、希望する科目の受講ができなかったことがあるか

【経年比較】

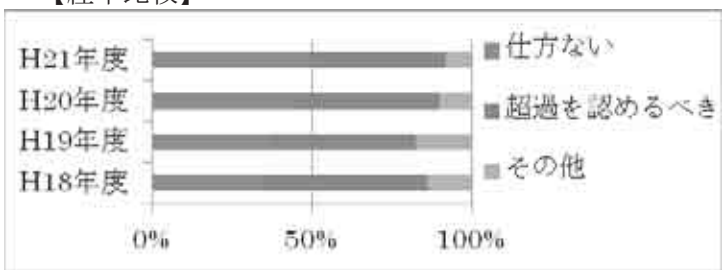


【学類間比較（平成 21 年度調査）】

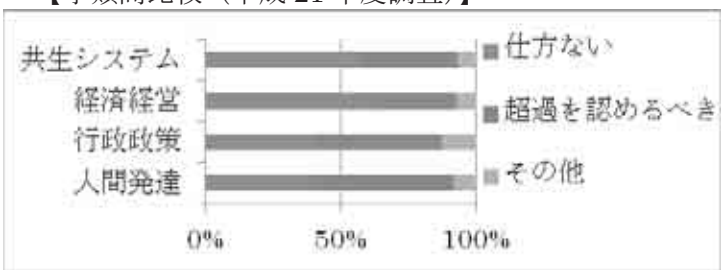


質問：受講調整の制度についてどう思うか

【経年比較】

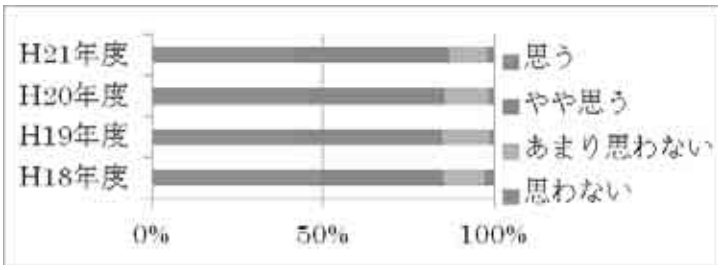


【学類間比較（平成 21 年度調査）】

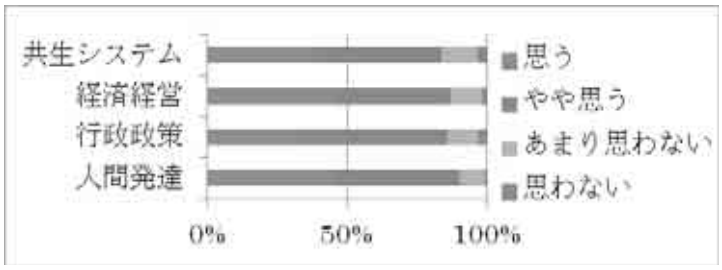


質問：シラバスは受講登録や受講の際に役立ったと思うか

【経年比較】

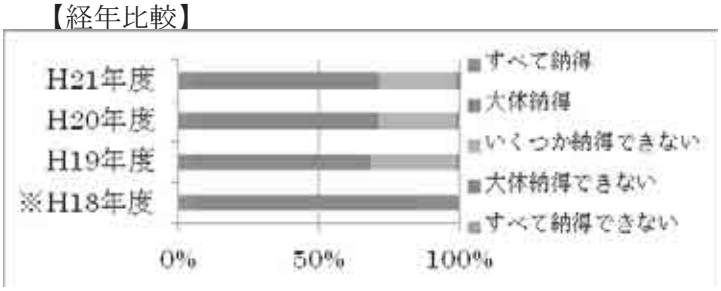


【学類間比較（平成 21 年度調査）】

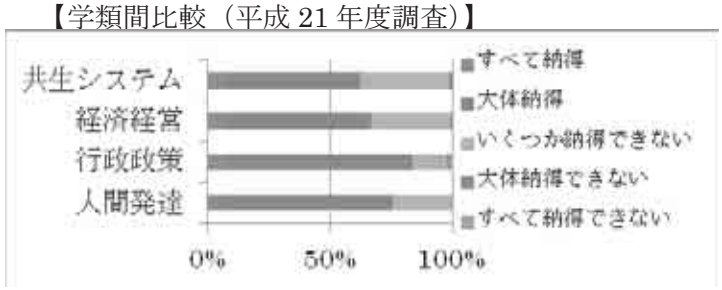


質問：実際の成績は、シラバスの基準から見て納得できたか

【経年比較】

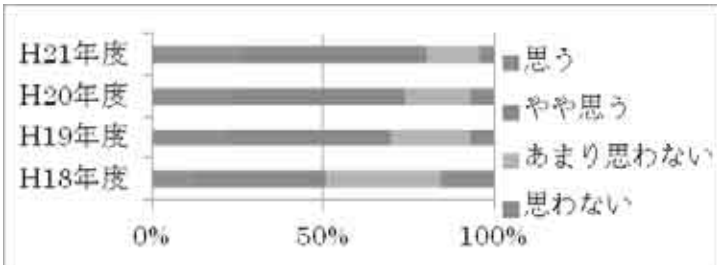


【学類間比較（平成 21 年度調査）】

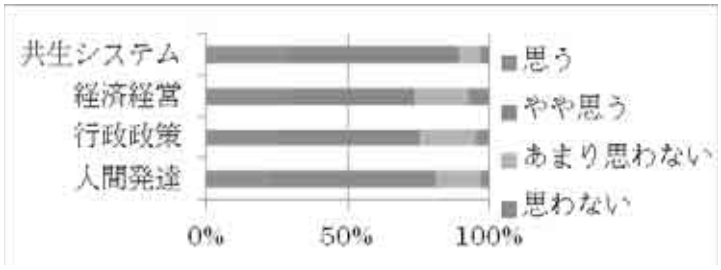


質問：ＧＰＡ制度の趣旨を理解し納得しているか

【経年比較】



【学類間比較（平成 21 年度調査）】



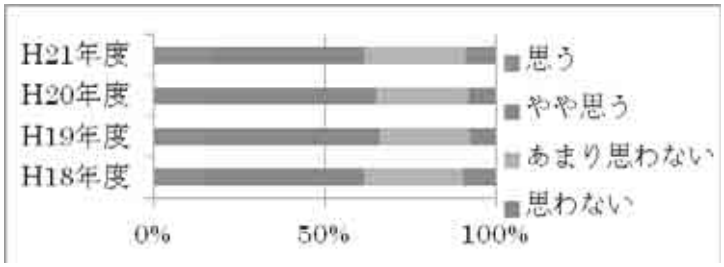
２．自己デザイン領域について

・自己デザイン領域のカリキュラムについて４年間で次第に理解が進み、平成 21 年度には７割の学生が、理念に適うものであると考えている。特に、キャリア形成論について、平成 21 年度には７割前後の学生が、「自分」「職業」「学び」について、考えることができたと回答している。ただし、平成 20 年度と比べると、肯定的な回答は若干減少している。

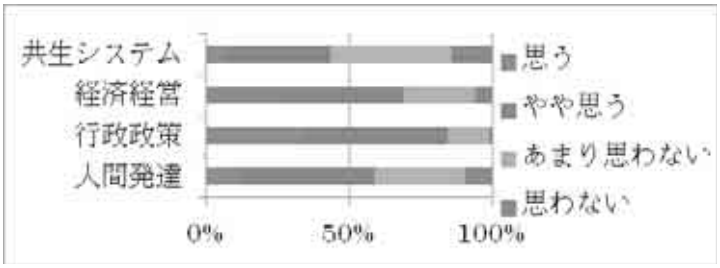
・一方、教養演習での「問題発見の姿勢」「社会性」修得は 6 割程度にとどまる。特に平成 21 年度は、平成 18 年度の水準に戻ってしまっている。また、学類間の格差が著しく、修得率に２倍近い開きのある学類もある。その他、自己学習プログラムを履修しなかった理由として、「授業の存在を知らなかった」と答える学生の割合が、４年間で次第に上昇してきた。

質問：教養演習で、「自ら問題を発見し、思考し、知識を追及する姿勢」が身についたか

【経年比較】

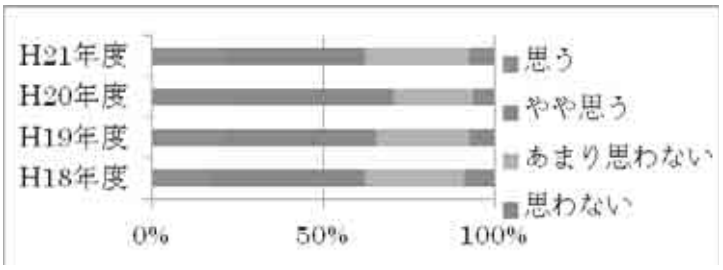


【学類間比較（平成 21 年度調査）】

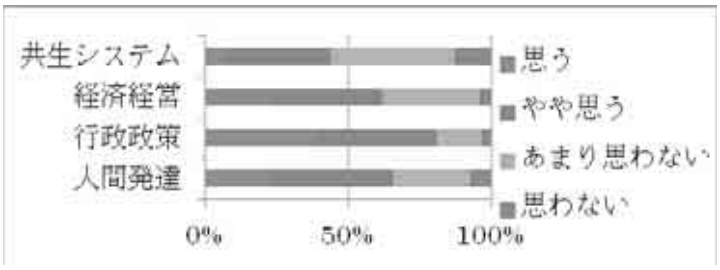


質問：教養演習で、「仲間を得、社会に通用するアクティブな知識」が身についたか

【経年比較】

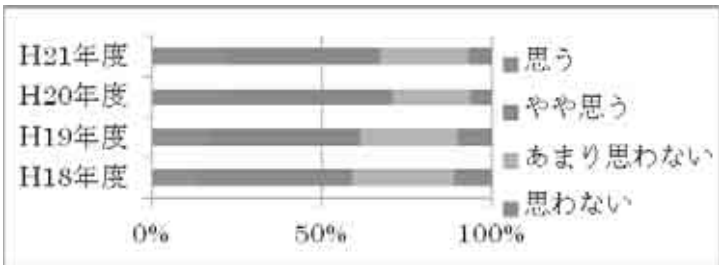


【学類間比較（平成 21 年度調査）】

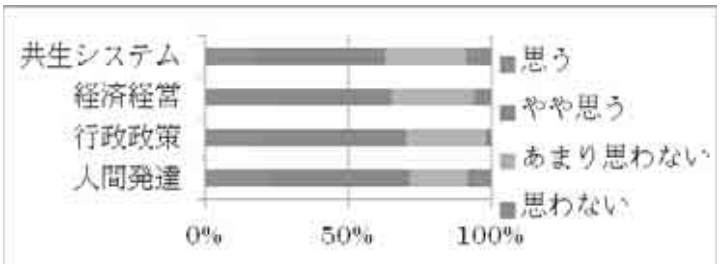


質問：キャリア形成論で、「自分」を見つめたり、これからの人生について考えたりすることができたか

【経年比較】

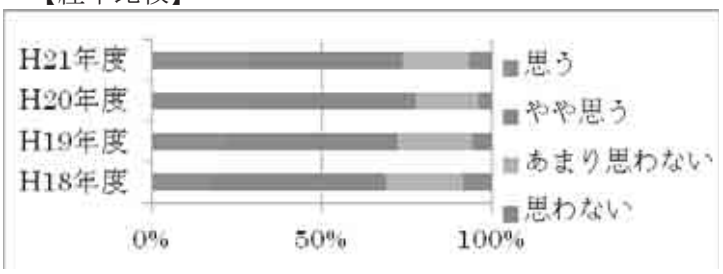


【学類間比較（平成 21 年度調査）】

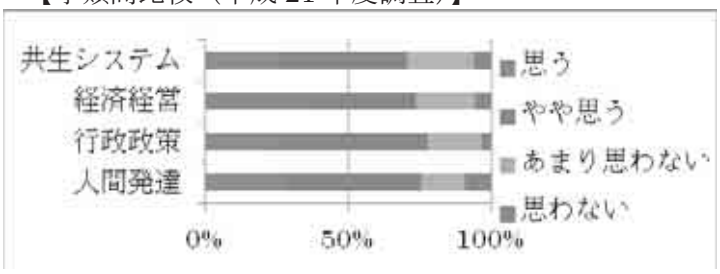


質問：キャリア形成論で、「働く」ということや「職業」について考えることができたか

【経年比較】

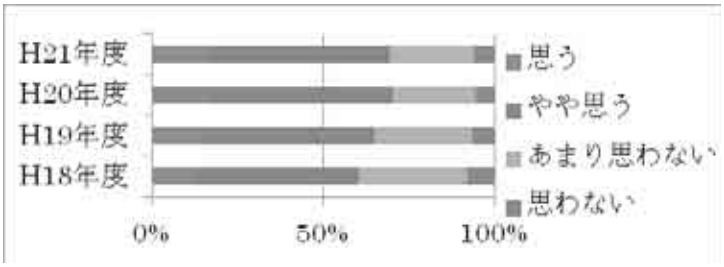


【学類間比較（平成 21 年度調査）】

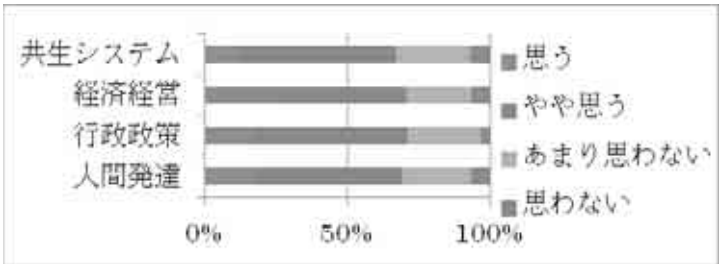


質問：キャリア形成論で、自分自身が「学ぶ」ことやこれからの取組みについて考えることができたか

【経年比較】

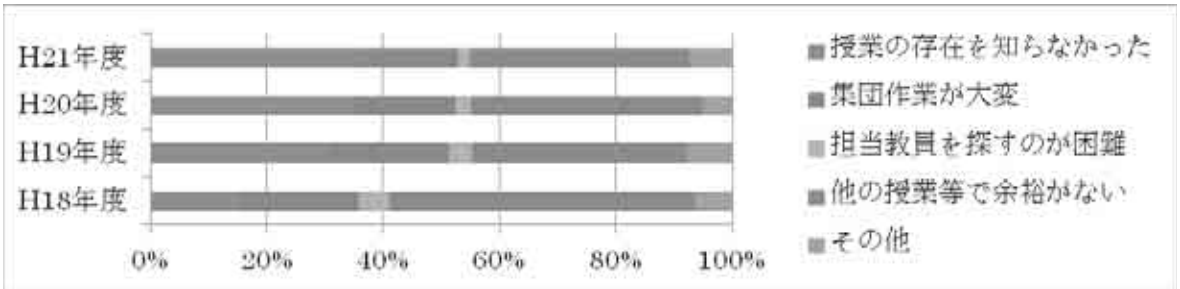


【学類間比較（平成 21 年度調査）】

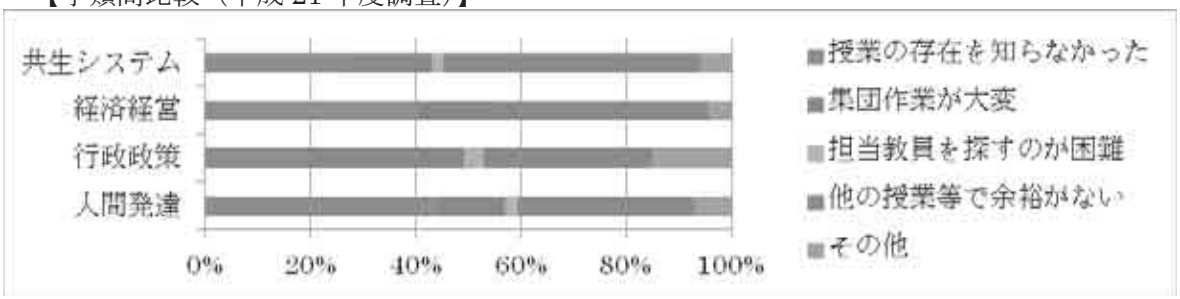


質問：キャリア形成論で、自己学習プログラムを履修しなかった理由はなぜか

【経年比較】

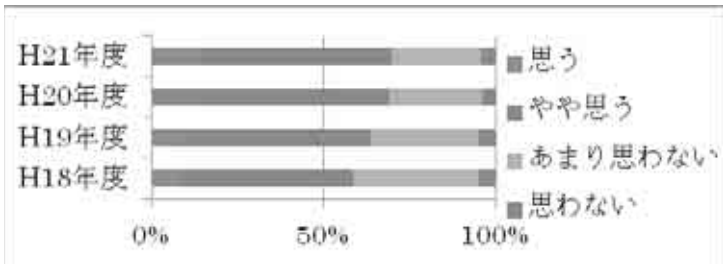


【学類間比較（平成 21 年度調査）】

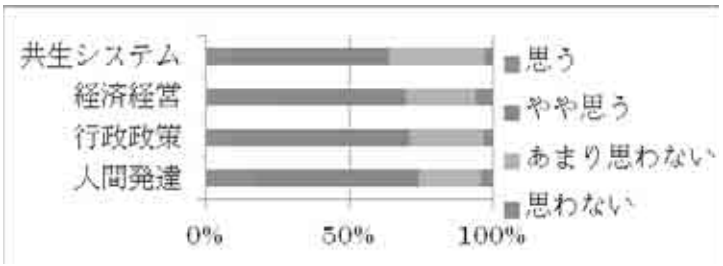


質問：自己デザイン領域のカリキュラムが、「自ら学ぶ」という主体性を強調する理念に適合しているか

【経年比較】



【学類間比較（平成 21 年度調査）】

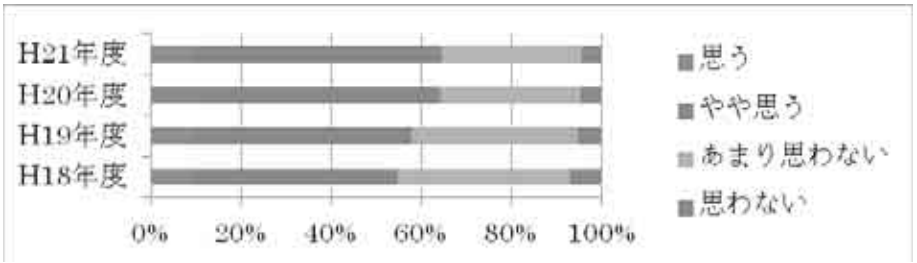


３．総合科目について

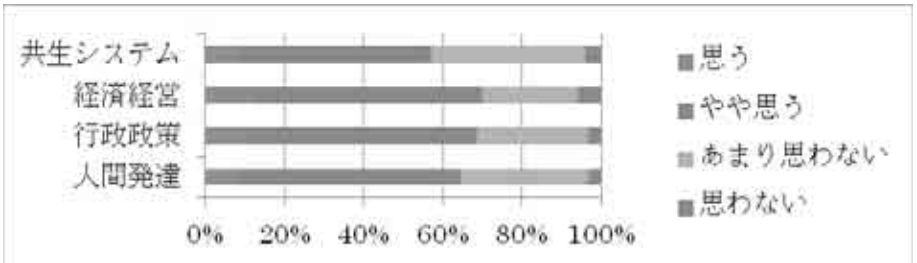
・「多角的・総合的な思考」が身についたと考える学生の割合が、平成１８年度から次第に上昇してきた。今後とも、さらなる「多角的・総合的な思考」習得に向けた支援が求められる。また、学類間での修得率の違いに注意を要する。

質問：総合科目で、「多角的・総合的な思考」が身についたか

【経年比較】



【学類間比較（平成 21 年度調査）】

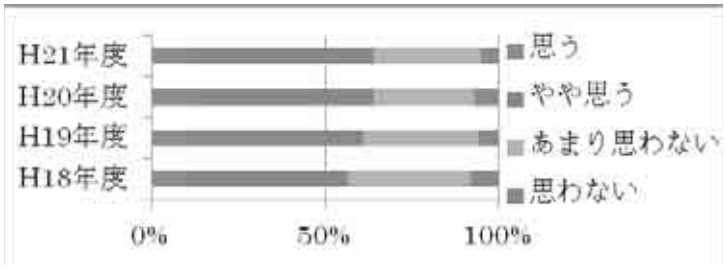


４．広域選択科目について

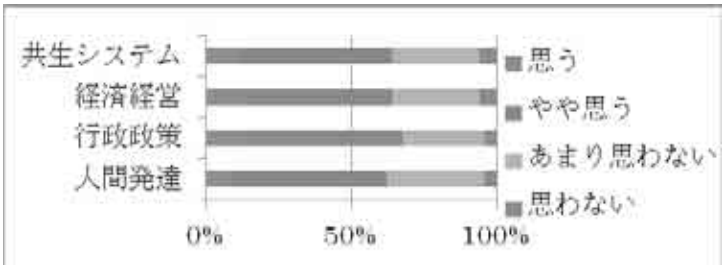
・「専門を超えた関心」「学問的な思考の基礎」が身についたと考える学生の割合が、平成１８年度から次第に上昇してきた。今後とも、さらなる「専門を超えた関心」「学問的な思考の基礎」習得に向けた支援が求められる。

質問：広域選択科目で、「現代の学問・文化の成果に対して専門を超えた関心と理解」が身についたか

【経年比較】

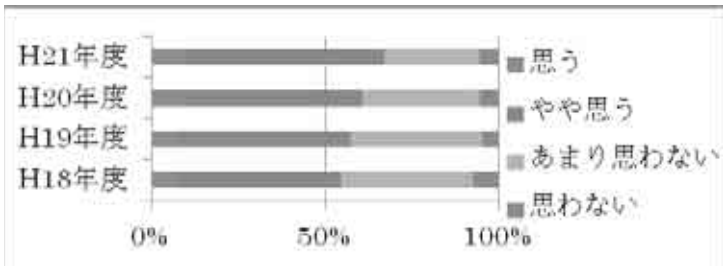


【学類間比較（平成 21 年度調査）】

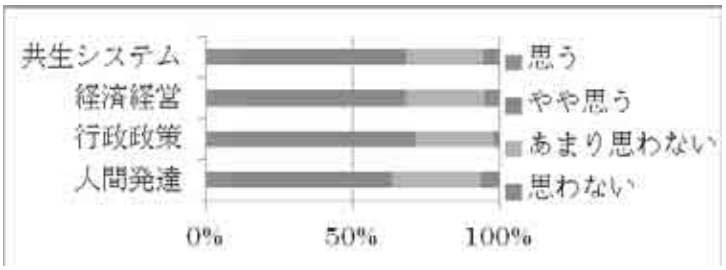


質問：「学問的な思考の基礎」が身についたか

【経年比較】



【学類間比較（平成 21 年度調査）】

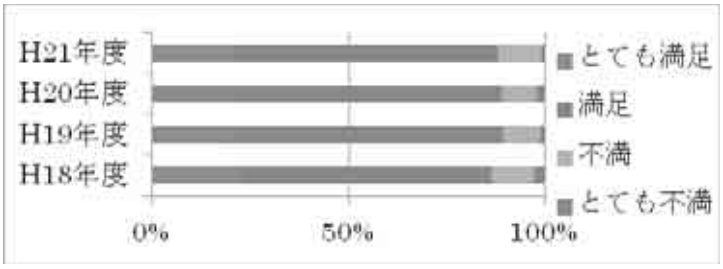


５．英語科目について

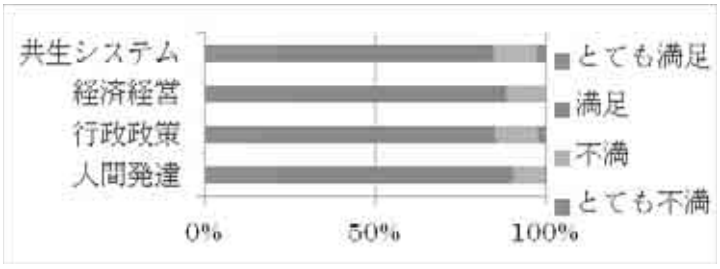
・英語のクラス編成方法は、４年間一貫して高い満足度（8～9 割）を得ている。「上級・基礎クラスの選択」、「上級・技能別英語の違い」、「技能別英語の内容」、「ALC の自学自習システム」については、過去に比べると次第に周知・理解が進んできてはいるものの、いずれも低い水準にとどまっているため、更なる改善が必要である。

質問：英語科目のクラス編成の方法についてどう思うか

【経年比較】

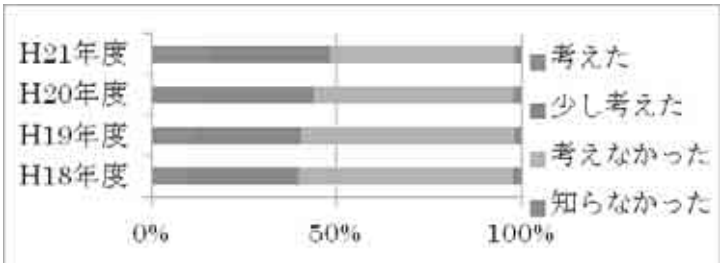


【学類間比較（平成 21 年度調査）】

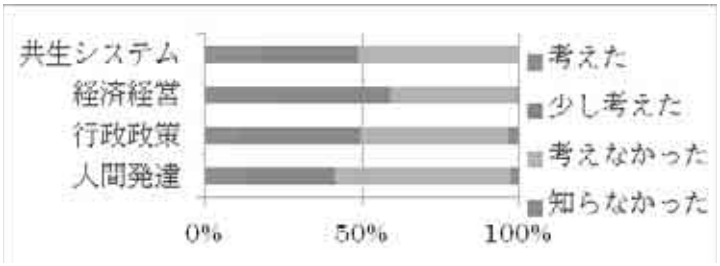


質問：英語の上級・基礎クラスの選択を考えたことがあるか

【経年比較】

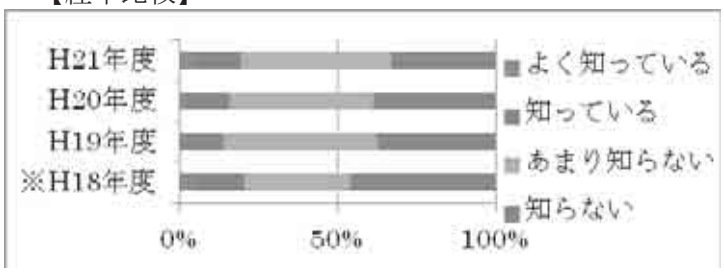


【学類間比較（平成 21 年度調査）】

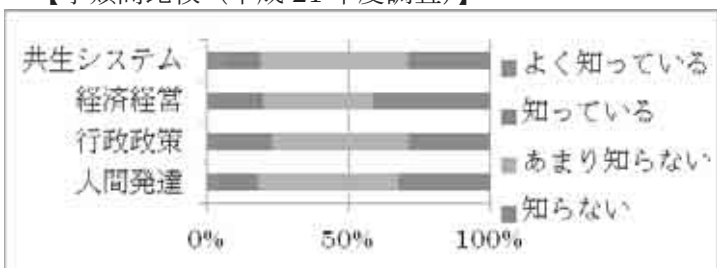


質問：上級英語と技能別英語の違いを認識しているか

【経年比較】

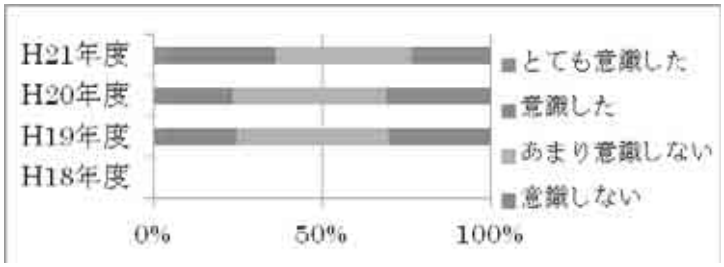


【学類間比較（平成 21 年度調査）】

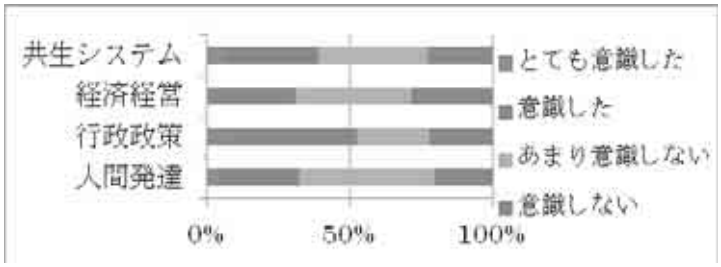


質問：技能別英語の Reading、Oral、Writing は意識したか

【経年比較】

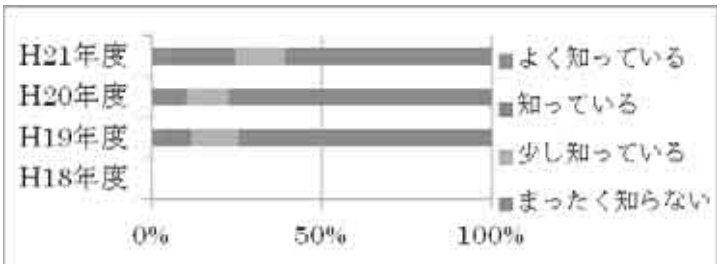


【学類間比較（平成 21 年度調査）】

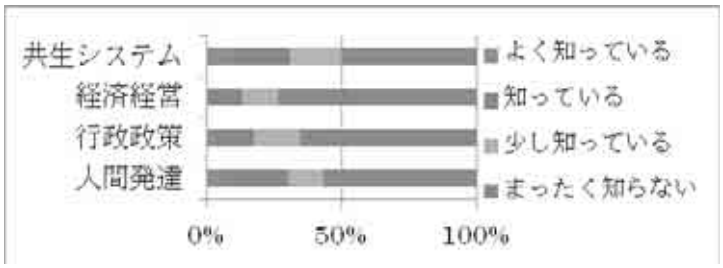


質問：ALC の自学自習システムについて知っているか

【経年比較】

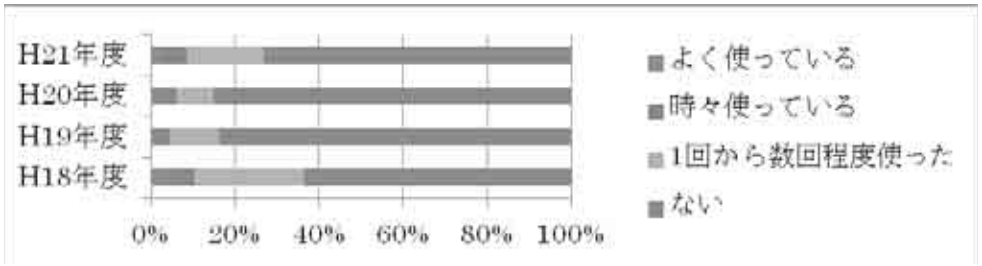


【学類間比較（平成 21 年度調査）】

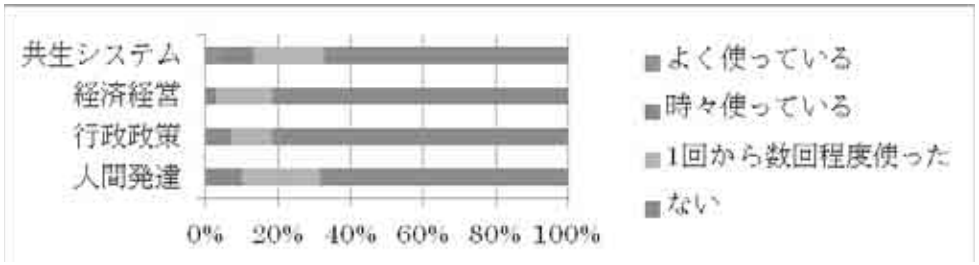


質問：ALC の自学自習システムを利用したことがあるか

【経年比較】



【学類間比較（平成 21 年度調査）】



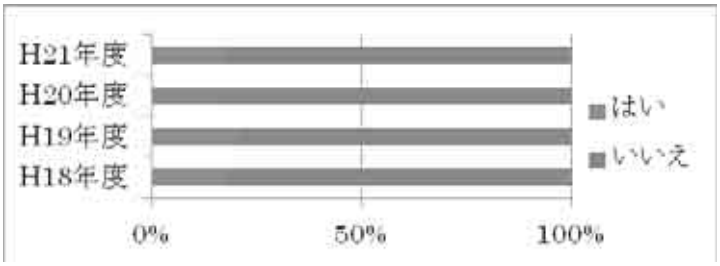
５．英語以外の外国語科目について

・英語以外の外国語科目を通じて、７割近くの学生が「豊かな世界観」が身についたと考えている（平成 19 年度に改善。しかし、それ以降は変化が見られない）。一方、８割近くの学生が中級を履修していない。ま

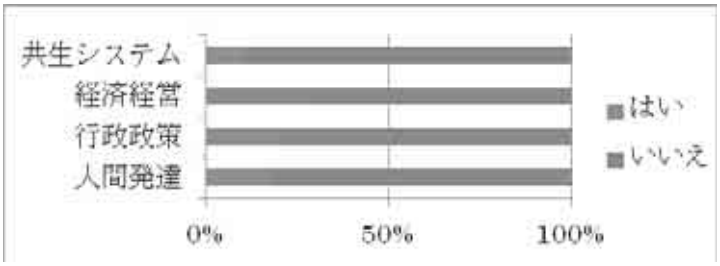
た、履修経験を持つ学生の割合は４年間ほとんど変わらず、改善が見られない。また、「読む、書く、聞く、話す能力」を身につけた学生は５割に満たない
（平成 18 年度より改善が進んだが、平成 21 年度に低下している）。その他、韓国語（ハングル）の設置希望は５割、履修希望は３割強である。

質問：英語以外の外国語科目について、中級を履修していたか（あるいは、いま履修しているか）

【経年比較】

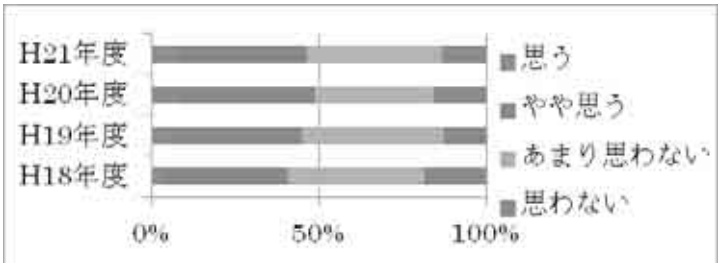


【学類間比較（平成 21 年度調査）】

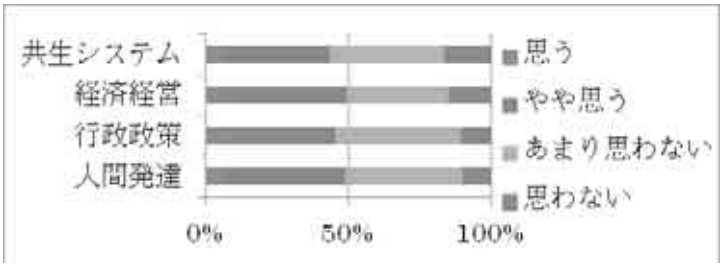


質問：英語以外の外国語科目で、「読む、書く、聞く、話す能力」が身についたか

【経年比較】

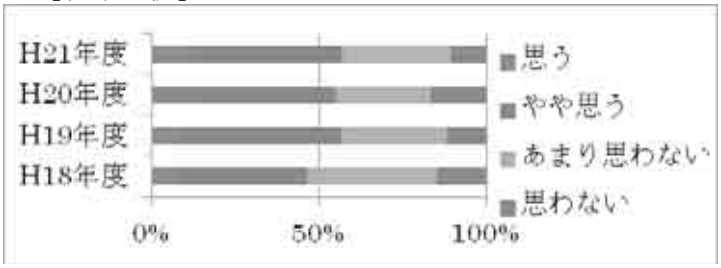


【学類間比較（平成 21 年度調査）】

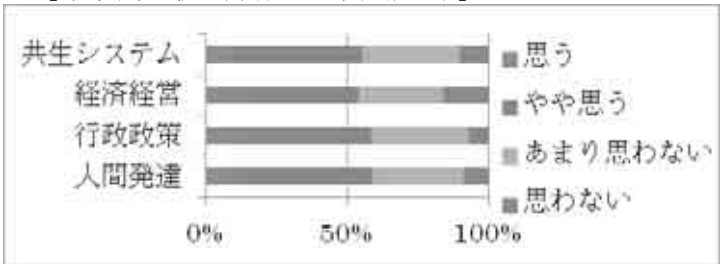


質問：英語以外の外国語科目で、「豊かな世界観、思考力、表現力」が身についたか

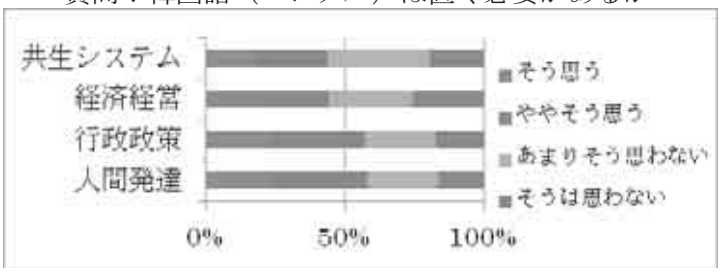
【経年比較】



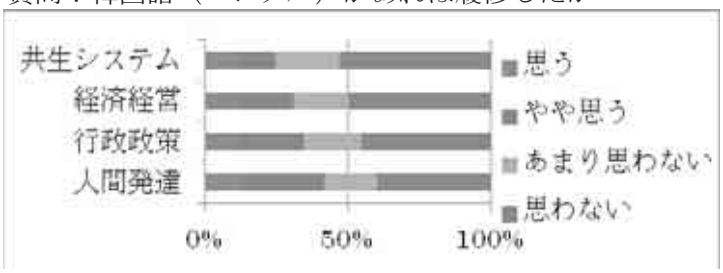
【学類間比較（平成 21 年度調査）】



質問：韓国語（ハングル）は置く必要があるか



質問：韓国語（ハングル）があれば履修したか



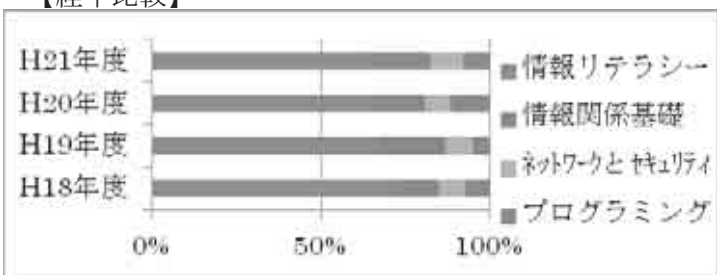
６．情報教育科目について

・情報教育科目の授業の内容理解について、４年間で一貫した改善傾向が見られ、平成 21 年度には７割以上の学生が授業を理解できたと回答している。一方、受講科目について、65％の学生が「情報リテラシー」に偏る（ただし偏りは、４年間で次第に緩和される傾向）。また、科目の選択理由で、単位取得の容易さが、内容への興味を若干上回る（ただし内容への興味を挙げる学生割合は、次第に増える傾向）。その他、６割

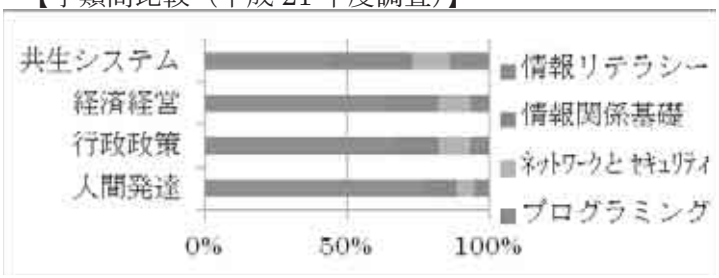
の学生は、情報処理が必修のままでよいと考えている。

質問：情報処理についてどの科目を受講したか

【経年比較】

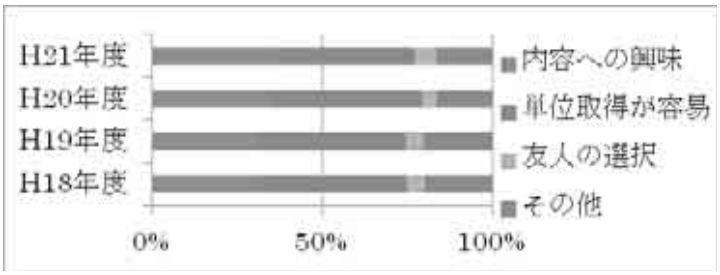


【学類間比較（平成 21 年度調査）】

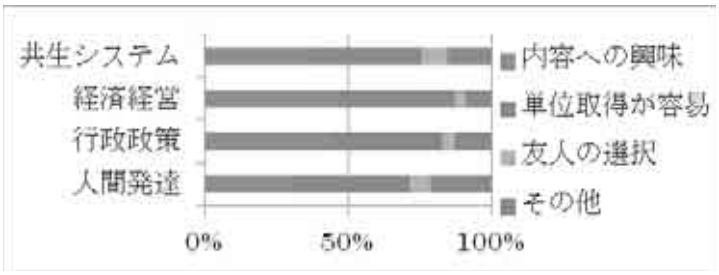


質問：上の科目を選択した理由はなにか

【経年比較】

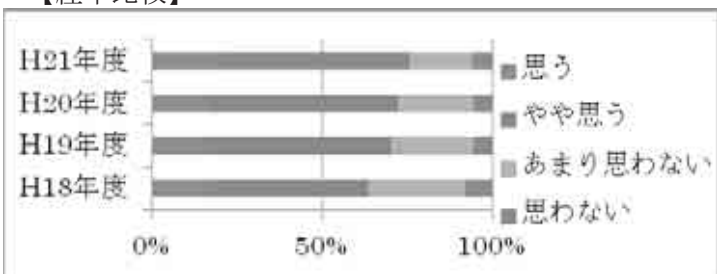


【学類間比較（平成 21 年度調査）】

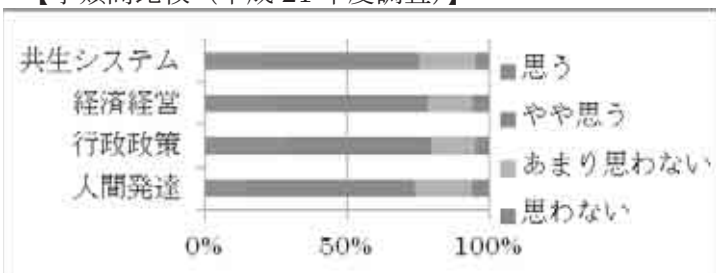


質問：情報教育科目の授業の内容が理解できたか

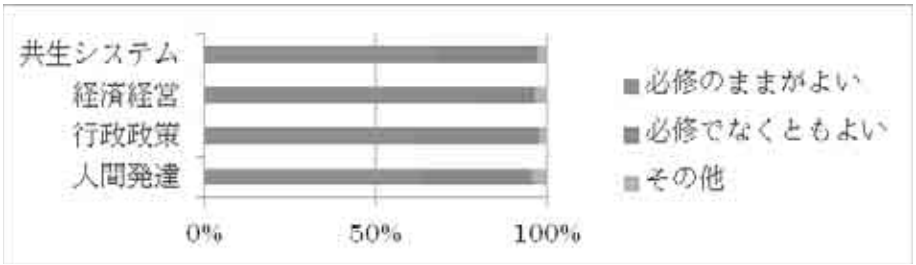
【経年比較】



【学類間比較（平成 21 年度調査）】



質問：「情報処理」科目は、必修のままでよいか

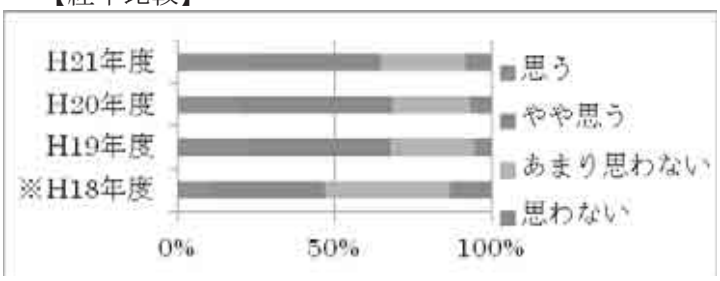


7．健康・運動科目について

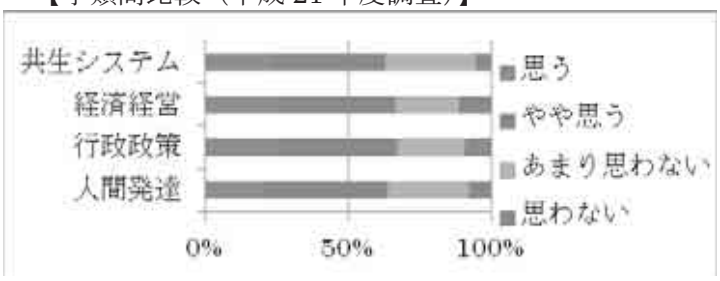
・健康・運動科目を通じた「身体リテラシー」の修得、「スポーツへの関心」の高まり、「興味のわく種目」の用意について、いずれの質問に対しても６～７割の学生が、肯定的な回答を行っている。一方、過去３年間、回答傾向に変化がない、あるいは若干の否定的回答の増加が見られるため、さらなる改善に向けた取り組みが求められる。

質問：健康・運動科目で、身体リテラシー（健康や運動科学についての科学的認識）が深まったか

【経年比較】

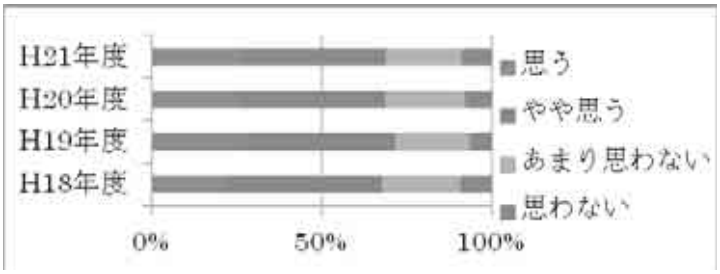


【学類間比較（平成 21 年度調査）】

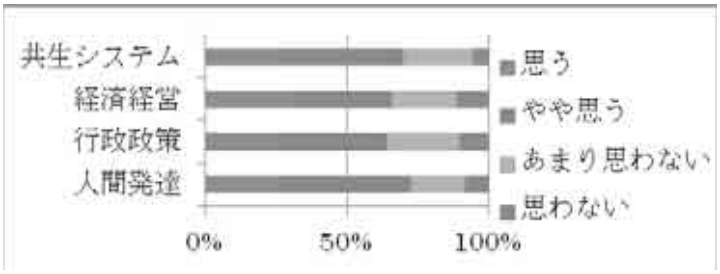


質問：健康・運動科目で、スポーツに対する興味や関心が高まったか

【経年比較】

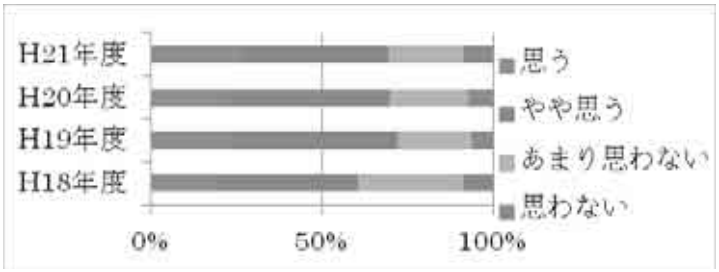


【学類間比較（平成 21 年度調査）】

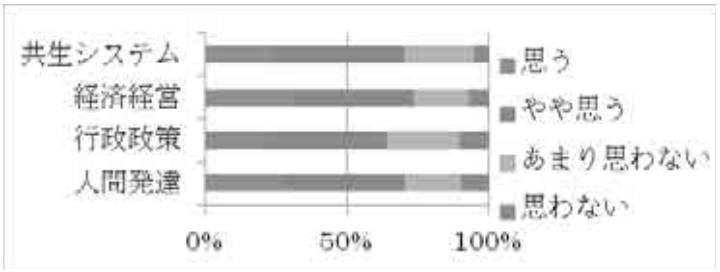


質問：健康・運動科目において、興味のある種目が用意されているか

【経年比較】



【学類間比較（平成 21 年度調査）】

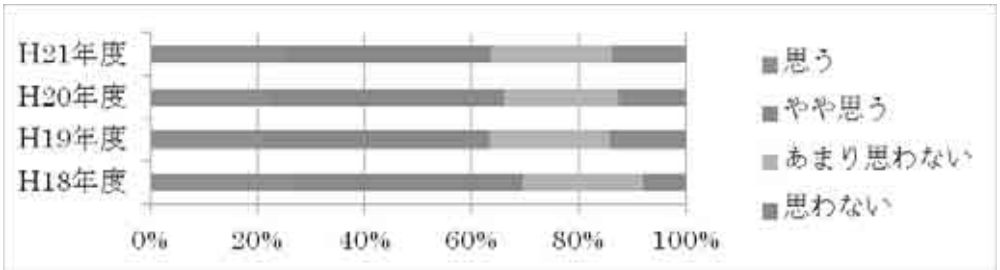


８．日本事情について

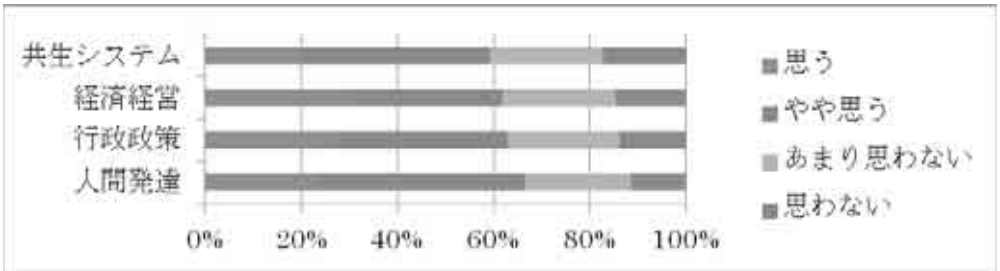
・日本事情が全学生対象になった場合、６割の学生が受講してみたいと考えている。受講希望学生の割合は、過去３年間で徐々に増加してきた。しかし、その割合は、平成１８年度の割合よりも低い。

質問：日本事情が全学生対象になった場合、受講してみたいか（留学生以外への質問）

【経年比較】



【学類間比較（平成 21 年度調査）】



４．卒業生・企業への教育成果検証アンケート

・本研究は、平成 22 年度末に福島大学の卒業生、および採用企業を対象として実施した二つの調査「福島大学の教育に関する卒業生アンケート」「就職先企業に対する大学教育の成果に関するアンケート」の分析から、福島大学卒業生の能力像について考察したものである。学士課程教育の質保証と、その成果の検証システムの確立が、全国的な大学の改革課題となっている。福島大学でも、2005 年に自己デザイン領域を導入するなど、新しいカリキュラムによる教育改革に取り組んできた。また、新カリキュラムの履修者に対しては、2007 年から 2009 年にかけて在学生アンケートが実施され、教育改革の成果の検証が行われてきた。しかし、大学教育の成果は、在学生の自己評価のみならず、卒業生や採用企業の視点も踏まえて、多角的に検証される必要がある。本研究の目的は、以上の課題を踏まえたうえで、新カリキュラムを履修した卒業生がどのように大学教育を評価しているのか、また卒業生自身や採用企業から見て新カリキュラム履修者の諸能力はどの程度の水準にあるのか、について明らかにすることである。なお、末尾に各アンケートの単純集計と自由記述の内容を記載する。分析結果と併せてご参照いただきたい。

（2012.1　総合教育研究センター　丸山和昭）

１．はじめに

本研究は、平成 22 年度末に福島大学の卒業生、および採用企業を対象として実施した二つの調査「福島大学の教育に関する卒業生アンケート」「就職先企業に対する大学教育の成果に関するアンケート」の分析から、福島大学卒業生の能力像について考察したものである。

学士課程教育の質保証と、その成果の検証システムの確立が、全国的な大学の改革課題となっている。国際的な「ラーニング・アウトカムズ」重視の改革動向を受けて、「コミュニケーション」「チームワーク」「批判的思考」などといった諸能力の育成が、専門分野をこえた教育課題として浮上してきた（川嶋 2008）。国内の高等教育政策・職業教育政策においても、厚生労働省の「就業基礎能力」（2004）、経済産業省の「社会人基礎力」（2006）、文部科学省の「学士力」といった能力リストが次々と提示され（松下 2010）、その実質化が各大学において模索されている。

福島大学でも、2005 年に自己デザイン領域を導入するなど、新しいカリキュラムによる教育改革に取り組んできた（森田 2010）。人間発達文化学類での「教員スタンダード」「学修指標」の策定や、全学での「福島大学スタンダード」の議論、及びディプロマポリシーの構築など、ラーニング・アウトカムズを意識した改革も進んでいる（人間発達文化学類 2011）。また、新カリキュラムの履修者に対しては、2007 年から 2009 年にかけて在学生アンケートが実施され、教育改革の成果の検証が行われてきた。

しかし、大学教育の成果は、在学生の自己評価のみならず、卒業生や採用企業の視点も踏まえて、多角的に検証される必要がある。本調査の目的は、以上の課題を踏まえたうえで、新カリキュラムを履修した卒業生がどのように大学教育を評価しているのか、また卒業生自身や採用企業から見て新カリキュラム履修者の諸能力はどの程度の水準にあるのか、について明らかにすることである。

２．調査の概要

本研究が分析に用いる質問紙調査は，福島大学教務課・総合教育研究センターFD 部門が実施した。調査用紙の配布は 2011 年 1 月、回収は 2011 年 2 月である。「福島大学の教育に関する卒業生アンケート」は、過去２年間の福島大学の学士課程卒業生（新カリキュラムの履修者）を対象とした。調査票は 1592 名に送付し、292 名からの回答を得た（回収率 18.3%）。また「就職先企業に対する大学教育の成果に関するアンケート」は、過去２年間で福島大学の卒業生を採用している事業所を対象とした。調査票の送付数は 724、回収票数は

211 である（回収率 29.1%）。

卒業生アンケートは、属性（性別・年齢・入学年・在学時の所属・卒業後の在学経験・現在の就業状況）、在学時の教育に対する評価、就業後における大学時代の経験の重要性、福島大学卒業生の社会人基礎力等諸能力の水準についての質問項目から構成されている。企業アンケートは、属性（所在地・業種・採用方針）の他、大学時代の経験の重要性、福島大学卒業生の社会人基礎力等の諸能力の水準について、卒業生アンケートと同様の質問項目を設けている。

なお、これらの質問項目の作成に当たり、在学生や他大学との比較を可能とするため、福島大学において過去に行われた在学生アンケートの他、「東北大学の教育に関する卒業・修了者調査」（東北大学　2007）、「就職先企業に対する大学教育の成果に関するアンケート調査」（北海道大学 2008）、「全国大学生調査　追加調査　2009」（東京大学 2009）、「2011 年卒マイコミ新卒採用予定調査」（毎日コミュニケーションズ　2010）を参照した。

以上の調査内容に基づいて回収された調査票について、総合教育研究センターFD 部門が実査および結果の分析にあたった。なお、本調査の有効回収率は、郵送法を用いた同種の調査における一般的な回収率の水準に照らしてそれほど遜色のあるものではないが、決して高い回収率を達成したわけではない。そのため、本学に対する好意や好感が高い卒業生・企業からの回答が多く回収されている可能性があることは想像に難くない。この点については以下の分析やデータの解釈の際にも留意すべきと考えられる。

３．分析の結果

３．１　回答者のプロフィール

まず、卒業生調査の回答者のプロフィールは以下の通りである。性別では、男性が 47%、女性が 51%である。年齢では、23 歳が 43%、24 歳が 42%、その他が 13%である。入学年は、2005 年入学が 46%、2006 年入学が 49%、その他が 4%である。在学時の所属は、人間発達文化学類 38%、行政政策学類 27%、経済経営学類 17%、共生システム理工学類 16%、現代教養コース 1%である。したがって、全体集計には人間発達文化学類の特徴が強く現れやすいこと、現代教養コースの卒業生の特徴は反映されていないことに留意する必要がある。学士課程卒業後の経験では、在学経験なし（未進学）が 90%を占める。在学経験有りの場合には、福大の修士課程が 5%、他大学の修士課程が 2%、その他が 2%である。現在の就業状況は、常時雇用が 80%を占めるが、パートやアルバイト 8%、無職 4%も回答している。就職年は 2009 年が 41%、2010 年が 45%、その他が 3%である。現在の業種の上位３つは教育 23%・その他公務 22%・金融 10%、職種上位３つは事務 37%、専門職 20%、営業 12%である。

次に、企業調査の回答した機関のプロフィールは以下の通りである。所在地のうち、最も多いのは福島県の 30%である。これに東京 18%、宮城 16%が続く。業種では、その他公務が 30%と最も多く、小売 13%、教育 9%、製造 9%が続く。卒業生の業種と、若干の差異が認められる。また企業調査では、福島大生に対する今後の採用意欲を示している。学士課程卒業者に対する採用予定として、「増やしたい」が文系 24%・理系 23%、「現在と同じ」が文系 33%・理系 23%、「採用予定なし」が文系 7%・理系 10%、未記入が文系 36%・理系 44%で、「減らしたい」が文系理系ともに 0%であった。

３．２　福島大学の教育に対する卒業生の評価

卒業生調査では、大学時代に受けた授業の内容について、図１・図２に示す 9 項目がどれほど含まれていたか、またどれほど必要であると考えるかを尋ねている。授業内容の経験では、出席を重視する授業が多かったことが明確であるが、その他の項目は「多かった」「少しあった」をあわせても、4〜6 割程度である。

授業内容の必要性では、「必要ない」「ある程度必要」をあわせると、全ての項目において 9 割をこえている。特に社会の現実に接する機会の必要性については、7 割近くの回答者が「とても必要」と考えている。そのほか、学生参加型の授業、理解度や興味への配慮に対する需要も高く、これに課題成果の発表報告、チームでの課題取り組み、外国語に接する機会が続いている。　社会の現実に接する機会は、実際の授業での経験が少ない反面、必要と考える卒業生が多い項目である。授業内にて社会の現実に接する機会を設けることは、容易な課題ではないものの、卒業生の要望として一考する必要がある。

図１：授業内容の経験

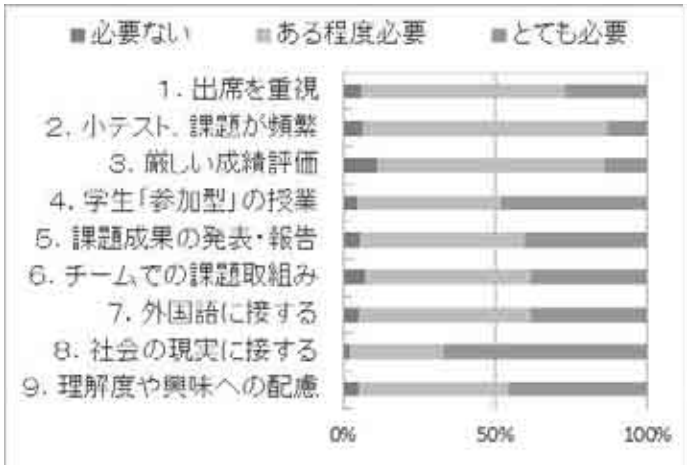
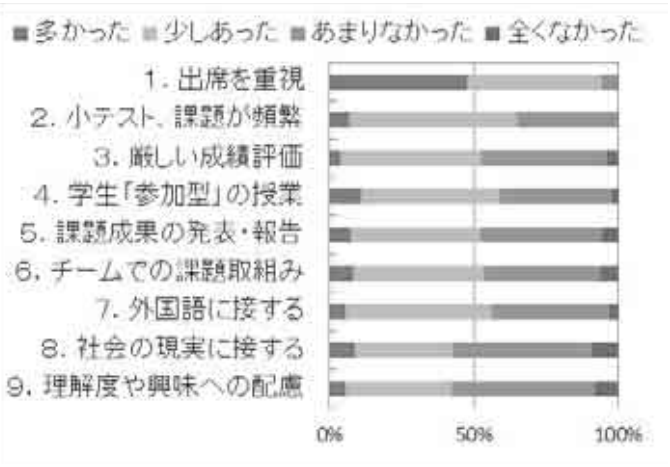
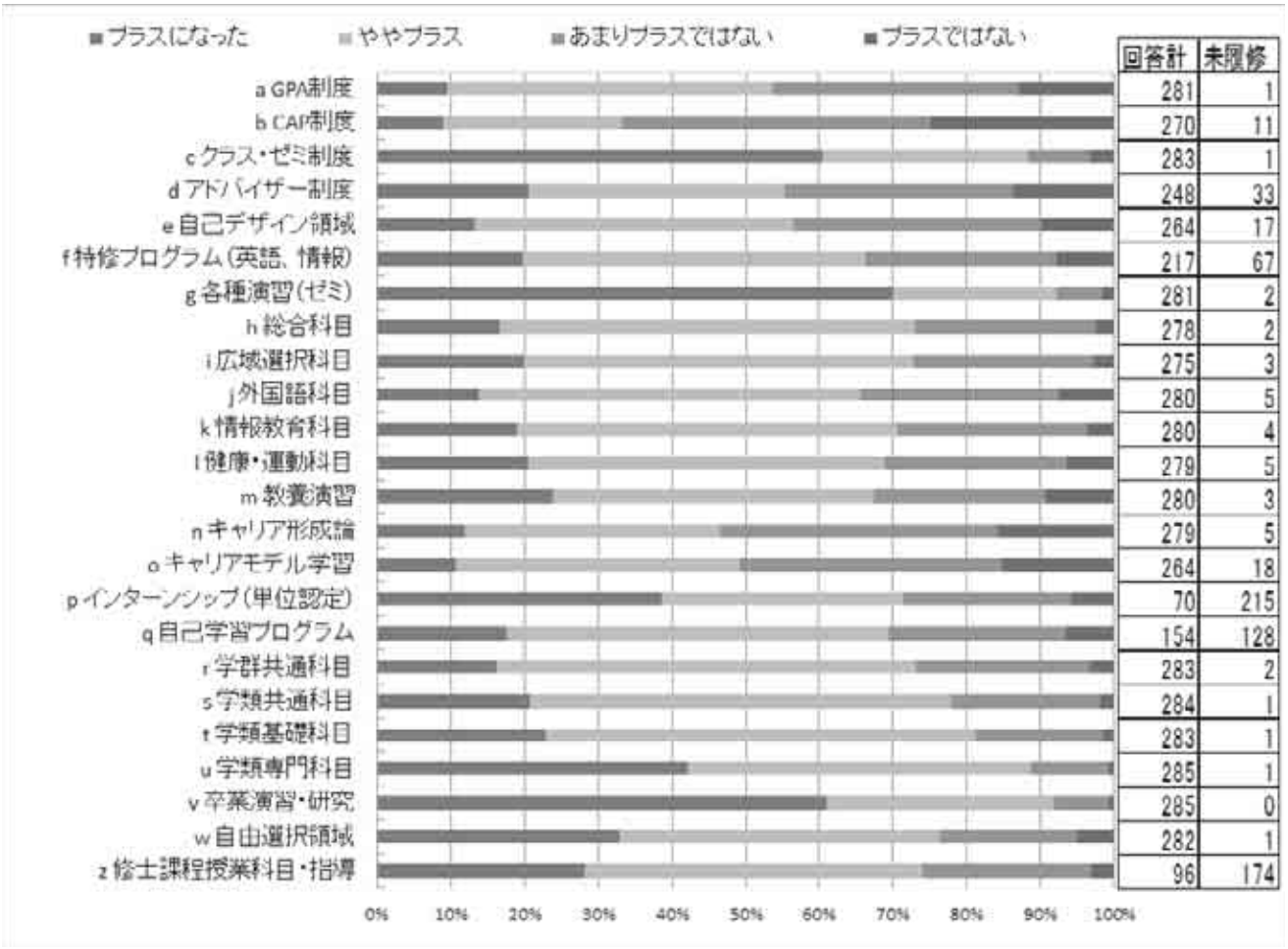


図２：授業内容の必要性



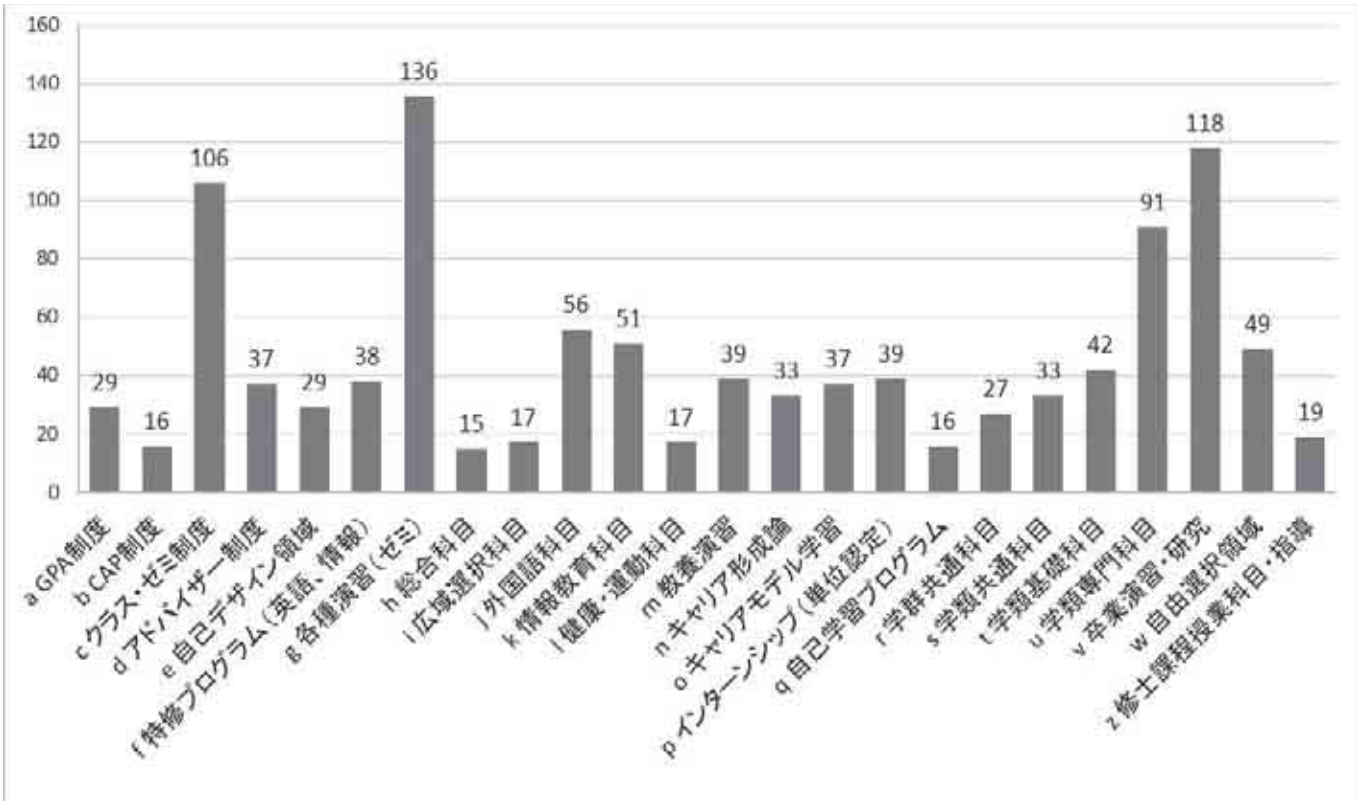
また卒業生調査では、図３・４に示す 24 のカリキュラム内容について、現在の知識や能力にどの程度プラスになったか（4 段階）、今後重点を置くべきか（複数回答）について尋ねている。調査結果から、クラス・ゼミ制度、各種演習（ゼミ）、学類専門科目、卒業演習・研究の評価が非常に高いことがわかる。さらに、これらの項目は、重点を置くべき項目として選択される傾向も強い。反面、CAP 制については、「プラスになった」「ややプラス」を合わせても、3 割程度であり、重点を置くべき項目としても選択者が少ないことがわかる。

図３：福島大学の教育内容の評価—現在の知識・能力にプラスになったか否か



	回答計	未履修
a GPA制度	281	1
b CAP制度	270	11
c クラス・ゼミ制度	283	1
d アドバイザー制度	248	33
e 自己デザイン領域	264	17
f 特修プログラム（英語、情報）	217	67
g 各種演習（ゼミ）	281	2
h 総合科目	278	2
i 広域選択科目	275	3
j 外国語科目	280	5
k 情報教育科目	280	4
l 健康・運動科目	279	5
m 教養演習	280	3
n キャリア形成論	279	5
o キャリアモデル学習	264	18
p インターンシップ（単位認定）	70	215
q 自己学習プログラム	154	128
r 学群共通科目	283	2
s 学類共通科目	284	1
t 学類基礎科目	283	1
u 学類専門科目	285	1
v 卒業演習・研究	285	0
w 自由選択領域	282	1
z 修士課程授業科目・指導	96	174

図４：福島大学の教育内容の評価―今後の重点を置くべきか（選択者数）

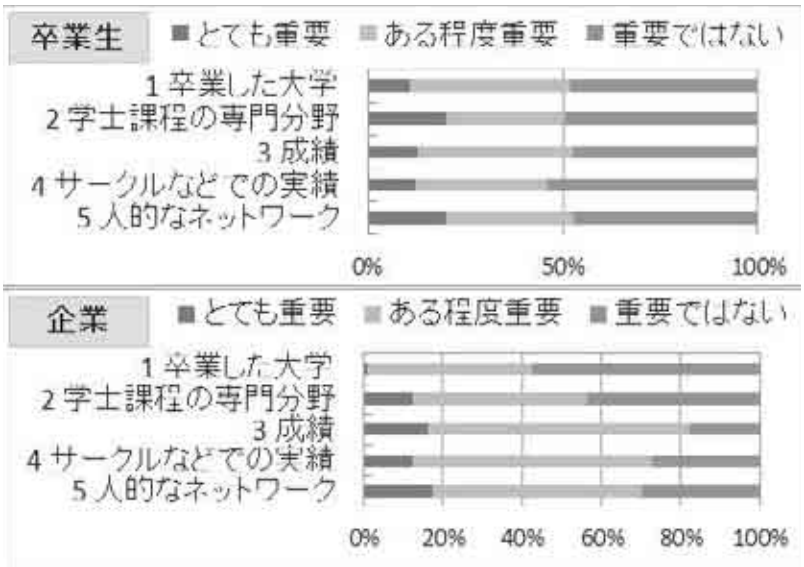


なお大学の教育制度・科目は、直接的な職業訓練とは異なる。そのため、卒業後の知識や能力にプラスか否かによってのみ、制度や科目の有効性を判断することは避けなければいけない。また、プラスか否か、もしくは重点を置くべきか否かの判断は、科目の内容だけではなく、大人数授業か少人数授業かなどの、教育条件の差異も反映しうる。これら教育制度や科目に対する調査結果の解釈は、以上の点を踏まえ、慎重を期する必要があることを付記しておく。

３．３　大学時代の経験の重要性

卒業生調査・企業調査に共通する設問として、採用時に評価された点（企業調査では選考時に重視する項目）について、図５に示す５項目の重要性を尋ねた。卒業生は全ての項目において５割近く「重要ではない」と答えるのに対し、企業では成績、サークル実績、人的ネットワークを高く評価しており、両者のギャップがみえる。

図５：採用・選考時の評価点



また、現在の仕事上、大学時代の経験の重要性について、図６に示す 10 項目について尋ねた。ここでは採用時とは逆に、卒業生が卒業論文、アルバイト、ゼミ経験、教員・友人との交流を重要視するほどには、企業がこれらの経験を重視していないことがわかる。

図６：大学時代の経験の重要性

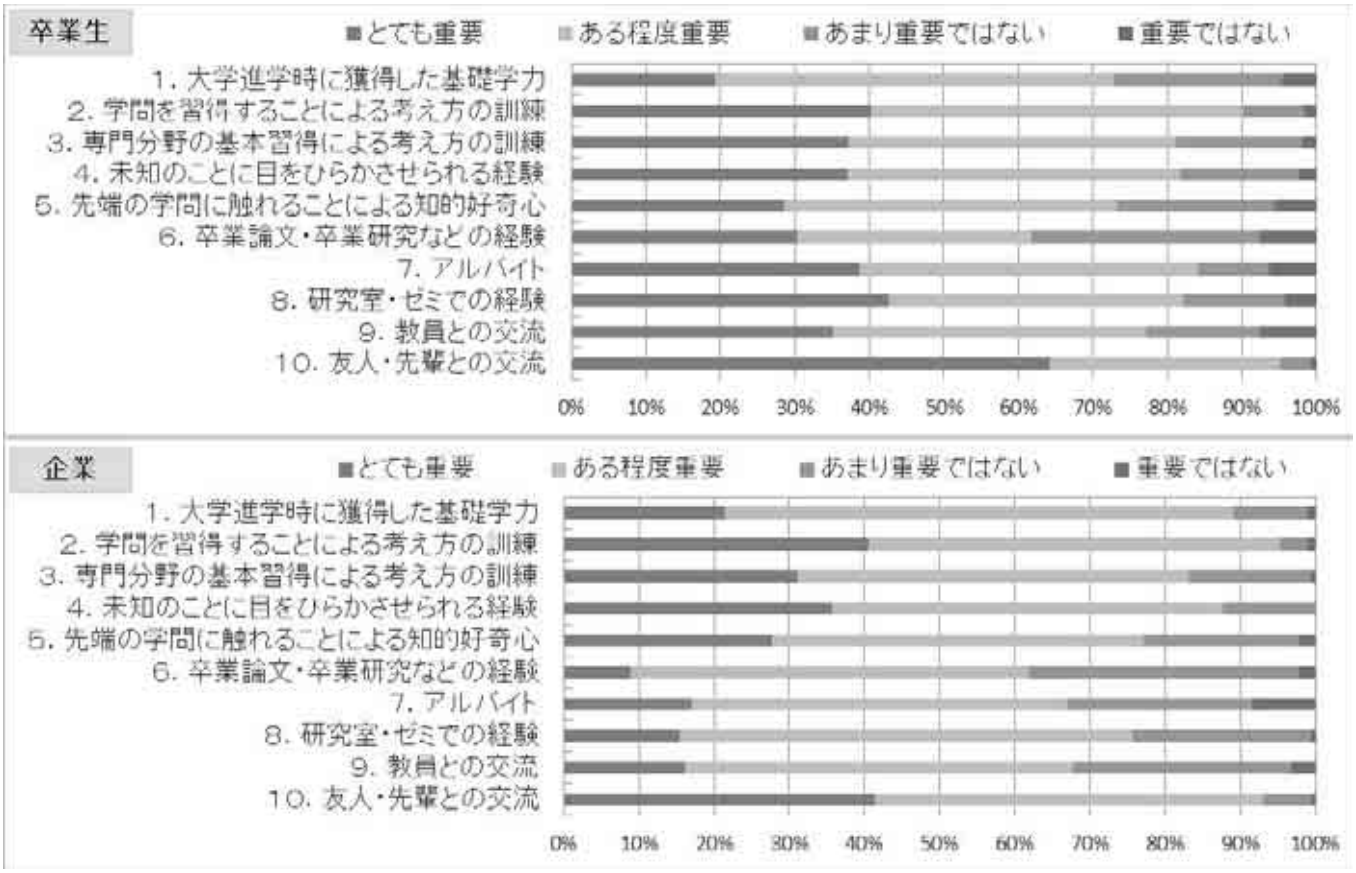


図５および図６に示す設問と、ほぼ同一の内容が、東京大学の大学経営・政策研究センターが行った「全国大学生調査 追加調査 2009」に含まれている[1]。これら全国調査の結果と、福島大学の卒業生の回答を比較してみよう。まず、採用時に評価された点について、「とても重要」「ある程度重要」を合わせた回答者の割合は、「卒業した大学」福島 51.9%・全国 55.5%、「学士課程の専門分野」福島 50.4%・全国 52.3%、「成績」福島 52.7%・全国 48.3%、「サークル実績」福島 46.2%・全国 35.3%、「人的ネットワーク」福島 52.7%・全国 42.3%である。福島大学の卒業生が、サークル実績や人的ネットワークの重要性を比較的強く感じているとの結果となっている。

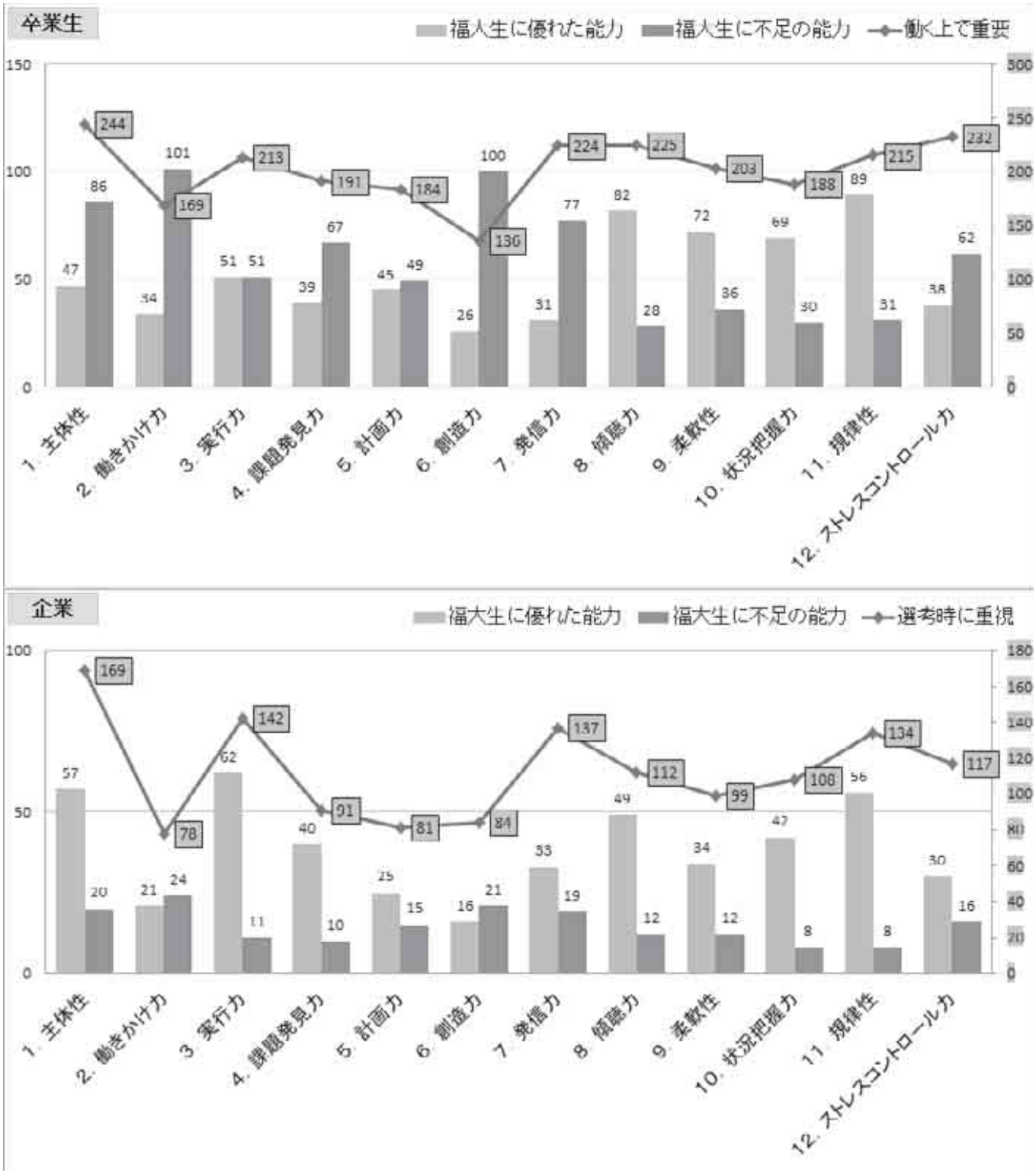
次に、大学時代の経験について、「とても重要」「ある程度重要」を合わせた回答者の割合は、「進学時の基礎学力」福島 72.6%・全国 67.3%、「学問の習得による考え方の訓練」福島 90.0%・全国 82.5%、「専門分野の基本の習得による考え方の訓練」福島 81.2%・全国 71.9%、「未知のことに目をひらかせられる経験」福島 81.7%・全国 78.4%、「先端の学問に触れることによる知的好奇心」福島 73.3%・全国 71.0%、「卒業論文・研究」福島 61.7%・全国 41.0%、「アルバイト」福島 84.1%・全国 64.4%、「研究室・ゼミでの経験」福島 82.1%・全国 50.3%、「教員との交流」福島 77.1%・全国 48.5%、「友人・先輩との交流」福島 95.1%・全国 79.6%である。全体的に福島大学の卒業生の方が、ここに挙げた大学時代の経験を重要と考える傾向があることがわかる。特に、研究室・ゼミでの経験や、教員との交流において、福島大学の卒業生の回答と、全国調査との回答の間で、30%前後の開きがある。

３．４　福島大学卒業生の社会人基礎力

卒業生・企業調査に共通の設問として、社会人基礎力に関する重要性の認識と、福島大生に特に優れた能力・不足の能力について尋ねた。12 の社会人基礎力については、それぞれ「物事に進んで取り組む力（主体性）」

「他人に働きかけ巻き込む力（働きかけ力）」「目的を設定し確実に行動する力（実行力）」「現状を分析し課題を明らかにする力（課題発見力）」「課題解決の過程を明らかにし準備する力（計画力）」「新しい価値を生み出す力（創造力）」「自分の意見をわかりやすく伝える力（発信力）」「相手の意見を丁寧に聴く力（傾聴力）」「意見の違いや立場の違いを理解する力（柔軟性）」「自分と周囲との関係性を理解する力（状況把握力）」「社会のルールや人との約束を守る力（規律性）」「ストレスに対応する力（ストレスコントロール力）」として説明している。卒業生調査では、図７に示す 12 の社会人基礎力が働く上で重要であるか否か、企業調査では選考時に重点を置くか否かについて、複数回答で質問した。また、福島大生に優れた能力・不足の能力については、卒業生・企業調査に共通の文面にて、複数回答で質問した。

図７：社会人基礎力について（選択者数）



まず社会人基礎力の重要性についての意識では、主体性・実行力・発信力・規律性・ストレスコントロール力・傾聴力の評価が高い点で、卒業生と企業が一致している。違いは、企業のほうが、これらの能力（特に主体性）を、働きかけ力・課題発見力・企画力・創造力に比して明確に重視している点である。

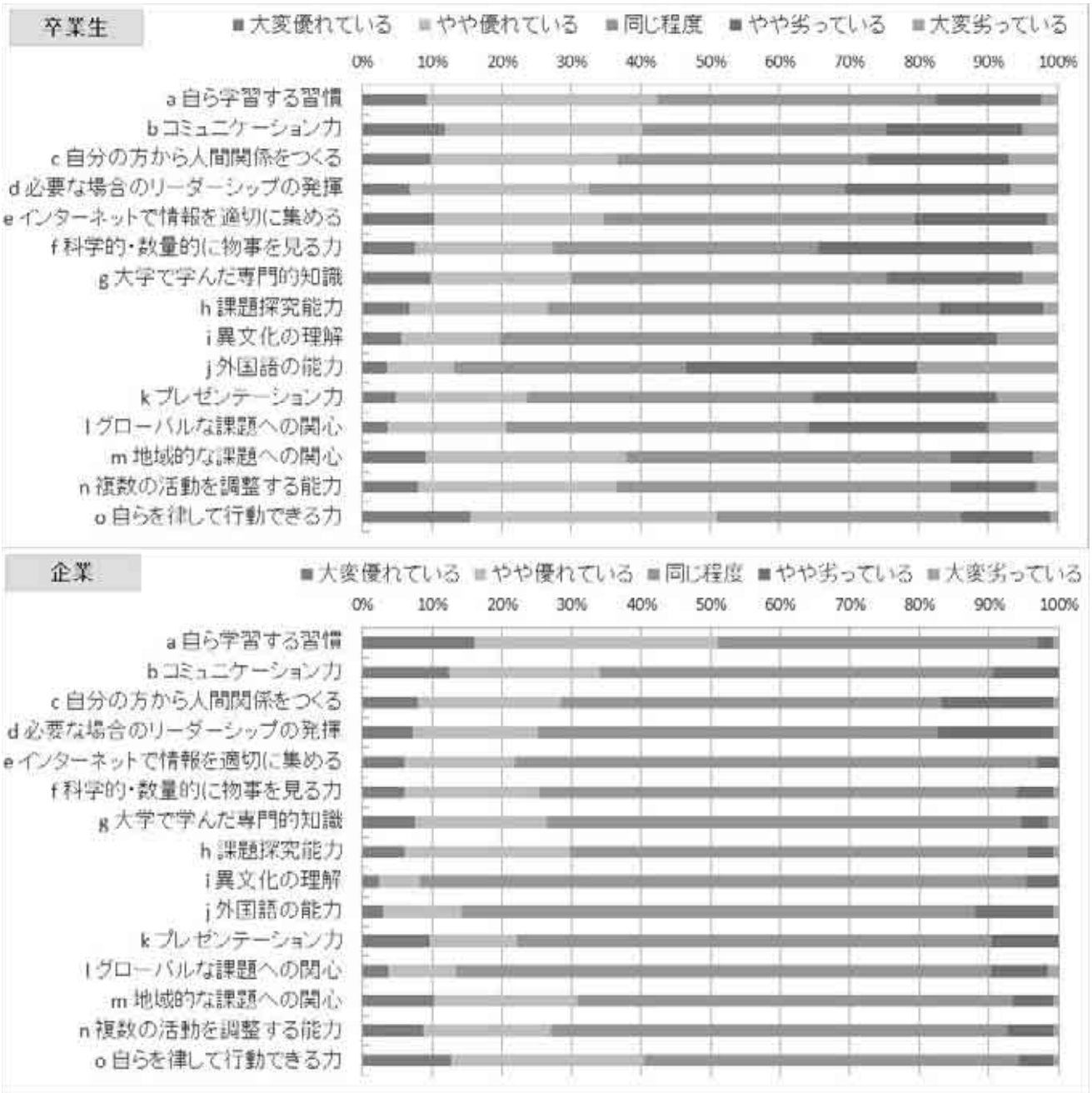
次に福大生に優れた能力・不足の能力についてみてみよう。卒業生では、傾聴力・柔軟性・状況把握力・規律性を、福大生の優れた能力として挙げる者が比較的多い。一方、主体性・働きかけ力・創造力・発信力については、不足の能力として挙げる者が比較的多い。

これに対し企業では、不足としてよりも優れた能力として選択される項目が多く、主体性・実行力・傾聴力・規律生の評価が特に高い。ただし、働きかけ力・創造力において、不足の能力としての選択が、優れた能力としての選択を上回るのは、卒業生と共通する評価である。

３．５　その他の諸能力に関する福島大学生の水準

社会人基礎力の他、図８に示す 15 の能力についても、福島大生の水準を尋ねる質問を、卒業生・企業調査に共通して設けた。卒業生については自分自身の能力と同期入職者との比較から、企業に対しては福島大卒者の能力と同期入職者との比較から、どの程度優れているかについて５段階で質問した。

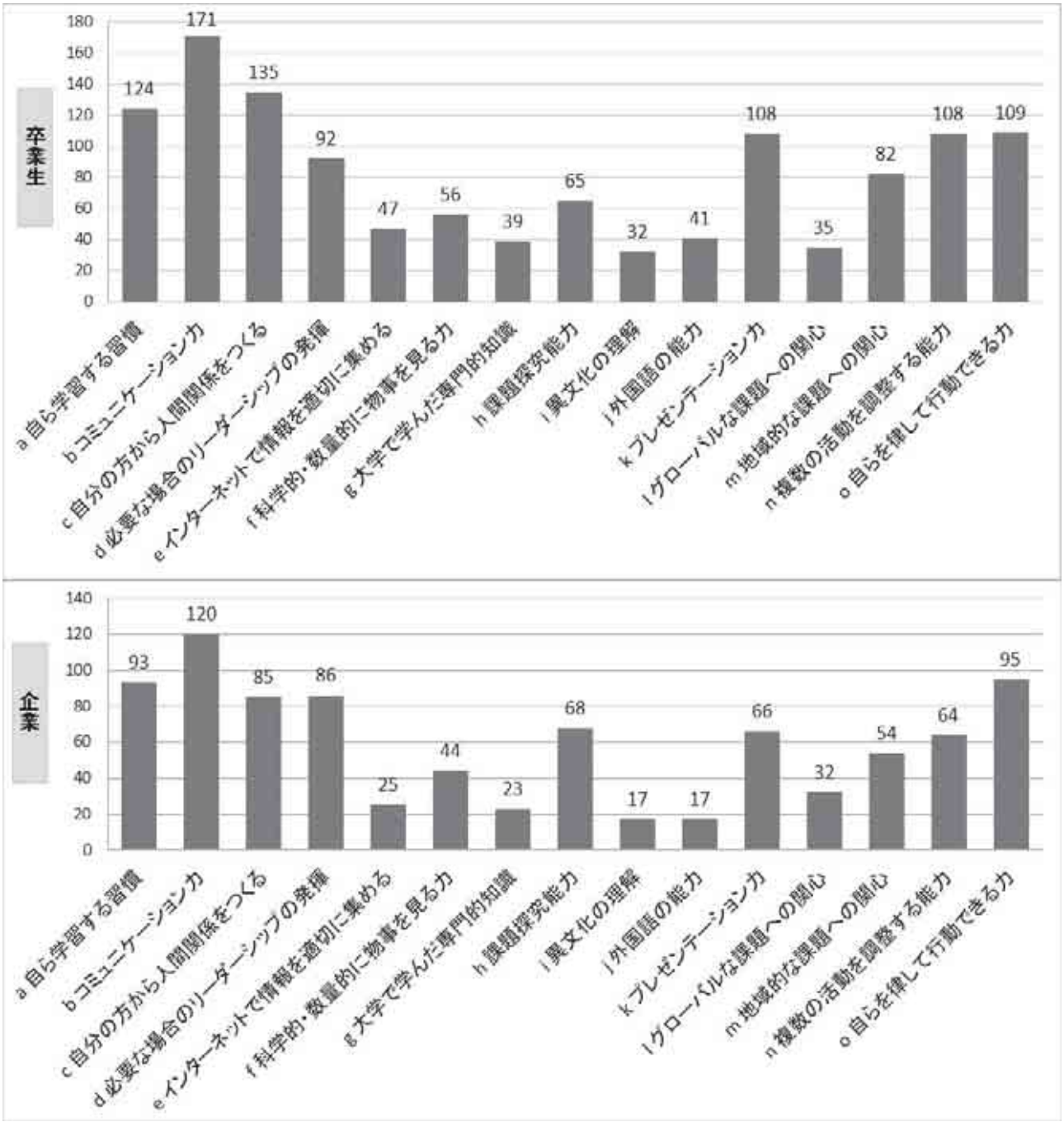
図８：その他諸能力の水準（同期入職者との比較）



「大変優れている」「やや優れている」をあわせた割合は、卒業生と企業において類似の傾向をみせる。「自らを律して行動できる力」（卒業生 51.0%・企業 40.5%）、「自ら学習する習慣」（卒業生 42.4%・企業 51.1%）の評価が高く、「グローバルな課題への関心」（卒業生 20.7%・企業 13.4%）、「外国語の能力」（卒業生 13.1%・企業 14.2%）、「異文化の理解」（卒業生 19.7%・企業 8.4%）への評価が低い。異なるのは、卒業生が全般的に「やや劣っている」「大変劣っている」と考える割合が高いのに対し、企業は概ね「同じ程度」と考える点である。福島大学の卒業生が考えるほどには、採用企業の評価は低いものではないということになる。

また図９に示すように、各能力が重要であるか否かについて、複数回答で尋ねた。各能力の重要性では、卒業生と企業の意識がほぼ一致する点が興味深い。選択率でみると、両調査とも「コミュニケーション力」（卒業生 58.6%・企業 56.9%）が群を抜いて高く、これに「自らを律して行動できる力」（卒業生 37.3%・企業 45.0%）、「自ら学習する習慣」（卒業生 42.5%・企業 44.1%）、「自分の方から人間関係をつくる」（卒業生 46.2%・企業 40.3%）こと等が続いている。このうち、「自ら学習する習慣」、「自らを律して行動できる力」は、卒業生・企業ともに、福島大生に優れた能力として評価した項目でもあり、福島大学において身につけることのできる能力と、社会的期待の一致点として、注目に値する結果である。

図９：その他諸能力の重要性（選択者数）



４．おわりにー結果の考察

最後に本調査によって明らかになった点をまとめておこう。本調査は、卒業生調査の回収率が 18.3%であり、また回答者の４割近くが人間発達文化学類の卒業生である。そのため、福島大学に対する好意や好感が高い卒業生や、人間発達文化学類の卒業生の特徴が、他の学生よりも強く反映されている可能性があることに注意を要する結果となっている。

福島大学の教育に対する卒業生の評価としては、授業内容について、「社会の現実と接する機会」の必要性を強く感じていることが明らかになった。また現在の知識・能力にプラスの影響を与えた教育内容としては、クラス・ゼミ制度、各種演習（ゼミ）、学類専門科目、卒業演習・研究の評価が高い。これらの項目は、今後に重点を置くべき内容として選択される傾向も強い。ゼミや卒業演習は、教員との距離が近しいカリキュラムであり、密接な指導体制が高評価につながるとの仮説が考えられるが、更なる検証が必要であろう。

大学時代の経験については、採用・選考時では、卒業生よりも採用企業において、成績やサークル活動での実績、人的ネットワークを重要であると捉えることが明らかになった。一方、現在の仕事への影響という点では、採用企業よりも卒業生において、卒業論文や、アルバイト・ゼミの経験、教員・友人との交流を重要と考えていた。また、全国卒業生調査の結果と比較した場合、福島大学の卒業生は、採用時におけるサークル実績や人的ネットワークの重要性、および現在の仕事における研究室・ゼミ経験や教員との交流の重要性を、強く感じていることがわかった。

社会人基礎力について、重要性が高く認識されている項目は、卒業生・採用企業の双方において、主体性・実行力・発信力・規律性・ストレスコントロール力・傾聴力であった。また、これら社会人基礎力のうち規律性は、「福大生に優れた能力」として、卒業生と採用企業が共通に選択していた。一方、働きかけ力・創造力については、卒業生・採用企業ともに、「優れた能力」の選択者数よりも「不足の能力」の選択者数の方が上回る結果となった。

社会人基礎力に含まれない、その他の諸能力についての設問からは、卒業生が同期入職者に比べて「劣っている」と考える傾向の強い項目であっても、採用企業では「同程度」と捉える傾向が高いことが明らかになった。また、「自らを律して行動できる力」「自ら学習する習慣」について、卒業生・採用企業が共通して「福島大生に優れた能力」として評価するとともに、仕事上でも重要な能力として捉えていることが明らかになった。

本調査は、回収率や回答者の偏りの点で限界を有しているが、社会人基礎力や汎用的能力において、外から見た福島大生の評価の一端を明らかにした点に意義を持つ。今後は、属性による詳細な分析や、学内外の調査との比較を踏まえて、継続的な調査の改善・実施が課題となろう。特に「福島大生に優れた能力」（自ら学習する習慣、自らを律して行動できる力）が、どのように卒業生に備わるのかについては、入学者の資質や、在学時のフォーマル・インフォーマルな教育成果との関連から、多角的に検証されるべき課題である。

【注】

[1] 同調査は、2009 年 2 月から 3 月にかけて、WEB 調査にて実施された。東京大学大学経営・政策研究センターが 2007 年に実施した「全国大学生調査」の回答者 48233 名のうち、追跡調査への協力を了承した学生・卒業生を対象としている。このうち、調査時点においてすでに卒業しており、かつ就職している（アルバイトを含む）348 名が、本文中にて提示した大学時代の経験に関する設問に回答している。

（記）
本稿は、福島大学教育担当副学長・教務課名にて実施した質問紙調査の分析に基づいて丸山が執筆を行ったものであり、文責は丸山にある。文末ながら、多忙な中、質問紙の配布及び回収を進めていただいた教務課の方々と、調査にご協力いただいた卒業生・企業の方々に、心からの御礼を申し上げたい。

【参考文献】

川嶋太津夫，2008,「学士課程教育の構築に向けてーその論点と課題」『大学教育学会誌』第 30 巻第 1 号，25-28。
福島大学 人間発達文化学類，2011,『人と文化のエデュケーターをめざしてー福島大学・人間発達文化学類の挑戦 2005-2010ー』。
松下佳代編著，2010,『〈新しい能力〉は教育を変えるかー学力・リテラシー・コンピテンシーー』ミネルヴァ書房。
森田道雄，2010,「大学のキャリア教育と教養教育の再定義」『福島大学総合教育研究センター紀要』(8)，87-94。
杉谷祐美子編著，2011,『大学の学びー教育内容と方法』玉川大学出版部。
東京大学　大学経営・政策研究センター，2009,「全国大学生調査　追加調査　2009」http://ump.p.u-tokyo.ac.j

p/crump/cat77/cat82/（2010 年 12 月参照）
東北大学　キャリア支援センター，2007,『卒後 10 年の経験から見た東北大学の教育』
北海道大学　高等教育機能開発総合センター　キャリアセンター，2008,『就職先企業に対する大学教育の成果に関する調査研究』http://ccsup.academic.hokudai.ac.jp/kigyouT.pdf（2010 年 12 月参照）
毎日コミュニケーションズ，2010,「2011 年卒マイコミ新卒採用予定調査」http://job.mynavi.jp/conts/saponet/release/saiyou/2010/（2010 年 12 月参照）

【単純集計と自由記述①：福島大学の教育に関する卒業生アンケート】

Ⅰ．あなたの福島大学（学類）の在学経験と、教育への意識について

問１：福島大学（学類）への入学年と卒業年（西暦)、学類名、コース名

１）入学

入学年	件数
2003	1
2004	4
2005	129
2006	143
2007	5
2008	4
2009	1
未記入	1
合計	288

学類	件数
人間発達文化	109
行政政策	80
経済経営	48
現代教養	4
理工	46
未記入	1
合計	288

昼間/夜間主	件数
昼間	238
夜間主	11
未記入	39
合計	288

２）卒業

卒業年	件数
2007	2
2008	6
2009	133
2010	144
未記入	3
合計	288

学類	件数
人間発達文化	110
行政政策	76
経済経営	49
現代教養	4
理工	45
未記入	4
合計	288

昼間/夜間主	件数
昼間	240
夜間主	8
未記入	40
合計	288

問２：あなたの福島大学（学類）卒業後の在学経験

	件数
1　なし	260
2　福島大学の大学院博士前期課程	13
3　他大学の大学院博士前期・修士課程	6
4　その他	5
未記入	4
合計	288

問３：大学時代の授業について

１）あなたの経験

	多かった	少しあった	あまりなかった	全くなかった	未記入	合計
1　出席を重視	136	135	16	1	0	288
2　小テスト、課題が頻繁	21	166	100	1	0	288
3　厳しい成績評価	11	140	124	11	2	288
4　学生「参加型」の授業	32	138	110	6	2	288
5　課題成果の発表・報告	22	130	120	16	0	288
6　チームでの課題取組み	24	131	115	18	0	288
7　外国語に接する	17	145	117	9	0	288
8　社会の現実に接する	26	97	138	25	2	288
9　理解度や興味への配慮	16	107	142	23	0	288

２）今振り返ってそれは必要だったと思いますか

	必要ない	ある程度必要	とても必要	未記入	合計
1　出席を重視	17	193	76	2	288
2　小テスト、課題が頻繁	18	233	37	0	288
3　厳しい成績評価	32	216	39	1	288
4　学生「参加型」の授業	13	138	137	0	288
5　課題成果の発表・報告	15	158	114	1	288
6　チームでの課題取組み	21	157	109	1	288
7　外国語に接する	15	165	108	0	288
8　社会の現実に接する	5	89	192	2	288
9　理解度や興味への配慮	14	141	132	1	288

問４：以下の福島大学の教育内容は、現在の知識や能力にどの程度プラスになっていますか
また福島大学の教育として今後、どの教育内容に重点をおくべきだと考えますか

	プラスになった	ややプラス	あまりプラスではない	プラスではない	未履修	未記入	合計
a　GPA 制度	26	123	92	36	1	10	288
b　CAP 制度	24	65	111	67	10	11	288
c　クラス・ゼミ制度	167	79	24	9	1	8	288
d　アドバイザー制度	50	85	76	34	33	10	288
e　自己デザイン領域	35	112	87	26	17	11	288
f　特修プログラム（英語、情報）	42	101	54	17	66	8	288
g　各種演習（ゼミ）	194	62	18	4	2	8	288
h　総合科目	46	156	65	7	2	12	288
i　広域選択科目	55	144	64	8	3	14	288
j　外国語科目	37	145	73	21	5	7	288
k　情報教育科目	52	144	70	10	4	8	288
l　健康・運動科目	56	133	68	18	0	13	288
m　教養演習	66	122	62	26	3	9	288
n　キャリア形成論	33	97	101	44	5	8	288
o　キャリアモデル学習	28	102	90	40	18	10	288
p　インターンシップ（単位認定）	26	23	16	4	212	7	288
q　自己学習プログラム	27	80	36	10	125	10	288
r　学群共通科目	46	160	64	9	2	7	288
s　学類共通科目	59	160	56	5	1	7	288
t　学類基礎科目	65	163	47	4	0	9	288
u　学類専門科目	119	132	28	2	0	7	288
v　卒業演習・研究	172	88	19	2	0	7	288
w　自由選択領域	92	122	50	12	1	11	288
z　修士課程授業科目・指導	26	43	21	3	173	22	288

Ⅱ．あなたの現在のお仕事について
（現在お仕事をされていない方は、最後に就かれていたお仕事についてご回答ください）

問５：就職した年

就職した年	件数
2000	1
2008	1
2009	119
2010	131
2011	6
未記入	30
合計	288

問７：勤務先企業等の規模（常用雇用者数）

勤務先企業等の規模	件数
1　29 人以下	15
2　30-99 人	14
3　100-499 人	38
4　500-999 人	16
5　1,000-4,999 人	32
6　5,000-9,999 人	8
7　10,000 人以上	15
8　官庁（国家公務）	13
9　地方公共団体(地方公務)	56
10　学校(教育機関)	46
11　公団・事業団等(準公務)	5
12　その他	2
未記入	28
合計	288

問６：現在のお仕事の職業・職種

業種	件数
1　農林水産業	3
2　鉱業	0
3　建設業	2
4　製造業	9
5　電気・ガス・熱供給・水道業	1
6　情報通信業	11
7　運輸業	7
8　卸売・小売業	15
9　金融・保険業	28
10　不動産業	2
11　飲食店・宿泊業	1
12　医療・福祉	17
13　教育、学習支援業	68
14　複合サービス事業	11
15　他に分類されないサービス業	7
16　他に分類されない公務	63
17　その他	13
未記入	30
合計	288

職種	件数
1　一般事務	107
2　営業・販売業	34
3　サービス職	17
4　技術職	12
5　専門職	56
6　その他	20
未記入	42
合計	288

問８：あなたが現在の職場に採用された際に評価された点として、以下の項目はどの程度重要だったと思いますか

	とても重要	ある程度重要	重要ではない	未記入	合計
1　卒業した大学	28	108	125	27	288
2　学士課程卒業時の専門分野	52	79	130	27	288
3　成績	34	103	124	27	288
4　サークルなどでの実績	31	89	141	27	288
5　人的なネットワーク	53	85	123	27	288

問９：社会人基礎力について(複数選択可)

	働く上で重要と考えられる能力	福大生として優れた能力	福大生に不足の能力
1　主体性	242	47	84
2　働きかけ力	165	32	98
3　実行力	209	51	50
4　課題発見力	187	39	64
5　計画力	179	45	47
6　創造力	132	26	98
7　発信力	220	31	74
8　傾聴力	222	80	27
9　柔軟力	200	71	35
10　状況把握力	184	67	29
11　規律力	211	87	31
12　ストレスコントロール力	227	38	59

問１０：現在のお仕事について、大学時代の経験はどの程度重要だと思いますか

	とても重要	ある程度重要	あまり重要ではない	重要ではない	未記入	合計
1　大学進学時に獲得した基礎学力	51	138	60	11	28	288
2　学問を習得することによる考え方の訓練	105	127	22	4	30	288
3　専門分野の基礎習得による考え方の訓練	96	114	43	5	30	288
4　未知のことに目をひからせられる経験	95	116	42	6	29	288
5　先端の学問に触れることによる知的好奇心	74	115	55	15	29	288
6　卒業論文・卒業研究等の経験	79	81	81	20	27	288
7　アルバイト	101	118	25	17	27	288
8　研究室・ゼミでの経験	110	103	36	11	28	288
9　教員との交流	91	108	40	20	29	288
10　友人・先輩との交流	167	80	11	2	28	288

問１１：同期で入職した同じ学歴の方と比較した場合、自分自身の能力をどのように評価しますか

	大変優れている	やや優れている	同じ程度	やや劣っている	大変劣っている	未記入	合計	重要
a　自ら学習する習慣	23	83	100	37	6	39	288	124
b　コミュニケーション力	30	72	87	48	13	38	288	168
c　自分の方から人間関係をつくる	25	67	90	50	18	38	288	133
d　必要な場合のリーダーシップの発揮	17	65	92	59	16	39	288	89
e　インターネットで情報を適切に集める	26	61	113	46	4	38	288	47
f　科学的・数量的に物事を見る力	19	50	96	76	8	39	288	56
g　大学で学んだ専門的知識	25	51	115	48	11	38	288	39
h　課題探求能力	17	50	142	36	4	39	288	65
i　異文化の理解	14	36	114	65	21	38	288	32
j　外国語の能力	9	24	84	81	50	40	288	41
k　プレゼンテーション力	12	48	102	67	20	39	288	106
l　グローバルな課題への関心	9	43	107	64	25	40	288	35
m　地域的な課題への関心	23	73	115	30	9	38	288	82
n　複数の活動を調整する能力	20	72	120	30	8	38	288	107
o　自らを律して行動できる力	39	90	87	31	3	38	288	109

Ⅲ．あなた自身

問１２：性別

性別	件数
1　男	135
2　女	147
未記入	6
合計	288

問１３：年齢（満年齢）

年齢	件数
22	14
23	125
24	121
25	14
26	2
28	1
29	1
30	1
39	1
53	1
未記入	7
合計	288

問１４：現在の就職状況

就職状況	件数
1　常時雇用の社員・職員	231
2　パート・アルバイト・臨時の社員・職員	23
3　自営業主・家族従事者	1
4　無職・主婦	12
未記入	21
合計	288

問１５：印象に残っている福島大学での教育・授業（自由記述）

・CAP 制度により多く授業受けたい時に受けられない。
・昼間主なので、授業時間帯が昼になるよう時間を調整して欲しい。改善されていたら申し訳ございませんがまだ改善されていなければ改善願います。
・小学校教諭をしています。今思えば大学時代に教員についてもっと知識・実践を増やすべきだったと思います。大学時代、決して理想的とは言えない生活をし、だらだらと生活していましたが、あの 4 年間の過ごし方次第で今後、社会人になった時のツラさが減ると思います。
・新潟のボランティアにいったこと。ゼミでの交流会など。プライベートな時間を仲間と共有できたこと。
・仲間と協力して課題を解決する授業が多く充実感があった。
・キャリア形成論がとても印象にのこっております。入学時の考え方に固執せず視野を広げる事が出来ました。
・教育実習楽しかったです。先生方は熱心に学生に教育していただけ就活にも思いやりのある声かけで将来を考えてアドバイスをいただきました。卒論研究は広い視野で物事を考える大切さを学びました。・卒業論文に関する授業や指導。他人に読ませるために論理的・客観的（科学的？）に文章を構成する大事さや難しさを知った。また、卒論に真剣に取り組み、向き合うかどうかということは、後々影響があると感じた。卒論を急に（3 年後半～4 年）始めるのではなく、入学後から意識できるような体制が必要だと感じました。
・大変お世話になりありがとうございました。大学でいろいろな勉強をさせていただき、昨年 4 月～公務員の仕事につきました。半年間の訓練はきびしかったけれど現在は先輩たちにいろいろ教えてもらい頑張っています。大学でのいろいろな免許を取得したいのでいまでは（＋）になっています。
・仲間と協力して指導案を作り上げた授業や不登校児とのキャンプをした授業など、活動を伴うものはとても印象に残っています。一方で座学で受け身だった授業の内容は覚えていません。学生同士が生き生きと交流し、活動できるのは福大の環境や先生方、学生のようさが活かされているからだと思います。
・クラスの授業で自分のライフプランを考えた授業は楽しかったしたまに思い出して起動修正したりします。
・ゼミの活動で様々な地域へ足を運び、多くの方々から話を聞くことができたのがよかったです。学生の頃からいろいろな職業、年齢の方が触れ合ったことは財産になると思います。その接し方もとても大切です。
・福島大学の学生は学ぶ姿勢が消極的なので積極的に発信ができる癖をつけれるような講義をしてもらいたいです。
・自分で興味ある授業は毎回楽しくやれた。興味ない授業は苦痛だったし、単位は落としましたし、さんざんでした。苦手だからテストができないのは当たり前なのに単位落とすなんてひどい。
・大学なのに高校生のような授業が多かったように感じます。もう少し、学生の主体性というか意見を聞いていただきたいと思うところもありました。また、大学の先生や授業に関しての悩みをもっと気軽に相談できるところがほしいです。予約をとるのが大変でしたので。
・実技科目においては、「できる」「できない」で合格か否かが決まると言う分かりやすい形体が多かったので、動きを見る目が備わったように思う。一度に大人数が受講する科目では、皆出席でも、小テストの点が良くても、試験の点数が悪いと単位がもらえないものもあり、しかし同科目で異なる先生の場合、その評価の基準が違うので、どうにも納得しがたかったという経験があった。

・大学は“自己責任”であるべきだと思いますが、熱心な先生に“管理”されている感じをうけたことも（一部）
・単に就職率を高める教育を行うのではなく、自分を持った学生を大切にしてほしい。
・ゼミが印象に残ってます。課題を研究し、知らない相手にパワーポイントを使ってわかりやすく伝える事が難しく大変な思いをしたことを覚えています。
・興味のない必修科目をとらされるのはイヤでした。興味のある授業とかぶっていたり、他学類の授業は受けれなかったり。時間ができたと思えば就活。もっと時間をうまく使えばよかったと後悔しています。
・仕事柄、エクセルやパワーポイントを多用するが、大学でも多用する機会があったため大変役に立っている。
・就職活動について、いくら本屋インターネットで調べても実際にその職がどういったものかはやってみないとわからないと思います。自分がどんな職業に就きたいか分からない学生も多いと思うので、大学側で職場体験の場を増やして頂ければ学生は助かると思います。
・教授とのコミュニケーションが取りやすく、親身になって対応してくれる。
・専門的な分野への深みが足りない。
・自ら課題や問題点を探究する授業がとても印象的です。実際に街歩きをして、地域が抱えている問題や現状を把握できたことは社会人（公務員）になってからとても役立っています。
・ゼミが楽しかった。もっと、ゼミで勉強したかった。
・インターシップやフィールドワークは就職先を決める上、また面接する上でとても参考になった。
・福島大学に入学し卒業できました事を嬉しく思います。学習、サークル活動、アルバイト、飲み会、ゼミ等々4年間の思い出が社会人になって一番印象に残ります。
・他の国立大に比べると学ぶ事が広く浅くであり、在学中は引け目を感じていたが、社会では幅広い知識と関心が大切な強みになっています。専門的に知っているものなどは、それほど実際は役にたちません。職場やお客様のみなさまと話ができるようなコミュニケーション能力や、社会の動きを見極める力や要領よく仕事をやる能力がとても重要です。福大には仲間との結束力が強い人が多いと思います。そこは評価できるところです。
・キャリア形成論。OB が講師となり仕事をするということを身近に感じられ個人的にはよかったと思う。一方外国語に関しては自由履修にすべき。グローバル社会になっても、就職するのは地元がほとんど。他の授業を履修する方がよっぽど学になる。
・3 コマ使っての授業なのに 2 単位しかもらえない、物理や化学、地学、生物実験はレポートや実験がとても大変でしたが、大学でしかできない体験だったのでとても記憶に残っています。
・日本国憲法→実例を入れて分かりやすかった算数→教育実習にとても役に立った
・たくさん学ばせていただき、また学びたいです。
・人にもよるが、基本的に先生方が学生に対して面倒みがよかったという印象を持つ。先生と話すことでとても勉強になった。今、幼稚園教諭として働いているが、大学での知識は今すぐに使えるものは少ないと感じる。だが、もっと長くこの仕事を続ける中で、大学での学びが役立ってくるのだろうと印象を受ける。
・いい意味で印象に残っているのはやっぱりゼミです。あとは非行臨床論。現場主義がよかった。
・卒業研究はとても印象に残っています。学ぶ楽しさを教えていただきました。福島大学の教育はとてもすばらしいなと改めて感じました。本当にありがとうございました。

【単純集計と自由記述②：福島大学の教育に関する卒業生アンケート】

Ⅰ．貴社の概要

問１：本社の所在地

所在地	件数
福島県	63
東京都	37
宮城県	34
山形県	11
栃木県	9
岩手県	7
青森県	6
茨城県	5
大阪府	5
神奈川県	5
埼玉県	4
千葉県	3
静岡県	3
秋田県	3

所在地	件数
岐阜県	2
群馬県	2
愛知県	2
新潟県	2
長野県	1
兵庫県	1
愛媛県	1
広島県	1
北海道	1
山梨県	1
福岡県	1
未記入	1
合計	211

問２：貴社の従業員数（正社員のみ）

従業員数	件数
1　29 人以下	8
2　30-99 人	23
3　100-499 人	59
4　500-999 人	27
5　1,000-4,999 人	30
6　5,000-9,999 人	6
7　10,000 人	6
8　官庁（国家公務）	5
9　地方公共団体（地方公務）	39
10　学校（教育機関）	6
11　公団・事業団等（準公務）	1
12　その他	0
未記入	1
合計	211

問３：貴社の業種について

業種	件数
1　農林水産業	0
2　鉱業	0
3　建設業	7
4　製造業	20
5　電気・ガス・熱供給・水道業	1
6　情報通信業	18
7　運輸業	4
8　卸売・小売業	27
9　金融・保険業	14
10　不動産業	0
11　飲食店・宿泊業	3
12　医療・福祉	3
13　教育、学習支援業	19
14　複合サービス事業	5
15　他に分類されないサービス業	11
16　他に分類されない公務	64
17　その他	14
未記入	1
合計	211

Ⅱ．貴社の大卒者の採用状況

問４：過去 5 年間の貴社の大卒新卒者の採用者数

	過去 5 年間（2006～2010 年計）		うち 2010 年 4 月入社	
	大学全体の採用数	うち福島大学からの採用者数	大卒全体の採用数	うち福島大学からの採用者数
学部文系	16330	447	3170	138
学部理系	4312	60	832	25
大学院文系	267	14	59	1
大学院理系	3194	7	487	0

問５：過去５年間で採用者数の多い上位３校の大学名

１）文系

大学名	件数	大学名	件数
福島	62	秋田経法	1
東北学院	42	広島経済	1
日本	20	山梨	1
東北	16	神奈川	1
山形	14	日本体育	1
岩手	11	立正	1
明治	8	文教	1
早稲田	8	広島修道	1
新潟	8	ノースアジア	1
法政	7	西南学院	1
東北福祉	6	滋賀	1
いわき明星	6	青森	1
宇都宮	5	独協	1
東洋	5	宮城県立	1
宮城	5	八戸	1
専修	4	甲南	1
関西	4	福島大	1
岩手県立	4	香川	1
宮城教育	4	名古屋	1
弘前	3	共愛学園前橋国際	1
福島学院	3	和様女子	1
高崎経済	3	千葉	1
茨城	3	愛知	1
埼玉	3	高崎健康福祉	1
立命館	3	山梨学院	1
石巻専修	3	共立女子	1
立教	3	東北文化	1
秋田	2	国際医療福祉	1
東日本国際	2	同志社	1
常磐	2	筑波	1
明治学院	2	その他	1
東北芸術工科	2	中京	1
青森公立	2	白鴎	1
横浜国立	2	朝日	1
静岡	2	福岡	1
慶應義塾	2	長崎	1
宮城学院女子	2	駿河台	1
高千穂	2	国士舘	1
仙台	2	文化女子	1
駒沢	2	島根県立	1
関東学院	2	群馬	1
松山	2	近畿	1
亜細亜	2	岐阜経済	1
城西	2	東京	1
大東文化	2	敬和学園	1
郡山女子	2	東京経済	1
帝京	2	東京成徳	1
東海	2	盛岡	1
関西学院	2	國學院	1
成蹊	2	新潟国際情報	1
鹿児島	1	神田外国語	1
岐阜聖徳学園	1		

２）理系

大学名	件数	大学名	件数
日本	37	前橋商科	1
山形	18	八戸工業高専	1
岩手	14	郡山女子	1
福島	11	宮城教育	1
会津	9	大阪工業	1
東北	8	山梨	1
東北工業	8	慶應義塾	1
東北学院	7	南山	1
秋田	6	広島	1
八戸工業	6	日本獣医生命科学	1
新潟	5	長岡技術科学	1
弘前	4	首都大学東京	1
千葉工業	4	長崎総合科学	1
秋田県立	4	福島医科	1
東京農業	3	岩手大学院	1
岩手県立	3	北海道	1
広島工業	3	東京	1
前橋工科	3	北里	1
東京理科	2	愛媛	1
東京工科	2	城西	1
宮城	2	東京情報	1
茨城	2	新潟青陵	1
千葉	2	神奈川	1
大阪市立	2	静岡	1
近畿	2		
筑波	2		
京都	2		
東海	2		
早稲田	2		
立命館	2		
北見工業	2		
いわき明星	2		
明星	2		
日本美	1		
佐賀	1		
名城	1		
信州	1		
東北大学院	1		
玉川	1		
福島高専専攻科	1		
明治	1		
国際医療福祉	1		
岡山理科	1		
東北工	1		
金沢工業	1		
芝浦工業	1		
九州工業	1		
宇都宮	1		
熊本	1		
京都工芸繊維	1		
群馬	1		
東京電機	1		

問６：現在の景気状態と仮定して、将来にわたって福島大学からの採用者数について

	福島大学生の割合を増やしたい	現在と同じ程度の割合	福島大学生の割合を減らしたい	今後の採用の予定はない	未記入	合計
学部文系	50	70	1	15	75	211
学部理系	48	49	0	22	92	211
大学院文系	26	44	0	39	102	211
大学院理系	35	38	0	36	102	211

問７：貴社では、大卒者の選考時に、下記のようなことはどの程度重視していますか

	とても重要	ある程度重要	重要ではない	未記入	合計
1　卒業した大学	2	78	107	24	211
2　学士課程卒業時の専門分野	23	82	82	24	211
3　成績	30	123	33	25	211
4　サークルなどでの実績	23	111	50	27	211
5　人的なネットワーク	32	97	55	27	211

Ⅲ．貴社で採用した大卒者の働く上での能力について

問８：次の社会人基礎力につて、貴社が大卒者の選考時に重視するのはどの能力ですか（複数回答可）

	選考時の重点	福大生に優れた能力	福大生に不足の能力
1　主体性	169	57	20
2　働きかけ力	77	21	23
3　実行力	140	62	10
4　課題発見力	89	40	9
5　計画力	79	25	14
6　創造力	83	16	20
7　発信力	136	33	18
8　傾聴力	110	48	12
9　柔軟力	98	33	12
10　状況把握力	107	41	8
11　規律力	132	55	8
12　ストレスコントロール力	115	28	16

問９：貴社で働くうえで、以下の大学時代の経験はどの程度重要だと思いますか

	とても重要	ある程度重要	あまり重要ではない	重要ではない	未記入	合計
1　大学進学時に獲得した基礎学力	41	129	19	2	20	211
2　学問を習得することによる考え方の訓練	77	104	7	2	21	211
3　専門分野の基礎習得による考え方の訓練	59	99	31	1	21	211
4　未知のことに目をひからせられる経験	67	98	23	0	23	211
5　先端の学問に触れることによる知的好奇心	52	93	39	4	23	211
6　卒業論文・卒業研究等の経験	17	100	68	4	22	211
7　アルバイト	32	94	46	16	23	211
8　研究室・ｾﾞﾐでの経験	29	114	45	1	22	211
9　教員との交流	30	96	54	6	25	211
10　友人・先輩との交流	78	97	12	1	23	211

問１０：貴社が採用した大卒者の働く上での能力について、福島大学と他大学を比較して感じていること
また、これらの項目は貴社で働く上での重要だと思いますか

	大変優れている	やや優れている	同じ程度	やや劣っている	大変劣っている	未記入	合計	重要
a　自ら学習する習慣	22	48	63	3	1	74	211	93
b　コミュニケーション力	17	30	78	13	0	73	211	120
c　自分の方から人間関係をつくる	11	28	75	22	1	74	211	85
d　必要な場合のリーダーシップの発揮	10	25	80	23	1	72	211	86
e　インターネットで情報を適切に集める	8	21	100	4	0	78	211	25
f　科学的・数量的に物事を見る力	8	26	92	7	1	77	211	44
g　大学で学んだ専門的知識	10	25	90	5	2	79	211	23
h　課題探求能力	8	32	88	5	1	77	211	68
i　異文化の理解	3	8	115	6	0	79	211	17
j　外国語の能力	4	15	99	15	1	77	211	17
k　プレゼンテーション力	13	17	92	13	0	76	211	66
l　グローバルな課題への関心	5	13	103	11	2	77	211	32
m　地域的な課題への関心	14	14	14	14	14	141	211	54
n　複数の活動を調整する能力	12	25	90	9	1	74	211	64
o　自らを律して行動できる力	18	39	76	7	1	70	211	95

問１１：福島大学の学生に、在学中身につけてほしいこと　（自由記述）

・素直で育てやすい人材が多いというのが印象です。反面もう少しガツガツしてても良いのでは？と感じる時もあります。
・福島県内にとどまらず、幅広い視野で物事を判断し、社交性ならびに競争力（よい意味）を兼ね備えた人材育成を希望したいところです。昔から比べますと福大生の魅力「一目おかれる存在」は薄れてきているように思います。「レベルアップ」を目指して頂きたい。私事ですが高校生の息子がおりますが「福大」は近いけれども、行きたいという魅力、卒業してからのビジョンが見えないという理由に他県国立大を目指しています。
・会社に就職したことで、自分はどうなりたいのか、何を実現したいのか、何をしたいのか、この部分が不明確であると、入社後活き活きと働けない。目標を見つけることはできなくなる。大学 3,4 年になってからでも遅くはないので、この事をよく考え選考、自分の人生の選択をして欲しい。
・全ての大学生に対してですが、自ら時間を作って独習する習慣を身につけて欲しいです。
・コミュニケーション能力と相手の立場になって物事を考える習慣、物事を客観的にみる目など
・英語力の修得　ex.TOEIC（Must　470 点以上、Want　600 点以上）
・学生時代にしか体験できない学び、廻りとのコミュニケーションにて自分自身を磨き、これからの人生計画を明確にして就職活動をしていただくことを期待しています。
・素直で真面目な学生が多いことは間違いないのですが、コミュニーション力をなお一層身につけていただけることを希望します。
・学生時代にしかできない様々な経験を積んでいただきたいと思います。
・一般的な要望になりますが、自ら課題を発見し、その解決に向けて計画を立て実行できる能力や、周囲から自分に対する理解し協調して物事に対処できる能力を身につけて欲しいと思っています。
・自分を福島大学の学生ということに自信と誇りを持つことはよいが、慢心と自惚れに至ってはいけない。個人の力は一人で絶対的に少ないのが普通。「私が」、「私の力で」と言うような自らを計る「ものさし」の無いような発言をする学生がたまにいる。「虚心坦懐」と「立場」、「社会における個人」について良く理解し人を見下す姿勢はあってはならない。
・明るく元気なあいさつができること。
・アルバイト、部活、研究等何かに打ち込む経験。
・教務指導に必要な専門的教養と教師として不可欠な社会的教養です
・物流現場においても多くの人とチームで上手く仕事ができるリーダーシップ
・海外事業の拡充に向けたグローバルな知識・能力を持ち合わせた大学生
・当社で福島大学の学生は本年度が初めてであったが、非常に優秀な学生である。採用は工学部の学生が中心であるため、採用人数の増加は難しいが、（電気、機械中心）事業展開で必要となった場合は採用に力を入れたい。
・社会にでる前段階としての幅広い経験、人との触れ合い、それで生み出されるたくましさに期待したい。福島大学生に限った話ではないが…
・基礎学力の他に研究室、ゼミ、サークル等の人間関係の中でリーダーシップを発揮できるような学生を望みます。

・将来の職業観をしっかりと持ち在学中は勉強、スポーツ、人間関係等々、社会人になる前の準備をして頂きたいと思います。
・地域と協働による課題解決
・福島大学の学生に限らず、コミュニケーション能力、協調性など色々な経験を通して身につけて欲しいと思います。
・社会人になった時に、自ら課題を見つけ、周囲を巻き込んでその課題を解決できる人間になるよう、学習、サークル、ゼミ、研究室、アルバイト、部活等での活動を通じて自ら考え、主体的に行動することを徹底的に繰り返して下さい。
・基礎学力と専門知識、コミュニケーション能力（相手の考えを正確に把握し、自分の考えをきちんと伝えられる能力）
・学内設備を正しく綺麗に使用すること（規律を守る）
・当事業所へは優秀な人材が応募してくれてますので、特にはないですが、あいさつが一番基本だと思います。その辺の指導等をお願いします。
・自分の頭で考え、判断し、行動する力、ただ単に授業のプログラムにのっとっているだけでは身につきにくいと思います。
・学問的な知識はもちろんですが、人として心の豊かな学生を育てて頂けたらと思います。
・コミュニケーション能力
・福島大学に限らないが、全ての学生に幅広い視野と柔軟な見識を身につけ、協調性を維持しつつバランスのとれた人間になり社会人になって欲しい。
・職員採用試験（一次試験合格後二次試験の通知するも無断欠席する学生がいる。大変遺憾である。）基本的なマナーであり、次年度以降の採用に悪影響を及ぼすので指導願いたい。
・自分をアピールする力
・もっとアルバイト等を通じて社会に出る前にある程度の社会的常識を身につけさせてほしい。アルバイトをするというのも学生時代に経験しておかなければならない重要な学習の１つだと思う。福大は学生がアルバイトをすることに良い顔をしないというが、それは是正すべき点だと思う。

第４章
学習支援システムの構築

１．福島大学におけるＬＭＳの活用・・・・・・・ 109
２．学習ガイドブック「学びのナビ」・・・・・・・119
３．「学びのナビ」における
　　学習ポートフォリオの活用・・・・・・・・ 159

１．福島大学におけるＬＭＳの活用

・福島大学では 2007 年から 2010 年にかけて、ＬＭＳ「e-Friend」の一部学類での試用を行った。試用の結果、学習時間の確保など、教育の質保証におけるＬＭＳの可能性が明らかになる一方で、運用コストや学内体制の整備など、継続利用のための課題も浮き彫りになった。今後、ＬＭＳや e-ポートフォリオなどの学習支援システムを本格導入するうえでは、今回の試行により明らかになった課題を踏まえて、継続的な運用体制の構築を図る必要がある。

福島大学における今後の LMS の活用について－「福島大学スタンダード」との関係を中心に－

2011.1.31　総合教育研究センター　丸山和昭

１．報告の経緯－福島大学における LMS 利用の問題

本報告は、福島大学において 2007 年より導入された Learning Management System（以下、LMS）について、現状の問題点と今後の活用可能性を、特に「福島大学スタンダード」構築との関係から整理したものである。

LMS は、Web システムを介して、対面式授業を補完するツールである。教員と学生、及び学生同士のコミュニケーションの活発化を促す目的から、多くの教育機関（岐阜大学、広島大学、山形大学、岩手大学、信州大学 etc）において導入されている。LMS には企業より提供される有償サービスと、オープンソースの無償システムなど、様々なシステムがある。福島大学では Blackboard 社の有償システム（先に山形大学に導入されていた）を人間発達文化学類で試用することとし、愛称を「e-Friend」とした。

e-Friend では、①情報の交換、②学習材や教材の提供と閲覧、③学習の進捗や習熟度の管理と閲覧、などの機能が提供された。実際に e-Friend を授業に活用した教員からは、「授業時間以外での学習を促すのに有効」「教育実習による学生の不在時に役立った」「ゼミの参考文献提示がスムーズになった」などのメリットが報告されている。また、当該授業を受講した学生からは、授業評価において e-Friend に対しての好意的な回答が得られた。

しかし、実際に e-Friend を利用している学生・教員は、ごく一部に止まっている。最も利用者数が多かったのは 2009 年の４月（教員 15 名、学生 154 名）であるが、それ以降は右肩下がりに減少している（2010 年４月：教員３名、学生 13 名⇒同年９月：教員１名、学生６名）。利用者減少の主たる原因は、e-Friend を授業に活用する教員の減少である。e-Friend を利用しない理由として、教員側からは、「操作が難しい」「自分の授業には必要がない」「時間がもったいない」との声が挙げられている。

また、Blackboard 社との契約条件、及び福島大学における遠隔授業の位置づけも、e-Friend の積極的な活用を妨げる要因である。他大学では、LMS を学内のみならず、卒業生とのネットワーク形成や、大学間連携における遠隔授業のツールとして活用している。しかし、福島大学における Blackboard 社との現在の契約条件は、人間発達文化学類・研究科の教員と学生に限られるため、卒業生が利用することはできない。加えて、福島大学では、LMS を利用した遠隔授業に対する単位認定という議論が行われていないため、LMS を活用する余地が狭い（信州大学、香川大学等では、単位認定が認められている）。

以上、LMS には、「コミュニケーションの活発化」、「授業時間外の学習」、「卒業生とのネットワーク形成」、

「遠隔授業における活用」といった可能性があるが、福島大学では①低い利用率、②利用範囲の制限等において問題を抱えている。LMS 利用については、所期の目的を達成しているとは言い難い状況であり e-Friend の利用停止を含め、見直しを図る必要がある。

２．システム管理者からの提案（詳細は末尾に添付の「e-Friend 報告書」を参照）

e-Friend の運用に当り、サポート兼システム管理者１名が配置されている（2008 年 2 月から株式会社パソナより派遣。2009 年以降はマンパワー・ジャパンからの派遣に移行。契約は 2011 年 3 月まで）。 e-Friend の利用率が低いことを踏まえ、システム管理者からは、①現行システムを普及させるための対策、②Blackboard 以外での LMS 運用、③LMS を選ばない、の３つの選択肢が提案されている。

①現行システムを普及させるための対策

まず、現行の e-Friend を継続して利用する場合の対策としては、「１．全学導入」、「２．推進チームの構築」、「３．学生サポーターの導入」の三つが必要である。「１．全学導入」については、コストアップを伴う。しかし、LMS に掲載される情報量も増加するため、現在の「一部の学類で、一部の機能だけを利用している」状態よりは、費用対効果は高まる。「２．推進チームの構築」については、個々の授業者に任せるのではなく、事務担当者も含めた検討チームを立ち上げる。他のシステムが連携することで、大学全体に関わる安定した情報共有システムとして活用できる。「３．学生サポーターの導入」では、授業サイトの構築に学生を活用することで、教員負担を軽減する。たとえば、帝京大学では、Blackboard 活用のサポート役として、学生アシスタント制度を採用している。

②Blackboard 以外での LMS 運用

LMS を継続したいが、契約費を軽減したい場合、「１．無償のシステム」もしくは「２．安価な有償システム」への移行が考えられる。「１．無償のシステム」としては、Moodre、Sakai、Attain３などがある。無償システムの場合、契約費の問題がないため長期利用が可能である他、福島大学仕様に改変することもできる。ただし、安定した運用を行うためには、LMS を構築しているプログラム言語を理解できる人員を配置する必要がある。すなわち契約費の代わりに人件費を考慮しなければならない。（現在、システム管理者によって Moodle の試験運用が行われているが、スムーズな運用には時間がかかる）。

「２．安価な有償システム」としては、Blackboard の契約費の半分以下で、基本的な機能を網羅している WebClass がある。無償システムのような人件費問題が発生しないため、確実なコストダウンを図ることができる。なお、無償にしろ有償にしろ、普及のためには①で挙げた対策が合わせて行われる必要がある。

③LMS を選ばない

福島大学の教員にとって、学外への情報発信のニーズは高いが、LMS の特色である学習進捗状況・習熟度の管理には関心が低い。情報発信のツールとしては、LMS にこだわる必要がない。「１．Web サイトやブログを開設（従来どおり）」「２．大学が SNS を運営する（安全なシステム）」「３．e ポートフォリオの実現（SNS に加え学習成果の蓄積と振り返りを図る）」といった選択肢が考えられる。

３．考察—LMS と「福島大学スタンダード」

ここでは、システム管理者からの提案を踏まえ、福島大学における今後の LMS 活用について考察する。結論から述べるならば、現行 LMS は「福島大学スタンダード」との関連は弱いものの、LMS の効果として指摘される「授業時間外の学習」の促進は将来的に大学教育の質を表す指標として重要性を増すことが予想されるため、改めて全学レベルでの取り組みが求められる。

①「福島大学スタンダード」と ICT

「福島大学スタンダード」の目的は、スタンダードの策定を進めつつ、学類ごとの専門性の陶冶をスタンダードの上位概念として位置づけ、全学教育の充実と構造化を図ることとしている。大学教育の構造化を進める他大学の取組みの中には、カリキュラム体系化のツールとして ICT （情報通信技術：Information and Communication Technology）を活用した先進的な事例がある（参考．山形大学／福井大学）。しかし、利用されている技術は e-ポートフォリオであって、LMS ではない。LMS は授業の補助ツールとしては有効であるが、「福島大学スタンダード」の目的に照らし合わせた場合、別のシステムの選択が適切である。

なお、福島大学では現在、教務情報システムの刷新が計画されている。他大学の事例では、成績評価システムと学習成果の「見える化」の連動（山形大学）や、シラバス入力システムとカリキュラムマップの連動（信州大学）が成果を挙げている。「福島大学スタンダード」における ICT 活用も、教務情報システムとの連携の下に進めていくことが望ましい。システムの刷新にあたり、e-ポートフォリオ等の機能をオプションとして追加することも、検討する必要がある。

②「授業時間外の学習」と LMS

しかし、LMS の効果として指摘される「授業時間外の学習」の促進については、スタンダード構築との関連は弱いものの、将来的に大学教育の質を表す指標として重要性を増すことが予想される。2008 年の中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」では、授業時間外の学習を含めた単位制度の実質化のため、大学側に学生の学習時間の自己点検・評価活動を求めている。読売新聞社の『大学の実力 2011』における全国大学調査でも、シラバスにおける授業外の課題の明示が評価項目に加えられている。

LMS は、授業内容（映像資料含む）や教材を自宅にて確認することができるため、授業時間外の学習を促すツールとして有効である。また、学生がシステムを利用した日数・時間帯が記録されるため、授業時間外学習の実態把握や、取り組み成果の可視化が容易にできる。他大学でも、無償システムである Moodre を用いた学修履歴の可視化の構想（信州大学）や、在宅学習での利用（香川大学 etc）が行われている。「授業時間外の学習」の促進に ICT を利用する場合、LMS の活用は有力な選択肢である。

③LMS と全学レベルでの取り組み

以上により、LMS に対しては、「授業時間外の学習」の促進・可視化の観点から、別途、全学レベルで取り組みを検討する余地がある。

この際、福島大学における過去３年間の LMS 試用経験を活かす必要がある。“一部の学類に限定し、個別の教員に任せる”運用では、投入されたコストにも関わらず、ほとんど活用されることがなかった。システム管理者が提案するように、①全学的な導入、②推進チームの構築、③学生サポーターによる教員負担の軽減、といった対策が必要であろう。特に、推進チームによる教員側ニーズの掘り起こし、及び意識改革を含めた普及活動が行われなければ、「授業時間外の学習」に LMS を活用したとしても、高い費用対効果を挙げることは困難であると考えられる。

４．福島大学における今後の ICT の活用について

過去３年間の福島大学における LMS の試用は、ICT 活用における問題を浮き彫りにした。「授業時間外の学習」に ICT を活用するとしても、現行 LMS を継続するのか、安価なシステムに移行するべきか、または LMS 以外のシステムを選択するかについては、必要とされる機能、及び予算状況を踏まえたうえで、厳しく検討される必要がある。

限られた予算下での ICT 活用は、専門的な人材の配置と、無償システムによる運用が望ましい。無償システムに移行した場合、契約上の利用者数の制限がなくなるため、全学的な導入の他、「卒業生とのネットワーク」、「遠隔授業における活用」といったニーズに柔軟な対応が可能となる（ただし、システムの拡大にはハー

ドの拡張が必要なため、全くコストがかからないわけではない。また、授業時間外の学習への活用と同様に、普及・定着のためには、全学的な合意と推進チームの働きが欠かせない)。

無償システムを利用する場合には、人件費の発生が避けられないが、中長期的な人材配置が実現した場合、システム運用及び大学における ICT 活用に関するノウハウの蓄積が期待できる。目まぐるしく変化する情報通信技術や、新たな大学への要求に対応するためには、個別のシステムの契約費に予算を投じるよりも、多彩な ICT から福島大学のニーズに適した技術・システムを選択し、再構築できるような人材を配置・育成する方が、より有益な投資であろう。

【参考：e-Friend 報告書】

～福島大学での Blackboard 導入からこれまでと問題点について～

2010.4　福島大学 e-Friend サポート担当

はじめに

2007 年、在学生向けの授業の事前及び事後学習補助、授業者との連絡手段、卒業生の活動サポートを目的とした Learning Management System（以下、LMS）の導入が検討され、海外でのトップ主エアであり山形大学でも導入されていることから、Blackboard 社の「Blackboard Academic Sweet」を人間発達文化学類で試用することとし、愛称を「e-Friend」とした。

本書では、Blackboard 社の LMS を導入してからこれまでについて報告し、問題点を考察した。

また、本書後半には、提案策も付け加えさせていただく。サポート担当者からシステムの運用方針を提案するなど出すぎたことをと承知しているが、伏線、事情もよく知らない門外漢からの一言ということでご容赦いただきたい。

１．報告

・導入からこれまで

◆契約内容

Blackboard 社の LMS を利用するには、年毎に契約を結ぶ。契約金は利用する機能と学生の利用者数によって設定されている。2007 年の試用開始時、福島大学 e-Friend では「Blackboard Academic Sweet」を利用していた。2009 年度から契約費の負担を軽減するため、最小限の機能だけを提供する「Blackboard Learning System」を、最小限のライセンス数（人間発達文化学類及び人間発達文化研究科の授業者と学生・大学院生が利用できる数）で利用する契約とし、2010 年度も同様の契約内容としている。現時点の Blackboard 社との契約費は、利用できる最大の学生数で換算すると、学生 1 人当たり月額 181 円となる。

◆サポート活動

2007 年、Blackboard 社の LMS「Blackboard Academic Sweet」試用開始に伴い、人間発達文化学類の授業者にはログイン用の ID とパスワードを紙ベースで配布した。サポート範囲拡大とシステムの利用促進のため、2008 年 2 月よりサポート兼システム管理者 1 名を配置した。

2008 年 10 月には、授業者向けの説明会を情報処理センターで実施した。授業者の操作は学生に比べれば難しく、システムの性質上、授業者の授業サイトが充実していれば、学生が興味を持ち、継続してシステムを利用しないため、授業者向けの説明会となった。開催に際しては、事前に人間発達文化学類の授業者へ紙とＥメールで案内と資料を配布した。定員 22 名の IPC2 で開催し、授業者は 10 人弱が参加した。授業者と同じよう

な学生を一斉に集めて開催する説明会は実施していないが、授業者からのリクエストによる1回数人規模の初期レクチャー（ログインの仕方、課題の提出方法、掲示板の使い方などの15分未満のもの）を数回実施した。

2010年1月より、LMSの比較としてフリーでオープンソース（以下、OSS）の「Moodre」をバックアップサーバに設置し、Blackboardにリンクを掲載しているが、授業者からの問い合わせは無い。

◆利用者推移

BlackboardのLMSでは、もともと簡易なログ情報を提供しているが、利用者状況を詳細に把握するため、2008年12月よりログデータを収集し、編纂する作業を開始し、結果をBlackboardで公開している。掲載している情報をもとに、下グラフ「図1　月別利用者数」を作成した（グラフ略）。グラフが示すとおり、2009年4月に最も利用者が多く、以降は右肩下がりに減少し、2009年10月には、4月の3割程まで利用者が減少していることがわかった。

授業者については、グラフより、2009年4〜6月までログインはしてみたものの、その後、継続して授業に取り入れるに至らなかったと推測される。

学生については、Blackboardに掲載するためのログ情報を収集、編纂していると、こまめにログインする学生や、真夜中、早朝にログインする学生がいることが読み取れた。しかし、下グラフより、授業者の利用が減少すると、徐々に学生の利用者も減少していることがわかる。

２．問題点

・授業者

◆授業者がBlackboardの利用を渋る3つの理由

2008年10月に説明会を開始し、2009年4月の時点で、Blackboardに興味を持つ授業者が多かった。主に、授業資料の提供、課題の回収、アンケートの回収、掲示板利用による授業者と学生との対話の場及び学生同士の対話を提供することを目的として利用し始めているようだったが、すぐに利用をやめてしまうケースが多かった。その主な理由は、次の3つである。

1つ目は、「操作が難しい」という理由である。1つの授業に対して1つのサイト群が用意されているというシステムの概念を理解しづらく、授業者特有の「コントロールパネル」から操作を行うことが難しいとのことだ。この件に関しては、電子メールやWord、Excel、PowerPointは、必要に迫られる上、毎日使う機会もあるので使いこなせるが、Webサイトやブログなど、たまにしか使わない。Webアプリケーション系のシステムを操作するのは難しいと感じるため、それらを継続する授業者が少ないと考えれば納得できる理由だった。他にも、履修登録が確定しない間、授業者が学生に対し閲覧権限を付与する2パターンの方法についても、理解しにくく難しいとのことだった。

２つ目は、「自分の授業には必要がない」という理由だった。契約内容の理由から、人間発達文化学類のみに利用限定したため、他学類の学生がいる自分の授業には使えないということだった。また、どのように授業にシステムを導入するか、アイディアが浮かばないという声もあった。例えば、学生向けの情報は、授業に関するものは授業中に十分発信しており、休講や教室変更などの事務的な情報の提供についても従来のシステムに不満はなく、欠席者のために資料掲載しなくても、今までどおり次の授業に直接取りに来ればよいし、質問をオフィスアワー以外に受け付けると収拾がつかなくなると予想され、小テストをBlackboardで実施しても代理解答の判別がつかないので、正当性に疑問がある、或いは、小テストで習熟度を計れるような授業ではないし、課題についても従来のシステムに不便を感じていないなど、活用するに至るきっかけが見つからないとのことだった。

3つ目は、「時間がもったいない」という理由だった。この先ずっと導入するかどうかもわからないシステムの操作方法を覚える時間の余裕がないとか、紙ベースの資料を掲載するといった場合に必要となる情報をカスタマイズする時間、学生の質問対応のためにPC操作に拘束される時間増加などが懸念材料となった。

その他には、利用端末についても意見があった。PC を所有している学生が 100%ではないし、携帯電話からの操作もできないため、活用には至らないという声もあった。

◆LMS の特徴と授業者の需要

Learning Management System は、ログインが許された者同士で次の３つを実現できるシステムという特徴をもっている。１つ目は「情報の交換」で、２つ目は「学習材や教材の提供と閲覧」、３つ目は「学習の進捗や習熟度の管理と閲覧」である。これらの特徴は相互に作用することで、授業者の授業の質向上と、学習者の習熟度向上の補助となる。こういったことから、学生や保護者の満足度アップの一環として LMS を導入している大学もある。

福島大学の授業者には、LMS 特徴のうち、特に３つ目の「学習の進捗や習熟度の管理と閲覧」についての需要・要望がない。何人かの授業者に Blackboard の機能紹介をした際に、「使う必要がない」と言われた機能が「テスト」「成績管理」だった。学習材や教材の配布などの「インプット」に関わる部分に興味があるものの、それらをどれだけ理解したかを把握する「テスト」などの「アウトプット」部分についてまで Blackboard で実施することを想定できないようだ。加えて、「テスト」「課題」「成績管理」は、Blackboard ではコントロールパネルから操作するため、授業者が操作を理解する時間が必要となるのですぐには取り入れられにくく、ハードルが高いようである。

授業者によって出題された LMS での「テスト」や「課題」を学生がこなす、或いは紙ベースで実施した「テスト」や「課題」の結果について、授業者が LMS の成績管理に登録すれば、学生も授業者も同じ成績情報を共有し、更には最終的な成績評価の根拠として活用することもできる。しかし現在、Blackboard ではそれを実現されていないため、LMS の魅力を十分実感していただけていない。

◆授業者の PC スキル向上とその動機付け

例えば、学外への情報公開の手段として、最初に思いつくのは Web サイトの作成や、ブログの開設だと思う。人開発達文化学類の授業者 81 人のうち、確認できた Web サイト開設者は 18 人で、更に、昨年 Web サイトを更新している授業者は 10 人程度である。ブログサイト構築についても、学内で開設できる環境が整っているが、ほとんど利用されていない。学外への情報発信に多少の興味はあるはずなのに、これらが活用されていないのはどうしてだろう。その原因は、必要となってくる PC スキル向上のために時間を費やす余裕がなく、更にそれらの自己努力を動機付けるものが不足している、と推測する。

Blackboard においても、現在、個々の授業者から「この情報を授業サイトにアップしておいてください」といった要望を受けてサポートできる体制ではないため、LMS での授業サイト作成時、授業者にもある程度の PC スキルが必要となる。前述した「LMS の特徴」をよく理解できず、前述した「渋る理由」を乗り越えてまで、LMS を活用するメリットがあやふやなので、結局「Web サイト作成やブログ開設を検討したけど断念」と同じ道をたどってしまうことになる。

・授業者

◆学生の２つの苦言

授業者から又聞きした学生の Blackboard についての苦言は２つだった。１つ目は、ユーザー名とパスワードを入力してログインするのが面倒だ、ということだった。学生は、ユニバーサルパスポートを利用する際と、情報処理センターでＰＣを利用する際の、最低２つのユーザー名とパスワードを知っている必要がある。更に、就職支援やフリーのメールアドレスなど、ユーザー名(または ID)とパスワードを複数記憶する必要があり、これらに付け加えて Blackboard となると、混乱してしまうとのことだった。

２つ目は、Blackboard のどの機能を使うのか困ったということだった。例えば、Blackboard にはファイルを配布するための「課題提出・資料配布」という機能と、テスト・アンケートと同じシステムの「課題」という機能がある。授業者が「こちらの機能を使う」と説明しても、家に帰っていざ使う段になると、どちらかわからなく

て困ってしまった、などということだった。

◆学生の２つの苦言は解決できる

いずれの苦言も、ちょっとしたことで解決できる問題であった。

１つ目の「ログインできない」は、Blackboard で提供されている、パスワードを忘れた場合に再設定するためのＵＲＬをメール経由で取得できる機能を活用すればよいし、パスワードが覚えられないなら覚えられるパスワードに変更すればよい。ユニバーサルパスポートと情報処理センターのログインのためのユーザー名は同じものを採用していて、Blackboard もできるだけ同じものとなるように設定している。従って、パスワードさえ３つ同じものを使えばいいだけのことである。付け加えるなら、Blackboard に限らず、ほとんどの LMS には認証情報を他のシステムと共有する機能も備わっている。学内のシステムを総合的に考えて Blackboard を導入していれば、元々この手の問題は発生しなかったし、更に、既存の履修登録データとの連携も図れたので、前述の授業者が難しいと感じる操作も１つなくなる。

２つ目の「どの機能を使うか困る」についても、授業者が授業サイトで左側に表示されるメニューを必要最低限にカスクマイズすれば、問題にはならない。初期設定のメニューのままにせず、使うメニューだけを表示するよう修正することで解決できる。

◆学生には問題がない

学生からサポートへの直接の質問は、ただ１つ、「ログインができない」ということのみだった。パスワードを忘れてしまったというパターンや、ユーザー名に学籍番号を入力していたといった類のものだけだった。現状での Blackboard で、学生は主に「見る・読む」だけなので、操作方法はシンプルだ。授業者のようにページを編集する必要もなければ、コントロールパネルもないので、Blackboard では今のところクリックだけしていればよい状態だ。従って、よほどＰＣ操作に苦手意識がない限り、或いはＰＣを全く利用したことがない限り、Blackboard での操作が困難だと思わないようである。

利用率に関しても、システムの性質上、及び「図１月別利用者数」から、授業者の Blackboard の利用率に比例して、学生の利用率が推移することがわかっている。学生が興味を持つような情報を Blackboard で提供できていれば、学生の利用率が伸び悩むという問題とはならない。

・利点の未活用

◆情報の共有

Blackboard においては、大規模な大学でも安心・安定して運用でき、授業情報ばかりではなく、あらゆる情報を共有するためのシステムとして活用できることを特徴としている。例えば、１ページに色々な枠を表示させてページを構成する機能も特っている。ノートに付箋紙を沢山張っているようなイメージだ。１片の付箋紙のような枠に文字や桧を記入できるが、その記入できる権限を人単位で付与することができる。つまり、教務担当の枠が数個、学類担当の枠が数個、就職担当の枠が数個、といった具合の枠をページに配置し、それぞれの枠は、教務の誰が編纂できる、就職担当の誰が編纂できるといった具合に権限を付与することができる。つまり、学内向けの事務情報を発信するツールとして導入することで、学生も事務担当者も便利だと思えるシステムでもある。

◆授業サイトの活用

授業サイトでは、授業を履修しているメンバー向けに情報を提供する。複数の学類の学生が履修している授業で導入することで、授業者が所属する学類以外の学生に連絡を取りやすい環境が提供されるので「便利だ」と思えるシステムなのである。

◆Blackboard を活用しきれない状況

このように、福島大学では、大規模な大学でも安定して使える Blackboard を一部の学類でのみ運用し、情報提供できるツールであるとの認識もされていないため、「便利だな」と思える機能を全く活用していない状態となっている。

３．提案策

インターネットが普及し、随分経つ。これまで、福島大学でも Web サイトやブログを開設して授業情報を掲載している授業者の方もいる。しかし、点でバラバラに活動しているため「福島大学色」として活用されていない。個々の成功に留まり、大学全体の評価・結果につなげられないでいる。

今のままでは LMS においても同じような状況となる。現在のように一部の授業で LMS を利用し、仮に一部の授業サイトを更に充実させ、ついに一部の授業サイトで成績まで共有できるような活用をしたとしても、これで学生は満足するだろうか。保護者から「福島大学はすばらしい」と言われるだろうか。学外から「福島大学は LMS を積極的に活用し、授業改善に努めた」と評価されるだろうか。LMS を活用した「とある授業者」は評価されたとしても、福島大学のブランド戦略には結び付かない。

LMS の導入が本当に必要なのか否かを考え、Blackboard で運用するのか否かを考えると以下が提案できる。LMS の導入が必要だと判断した場合には、「LMS を普及させるために」の実施を提案する。なおかつ、LMS の契約費用の軽減を解決したいなら、「LMS を Blackboard で運用しない選択」も付け加えて提案する。

LMS は必要ないと考えるなら、授業者の要望を考慮した「LMS を選ばない選択」を提案する。

・LMS を普及させるために

福島大学で LMS や Blackboard を十分利用するために必要なこととは何だろうか。Blackboard の導入からこれまでの問題点をもとに、どんな LMS 製品の導入でも最初に実施すべきではないかという２つのステップと１つのアイディアを紹介する。

◆ステップ１：全学導入

Blackboard の場合、全学で導入するということは、コストアップになってしまい、コストパフオーマンス向上が連想しにくいだろう。しかし、「一部の学類で、一部の機能だけ利用している Blackboard」を「高い」と思うことは至極当然である。Blackboard を全学導入すれば、学生にとっては、学内で誰かに聞かなければならなかった情報や、授業で確認しそびれた情報を場所・時間も問わずに見ることができ、授業者にとっては、どんな学類の学生に向けても、リアルタイムに情報を提供することもできる。システムの利用習慣を養うことができれば利用者も増えることとなり、結果、費用対効果も得られるということになる。

◆ステップ２：推進チームの構築

Blackboard ではこれまで授業者の裁量によって授業者と学生だけが使うシステムとされていたため、利用用途が極端に狭かった。Blackboard は大学全体で安定して情報共有できるシステムである。授業者、学生のみならず、事務担当者も参加し、それぞれの立場から Blackboard の活用方法・掲載情報・運用方法などを検討し、実現するチームが必要である。他のシステムとの連携も構築されやすくなる。定期的に利用状況を確認する体制とすれば、授業者にフィードバックできる活用事例を集約することもできる。

◆アイディア：学生サポーターの導入

授業サイトを魅力的にすれば、学生の利用が更に増進される。しかし、現実には教材開発や構築を授業者だけで実現するには難しい。従って、授業に密着した情報を授業サイトに掲載できる人力が必要だ。

帝京大学では、Blackboard 活用のサポート役として学生アシスタント制度(LTA 制度)を設置している。学

生をサポーターとして募り、研修と年数回のミーティングを実施することで育成し、教職員から割り当てられた作業をする。

学生サポーターの導入は、充実した授業サイト構築を実現し、授業者の作業負担を軽減することができる。Blackboard では、授業サイトを構成するための「コース作成」という権限がある。この権限を学生サポーターに付与することで、授業者の代わりに学生が授業サイトをカスタマイズすることができるようになる。

・LMS を Blackboard で運用しない選択

LMS の普及には、前述の２つのステップや様々なアイディアが必要となる。 LMS を Blackboard 以外で運用する場合には、それらに付け加えて以下を考慮しなければならない。

◆オープンソースの LMS と人件費

LMS は授業者に受け入れられにくく、その上、Blackboard の場合、運用に高額な費用が発生するため、継続導入の是非に拍車がかかる理由となっている。LMS を継続したいが契約費は軽減したいということで、契約費が心配いらない OSS で LMS を運用した場合を考えてみる。

OSS の LMS として Moodle や Sakai、国産では Attain3 などが上げられる。これらでの運用になれば、システム契約費の憂慮がなくなる。福島大学仕様として改変することもできるし、長らく利用することもできる。しかし、安定して LMS を運用したいなら、LMS を構築しているプログラム言語を理解できる人員を必ず配置する必要がある。OSS の場合、問題が発生したら、使う側で自己解決するのが原則である。LMS のソースが理解できる人材を登用し、エラー発生などの非常時に備えなければならない。つまり、契約費の代わりに人件費を考慮しなければならないということになる。

実際、Moodle を試験運用し、こんな問題に直面した。Blackboard も Moodle も、授業データを作成するには、ブラウザに出現したデータ人力フォームに、授業名や授業の詳細を文字人力することと、その授業に誰が参加しているかを人力することで、１つの授業サイトが完成するのが基本となっている。Blackboard においては、その他に「一括アップロード機能」があり、教務課から提供されたデータを Excel などの表計算ソフトで編纂し、テキストファイルとした後、そのファイルをアップロードすれば、多数の授業データ登録を１回のクリックで完了させてしまうことができる。しかし、Moodle では同等の機能が標準装備されていなかった。こういった場合、あきらめて一つ一つ授業を登録するか、自分で開発するか、フォーラムなどに参加して誰かが提供している追加モジュールを探さなければならない。幸いなことに、一括アップロードできるモジュールを無料で提供している方がいたので、それを使用してみた。しかし、そのモジュールは日本語環境対応していなかったため、文字コードの変換部分を修正しなければならず、一括アップロードが実現できるまで色々と回り道したということがあった。

◆そのほかの有償 LMS

LMS の普及が進まず、契約費もネックなり、Blackboard から別の LMS に乗り換える大学も多い。OSS の LMS 製品に乗り換えて、一気にコストダウンを図る大学ももあれば、契約費を抑えた有償 LMS へ乗り換える大学もある。有償 LMS の中でも、株式会社ウェブクラスが販売する「WebClass」は、Blackboard の契約費の半分以下で、LMS としての基本的な機能を網羅している。試用する機会がなかったため、詳細な Blackboard との機能比較はしていない。確認できた中で気になった点は、ログイン後の両面が時間割のため、演習や実習の場合はどう関連づけるのだろう、という１点だけだ。Blackboard のような学内情報の共有機能はないが、Blackboard と契約費を見比べたら、仮に現在のような、LMS の半分ぐらいの機能である「学習材や教材の提供」だけで利用しても「もったいない」という感覚にはならないと思う。サポートについても、どの程度のものかは不明だが、大学の導入代表者を介して行うとのことで、OSS のような人員配置問題もない。Blackboard の契約費か、OSS の人件費かといずれにおいても費用が発生するならば、選択肢として「WebClass」も有効だと思う。

・LMS を選ばない選択

前述したとおり、Blackboard を試用した授業者の皆さんは、LMS の特色である学習進捗の管理や習熟度の管理について関心がなく、どちらかというと、学外への情報発信手段のニーズが高いようである。どんな研究をし、どんな授業を提供しているかを学外に向けて発信することで、学生にも情報を届けることができる「一石二鳥」が叶う、しかも PC スキルがあまり必要でないシステムはないか、というなら、LMS にこだわることはない。

「大学の特色にしたい」と固執せずに、授業情報を履修者に提供したいと考えるなら、授業者には今までどおり、Web サイトやブログの開設がおすすめだ。大学が運営するシステムで安全に、もうちょっと発展したシステムを、というなら、Socia1 Networking Service(以下、SNS)が有効だと思う。 SNS はログイン認証後、コミュニティという概念があり、限定した仲間を招待したり、或いは自発的に参加してもらったりして、コミュニティ限定の情報を共有するので、秩序が保たれながら学生以外の有志への情報発信の役割も果たす。コミュニティを授業サイトとして置きかえれば、教材の提供は実現できる。mixi、GREE、Facebook などは SNS で有名であるが、OSS の「OpenPNE」をサーバーにインストールすれば、同様のサービスを運営できる。

また現在、私大などで導入が盛んな e ポートフォリオを実現するため、OSS「Mahara」を採用するケースもあるが、こちらも、SNS の基本機能に加え、マイポートフォリオという機能があり、大学での学習の成果を集約しつつ、都度の振り返りに活用できるシステムとなっている。

むすび

・振り返りから次へ

人間発達文化学類では現在、「小さく導入して全学に普及」するボトムアップを実行中だが、このままでは成功しそうにもない。

2007 年より試験的に導入した LMS は、一部の学類で一部の機能を使い運用してきた。しかし LMS は、インプット→アウトプット→現状把握という一連を実行しこそ威力を発揮するため、その「システムの性質」から見ると、便利な部分をちょっとだけ使っても劇的な成果は得られない。また、紹介者が「導入してみたら」と新規者に働きかけても、同じ結果が得られやすいシステムでもない。なぜなら、大学の授業は授業者によって千差万別であるため、紹介者が「便利だ」と思えたシステム活用方法が、新規者の授業でも有効なものとはいえない上、福島大学では今のところ紹介者も少ないから流用できるアイディア数も少ない。また、紹介者が新規者の授業を見て「あなたの授業では LMS をこう使ったほうがいい」というフオローができるような人材もなく、そのような状況になるのも難しい。

・結果につなげられるシステムというチャンス

日本で LMS を大学の特色として導入し、かつ、成功したという例は数少ない。だからこそ、「福島大学ならでは」の LMS の運用方法、活用方法を模索し、成熟させることに、「福島大学色」を開発するチャンスがあり、また、学生の満足、保護者の満足を実現できる余地がある。

LMS で苦悩する大学は、クリアするための問題点とその解決策でさえ分かっている場合が多い。本書の内容も「どこかの大学のあのパターンだ」というものばかりだ。LMS を導入すれば、同じ経路を多かれ少なかれ辿っていく。そして、解決策がわかっていても「できない」でいる。導入し、結果を残せることが、一見簡単に出来そうで、実はなかなか出来ないシステムだからこそ、より熟考し、より綿密に計画し、多くの手で創造することで「福島大学色」となりえると言える。

「福島大学」という適度な規模で、Blackboard による LMS 運用を検討できるだけでも、千載一遇のチャンスとも言える。機会を逸することのないよう、絶好のタイミングが今だということを理解してほしい。

２．学習ガイドブック「学びのナビ」

・「学びのナビ」は、“大学生らしい学び”の実現の支援ツールとして作成された学習ガイドブックである。福島大学の学生を対象として開発され、その後、「アカデミア・コンソーシアムふくしま」を通じて、福島県内の学生を広く対象とした内容に拡充された。2007 年度末に試作品が作られ、以下に示す 2012 年度版（概要版）に至るまで 5 回の改訂を重ねてきた。この改訂の過程の中で、「福大スタンダード」を巡る議論から抽出された基本的な学習スキルが盛り込まれた他、それら学習スキルの獲得を振り返る仕組みとして、次節に詳述する学習ポートフォリオの解説書を兼ねることになった。この「学びのナビ」は、初年次の学生に配布され、また一部の学類において教材として活用されている。

学習ガイドブック「学びのナビ」2012 年（概要版）

はじめに

大学の一員となった皆さんに、『学びのナビ（学習ガイドブック）』（概要版）をお届けします。このガイドブックの目的と特徴には、以下のようなものが挙げられます。

○大学での学びをサポートし、自分なりの学びの目標やスタイル、その成果を着実に得られるような「ヒント」を書いています。
○大学での「学び」は多様であって、これが絶対的に正しい、望ましいというものはない、ということを強調しています。
○皆さんにヒントを授けることはあっても、こうすべきということを強要するものではありません。
○私達は、精一杯工夫したつもりですが、十分ではないと思っています。ご意見・ご要望は、ぜひ聞かせて下さい。

『学びのナビ』の詳細版は、アカデミア・コンソーシアムふくしまのＷＥＢサイトにアップロードしてあります。その内容は、

第１部　大学と学習スキル
第２部　学ぶ楽しさ・喜び
第３部　用語集
第４部　学習ポートフォリオ記入のために

という構成で書かれています。第１部では、皆さんの大学での学びに必要となるスキル（本の読み方・ノートの取り方・提出課題の書き方や、知的生産・思考整理の方法など）を説明しています。第２部では、福島県内の各大学の教員がこのガイドブックの趣旨にあわせて執筆した原稿を掲載しています。学習面から生活面にいたるまで、さまざまな観点から大学生活をよりよく過ごすためのアドバイスが書かれていますので、ぜひお読み下さい。第３部では、大学生活に関わる様々な用語の説明がなされています。第４部では、この冊子に別冊として付けられている「学習ポートフォリオ」（この冊子の第１０章でも簡単に説明します。）について、書き方の説明がされていますので、参考にして学習ポートフォリオを記入して下さい。

さて、この冊子は詳細版第１部の概略を示した概要版です。詳細版の他に概要版を作成した理由はいくつかありますが、その最たる理由は、以下で示すように皆さんをいち早く大学生活や学問の世界にお連れしたいというものです。

詳細版の内容は、皆さんにとって、やや取っつきにくい内容であるかもしれません。この概要版（本冊子）は、詳細版のポイントを抽出し、各章においてどんなことが書かれているのか、簡潔に提示したものです。概要が把握できたら、詳細版の文章を読んでみて下さい。詳細版にはほとんどすべての章末に「＜他の参考文献・情報へのガイド＞」が記載されています。もっと知りたいという人は、そちらの文献等も参考にして、自分流のスキルを身に付けてもらいたいと思います。早く自分流のスキルを確立できれば、早く学問の世界・大学の世界に入っていけるでしょう。大学にいる２～６年ほどの時間は長いようであっという間ですから、「いち早く」を願うばかりです。

各章には、簡単な内容の確認やふり返り用のワークシートを設けました。詳細版も参考にしながら、自分の言葉で記入してみて下さい。また、ワークシートだけが欲しい、またはワードで入力したいという場合には、アカデミア・コンソーシアムふくしまＷＥＢサイトに専用のファイルが準備されていますので、そちらをご利用下さい。

第１章　大学の機能と歴史

＜この章の目的＞

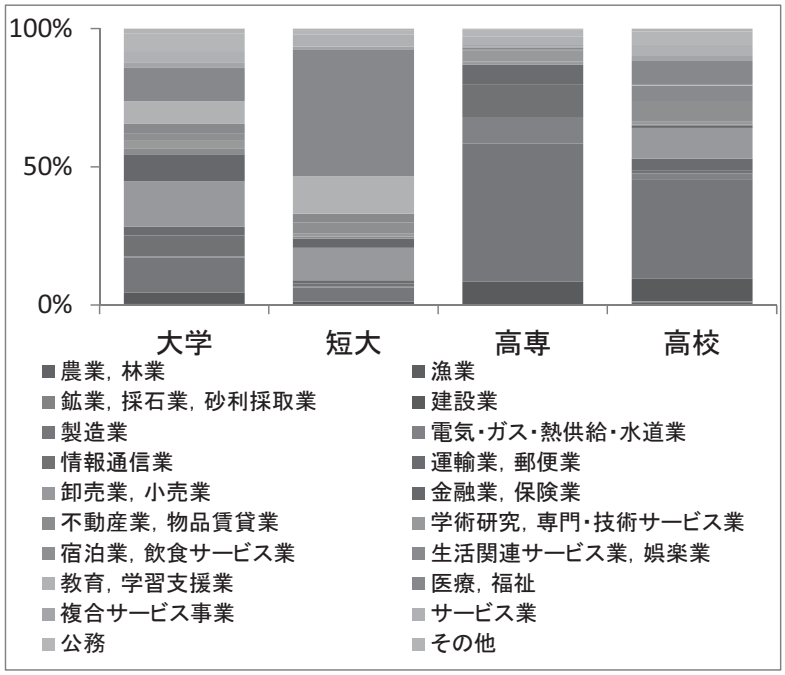
◎皆さんが入学したのは福島県内の１つの大学ですが、それは当然数ある大学の１つです。大学というのは、そもそもどんなところか、何をするところなのか。今現在、どのような役割を果たしているのか。この章を通して、将来のこと、学生生活のことを少しでもイメージでき、皆さんのモチベーションが上がることを期待します。

○大学の歴史は長く、その淵源は紀元前５世紀のアテネにまで遡ることができるようですが、今のような形になったのは中世（１２～１３世紀頃）のヨーロッパにおいてです。そこでの大学の機能は、法学・神学・医学の３領域の専門職人材の養成でした。

○その後大きく大学が変わるのは、１８～１９世紀頃と言えます。１７８９年にフランス革命以降のヨーロッパは新しい世の中になりますが、工学や農学等の職業人の養成機能も大学に付け加えられました。

○明治維新以降の日本では、当初から法・医・文・理といった伝統的な学部の他に、工・農・経済といった新しい実学的な職業人養成の機能を持つ学部が置かれました。

○太平洋戦争後の大学は旧制の大学や専門学校を下敷きに誕生し、主に高校を卒業した生徒を受け入れ、２～６年間の高等教育を行うようになりました。



○平成２２年３月卒業生の進路を比較すると、高専と高校は製造業に、短大では医療・福祉、大学は他と比べて卸売業、小売業や金融業、保険業に多くの卒業生を輩出しているようです。特に大学で養成される人材は、現在は非常に幅広くなっています。

記入日（　　・　　・　　）

＜「大学の機能と歴史」ふり返りシート＞

※この章の内容から、あなたは何を学びましたか。
理解したこと、考えたこと、疑問に思ったことなどについて、
次のポイントごとに、あなたの言葉で記入して下さい。

【この章で理解したこと】

・世界や日本の大学の始まりは、どのようなものだったか

・今の高等教育の役割や、養成している人材はどのようなものか

【この章で考えたこと・疑問に思ったこと】

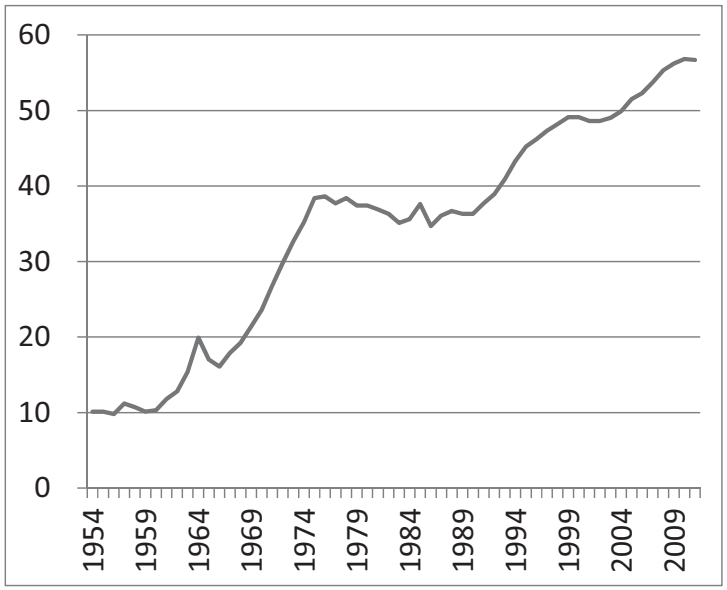
第２章　大学の性格の変化

＜この章の目的＞

◎大学の性格は、昔から一様ではありません。皆さんのお父さん・お母さん、お爺さん・お婆さんの時と今とでは、大学の性格が異なっています。昔と比べて大学の何がどのように変わったのか、また変わらないものは何かを理解することで、皆さんの大学生活を見つめ直すきっかけになると思います。

○旧制の大学については、法令上、国家のためのものと決められていました。

○戦前の大学数は４８大学（１９４５年）と、それほど多くはありませんでした。



○大学・短大進学率（左のグラフ）は１９６０年頃には約１０％で、大学はごく一部の限られた学力エリートのための教育機関でした。

○高度経済成長の時代には、４０％近くにまで達しました。

○１９９０年代以降、大学・短大進学率は再び上昇します。今や２人に１人以上は大学に進学している状況で、誰にでも進学のチャンスがある身近なものになりました。

○その結果、「みんなが行くから」「高卒だと不利かも・・・」と思って入学する人も、多くなってきたと言われています。

○一方で、大学は義務教育ではなく、また大人への入り口であるので、大学教育に関するほとんどすべての事が自己責任です。これは、今も昔も変わりません。

○だからと言って、誰にも頼るなとは言いません。困ったことがあったら、大学内のしかるべき場所や人に相談してみて下さい。

記入日（　　・　　・　　）

＜「大学の性格の変化」ふり返りシート＞

※この章の内容から、あなたは何を学びましたか。
理解したこと、考えたこと、疑問に思ったことなどについて、
次のポイントごとに、あなたの言葉で記入して下さい。

【この章で理解したこと】

・大学の性格はどのように変わってきたか

・学生に変わらず求められるのはどのようなことか

【この章で考えたこと・疑問に思ったこと】

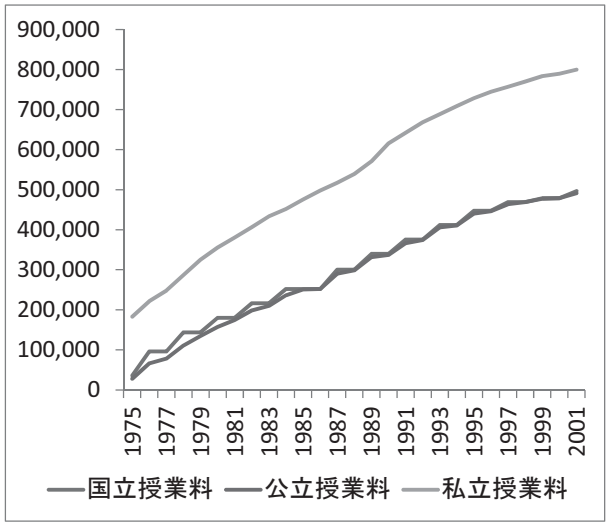
第３章　大学を取り巻く環境の変化

＜この章の目的＞

◎大学の性格が変化してくると、国や社会との関係は変化し、圧力も増してきます。圧力が増すということは、大学の教職員や学生に対して求められることが多く、また強くなることを意味しています。現在、社会からどんな風に大学や学生が見られているのか、何を求められているのか、考えるきっかけになると思います。

○従来の大学は「象牙の塔」などと言われ、社会への関心も薄く、また社会からも何かが強く求められることは少なかったと言えます。

○高度経済成長期の大学の急激な拡大は、特に私立大学の教育環境の悪化を招きました。そこで国は私立大学へ補助金を出すようになりました。



○私立大学に補助金を出すようになるとともに、国公立大学の授業料も値上がりを始めることになります。１９７０年代以降国公私立大学とも授業料は一貫して高くなってきました。

○授業料の値上げは、私立大学への助成開始・国（公）私格差の是正の他に「受益者負担主義」の考え方にも支持されていたようです。

○グローバル化が進展する中で、日本の高等教育は国際的な標準から大きく下回っていると評価されています。それ以来、日本の高等教育は、改革を続けています。

○１９９０年代以降の不況を背景に、国からの大学への予算は減少しています。

○いろんなところから、大学教育によって要請されるべき能力が提案されています。代表的なものに、「キー・コンピテンシー」、「ジェネリック・スキル」、「エンプロイアビリティ」、「社会人基礎力」、「学士力」などと呼ばれているものがあります。

○こうした国や社会との関係の中で、皆さんは学生生活を送っているということです。

記入日（　　・　　・　　）

＜「大学を取り巻く環境の変化」ふり返りシート＞

※この章の内容から、あなたは何を学びましたか。
理解したこと、考えたこと、疑問に思ったことなどについて、
次のポイントごとに、あなたの言葉で記入して下さい。

【この章で理解したこと】

・国から大学への補助金、大学授業料等はどのように変化してきたか

・大学教育には、どのような能力の育成が求められてきているか

【この章で考えたこと・疑問に思ったこと】

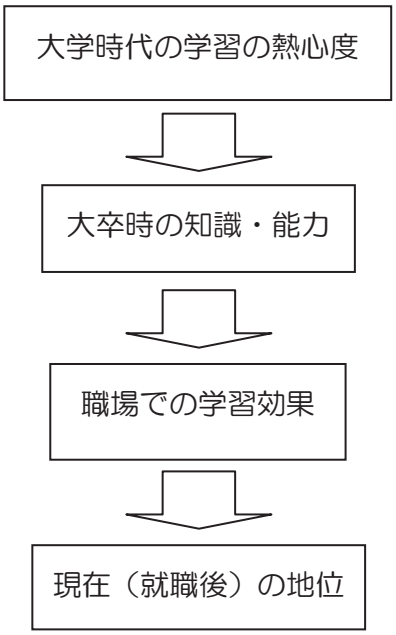
第４章　学習スキルの意義

＜この章の目的＞

◎大学では、高校までの勉強方法とは大きく異なる点がいくつもあります。レポートの書き方やノートの取り方など、皆さんからすれば「すぐ知りたい！」という学習スキルは多いでしょう。それらは後で詳しく紹介しますが、在学している間だけでなく、その後の人生のことも見越した学習スキルの重要性を理解してほしいと思います。

○広義の学習スキルは、「学ぶ方法や学ぶことそれ自体を学ぶこと」と言うことができます。

○「学ぶ方法や学ぶことそれ自体を学ぶこと」というのは、結局、自分流の学びの方法やスタイルを身に付けることです。



矢野眞和氏の研究成果の概要

○教育社会学者の矢野眞和氏らによれば、「専門知識よりは、一般教育などを含めた学習習慣が身についたことが役立つ」の妥当性を示す傾向が見られたことを確認しています。

○認知心理学者・教育心理学者である市川伸一氏によれば、「『学校で習った内容を忘れても残るものこそが、学校教育で大切なものである』などと言われることがありますが、そのひとつが学習スキル」であると言っています。

○高校までのような主に反復練習による知識暗記型の学びではなく、大学では自分流の学びの方法やスタイルを見つけ、それを習慣にしていくことが重要です。そのことは、大学に在籍している間だけでなく、社会に出てからずっと役に立ちます。

記入日（　　・　　・　　）

＜「学習スキルの意義」ふり返りシート＞

※この章の内容から、あなたは何を学びましたか。
理解したこと、考えたこと、疑問に思ったことなどについて、
次のポイントごとに、あなたの言葉で記入して下さい。

【この章で理解したこと】

・広義の学習スキルとはどのようなものか

・自分流の学び方を身に付けることは、どのような意味で大事と言えるか

【この章で考えたこと・疑問に思ったこと】

第５章　大学での学びと単位取得までのプロセス

＜この章の目的＞

◎高校までと異なる点が多いため、大学での学び方がイメージできない人は多いと思います。大学では様々な形式で授業が行われますが、それらの授業の単位を取得するまでのプロセスを示します。この章では、授業を含めた大学での学習がどう進んでいくのか、イメージしてほしいと思います。

○大学の授業形式には大きく分けて「講義」、「ゼミ」、「実習・実験」の３つ（当てはまらない形式も若干あります。）があります（参考：世界思想社編、２０１１、『大学生 学びのハンドブック』）。

○講義とは、「先生が教壇に立って行う大人数の授業」、ゼミとは、「学生が調べてまとめたことを発表し、みんなで議論する少人数の授業」、実習・実験とは「実際に体験したり、調査や実験をしたりし、結果をレポートにまとめる少人数の授業」のことを言います（参考：世界思想社編、２０１１、『大学生 学びのハンドブック』）。

○これらの授業形態において、単位取得までには①予習をする、②授業に出る、③質問をする、④復習する、⑤報告をする、⑥課題を提出する、⑦試験を受ける、というプロセスを経ると言えます。

○それぞれのプロセスにおいては、下表のような学習スキルが必要と考えられます。

①予習をする	…資料の調べ方、本の読み方
②授業に出る	…ノートの取り方
③質問をする	…質問の仕方
④復習する	…資料の調べ方、本の読み方、ノートの取り方、ふり返り方
⑤報告をする	…プレゼンテーションの仕方、文章の書き方
⑥課題を提出する	…文章の書き方、提出課題の書き方
⑦試験を受ける	…試験対策の仕方

○その他、授業以外にも幅広く応用でき、他のスキルの根幹にあると考えられる学習スキルとして「考える方法」があります。

記入日（　　・　　・　　）

＜「大学での学びと単位取得までのプロセス」ふり返りシート＞

※この章の内容から、あなたは何を学びましたか。
理解したこと、考えたこと、疑問に思ったことなどについて、
次のポイントごとに、あなたの言葉で記入して下さい。

【この章で理解したこと】

・大学での学び、単位取得のプロセスはどのようなものか

・「考える方法」とは、どのようなものであるか

【この章で考えたこと・疑問に思ったこと】

第６章　資料の調べ方

＜この章の目的＞

◎高校時代に主に活用した資料としては、与えられた教科書や参考書・問題集などが主だったと思います。大学は自ら学び、調べ、研究する場所であり、自分から資料を調べることが必要になります。この章では、図書館やインターネットでの調べ方や、その際に注意すべきことなどを理解して下さい。

○新しい知識の情報源としてはインターネットも有効ですが、学問の基礎や歴史的背景は図書館でしか探せません。また、図書館にある図書は、著者・出版社・図書館職員（司書）が内容とその信憑性を保証しています。

○図書館の本は、類似する本が近くに集まるよう分類されています。蔵書検索で目的の図書が見つかった場合、付近をブラウジングする（見回す）ことも有効です。

○参考書はちょっと確認したい情報や、学術調査の出発点・手がかりとして役立ちますし、学会誌等の最新号は最新の学術情報の動向を知るのに役立ちます。

○全能の図書館はないかもしれませんが、福島県のすべての大学図書館はネットワークを組んでいますので、相互に利用することが可能です。

○図書や論文等の著作者には、著作権が認められています。本の全てを複製したり、２部以上複製したりすることは法律違反です。引用する際にも、ルールがあります。

○①インターネットで得られた情報は、鵜呑みにしないこと。②見ている情報の確かさの見極めができること。③インターネット以外の書籍・専門誌等に類似の文献がないか検索すること。④引用のルールを守ること。⑤インターネットから得た資料だけから成るレポートは、自分の学習の力にはならないのでやめること、などの注意が必要です。

○参加者が特定でき、無責任な発言が許されないような電子掲示板や SNS（Social Networking Service）に、明確な目的意識を持って参加することは、有意義です。自分のニーズを満たせるコミュニティを見つけるとよいでしょう。

○情報メディアを批判的に読み解いて、必要な情報を引き出し、その真偽を見抜き、活用する能力のことをメディア・リテラシーといいます。さまざまなメディアを通して得られる情報に対して、能動的な態度を持って接することが重要です。

記入日（　　・　　・　　）

＜「資料の調べ方」ふり返りシート＞

※この章の内容から、あなたは何を学びましたか。
理解したこと、考えたこと、疑問に思ったことなどについて、
次のポイントごとに、あなたの言葉で記入して下さい。

【この章で理解したこと】

・図書館を利用する際のコツや注意点は何か

・インターネットを利用する際、注意すべき点は何か

【この章で考えたこと・疑問に思ったこと】

第７章　本の読み方

＜この章の目的＞

◎本を読むというのは、簡単そうで意外と難しいです。高校までの教科書や、マンガや小説などを読むときとは違う読み方や、コツなどがあります。本を読まずに大学を卒業することは、絶対にできません。皆さんの学習や研究の成否は読書にかかっていると言っても過言ではなく、いち早く身に付けてもらいたいスキルの１つです。

○ＷＥＢ上の情報は、内容的に不十分なことも多く、その信頼度についても問題が少なくありません。

○読書というのは活字というメディアを、時には反復しながら自分の眼と頭脳で読みとるという、きわめて能動的な行為です。だからこそ、大学で学んだ知識より、読書の習慣を身に付けたことが、職業生活に役立っているという卒業生が多いようです。

○本は数々の著者の知的営みであり、その営みは人類の知的財産を継承するものです。本に凝縮されている最先端の知識は、学ぶに値するものだと言えます。

○読むときにただ目で追うだけではなく、ペンを持ち、自分なりに色分けしながら大事なところをマークしながら読むことがお奨めです。

○本を読む際には、大学に入るまでに高校などで学んできた基礎的な知識が必要になります。

○本の読み方として、①とにかく何が書いてあるか大つかみに把握する段階、②著書の重要な箇所をしっかり理解する段階、さらには、③自分なりに言い表したり、「わからない」ことが「わかる」段階など、いくつかの段階があります。

○苅谷剛彦氏は『知的複眼思考法』という本の中で、「批判的読書法」という２０項目を紹介しています。詳しくは『知的複眼思考法』や『学びのナビ』詳細版を参照してほしいですが、①著者を簡単には信用しないこと、②著者のねらいをつかむこと、③論理を丹念に追うこと、根拠を疑うこと、④著者の前提を探り出し、疑うこと、の４段階があるということです。

記入日（　　・　　・　　）

＜「本の読み方」ふり返りシート＞

※この章の内容から、あなたは何を学びましたか。
理解したこと、考えたこと、疑問に思ったことなどについて、
次のポイントごとに、あなたの言葉で記入して下さい。

【この章で理解したこと】

・本を読むということには、どのような意味があるか

・批判的に読書をする際、どのようなことに気をつけるとよいか

【この章で考えたこと・疑問に思ったこと】

第８章　ノートの取り方

＜この章の目的＞

◎ノートの取り方は、入学して最初に皆さんが苦労することかもしれません。高校までと異なり、大学ではただ板書を写す授業だけとは限らないからです。しかし、「これがノートの取り方だ！」という決まった方法はなく、いろいろ方法があること、自分なりの方法を探す必要があることを知ってほしいというのがここでの狙いです。

○ノートを取る媒体には、冊子状のノート、ルーズリーフ、カードなどがあり、形も様々です。目的や自分にあったものを選ぶことが大切です。

○ルーズリーフをファイリングする人が多いようですが、きちんと整理しなかったり、ノートや資料がばらけたりすると大変ですので、気を付けましょう。

○資料は事前もしくは授業後にＷＥＢに掲載される場合もありますし、何ら指示のない場合もあります。板書やスライドの資料を丸ごと写すのが必要な場合も、そうでない場合もあります。どれを書きとめるべきか、各自判断できるようになって下さい。

○特に入学してしばらくの間、授業の前後、あるいは学生の質問や相談等に応じるために設ける時間である「オフィスアワー」を利用して、教員に相談してみるのもいいでしょう。

○講義で紹介されたエピソードや具体例を、場合によってキーワードだけでも書き取っておくことは、理解を深める上で有効であり、１つのコツと言えるでしょう。

○ノートを取る際、要点、疑問点、課題提示、具体例などを付け加えることも想定し、びっしり書き込まないのもコツの１つと言えます。

○結局のところ、授業によって、また皆さん一人ひとりのやり方によって、ノートの取り方はいくつもあります。

○一人ひとりによっていくつもやり方があるということから、ノートの取り方を扱った本は、詳細版に示す通り多数あるので、見比べてみて自分流の方法を見つけるといいでしょう。

記入日（　　・　　・　　）

＜「ノートの取り方」ふり返りシート＞

※この章の内容から、あなたは何を学びましたか。
理解したこと、考えたこと、疑問に思ったことなどについて、
次のポイントごとに、あなたの言葉で記入して下さい。

【この章で理解したこと】

・本章の内容で、なるほどと思えたノートを取る際のコツは何か

・「講義内容を記録に取る」以外に、ノートの重要な役割は何か

【この章で考えたこと・疑問に思ったこと】

第９章　質問の仕方

＜この章の目的＞

◎わからないこと＝恥ずかしいことではありません。かと言って、なかなか授業で質問しにくい心理も分かります。ここでは、質問の意義と、どうやって質問をしたらいいのかについて、説明をします。これによって、授業において自分がどう分からなくて、どう質問したらいいかが理解でき、実際に質問する勇気が得られることを望みます。

○授業中の質問は授業を双方向化させるために意義あるものですので、積極的に出して欲しいです（オフィスアワーという制度も、学生とのコミュニケーションを図るために設定されています）。

○「質問する」こと自体を掘り下げてみますと、「基本となる問題を浮き出させる、問題の表面下のことを探索する、思考しづらいことを追求する、自身の思考の構造を発見する手助けをする、明瞭さ・正確さ・関連性への敏感さを高める、自らの論理によって判断にいたる手助けをする、思考の要素をスポットする案内となる」など、数多くの利点があります。

○ソクラテス問答法とは、弟子との問答によって真理を深める方法に熟達していたソクラテスという古代ギリシャの哲学者が用いていたと言われる方法で、考えを徹底的に掘り下げる効果的な方法です。

○ソクラテス問答法には、明確化を求める質問、理由と証拠を探索する質問、含意と因果関係を探索する質問、推測・仮定を探索する質問、視点に関する質問、質問に関する質問があります。

○例えを挙げれば、明確化を求める質問には「～とはどういう意味ですか？」、理由と証拠を探索する質問には「どうしてそう分かるのですか？」、含意と因果関係を探索する質問には「それはどういう意味を含んでいますか？」、推測・仮定を探索する質問には「他にどんな仮定ができますか？」、視点に関する質問には「違った見方が出来る人はいますか？」、質問に関する質問には「この問題はどうして大切なのでしょうか？」などといったものが挙げられます。

記入日（　　・　　・　　）

＜「質問の仕方」ふり返りシート＞

※この章の内容から、あなたは何を学びましたか。
理解したこと、考えたこと、疑問に思ったことなどについて、
次のポイントごとに、あなたの言葉で記入して下さい。

【この章で理解したこと】

・質問することの意義や意味は、どのようなものか

・質問の種類には、どのようなものがあるか

【この章で考えたこと・疑問に思ったこと】

第10章　ふり返り方

＜この章の目的＞

◎近年「ふり返り」というのが、学びの過程として注目されています。単に反省するだけでなく、次の学びや活動につながるものだからです。ここでは、「ふり返り」をするために学習を記録に残す方法として、２つを紹介します。皆さんの実りある学習に役立てて下さい。

○「ふり返り」（reflection）は、意図的に記録に残すという作業であり、最も重要な「学び」の要素とも言えます。

○過去をふり返るということには「反省」とか「省察」という言葉があてられますが、単によくなかったことを思い起こすというだけではなく、今と未来を考えることに通じます。

○ふり返りの方法としては、思いついたこと、考えたことを記録に残すことや、学習ポートフォリオなどの方法があります。

○思いついたこと、考えたことを記録に残す際には、以下のようなことに注意しながら書くといいと思われます。

①　事実を詳しく書いてみる	②　分析的に書く
③　説明的な文章で書く	④　深く探求するつもりで書く
⑤　創造的なアイディアを入れてみる、質疑応答形式で書いてみる	⑥　それを体験した前と後を比較してみる、つまり、何が得られたかに留意する
⑦　書く内容の優先順位を考える	⑧　なんの制約も作らずに自由に書く

○ふり返りをシステム化する形である学習ポートフォリオは、学ぶ側の能動的な学習のふり返りによるまとめと自己評価という「新しい評価」の要素が、組み込まれたものです。

○学習ポートフォリオは、能動的な学習をＰＤＣＡ（Plan、Do、Check、Action）サイクルで実現できるよう支援するものです（『学びのナビ』詳細版を参照）。

○簡略版とは言え、別冊の学習ポートフォリオに記入し活用することで、大きな効果が期待されます。

記入日（　　・　　・　　）

＜「ふり返り方」ふり返りシート＞

※この章の内容から、あなたは何を学びましたか。
理解したこと、考えたこと、疑問に思ったことなどについて、
次のポイントごとに、あなたの言葉で記入して下さい。

【この章で理解したこと】

・「ふり返り」とはどのような意味を持っているか

・ＰＤＣＡサイクルとは、どのようなものか

【この章で考えたこと・疑問に思ったこと】

第11章　文章の書き方

＜この章の目的＞

◎文章を書くというのは、大学生の最も重要な仕事です。これまで読書感想文などは経験があるかと思いますが、研究をする場所である大学では、レポート・論文（卒業論文）といった新しいタイプの文章を書かなければなりません。「大学生」や「学士（短期大学士）」の名に値する文章表現力を身に付けましょう。

○１つの形となった文書は、「内容」と「文体（書き方）」という２つの要素から成っています。内容とは「書き手が訴えたい事柄・主張・事実」などのこと、文体とは「内容をどのように書くか」という書き方のことです。

○自分が言いたいこと、書きたいこと、レポートなら自分の学習の成果をアピールする気持ちで書くことが、絶対の必要条件です。

○授業で理解したこと・疑問に思ったこと、などを書くことになりますが、「理解」したことを書くには、先生の話（あるいはプリントの説明文）を繰り返すのではなく、自分なりの言葉でパラフレーズすること、すなわち、言い換えることが重要です。

○ノートを書く時にも、先生の言葉を書き取ったらそれでおしまいではなく、早めに自分なりの「まとめ」を書き込み、さらに復習の段階でノート全体をふり返って、要点を整理すると、いいノートになります。

○「なたもだ」とは、「なぜなら」「たとえば」「もし」「だから」という語の頭文字をつなげたものです。まず、これはこうだということを書いた後、この「なぜなら」「たとえば」「もし」「だから」を意識して、内容を書き出していくというものです。

○図書館や本屋に行けば、詳細版の「＜他の文献・情報へのガイド＞」で紹介した文献をはじめ、文章の書き方に関する本がたくさんあります。中身を見て、自分にあった内容を選んで、自分で理解し、実践することが、よい文章を書く近道と言えるでしょう。

○書いた文章を見直す際には、「誤字や明らかな書き違いの点検」、「推敲（文体、表現の吟味）」、「キーワード、キーフレーズが正しく理解されているか、点検をすること」などが重要です。

記入日（　　・　　・　　）

＜「文章の書き方」ふり返りシート＞

※この章の内容から、あなたは何を学びましたか。
理解したこと、考えたこと、疑問に思ったことなどについて、
次のポイントごとに、あなたの言葉で記入して下さい。

【この章で理解したこと】

・文を書く際に注意すべきことは何か

・文を書く際のコツやヒントで、なるほどと思ったことは何か

【この章で考えたこと・疑問に思ったこと】

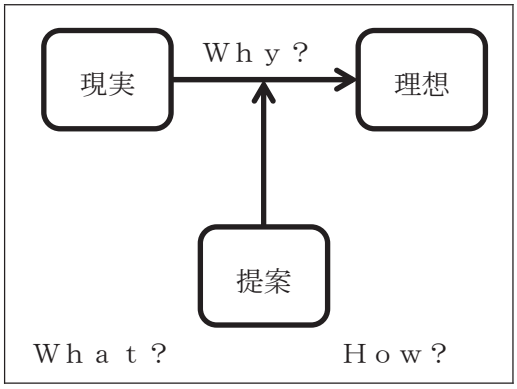
第12章　プレゼンテーションの仕方

＜この章の目的＞

◎大学生になると、ゼミをはじめプレゼンテーションをする機会が増えます。文章の書き方（第１１章）、提出課題の書き方（第１３章）、ロジカル・シンキング（第18章）と共通する部分も多いですが、プレゼンテーションに特有の問題点をお伝えします。聞き手にとって、分かりやすいプレゼンテーションができるようになることを望みます。

○文章に２つの要素、すなわち「内容」と「文体」があったのと同じように、プレゼンテーションにもやはり「内容」と「方法（伝え方）」の２つの要素があると言えます。

○限られた時間内で聞いただけで分かるように、動機、背景、肝心な点、要約、結論、将来展望という内容を検討しましょう。



永田氏による図解

○いきなり資料を作り始めるのではなく、きちんと構想を練ることが大事です（構想を練る際の例：左図）。

○問題認識、結論、根拠となる分析などを内容とし、聞き手を意識して、分かりやすく順序立った中身としましょう。

○方法の問題としては、①話し方、②資料の作り方、③その他の問題に分けられますが、実はそれぞれは密接に結びついている部分もあります。

○プレゼンテーションでよく見かける失敗はいずれも構想段階での失敗とつながっていて、目的・要点・結論などの全体像がはっきりしないままプレゼンテーションに臨んでしまうことから起こっていることだと考えられます。

○あれこれ詰め込むのではなく、言いたいことをはっきりさせ、図表を効果的に用いながら、ゆっくりと説明することが大事です。

○聞き手の立場に立って構想をしっかり練れば、「方法（伝え方）」の問題の大部分は解決されるものかもしれません。

記入日（　　・　　・　　）

＜「プレゼンテーションの仕方」ふり返りシート＞

※この章の内容から、あなたは何を学びましたか。
理解したこと、考えたこと、疑問に思ったことなどについて、
次のポイントごとに、あなたの言葉で記入して下さい。

【この章で理解したこと】

・プレゼンテーションの内容について、注意すべきことは何か

・プレゼンテーションの方法について、注意すべきことは何か

【この章で考えたこと・疑問に思ったこと】

第13章　提出課題の書き方

＜この章の目的＞

◎大学では、レポートが一般的になってきます。高校までに書いてきた感想文などと比べて、レポートはどのような違いがあるのか説明し、書く際の注意事項やポイントを紹介します。多くの学生さんが戸惑うレポートの書き方について、いち早くその書き方を身に付けてもらいたいと思います。

○レポートとは、「調査や研究の報告書」という意味、つまり、何かを調べ、何がわかったのかを説明する文章のことです。試験に代わる代替物から授業時間内に提出する簡易報告書まで様々なものがあり、目的や機能によって使い分けられます。

○レポートの一般的な書き方のポイントをまとめると、以下の通りです。

①何を中心に書くのかよく考え、テーマを定め、適切な表題をつける。

②そのテーマについて、書くべき資料・情報を収集する。それをＫＪ法とか、マップ式ノート術を使って自分なりに客観的に整理する。

③テーマとそれについての内容（事実、学説、異説）などの中から、自分なりの意見をまとめる。これを「考察」という。考察は説得力が重要なので、そう考えた理由や根拠を示すことは必須。

④考察から導かれる結論を端的にまとめる。なお、学んだことを前提にして、そこから湧いた疑問や発展的な問題等を書くことは大いに推奨できる。

⑤これらを、序論、本論、結論、を意識して、構成を予め考えておく。そして、読む人が先生であっても、何も知らない人を想定して丁寧に書く。

⑥事実や学説などを示す客観的な文と、自分自身の見解などの文を区別して書く。

⑦引用などは、しっかりルールを守る。文献・資料などからの引用は、必ず「　」で示し、どういう資料の何頁かを、「　」の後の（　）内に書く。「　」の中は原文を正確に写し取る。（　）を、引用注という。

○「無断引用」「剽窃（ひょうせつ）」は、不正行為ですから絶対やってはいけません。

○しっかりした内容のレポートが書けるということは、「おとな」であることの入り口に立つ資格ではないかと思います。

記入日（　　・　　・　　）

＜「提出課題の書き方」ふり返りシート＞

※この章の内容から、あなたは何を学びましたか。
理解したこと、考えたこと、疑問に思ったことなどについて、
次のポイントごとに、あなたの言葉で記入して下さい。

【この章で理解したこと】

・レポートとは、どのようなものか

・レポートを書く際のポイントとして、重要だと思うこと、その理由は何か

【この章で考えたこと・疑問に思ったこと】

第14章　試験対策の仕方

＜この章の目的＞

◎大学の学びが高校以下の学びと異なるように、試験対策の方法も高校までとは異なります。ここでは、大学における試験の意味とその対策方法（良い方法と悪い方法）や注意点を紹介します。高校までとは異なる試験対策があること、また、それが前章までで示してきた学習スキルと強い関連があることを理解して下さい。

○「試験」には正規試験および平常試験があります。正規試験は試験・補講期間中に実施される試験、平常試験は授業期間中に実施される試験で、取り扱いが異なります。

○試験の際、カンニングなどの不正行為に対しては重い処罰（退学になることもあります。）が待っていますので、絶対にやってはいけません。

○成績評価は、試験の代わりにレポートで代替したり、出席や平常の受講状況を加味したり、調査結果の発表を重視するなど、様々な角度から行なわれます。シラバス等にある評価方法をよく理解しておくことが重要です。

○基本的な対策の１つとして、『学びのナビ』に書かれている学習スキル全般を読んだ上で、それらを総動員して、あるいはその中のスキルを適宜応用することをお薦めします。

○試験一般に共通すると考えられるアドバイスとして、①応急対策はしないこと、②講義内容を復習したり、各テーマのキーポイントを確認したりすると同時に、学んだ内容を再確認しておくこと、③他人のノートをあてにしないこと、④オフィスアワーを活用したり、平常授業時に的確な質問をどんどんすること、⑤一緒に授業を受けた仲間と問題を出し合って、答えを考えながら議論し、復習すること、の５つを挙げておきます。

○「大学の試験は、簡易な対策で乗り切れる」というように考えないほうがいいです。この『学びのナビ』で学習の仕方を書いているのも、試験対策という「付け焼き刃」ではなく、本当の「学び」をしてほしいからに他なりません。

記入日（　　・　　・　　）

＜「試験対策の仕方」ふり返りシート＞

※この章の内容から、あなたは何を学びましたか。
理解したこと、考えたこと、疑問に思ったことなどについて、
次のポイントごとに、あなたの言葉で記入して下さい。

【この章で理解したこと】

・大学の試験は、どのように行われるものか

・大学の学びの特質に関連付けると、試験対策とはどのように説明されるか

【この章で考えたこと・疑問に思ったこと】

第15章　考えることの４つのレベル

＜この章の目的＞

◎前章まで狭義の学習スキルを扱ってきましたが、ここからは「考える」ということを考えていきます。ここでは、「考える」ことのレベルを想定し、それぞれの違いを説明します。「考える」ことを「考える」ことで、自他の学びのレベルについて客観的に考え、深化させられるようになることを望みます。

○「考える」ことには、いくつかのレベルを設定することができます。この『学びのナビ』では、便宜的に４つのレベルを想定しています。そうしたレベルを想定することで、「知識」を持つ人の知識レベルを「評価」することもできます。

○「考える」ことや理解度のレベルが上がる（深化する）ということは、誰でも知っていそうな常識的なレベルから、次第に本質的で深い認識段階へと進んでいくことを示していて、その段階を意識化したものが「詳細版」の表に例示されています。

○「考える」ことや理解度のレベルが上がる（深化する）ためには、授業や参考書が助けになるのは当然ですが、原動力は学ぶ人の「知りたい」という意欲、「なぜ」を追求する「好奇心」だと言えます。

○例えば、マップ（第１９章参照）なら、その出来具合で、書いた人がどこまで自分の考えが進んだか自己診断出来るし、他人もそれを見て理解や思考の度合いをある程度判断出来ます。そういう思考の法則、技法、スキルを学ぶことで、考えるレベルを可視化することは、学習レベルを意識化出来るという意味でも、大変重要なことです。

○単に知識があるということにとどまらず、日常の生活場面に生かせるような知識のありようが求められています。

○現実世界においては、「考える」ことの中に価値判断を伴うものもあります（詳細版参照）。価値判断を伴う場合には、１つの解答を出すことは難しいですし、考えのレベルを基準化することも困難です。

○自分の作業レベルを自己判断することは、実際には難しいことです。この能力は、独学よりも、ゼミなどの発表・議論・批評というプロセスの中で、自分のレベルを他の学生と比較するなどして身につけていくのが一番だと思います。

記入日（　　・　　・　　）

＜「考えることの４つのレベル」ふり返りシート＞

※この章の内容から、あなたは何を学びましたか。
理解したこと、考えたこと、疑問に思ったことなどについて、
次のポイントごとに、あなたの言葉で記入して下さい。

【この章で理解したこと】

・「考える」ことを「考える」とは、どういうことか

・思考のスキルを学ぶことには、どのような意味があるか

【この章で考えたこと・疑問に思ったこと】

第16章　ＫＪ法

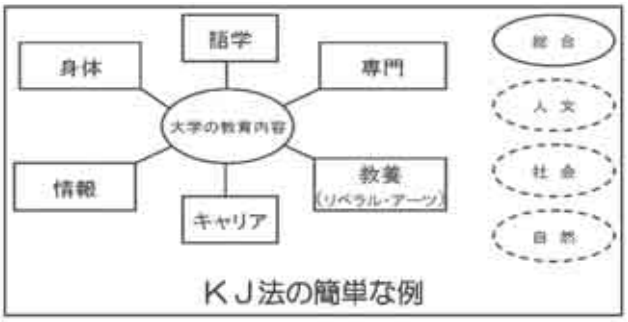
＜この章の目的＞

◎ここでは、発想法の１つであるＫＪ法（開発者の川喜田二郎氏のイニシャルに由来）について紹介します。大学生活での重要な経験は「研究」にあると言えますが、発想が命と言っても過言ではありません。研究テーマを決めたい時、あるテーマについての理解を深めたいときに役立つＫＪ法の意義や方法を理解しましょう。

○ＫＪ法は、キーワードを小さな紙片（カード）に書き出し、それをグルーピングしたり、順序などの配列を考えたり、自由に動かし、思考を柔軟に進めるための方法です。

○フィールドワークの際、新たな発想を生み出すスキルとして開発されたものですが、読書にも応用が利きますし、いろんな活用が考えられます。

○キーワードを書いた紙片（カード）を自由に動かせるため、グループ討議の際、あるいは発表の際、模造紙に字を書くだけでなく、紙片を貼り付け、質疑や議論で動かしてみる、というような使い方もできます。



ＫＪ法の簡単な例

○具体的な手順は、①用意した多量の紙片に思いつくかぎりの、大テーマ・小テーマにかかわるキーワードを書きこみ、②ある程度の量になったら、それをグルーピングして、配列を考え、③一枚ごとの関連や、グルーピングした「島」の相互関係を線で結んだり囲んだりしてみると、ウエッブ（網）模様の平面的な関係図ができる、という感じです。こうした思考力の作業は極めて重要で、かつ応用性が高いと言われています。

○課題レポートやゼミの発表レジュメづくりの準備は、このようなＫＪ法などの「発想法」を通して「構造化の方法」を習得するチャンスでもあります。

○分類をすることだけが課題ではなく、紙片を貼ってみてから、位置を変えるなどの作業は、欠けているものがないのかという発見の過程でもあります。

○「習うより慣れろ」で、自分であれこれと試行錯誤してみましょう。

記入日（　　・　　・　　）

＜「ＫＪ法」ふり返りシート＞

※この章の内容から、あなたは何を学びましたか。
理解したこと、考えたこと、疑問に思ったことなどについて、
次のポイントごとに、あなたの言葉で記入して下さい。

【この章で理解したこと】

・ＫＪ法とは、どのようなやり方をするものか

・ＫＪ法の意義や、ＫＪ法が力を発揮する場面はどのようなものか

【この章で考えたこと・疑問に思ったこと】

第17章　クリティカル・シンキング（批判的思考）

＜この章の目的＞

◎クリティカル・シンキングとは、情報を鵜呑みにせず、思考すること、思考する力のことです。ここでは、大学の学びに役立つクリティカル・シンキングそのものを理解することはもちろんながら、クリティカル・シンキング以外の様々な「思考（力）」について興味を持つことを望みます。

○クリティカル・シンキングとは、1980 年代以後の大衆化したアメリカ合衆国の大学で提唱され、アメリカの大学の教養教育の中核をなすものといえるもので批判的思考ともよばれています。

○クリティカルとは攻撃的・否定的な意味というよりは、むしろ創造的・建設的というべきものです。

○ノン・クリティカルな思考とは、普段あまり考えもなしにやりがちなこと―決めつける、すぐ結論を出す、考え直さない、感情にまかせる、他人の意見に同調するなど―のことで、こうしたものの対極がクリティカル・シンキングというわけです。

○クリティカル・シンキングとしては、１つの事実から、どのような結論を得るかという場合に、決して１つの結論しかないというわけではなく、様々な可能性を考える必要があるということになります。

○普段から誰しも結構クリティカル・シンキングをしているので、自分はクリティカル・シンキングは無理だと思い込まないようにして下さい。

○大学でのクリティカル・シンキングは、得た情報に対する批判的な受容をする習慣をつけるなど、日常レベルのことを高度な思考で吟味する力を含みますし、レポートや論文を書くという本格的な課題探求の際の必須の思考力を意味することもあります。

○クリティカル・シンキング以外にも、思考（力）にはいろいろあります。クリティカル・シンキングをクリティカル・シンキングするというところに到達できれば、言うことありません。

○結局のところ、考えるということは、頭をフルに働かせるということです。

記入日（　　・　　・　　）

＜「クリティカル・シンキング（批判的思考）」ふり返りシート＞

※この章の内容から、あなたは何を学びましたか。
理解したこと、考えたこと、疑問に思ったことなどについて、
次のポイントごとに、あなたの言葉で記入して下さい。

【この章で理解したこと】

・クリティカル・シンキングとは、どのようなものか

・詳細版にある練習問題をやってみましょう

【この章で考えたこと・疑問に思ったこと】

第18章　ロジカル・シンキング（論理的思考）

＜この章の目的＞

◎ロジカル・シンキングは、近年特にビジネスの世界で発展してきた思考法と言えます。前章のクリティカル・シンキングとは異なる角度から、思考（力）を考えるものです。ロジカル・シンキングの考え方を理解し、研究報告等の際に応用できることは何かを各自でイメージしてみて下さい。

○ロジカル・シンキングとは「筋道を立てて考えること」であり、特に、「目標を明確にし、どうしたら最小限の労力で目標を達成できるかというシナリオを筋道を立てて考えること」などと言われています。

○ビジネスの世界で独自の発展を遂げ強調されるようになったロジカル・シンキングは、必ずしも「論理学」のような厳密性を持たない部分もあるのですが、趣旨を理解し必要な追加や修正を加えれば、他の分野、あるいは普通の人が直面する日常の課題に対しても有効に活用できる場合が少なくないでしょう。

○ロジカル・シンキングでは、「思考とは問いを立てて答えを出すプロセス」であるとか、「問題とは目標と現実との差」であり、「その差がどうして生じたのかがその原因」であると説明されることがあります。

○大学という世界も、多様な学問、多様な理論や学説が集まり、多様な人々が集まっている世界ですから、その中で自分の考えをきちんと伝え、理解や支持を得るためにも、このようなロジカル・シンキングの訓練をしておくことは有益でしょう。

○ロジカル・シンキングで推奨されている思考方法や技術のうち代表的なものとして、①当面の問題に関連する「フレームワーク（枠組み）」を的確に把握すること、②フレームワークを考える際にはもちろんのこと、様々なデータの取得や処理に際しては「モレやダブリがない（Mutually Exclusive Collectively Exhaustive：MECE（ミーシー）」ように留意すること、③効果の程度や実現可能性などを検討できるように、「原因の仮説」をツリー状に構成した「イシュー・ツリー（または、ロジック・ツリー）」を作成すること、の３つが挙げられます。

記入日（　　・　　・　　）

＜「ロジカル・シンキング（論理的思考）」ふり返りシート＞

※この章の内容から、あなたは何を学びましたか。
理解したこと、考えたこと、疑問に思ったことなどについて、
次のポイントごとに、あなたの言葉で記入して下さい。

【この章で理解したこと】

・ロジカル・シンキングとは、どのような考え方か

・ロジカル・シンキングで推奨されている方法や技術は、どのようなものか

【この章で考えたこと・疑問に思ったこと】

第19章　コンセプト・マップ

＜この章の目的＞

◎コンセプト・マップは図解表現技法の１つで、やはり思考を整理したり、知的生産をしたりする（新しいアイディアを生み出す）ための方法と言えます。コンセプト・マップの考え方を理解し、研究報告等の際に応用できることは何かを各自でイメージしてみて下さい。

○コンセプト・マップは、紙の中心に最も重要な「テーマ」を置き、それを構成するべき項目を放射状の枝に見立て、階層をつくりながら伸ばしていく書き方です。

○トニー・ブザン氏によれば、コンセプト・マップはあらゆる用途に使用でき、学習能力を高めたり、考えを明らかにするのに役立ち、生産性の向上が可能になると言います。

○このスキルは小学校とか学習塾でも取り入れられていることから、決して難しいものではなく、コツさえつかめば「基礎スキル」として、効果を発揮するものです。

○マップを書く際の、簡単なコツとしては、以下の５つが挙げられます。

①中心に何を置くか、が重要です。右上から下へと、時計回りに枝を加えます。
②枝分かれしていく際には、大きなものから小さなものへ、抽象的なものから具体的なものへ、など「階層」に気をつけます。
③文字だけでなく絵や記号もOKです。というより、絵など手書きがとても有効です。
④色を使い分けるともっと良いそうです。
⑤書いた後、修正した方が良いことが発見できるでしょう。

マップによるノート例

○コンセプト・マップは、１つのキーワードを起点として、その関連事項をどんどん発想を豊かに書き足していくような場合とても効果的ですが、逆に、そのキーワードの設定が適切でなかったり、そういう発想のやり方ではうまく行かない場合もあることには注意が必要です。

記入日（　　・　　・　　）

＜「コンセプト・マップ」ふり返りシート＞

※この章の内容から、あなたは何を学びましたか。
理解したこと、考えたこと、疑問に思ったことなどについて、
次のポイントごとに、あなたの言葉で記入して下さい。

【この章で理解したこと】

・コンセプト・マップは、どのような特徴を持っているか

・コンセプト・マップを作るには、どのようなことに気を付けたらいいか

【この章で考えたこと・疑問に思ったこと】

３．「学びのナビ」における学習ポートフォリオの活用

・以下では、「学びのナビ」とともに学生に配布される「学習ポートフォリオ」と、「学びのナビ」の詳細版における「学習ポートフォリオ」記入のためのガイドラインを記載する。「学習ポートフォリオ」は、学生自らが目標を立てることを促し、大学での学習を能動的なものとするべく設計されている。その際、学習目標の例として「学びのナビ」が示す諸能力を挙げることで、基本的な学習スキル修得のための支援ツールとしての役割も含む。これら「学びのナビ」を通じた「学習ポートフォリオ」の試行を踏まえ、今後は、WEB ベースでの本格運用に向けて、更なる内容の精査と拡充を図る必要がある。

学習ポートフォリオ記入のために（「学びのナビ」詳細版より）

このガイドブックの「学習ポートフォリオ」では、学生一人ひとりが、自分の学習の歩みをふり返り、現在の到達伏況を確認して、次に取り組むべき課題を明らかにしていくことをねらっています。本文中に、基本的なことを説明してありますので、それをふまえて、記入と活用を説明します。面倒がらすに、ぜひ、チャレンジしてみてください。おそらく、書いた人と書かなかった人の違いは、４年後に出ると思います。

〇ポートフォリオの基本

学生は、授業や授業外の学習、学生生活全般から得た知識や体験・剔出した知恵を、学生自らが文書化し、行動履歴としてポートフォリオに蓄積管理します。これによって、その蓄積した情報をもとに、自分の「ふり返り」に用いるほか、自分以外の他者、例えば、クラスの同級生やゼミの上級生、さらにはアドバイザー教員などと、定期的なあるいは適宜に確認（回顧・展望）を行い、自己の学習プロセスの成果や態度の評価・改善を図り、自己実現目標をキャリアデザインとして描くことができるようにしていけるような、発展した使い方が想定されます。

もっとも、まだ、こういう形式のポートフォリオが普及しているわけではなく、現段階では大学・教員側の体制も準備できているわけではないのが実情です。本学では、このガイドブックで「初登場」というわけですから、まずは、学生自身で、この仕組みの理解をしながら、取り組ん　ではいかがか、ということになります。

〇書き方のアドバイス

１ページ目は、とにかく、今思っていることを書き込んでください。難しく考えることはありません。「初心忘れるべからす」とか「鉄は熱いうちに打て」などという諺の通り、新入生のピカピカの気分のうちの心の状態を記録しておくことが重要です。

２ページ以下は、各学年単位の設定ですが、セメスター単位でもどうかと検討した経過がありました。自分自身の記録として、しかも提出を義務づけるものでもないということから、最少枚数にとどめたのですが、足りなければコピーして、貼り足してもらってよいです。

おそらく、戸惑うのは「目標」の書き方でしょう。自分が思いつくことなら何でもよいのですが、履修登録で受講する授業が確定し、その中身がわかった隠点て、自分としての重点的な目標を持つということも考えられます。また、入学当初抱いた目標に向かって、今年はこれをものにするということでもよいのです。例えば、インターンシップに取り組む、ボランティアに取り組むなど、体験学習を主体性を持って、高い目標で頑張るというようなことも、よいでしょう。できれば、学びの内容、学びの質を意識して、書いてほしいと思います。

ふり返りと次の目標設定は、一体のものと考えれば、また、そういう書き方もよいでしょう。
これは、書く時期を自分でどう意識するのか、ということにもかかわりますね。いずれにしても、書き方に定型はありません。ガイドブック作成者としては、活用を願うだけです。そして、皆さんからモニターとしての感想を寄せていただきたいです。もし、これが皆さん自身の積極的な記入と活用があれば、後になって、青春時代の記念になるかもしれません。

〇目標の書き方のヒント

学習には、目的があります。これこれのことを知りたい、できるようになりたいという「目的意識」がないような学習は、普通はありません。その目的には、このような学習対象に内在的（内発的）なものばかりでなく、試験に受かりたい、ほめられたい、という類のものもあり、それは

外在的なものといえます。それが悪いと一概には言えないにしても、内在的な目的の方が、持続性、その効果などに優れています。以前、「大学で学ぶ」の授業のアンケートをして、「後期の学習の目標を害いてください」と聞いたところ、「授業に遅刻をしない」「単位を計画通り取る」「Ａをたくさん取る」という回答が結構ありました。これ自体は、目標を持たないよりはましですが（目標がない、という回答も若干ありましたよ）、もっと中身のことを書いてほしかったというのが、質問の本来の意図でした。中身については、２年生あたりから「予習復習をしっかりやる」「〇〇の資格を取る」「TOEIC で〇〇点を取る」や「自分をもっと磨く」という記述も見られました。

このことからわかったのですが、大学に入っていきなり学習目標を持ちなさいと言っても、書くことがわからない、ということになりかねないですね。

そこで、ヒントはないか考えました。例えば、大学の授業・講義などを通して、どんな力が育っていくのかを、個別の授業をこえて共通に害吉出してみたのが、以下のような項目です。

1　授業の重要なところを理解しノートできる
2　図書館等で資料・文献を調べられる
3　パソコンで文書・資料を作成できる
4　インターネットで情報を集められる
5　定められた形式に従ったレポートが書ける
6　自分の意見と事実を区別して書ける
7　物事の問題点を見つけられる
8　意見や情報を鵜呑みにせず受け止められる
9　科学的・数量的にものごとを見る
10　自分の意見を筋道立てて表現できる
11　先生や学生仲間にしっかり質問ができる
12　自分から人間関係をつくる
13　一般的な教養的内容がある
14　グローバルな課題への関心がある
15　地域社会が直面している課題の理解
16　外国語の能力
17　異文化の理解
18　リーダーシップの能力
19　プレゼンテーションの能力
20　自分から学習する習慣
21　社会人としてのキャリアについての関心と行動

これらを直接扱って授業の「看板」になっているものとしては、外国語、キャリア教育など、幾つもありますが、しかし、多くの授業で共通に扱われているものの、明示的ではないものが大半です。自分の専攻分野の専門知識の重要性は言うまでもないのですが、ここで掲げているような「力」も是非、意識的に身につけてほしいものです。大学４年間をより実りあるものにするという場合、課外活動、ボランティア、旅行、その他、学生の特権を生かした体験学習を含めて、このような「指標」も頭に置いて、自分のポートフォリオの「目標」に入れてみるのもいいかと考えています。

＜ポートフォリオ作成の前に＞

大学４年間の目標を立てる、とはいってもいきなり考えることはなかなか難しいものです。そこで、自分史年表の作成と自分の長所・短所・性格・対人関係の分析を行い、夢や目標を実現するために大学生活でとのようなことをする必要があるか考えてみましょう。

学びのナビ２０１２「学習ポートフォリオ」の構成

《自己分析シート》

１．自分史年表を作成してみましょう
２．自分の長所、短所、対人関係について自己分析してみましょう
３．自分史年表の作成と性格に関する自己分析を踏まえ、大学入学時点あるいは現在の夢や構想といったキャリアデザインを箇条書きにしてみましょう
４．３で描いた夢や構想を実現するためには、どんな学びの構想を立てたり、能力の開発・資格取得の勉強や社会経験をしなければならないか考えてみましょう
５．１～４の作業をした上で、改めて自己分析について評価をしてみましょう

《学習ポートフォリオ》

１．大学・短大入学の動機
２．将来の目標（自分のやりたいこと、希望する就職先等）
３．取得したい免許・資格・検定試験等
４．大学・短大における学習目標
５．大学・短大における学習以外の目標
６．各年度の目標、自己評価、アドバイザー確認欄
７．卒業時のふり返り

１．自分史年表を作成してみましょう。

年代	私の歴史	各時期における夢や目標	左記の夢や目標を持った理由
（例） ２００４年 （１２歳）	小学校卒業	小説家	本を読むのが好きだったから。

年代	私の歴史	各時期における夢や目標	左記の夢や目標を持った理由

２．自分の長所、短所、対人関係について自己分析してみましょう。

＜長所＞
＜短所＞
＜対人関係＞

３．自分史年表の作成と性格に関する自己分析を踏まえ、大学入学時点あるいは現在の夢や構想といったキャリアデザインを箇条書きにしてみましょう。

４．３で描いた夢や構想を実現するためには、どんな学びの構想を立てたり、能力の開発・資格取得の勉強や社会経験をしなければならないか考えてみましょう。

５．１～４の作業をした上で、改めて自己分析について評価をしてみましょう。

（１）自分の長所や短所をまとめた自己分析をすることで、自分についての理解は深まりましたか。自己理解の進め方について別のアイディアはありますか。
（２）将来の夢や夢に向けた能力開発計画は自分の納得いくものですか。納得がいかないとすると、それはどのような点ですか。

＜学習ポートフォリオ＞

１．大学・短大入学の動機　　記入日（　　・　　・　　）

２．将来の目標（自分のやりたいこと、希望する就職先等）

３．取得したい免許・資格・検定試験等

４．大学・短大における学習目標

５．大学・短大における学習以外の目標

６．各年度の目標、自己評価、アドバイザー確認欄

第１学年

＜目標＞　記入日（　　　・　　　・　　　） ①学習目標   ②学習以外の目標
＜達成度評価＞　記入日（　　　・　　　・　　　） ①学習達成度   ②学習以外の達成度

＜受講登録科目・単位取得科目＞　記入日（　　・　　・　　）

・受講登録科目中、単位取得したものには授業科目名の前に〇をつける。

前期	月	火	水	木	金	土
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
後期	月	火	水	木	金	土
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						

＜読書欄＞　記入日（　　・　　・　　）

・著者、書籍のタイトル、出版社、発行年、感想等を書き入れる。

＜アドバイザー用＞　記入日（　　・　　・　　）

第２学年

＜目標＞　記入日（　　　・　　　・　　　） ①学習目標   ②学習以外の目標
＜達成度評価＞　記入日（　　　・　　　・　　　） ①学習達成度   ②学習以外の達成度

＜受講登録科目・単位取得科目＞　記入日（　　・　　・　　）

・受講登録科目中、単位取得したものには授業科目名の前に○をつける。

前期	月	火	水	木	金	土
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
後期	月	火	水	木	金	土
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						

＜読書欄＞　記入日（　　・　　・　　）

・著者、書籍のタイトル、出版社、発行年、感想等を書き入れる。

＜アドバイザー用＞　記入日（　　・　　・　　）

第３学年

＜目標＞　記入日（　　　・　　　・　　　） ①学習目標   ②学習以外の目標
＜達成度評価＞　記入日（　　　・　　　・　　　） ①学習達成度   ②学習以外の達成度

＜受講登録科目・単位取得科目＞　記入日（　　・　　・　　）

・受講登録科目中、単位取得したものには授業科目名の前に〇をつける。

前期	月	火	水	木	金	土
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
後期	月	火	水	木	金	土
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						

＜読書欄＞　記入日（　　・　　・　　）

・著者、書籍のタイトル、出版社、発行年、感想等を書き入れる。

＜アドバイザー用＞　記入日（　　・　　・　　）

第４学年

＜目標＞　記入日（　　　・　　　・　　　） ①学習目標   ②学習以外の目標
＜達成度評価＞　記入日（　　　・　　　・　　　） ①学習達成度   ②学習以外の達成度

＜受講登録科目・単位取得科目＞　記入日（　　・　　・　　）

・受講登録科目中、単位取得したものには授業科目名の前に〇をつける。

前期	月	火	水	木	金	土
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
後期	月	火	水	木	金	土
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						

＜読書欄＞　記入日（　　・　　・　　）

・著者、書籍のタイトル、出版社、発行年、感想等を書き入れる。

＜アドバイザー用＞　記入日（　　・　　・　　）

第５学年

＜目標＞　記入日（　　　・　　　・　　　） ①学習目標   ②学習以外の目標
＜達成度評価＞　記入日（　　　・　　　・　　　） ①学習達成度   ②学習以外の達成度

＜受講登録科目・単位取得科目＞　記入日（　　・　　・　　）

・受講登録科目中、単位取得したものには授業科目名の前に〇をつける。

前期	月	火	水	木	金	土
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
後期	月	火	水	木	金	土
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						

＜読書欄＞　記入日（　　・　　・　　）

・著者、書籍のタイトル、出版社、発行年、感想等を書き入れる。

＜アドバイザー用＞　記入日（　　・　　・　　）

第６学年

＜目標＞　記入日（　　　・　　　・　　　） ①学習目標   ②学習以外の目標
＜達成度評価＞　記入日（　　　・　　　・　　　） ①学習達成度   ②学習以外の達成度

＜受講登録科目・単位取得科目＞　記入日（　　・　　・　　）

・受講登録科目中、単位取得したものには授業科目名の前に〇をつける。

前期	月	火	水	木	金	土
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
後期	月	火	水	木	金	土
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						

＜読書欄＞　記入日（　　・　　・　　）

・著者、書籍のタイトル、出版社、発行年、感想等を書き入れる。

＜アドバイザー用＞　記入日（　　・　　・　　）

７．卒業時のふり返り

（１）在学中における学習目標の達成度

（２）在学中における学習以外の達成度や成果

（３）総評

福大スタンダードによる教育の質の保証と成果の検証システムの構築
―教養教育の再定義と専門基礎教育との接合―

第５章
取組成果と今後の課題

取組成果と今後の課題（おわりに）

本事業「福大スタンダードによる教育の質の保証と成果の検証システムの構築」は、福島大学の学生が４年間で身に付けるべき諸能力を策定することを中心に、その諸能力の獲得状況の検証、及び、これら諸能力を学生が能動的に身につけるための学習支援の実施を目的として、平成２０年度から４年間にわたり、特別教育経費の支援の下に進められてきた。アイディアの原型は、平成１８年度の段階で既に出されているものであるため、通算６年間に及ぶ取り組みである。本報告書は、特別教育経費にかかわる成果報告となるが、それ以前からの長期的プロジェクトを継承した経緯を踏まえるならば、中間報告としての趣が強い。以下、各章に記載した本事業の現段階での成果について、それぞれ簡単にまとめておこう。

まず福島大学の学生が４年間で身に付けるべき諸能力については、第２章に示す「三つのポリシー」として結実した。「福島大学の教育目的」は、これら諸能力の全体像を示す。所属する学類・コースごとに修得すべき知識及び能力（各ディプロマポリシー）と、主に共通領域、自己デザイン領域において学生が共通して修得すべき知識及び能力（「幅広い教養」「自己形成力」）によって構成されている。これら諸能力のカリキュラム上の位置づけは「教育課程編成の方針（カリキュラムポリシー）」に示すとおりである。また、各学類・コースのアドミッションポリシーは、「大学入学時に必要な能力」と「大学卒業時に身についている能力」を併記することで、ディプロマポリシーと対応した改訂を行った。今後は、これら諸能力と個別の授業の教育目的・成績基準との連関について、シラバスを通じた検証を進めていくことが課題であろう。

福島大学の学生における諸能力の獲得状況の検証については、第３章に示す各種質問紙調査の実施を通して、上記のポリシー構築と並行して進められた。在学生の教育成果検証アンケートは、学類制度の導入を受けた第Ⅰ期卒業生（平成１９年３月卒業）と第Ⅱ期卒業生（平成２２年３月卒業）、及び平成２２年度の３年次学生・１年次学生を対象に行った。福島大学の教育制度と個々の科目に対する評価と、２２項目の諸能力の獲得状況についての自己評価からなる。特に学類Ⅱ期生対象のアンケート結果をみると２２項目の諸能力のうち、多くの項目は１年次から４年次までに漸増する傾向がみられる。次に、共通教育アンケートは、平成１８年度以降、２年次学生を対象とした悉皆調査として実施してきたものだが、４年間の経年分析の結果から、各共通教育科目が掲げる諸能力の獲得状況について、多くの場合、漸増傾向がみられる。卒業生・企業アンケートは、学類Ⅰ期卒業生・Ⅱ期卒業生と、その採用企業を対象に実施したものであるが、他大学の学生と比較した場合の福島大生の強みとして、「自らを律して行動できる力」「自ら学習する習慣」が挙げられた。今後は、これら調査を継続的に実施するとともに、三つのポリシーの確定を踏まえ、学類・コース・専攻ごとに身につけるべき諸能力を含めた成果検証システムを模索する必要がある。

最後に、これら諸能力を学生が能動的に身につけるための学習支援について、第４章に示す各種の支援システムの開発・運用を行った。LMS「e-Friend」の試行、学習ガイドブック「学びのナビ」の作成・配布、及び「学びのナビ」を通じた学習ポートフォリオの活用である。これらは、特別教育経費のプロジェクト開始以前から進めてきた取組を継承したものであるが、この４年間の取組を通して、学生が身につけるべき基本的な学習スキルの観点から拡充が図られた。特に学習ポートフォリオについては、「学びのナビ」での経験の蓄積を踏まえ、今後、WEB ベースでの本格運用を検討している。その際、LMS の試行から明らかになった諸課題を解決するために、全学的な支援体制を構築することがポイントとなろう。

本事業における現段階での取組成果は、上記３つにまとめられる。しかし、第１章の最後に示した通り、これまでの「福大スタンダード」を巡る議論の中で提起された課題は、本報告書に示す内容によって完成するわけではない。今後は「福大スタンダード」の議論の到達点を参考にしながら、「福島大学の教育目的」及び各種ポリシーの運用と検証・改善のサイクルの中で、「学生が修得すべき知識及び能力」の全学的な成果検証・質保証システムの構築を進める必要がある。その際、本事業を通じて蓄積されたノウハウを活用し、福島大学の学生が４年間で身に付けるべき諸能力、その諸能力の獲得状況の検証、及び、これら諸能力を学生が能動的に身につけるための学習支援策を、有機的に結びつけることが必須となろう。本報告書の内容が、福島大学における質保証システムの構築に向けた基礎資料としての役割を果たすことを願う。

（担当　総合教育研究センター　丸山和昭）

福大スタンダードによる教育の質の保証と
成果の検証システムの構築

平成２０年度～平成２３年度　福島大学特別教育研究経費事業報告書

平成２４年（２０１２年）３月　発行
編集：福島大学　総合教育研究センター　ＦＤ部門
発行：福島大学
印刷：株式会社日進堂印刷所